

エントマは俺の嫁 ~異論は認めぬ~

雄愚衛門

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オーバーロードの二次創作です。

オリキャラである至高の41人の一人がプレアデスのあの子を嫁にするべく奮闘します。

後、バトルパートよりナザリックでの触れ合いパートが多くなると思います。

そういうのアカンって人はお奨め出来ません。

後、人類的には原作通り魔王の軍勢めいてます。

DRMMO—RPG ユグドラシルオンライン

12年続いた大人気ゲームと共に、

その命を散らそうとする一人の廃人（ゲーム的な意味で）がいた。

虫と虫系モンスターをこよなく愛する彼は、

再度ナザリック入りを果たし、嬉々として活動を始める。

主人公の立ち絵を描いてくださった方がおられます。

反り投げさんと二円さんと蠅王さんに多大な感謝を……。

←←

# 目次

## プロローグ

人生の終わり

1

蟲生の始まり

4

## 顔合わせ編

再会

8

語らい

14

プレアデス月例会議 緊急編

20

## 挨拶準備

26

デミウルゴスの決意

32

アウラの失敗？

38

想定外と言う名の必然

44

強くある為に

50

強さの証明

56

## 準備編

アルベドの野望・確信

61

直属

65

部下泣かせ

68

メシ友

74

思惑

80

蓼食う虫も好き好き

85

大役

90

決心

95

抜擢

100

変化

106

名探偵デミウルゴス

黙示録

キャラ紹介

アバ・ドン (挿絵付き)

お供面接編

選別

憂慮

守護者

面接

評価

メシ友?

墓穴

二巻編

じじい無双

眼鏡&鎧無双

悲劇

テイクアウト

三巻編

同乗

大パニック

フットー

蟲野郎共

急展

最強の切り札

奇襲

248 239 232 227 220 213 208 201 194 186 179 173 166 158 153 142 135 127 122 116 111

罪	412
日常	403
まじやばい	397
これがやりたかった	391
いつもの	384
使い道	374
はじめての	369
手	359
この木なんの木	349
便利な物差し	341
●●死す	330
念願	323
逆転の妙手？	313
四巻編	
アルベド、暁に死す	306
秘め事	296
日進月歩	290
th／あらゆる理性の目指すところは死である	283
The goal of all reason is death	274
デミウルゴスの謀略？	274
閑話編	
褒美	265
狂喜乱舞	261
汚食事会	254

## プロローグ 人生の終わり

体が動かない、いよいよもって俺もここまでか……。

一面清潔なタイルで張り巡らされた集中治療室。清潔感はある。しかし、病院特有の息苦しさを感じる。まあ、大元の原因は俺の体中に取り付けられたチューブの束だと思うが。そこで、俺の命は尽きようとしていた。

何のことはない。ただただこのクソツタレな環境に体が適応出来なかった。ひ弱な体を、不治の病が蝕んでいただけのこと。

とある研究員だった俺は、体の限界にも気がつかず、業務遂行中にブツ倒れた。医者が言うにはとうに手遅れだとか。医療機関はいつちよまえない癖して、それでも手遅れと言わしめるとは、俺の体は随分とボロボロになっていたらしい。

ああ、生まれてくるのが後100年も早ければもう少しマシンな生活が出来ただろうに。

……悔やんでも仕方がない。まあ、ろくすっぽ息もできず、ほとんどの生き物も死に絶えたこの世の中に悔いなんてものは一つもない。あくまでこの世の中にだが……と言うわけで、例外も存在する。

### DMMO—RPG ユグドラシルオンライン

心の拠り所といっても良いゲームだ。世間一般で言うところ、俺はゲーム的な意味での廃人だ。生活費以外の金は、専らユグドラシルに費やしていた。

広大なフィールド、溢れる自然、膨大な謎解き。個性豊かなギルドの仲間達。俺の周りに無かった物が、そこには全てあった。

語りたい思い出は山程あるが、俺にはもう時間が無い。

突然だが、俺は虫が好きだった。小さいその体に宿した、計り知れぬ能力と、生物とは思えぬ機械的容姿。あー……昆虫採集とかしてみ

たかったなあ……。

100年前に生まれてればと思う理由がまさにそれだ。

俺は昆虫採取をして、集めた昆虫を眺めたり、遠く未知の世界に立ち、新種を発見したいなんて憧れも抱いていた。無茶な話だが、俺自身が虫になってみたいという気持ちもあった。

だが、そんなささやかな趣味すら出来もしない世界が嫌だった。

さて、そんな願望を宿してゲーム中のキャラ作成に励み、ゲームも楽しんだ訳で、蟲人という、虫と人間を組み合わせたような異形種が、俺の第二の肉体であった。

名前は『アバ・ドン』

由来はヨハネ黙示録に登場する、いなこ蝗を操るあの悪魔だ。余計な点が入ってるのは名前被り対策だ、気にするな。

奇しくも、俺はその『アバ・ドン』と共にその命を終えることとなる。何故ならば、ユグドラシルオンラインも12年続いた運営を終了することになったからだ。偶然にも、俺の死期とほぼ同じだと言うのだから、笑い話もいところだな。

昔どこかで聞いた、木に残った最後の葉っぱが散った時、自分の命も散るだとかいう話があったが、俺の場合はそれがユグドラシルオンラインだったという訳だ。実に2100年代らしい最期と言えるかもしれない。

せめて最期に一目、ギルメン達が作ったNPCを見たかった……。

るし★ふぁーさん考案のゴキブリ紳士、恐怖公。

ぶじんたけみかずち武人建御雷さん作、昆虫武人、コキュートス。

そして……源次郎さんが生み出した、アラクノイドのエントマ……。NPCと頭で理解していながら、俺の心を掻き立てたあの女の子……。叶うならば、嫁にしたかった。せつかく源次郎さんは説得出来たのに……。

間もなく今日の日付が変わる。その瞬間、俺もおさらばだ。気分的にだが。

残り1分前……30秒前……20……10……あ、意識飛んで……きた……。

マジで……終わるか……。

.....



## 蟲生の始まり

ユグドラシルの終焉と共に、俺の命の灯火も掻き消えた。

……筈だったのだが。

これは泡沫の夢という奴だろうか……。今の俺は、集中治療室の薬品臭いベッドではなく、金持ちのボンボンが使うような、ふかふかのベッドに横たわっている。

死んだと思っていたが、意識を失っていただけ……？

死亡確認されて葬儀の準備でもしてるのかな？

それともここがああの世だとも言うのか。分と煌びやかな部屋だが、俺は天国へ逝ける程良い行いをした覚えが無い。しかし、俺はこの豪華な部屋に見覚えがあった。

所々に設置されている、様々な虫型のオブジェは……。

だが、考えていても意識が朦朧とする。だるいので、脳内のまどろみに身を任せ、一眠りしようか。

が、俺の意識は部屋に入ってきた人物を目にすることで一気に覚醒することとなる。

「失礼します。お水の交か……ッ!? アバ・ドン様!? アバ・ドン様!!

お目覚めになりましたか!」

「……えっ?」

俺は気の抜けたような返事しか出来なかった。驚きのあまり、思考がショートしたとでも言おうか。だが、次の瞬間にはまるで静かな水面の如く平坦なものになる。そこから更に驚きに思考が彩られ、頭がパンクしそうになる。

うぐぐ、脳内がジェットコースター状態だ。なにこれこわい。

俺が眠るベッドの横で、従者のように傅く一人の少女。

甲殻類を組み合わせて作り上げたようなお団子ヘアー。

和服とメイド服の相の子のような衣装。

胴体を巻く赤いワーム。あどけない幼さ。

スラッとした可愛らしいおみ足に張り付く数々の呪符。

ナザリック地下大墳墓で奉公する戦闘メイド、プレアデスの一人。

俺が愛してやまなかつた、エントマ・ヴァシリッサ・ゼータその人であつた。見間違える筈も無い。

「体のお加減はいかがでしょうか？」

「あつと、少し眠い……です……えと、ここは？」

初対面の相手に接するよう、つついっい敬語になつてしまふ。何か自分の声に違和感を覚えるな。寝覚め特有の低い声をもっとひどくしたような……。あ、でも割とイケボ。

「ここはナザリック地下大墳墓、アバ・ドン様の個室でございます。

第6階層にて、お倒れになつているところを、階層守護者であるアウラ様の使役獣が保護致しました」

「あー……」

見覚えがあると思つたら、ここはナザリックの地下か。は？ 俺口グインした覚えはないんだけど？ いやちよつとまで、階層守護者で、アウラってペロさんのリアル姉貴であるぶくぶく茶釜さんが生み出したNPCだよな？

何がどうなつてるんだ？

と、慌てふためくがすぐさま沈静化、どういうこつたい。

それよりも、今度は別の意味で意識がショートしそうになる。

やつべ、エントマちゃんめちゃんこ可愛い可愛い！ こんな喋り方だつたのか。

甘えたような口調と仕草、食いしん坊が特徴だつた筈だが。お仕事モードって奴なのだろうか。だがこれはこれで……。一見可愛い人

間の少女のように思える彼女は全身が蟲で形成された蜘蛛アラクノイド人なのだ。この人間的な見た目、表情、声。全てが虫による擬態！ しかもフジュツシとして高い能力も有している。

生物の中には異種同士の生物が協力し、支えあう、共生という生態系がある。彼女の姿形は相利共生（片利共生？）の究極系とも言える美しさだ。虫同士の共生はクロシジミとオオクロアリが有名だろうか。おまけに、完璧と言っても良い程、人間の美少女に擬態する事に成功している。枯葉に擬態するアケビコノハを想起させる程の完成度である。

源次郎さんが作ったNPCだろうという突っ込みは無粋と言わせて頂きたい。そもそも現実じゃ虫を見ることすら中々出来なかったんだから。

懐かしい……俺も、アインズ・ウール・ゴウン（以下AOG）に入した際、独自の虫系NPCを作ろうと思ったのだが、エントマちゃんとかキュートスを見てボツキリ心が折れた。こいつら作り込みすばらしすぎるんだよお!!

俺はあれ等に並ぶNPCを作れる気がしないと確信したね。

その後、るし★ふぁーさんがゴキブリ型NPCを作ると聞いて、リアルなディテールを作るのに俺が協力した。女性陣から大響感を買ったが、あれは必要経費だったのだ。

その結果生まれたのが無限ゴキブリ召喚が可能な巨大ゴキブリ、恐怖公だ。

というわけで、俺専用のNPCは強引に言えば恐怖公かもしれない。

まあ、実際はるし★ふぁーさんだと思うけど。

んんん、それにしてもだ。自分が一押ししてるアイドルと生で会話できたらこういう気持ちなんだろうか。なんで、NPCであるエントマちゃんが俺とコミュニケーションを取る事が出来ているのか。大いに謎だが、そんなもん後回しだ。

死ぬ前に見せてくれた夢だと言うならばこの粋な計らいに感謝せねばなるまい。こっちのほうが懐かしの我が家と言っても差し支えない。ここで、エントマちゃんの傍らで死ぬるといふなら、俺はかなり救われる。

「聞きたいことが……あるんですが……」

「はーなんなりとー」

おお、従者然としたエントマちゃんの凜々しきよ。

やはり、自分の声じゃないようだ。徐々に状況が飲み込めてきたおかげで、色々と気がついてきた。何か体の違和感が尋常じゃない。

「鏡、持ってきてくれませんか？自分がどうなってるか見てみたい……」

「いちご」

「はやっ」

俺の部屋に置いてあった姿見を即座に持ってきてくれた。目の前に写る自分の姿に俺はいよいよもって驚きが限界突破しそうになった。上半身を起こし、俺は改めて鏡を見る。

「……………うん、いつもどおりの姿だ」

たつぷりと間を置いて、天を仰いだ。辛うじて発する事が出来た台詞がこれだ。

といつても、現実のしがない研究員ではない。

特撮ものの怪人然とした人型の肉体。色は全体的にメタリックな緑色がベースで。見る角度によって、様々な色がグラデーションをする。

背面脇腹付近から生える、昆虫のそれに近い細長い四本の副腕。そして、両肩から伸びる対の鎌。

これは背中から見れば分かりやすい。背骨に該当する部分が、カマキリの胴体になっており、肩から鎌を覗かせ、仕舞い込まれた昆虫の翅はねを背負うように有する。

そして顔は、クワガタを模した特撮の怪人を思わせる鬼貌であった。顔には、左右対称に四本の角が生えており、外側の二本は甲殻により形成された角、内側に形成された短い角が触覚という設定で、勇ましくそそり立つ角は昆虫王者の風格を漂わせる逸品だ。

「はい！紛れも無く貴方様は至高の御方であられる、アバ・ドン様でございますー！」

エントマが喜色の孕んだ声色で肯定してくれた。

俺の容姿は、ユグドラシルオンラインでの姿、『アバ・ドン』に相違無かった。

さて、この状況をどう説明すべきなのか…………？

## 顔合わせ編

### 再会

とりあえず、周囲を見てみないことにはなあ。どうせ一度死んだ身だ。なるようになるさ。これが夢なのか死後の世界なのかすらも分からんのだ。

ベッドから降り、全身を軽く動かしてみる。手足は勿論、副腕も背中の翅も思い通りに動かせる。調子に乗って、回し蹴りのポーズまで決めちゃった。体を動かす度、俺の輝けるボディが煌く。

こう言う途端にむさくるしくなるな……。

まるで、初めからこの体こそが自分だと言わんばかりだ。あとなんか体の調子がすつげえ良い。体が羽のように……いや、翅のように軽い。

そうそう、俺の種族は蟲人の最上位、ヴァーミンロード 蟲 王だ。うん、ぶっちゃけコキュートスとおもつくそ被ってる。まあ自由度がウリのユグドラシルなら差別化も容易なので大した問題じゃないけどね。

で、なんかエントマちゃんかぼーつとしてる。どしたんだろ？ 心ここにあらずというか……。

「エントマさん、大丈夫ですか？」

「……っ！ も、申し訳ありません！ 至高の御方の前でとんだ失態を……」

体を一瞬震わせ、頭の触覚をピンと立て、我に返った。あ、触覚が通常より垂れ下がってる。深々と頭を垂れているので尚更だ。あらかわ。

しかし、そんな姿を見せられちゃうとこっちが申し訳なくなってくる。確かにA アインズ・ウール・ゴウン O GのNPCはギルメンに仕える設定だった筈だけど、これ忠誠心高すぎやしません？

そーいや、一人裏切る予定の奴いたっけ、ペンギンの奴。名前忘れた。あいつどうなるんだろう……。

さて、一先ずエントマちゃんを始め、動き出したであろうNPC達

にどう接するのが良いだろうと考える。その結果、周囲には主に敬語 &さん付けで接する事にした。礼儀は大事。

正直な話、ゲーム中でも仕事中でも散々使ってた言葉なので、その方がボロが出ないだろうという判断なのだが。

渋カッコいいボイスと化したおかげで、敬語もサマになってる。なんか強者の風格ただよってるよね、多分。

「ちつとも気にしてませんよ。それより、何か用事があつて来たんですよね?」

「はーアバ・ドン様。差し支え無ければお聞かせ下さい。体のお加減は如何でしょうか?」

心配そうな表情で俺の様子を伺うエントマちゃんに胸打たれる今日この頃。すげえな、顔の蟲は表情まで変えられるのか。表情、そう、表情だ。ユグドラシルオンラインには表情を変える機能はない。NPCとの意思疎通なんでもつての外だ。エントマちゃんの仮面は口が動かないみたいだが、目の動きによって感情表現が成立している。可愛い。

「ちよつと頭がフラフラするだけです。痛い所とかは無いから安心して下さい。」

「もしや、ずっと看病を?」

「はい、アインズ様が、アバ・ドン様がお相手ならば私が良いだろうと仰せに。特例ということで、個室に入らせて頂く許可を頂きました」

なんてこった! エントマちゃんが看病してくれるって分かってたなら、もつと早く死ねば良かった……。

そのアインズ様って人には5分程、深々と一礼せにやならん。副腕の一つで頭を掻きながらそう考える。あ、痛覚ないかもこれ。

「お礼を言わなくてはなりませんね……」

しかし、アインズ様とは一体どなたの事でしょうか?」

AOGの名前そのものな名だが、ギルメンにそんな名前の人はいない。ギルドが擬人化でもしたの?

「……あつ! その……モモンガ様はお名前を改め、アインズ・ウー

ル・ゴウン様と名乗られておいでなのです」

「モモンガさん!?!」

「は、はい」

モモンガさん。言わずもがなだ。AOGギルドマスターのモモンガさんで間違いないだろう。

そもそもここナザリックっぽい。この不可解な状況を解く鍵になるのは確実。会うほかあるまい。

なんと言うか、AOGの面々がリアル化してるってのはなんとなく分かった。夢説も捨てられない以上そうとも言い切れないが、理由は最早どうでもよくなってる。

俺、エントマちゃんと会話してるよ。大事なことだからもっかい言うぞ。俺、エントマちゃんと会話してるよ。そこいらのリア充共を鼻で笑えるぐらいの幸福感です。

……ん?

どうやら幸福感も度が過ぎると平静に戻ってしまうようだ。ええい、煩わしい。

だが、後から後から幸福感が溢れ出てくる。今度は幸福のジェットコースター。

「配慮が足りず、重ね重ね申し訳ありません! 愚かな私めにどうか罰を……」

「何を仰います!?!むしろ感謝してますよ! 私がこうしているのも、エントマさんの献身的な看病のおかげと言って良いです。罰なんてありえません」

「……!も、勿体無きお言葉。至高の御方にお仕えする者として当然の事を果たしたままです!」

またエントマちゃんの触覚がピーンツてなった。何なのその触覚? 俺を萌やし尽くす新手の兵器かなんかなの?

おい運営。マジで忠誠心どうなってんだよ。のっけからMAX300だよ。もっところうさ、タメ口利いて他愛ない話に花を咲かせてキヤツキヤウフフとかしたかったんよ……。

いや、この状況をおいしいと思ってしまうてる俺が言うのもアレだ

けどね。生きてて良かった。死んだけど。

「では、モモンガさん改め、アインズさんに会いに行っても……?」

「は!元よりそのつもりとの事です。目覚め次第こちらに伺うと」

てことは、エントマちゃんが俺のお目覚めを報告するんだろうか。じゃあ、こつちから出向いた方が手っ取り早かろう。

「あ、それなら一緒に行きましょう。このままアインズさんの下へ案内して下さい」

「かしこまりました。第十階層へご案内致します」

「お願いします」

第十階層?アインズさんは玉座で待ってるのだろうか。いつもなら円卓の筈だけど、どういう風の吹き回しだ?まあいいや。さて、エントマちゃんに案内されて部屋の外に出てみると。

……………おお、懐かしの光景に涙が出そうだよ。多分涙腺無くなってるけど。

俺の目の前に広がるのは皆の総力を結集して作り上げた、ナザリック地下大墳墓、第九階層ロイヤルスイートそのものであった。

ギルメン達が凝らしに凝らして作ったインテリア達の堂々たる風貌よ。個室毎に設置された、ギルメン達のマーク入りタペストリーが  
いい味出しています。見慣れた景色に安心感が止め処ない。

初めて東京を訪れたお上りさんの如く、辺りを見渡す。勿論、エントマちゃんからは片時も目を離しません。何か矛盾してるようにも  
思えるが、複眼になっちゃったので余裕のよっちゃんである。

それにしても、エントマちゃんに連れられる俺、これは

「デートと言って差し支えないのでは……?」

「えっ!」

「ああ!!いや、い、今のはお気になさらず」

「は、はい……」

やっべ、声に出してしまった。やばいどうしよう。ていうかどこがデートだよ、バカか俺。エントマちゃんの触覚がまた垂直になった。今度は歩き方までギクシヤクしてるし。うう、気まずい。

あれ、なんかエントマちゃんグラついてない……?」



「ア、ダメ……ダメダヨウ！ソナア！」

げ！ついに擬態にまで綻びが！顔の虫が取れそうになってる！お  
お、中身までぷりちー……。

しかも声がさつきまでと違う感じに……あ、そーいや口唇蟲で喋  
るって設定だったな。

地声はあんな感じなのか、なんてこった一粒で二度美味しい。

このワンシーンを切り取って保存出来るなら言い値で……じゃ  
ねーよ。

エントマちゃんが困っているというのに、放っておく訳にはいかな  
い。えーつと、えーつとこういう時どうしたらいいんだ。

「エントマさん、リラックスで良いんですよ。」

何があるうとも私はエントマさんの全てを許します」

一体俺は何様なんだろうか。優しく語りかけながら俺は、そつとエ  
ントマちゃんの頭に主腕を添えた。元末端研究員の俺が上司ヅラを  
するという異常事態。

つーかこれセクハラじゃね？もうダメだ。

エントマちゃんロリ系だからついやってしまいました。おまわり  
さん私です。

「……」

「慌てない慌てない一休み一休み」

太古の昔流行ったと言われている。屁理屈坊主の言葉だ。数分続  
けていると、徐々に落ち着きを取り戻してきた。効果あったようだ。

「元に戻りましたね？良かった、では行きましょうか」

「はい……」

気まずいのでささつと話を戻す。道案内続行だ。さも、俺は気にし  
てませんよという感じで振舞うが。これ絶対話戻せてないよ。

そんなこんなでアインズさんが待つてると言う第十階層「玉座の  
間」に到着。

玉座に転移出来ないのは相変わらずか。まあギルド武器置いてる  
故、致し方無し。

尚、その間会話ゼロの模様。辛いです……。

それと、道中でエイトエツジアシン達を始めとする、見覚えのあるNPC達が俺を向いて次々に跪いてたけど対応する余裕無かった、ごめんな。

ギルメンの個室は基本的に第九階層にあるので、割と近かったのは不幸中の幸いか。

「アインズ様はアバ・ドン様と二人きりでのお話を御所望ですので、私はここで失礼致します……」

「うん、道案内ありがとうございました」

ペコリと頭を下げ、エントマちゃんがそそくさと去っていった。うあー……これぞってえ第一印象最悪だよ……泣きたい……。

あ、また胸中が平静に。

はあ、後で何とかフオローを入れなきゃならんが、今はアインズさんの面会が先だ。俺はやたらでかくてゴージャスな扉を開いた。

おお、玉座も相変わらず珠玉の出来で何より。気圧されそうな雰囲気のを漂わせてるが、俺にとっては自宅の廊下みたいなものだ。

この玉座の間にNPCをズラリと並べるとそれはもう壮観だ。アインズさんはサシで話したいとの事で、ここにはいないようだ、残念。

さて、目の前の玉座に座す神器級アイテムに身を包んだ死の支配者<sup>オーバード</sup>。どこからどう見てもモモンガさんだ。楽しかった思い出がたくさん脳裏をよぎる。何から喋ればいいのか分からなくなってしまふなあ……。

しかし、傍目に見れば悪の秘密結社の面会にしか見えないだろう。強そうな緑てかてか虫と、ゴージャス骸骨の組み合わせなだけに。

「……」

お互いに黙して語らず。互いに何から喋れば良いか計りかねてるのだろう。モモンガさん改め、アインズ・ウール・ゴウンさんと名乗っているとは聞いたが、今はこう呼ぶ方が良いだろう。

「……モモンガさん？」

「……お帰りなさい、アバ・ドンさん」

あ、やばい、マジで泣きそう。

語らい

「いや、ほんとにお久しぶりです。えっとアインズさん」

「アバさんもお変わりなく……あ、すいません、”モモンガ”でいいですよ」

「そりやどうも、モモンガさん。早速なんですけど、

なんでギルド名を名乗ってるんですか？」

「ああ、それはですね……あ、立ちっぱなしはなんでしようし、どうぞ」「あざっす」

どこからともなく呼び出してくれたクラツキングチェアに腰掛けると、早速、自分が辿った経緯を説明してくれた。モモンガさんも随分とイケメンボイスになったなあ。

俺を玉座に呼び出したのに他意は無いとの事。

部下との付き合いで、今は円卓よりもこっちのが使用頻度が高いのだとか。

そして、モモンガさんの口から語られる衝撃の事実。

俺達がどうなったかざっくり纏めると、ナザリック地下大墳墓とNPC達で丸々異世界に移したんだそう。その折に、NPC達が生を受け、モモンガさんに忠誠を誓ったと言う。で、他のギルメン達がないか、AOGの名を世界に轟かせるべく、秘密裏に活動中と。

なんじゃそりやあ!?

……はいはい、沈静化沈静化。

かつて栄華を誇ったAOGは、モモンガさんを除き、誰もいなくなっていた。

ユグドラシル終了のその時まで、モモンガさんはAOGの維持に一人奔走していたのだ。

うん、涙腺あつたら、玉座の間が洪水になってる自信あるわ……。

AOGが野望を抱いてる最中、第六階層のジャングルで俺が眠るように倒れてたのを発見。ナザリック中が蜂の巣をつついたような大パニックになったと嬉しそうに語っていた。

「そういう訳で、動き出したNPC達には上位者として接しています」

「なるほど、うん……俺もそうした方が良いかもなあ……。

さつき、エントマさんに案内されてる時考えたんですけど、みんなには敬語で接しようかと」

「ああ、敬語キャラで通すんですね」

「そんな感じですか。何か強そうでしょ？」

「確かに」

「ウルベルトさんが自分のキャラを模索してたのを思い出しますねえ」

「ははは、そつすね。あの人悪役へのこだわり半端なかったですもん」  
「おかげでたつきさんと仲悪かったですけど」

「人助け当たり前と考えるリア充でしたし、折り合い付かなかったんだらうなあ。

あ、俺恐怖公にまだ会ってないんですけど元気してるかな？」

「ああ、元気と言うか蠢いてると言うか……。

どうも部下達の中にも忌避感を持つ者が多いみたいです」

「ぬぐ、やっぱGはあかんのか！くそう！太古の昔から姿を変えず生存する虫の終着点の一つだと言うに、ゴキちゃんやバッチイのは住む環境が原因であって、あれ自体は普通に清潔で……。」

「……アバさん、相変わらずですね」

「モモンガさんこそお変わりなく」

本来なら情報の共有が優先事項だと言うのに、後から後から色々な会話が溢れてくるのは、どうしたものだろうか。だが、暫し許して欲しい。

俺達は、話を大いに脱線させつつ、自分の状況を把握した。

他にも、AOGが現地で敵対した相手をひっ捕らえて、人間時代なら口に出すのも憚られるような苛烈な尋問をしている事も聞いた。なんてこつたい。

「いよいよもって悪の秘密結社だなあ……。」

「……アバさんはどう思われますか？」

「それがその、人間に対して情が湧かないというか、なんとも無いというか」

「やっぱりか……」

「と、言いますと?」

「お互い人間ではなくなってしまうた影響で、倫理観に影響が出てるようです。」

他にも、精神的に大きな触れ幅があると、精神作用効果無効の能力で無理やり……」

「あ! そういうことかあ! なんて気づかなかった!

俺もそうです。 蟲人にも付いてますしね、無効化」

「一先ず人間時代の自分はほぼ死んだと思つて良いかもしれません……」

「ですね」

俺に至つては実際死んでるしな。人間であつた頃の自分は死に、蟲王アバ・ドンが誕生したということだ。

今の俺は嘘偽り無く、アバ・ドンという生命体になつたのか……。「むう……」

「俺は元の世界にそれほどの未練はありませんでした。アバさんは……」

「……」

「あ、アバさん?」

「うおおおおお! やつたああああああああああ!!」

「うわ!!」

「……ふう」

「ああ、無効化しちやつたんですね、分かります」

「……やつたああああああ!!」

「またですか!」

蟲になつた!俺は蟲になつたぞ!今日は何て素晴らしい日だ!

絶対に叶わぬと諦めていた念願が、思わぬ所で叶つてしまった!

これが夢なら一生覚めないでくれ!

ああ、まただ!また歓喜と精神異常無効化に心が揺さぶられる。

貧弱ですぐに息の上がる体とおさらばし、願望を詰め合わせた肉体に生まれ変わることができたのだ。これを喜ばずにはいられまい!

精神無効を何度も繰り返し、ようやく鎮まりました、サーセン。

「すみません、やっと落ち着きました」

「精神作用効果無効をそんなに連発するとは……。度合いが大きすぎるとそうなるのか……。？あれですね、よほど嬉しかったんでしょ」  
「そりやもう！あ、じゃあ俺がどうやってこつちに來たのかも説明しない」と

一段落したので、俺はアツチで死んだ時の事情を、モモンガさんに説明した。

「そうだったんですか……。そう言えばアバさんが脱退したのも体調不良が原因だったっけ」

「いやほんとすいません。あの時のモモンガさん”悲しい”アイコン連発しまくるから罪悪感半端無かったです」

「いやはや、お恥ずかしい」

「しかし、何の因果かこうして再会できましたし

俺もAOGの一員として、モモンガさんに全面協力したいと思いません。

ですので、改めてよろしく願います。モモンガさん

「こちらこそ！頼もしい限りですよ！」

俺とモモンガさんは両手で固く握手を交わす。

副腕もねじ込んだのでモモンガさんの腕が全く見えねえ。

「ところでアバさん……」

「はい」

「GM（ギルドマスター）及び、此処の総括としてお聞きしたいのですが、

エントマとの関係はどうするんですか？嫁にするって豪語してたの——」

「嫁にします」

「即答か」

「おうとも」

俺の最終目標はこれに尽きる。

この世界での行動方針は決まった。俺は再びAOGの一員として、

ギルドに貢献すると共に、エントマちゃんとの仲を徐々に深める。

従者として、絶対の忠誠を誓ってくれているとは言え、異性経験ゼロの俺にエントマちゃんという高嶺の花は恐ろしいほどのハードモードとなるだろう。

だからこそ、至高の41人の1人にふさわしい働きを見せるべく邁進しよう。

早速、前途多難なのだが……。

「ただ、俺の第一印象最悪だったみたいなので、先は長いですよ……はは……は……は……。ふう」

「う、うーん、その辺は、まあ、これから長い付き合いになるだろうから、ゆっくり改善していきましょう」

「そつすね、ていうかいいんですか？ いわゆる職場恋愛ですけど」

「職場というか……うん、確かにそうだな。」

それについては源次郎さんとアバさんで話がついてますから俺が介入する余地はありませんよ。夢が叶いそうなのに邪魔なんてとてもとても」

「ありがとうございます」

「すごかったですもんね、

源次郎さんへの執拗な土下座と数十回に渡るPVPの果てでしたし」

「いやー、嬉しかったですよ。ペロさんにお前こそ真の漢だとベタ褒めされました」

「虫に関して言えばペロロンチーノさんを凌駕してますもんね、アバさん」

「何がです?」

「その……変態度」

「ぐふう」

「ただ、色恋沙汰は……俺も疎いので、そういう相談はちよつと……」  
「大丈夫、全部分かっています」

俺はどこからともなく珍妙な仮面を取り出す。真っ赤な顔に、笑つてるとも怒つてるとも泣いているとも取れる、絶妙な表情を浮かべた

仮面が一つ。

クリスマススイブ、いつもどおりログインしていたら突如配布されたアイテム。

通称『嫉妬マスク』だ。

何故、そんな通称が付いてるのはかは想像に難くないだろう……。

すると、おもむろにモモンガさんの右手がぽっかりと空いた虚空へと吸い込まれる。

やがて戻ってきた手にはあの仮面、『嫉妬マスク』が……。

「……」

俺たちは仮面を片手に、静かにサムズアップをした。



## プレアデス月例会議 緊急編

アインズ・ウール・ゴウン所属、戦闘メイド『プレアデス』。ナザリツクに多くいる一般メイド達とは違い、六人からなる、50から60程のレベルを有する戦闘メイド達だ。

個性豊かな面々はそれぞれが異なる特徴、種族を持つ。

副リーダーであり、まとめ役でもある僕ツ娘デユラハンのユリ・アルファ。

ワーウルフであり、独特な語尾が特徴の隠れDS、ルプスレギナ・ベータ。

ドツペルゲンガーであり、黒髪ポニーテールな毒舌家、ナーベラル・ガンマ。

オートマトン（自動人形）であり、ポーカーフフェイスなCZ2128Δ。略称、シズ・デルタ。

シヨゴス（不定形の粘液）であり、オープンD肉食系女子、ソリュシャン・イプシロン。

蜘蛛人であり、体のほぼ全て虫による擬態である、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。

そんな六人が、卓に豪勢な食事を用意し、集合する。緊急の会議でも、食事を用意出来る点は使用人のレベルの高さが伺える。

彼女らの本拠地、ナザリツク地下大墳墓の一角にて、異世界に来て初、緊急の会議が開かれようとしていたのだが……。

「……うゝ、ワー、むううううう」

食卓に用意された椅子に腰掛ける少女の内一人が卓に突っ伏したまま苦しそうに身悶えている。蜘蛛人のエントマだ。

挙句の果てに、口唇蟲が時折役目を忘れ、エントマのお団子へアールに擬態している蟲の一匹が、擬態もへったくれも無い状態で大暴れしていた。幸い、ユリの巧みな誘導により、食卓には被害が及ばなかったが、彼女はプレアデス全員が集合してからもこの状態のままであった。

「ユリ姉……エンちゃんどうしたっす？悪い物でも食ったっすか」

一番に食いついたのはルプスレギナだった。ルプスレギナは、いつもならば自分と同じく真つ先に食事でありつくであるろうエントマの異変に、戸惑いを隠せないでいた。

「ルプーじゃあるまいし……分らないわ、ずつとこの調子だもの」「私はちよつとやさつとじゃ腹壊さないつすよ!?!」「ふう……」

ソリュシャンは突つ込み所はそこなのかと、ズレた回答とエントマの状況に溜息を吐いた。予想以上に、事は深刻らしい。

「今日、一番重要なのに……。この調子では困る」

話が進まない事に苦慮しながらも、専用である特製ドリンクをストローで飲み続けるシズ。その飲み物のカロリーは成人男性の一日分に匹敵する。

「至高の御方であるアバ・ドン様と何かあったのでしょうか。特別にアバ・ドン様の個室へ入る名誉を授かったにも関わらず……。何か不備があったのかしら?」

ナーベラルの一言を期に、エントマはピクリと震え、先程までの荒ぶりようが嘘のように、静まり返ってしまった。打って変わって、今度は死んだように不動を貫く。

全員、それが答えだとはつきり分かった。エントマの動きがナーベラルの問いを肯定しているのは明白であった。

「凶星ね。しかも、さつきから一度も食事に手を付けてないの。」

ほら、何があったのか説明してご覧なさい、何なら食べながらでもいいから」

「いらなしい……」  
「……!?!」

ソリュシャンは、あろうことか肉を突つばねる妹に最大の衝撃を受けた。そのショックか、ソリュシャンはがくりとずっこけた。かのように見えたが、人間の腰に該当する部分が人体の構造上ありえない方向へ曲がっただけである。

人間のように擬態するモンスターは、ナザリックに数多く存在する。そんな者達の大半は、至高の41人から与えられた姿形を大きく

崩す事を良しとしない。アインズの命令次第で、いかなる形に変わろうという覚悟も背負ってはいるが、一時的にそれを失念する程に大きな衝撃だったのである。

それでも尚、答えを急ごうとする。

神にも等しい偉大なる御方の看病ともなれば、一つたりとも失敗は許されない。それはプレアデス、引いてはナザリツクにいるシモベ達の総意でもあった。

「待ちなさいソリユシャン。至高の方々には絶対の忠誠を誓っているのはこの子も同じ。お達しが無い以上、アバ・ドン様は今回の件は不問にしてる筈よ」

このままでは、エントマから話を聞き出すのは難航するばかりだ。ユリは答えを急ごうとする流れに待ったをかけた。

ここでエントマを責めるのは簡単だ。

しかし、これはプレアデスの共通認識でもあるのだが、服が汚れる事を至高の御方に泥を塗る程の恥とする彼女が、アバ・ドン様の前で失態を犯すだろうか？

先程まで見せていた狼狽ようは余程の事が無ければ起こりえない。エントマも、深く忠誠を捧げる一人。何か理由があるに違いない。そう考えたユリは、いつもより何回りも小さく見えるエントマに、努めて穏やかな口調で語りかけた。

今回は、机に鞭を打ちつけ音を立てる癖も鳴りを潜めていた。

「一つ一つ、ゆっくりと話してご覧なさい。ぼ……私はエントマの味方よ」

「んう……」

もともと動きを見せたエントマは、ゆっくりと顔を上げる。顔に擬態する蟲は想像以上に悲しそうでもあるし、嬉しそうでもある。まるで、至高の41人の大半が所有している、あの仮面のようだ。

ようやく、エントマは一連の出来事をポツリポツリと語り始めた。

「……見とれちゃったのお」

何に？とは聞かない。五人は静かにエントマの答えを待った。

「本当ならあ、アバ・ドン様の体調を気遣うべきなのに……。アバ・

ドン様が美しすぎてえ……見惚れちゃったのお……」

エントマの答えは、プレアデス達を幾分か納得させるものであった。

至高の41人の一人であるアバ・ドン。第五階層守護者であるコキュートスと同じく蟲王である。しかしその容姿は大きく異なる。

この世を喰らい尽くさんばかりの不敵な顔。肩から伸びる鎌は万物を切断し、暴力的と言える程禍々しい主腕と二対の副腕。しかし、その眼に宿す光は理知的で、鮮やかに輝く虹色の身体は、数多の寶石を路傍の小石と思わせる程。

あの恐怖公の超恐怖的容姿が先行し、蟲系モンスターに一定の壁を感じていたナザリックの女性陣もアバ・ドン様の壮麗さは認めざるを得ない。

「どう尽くすべきかあ、たくさん考えたのにい、どきどきしてえ、何も考えられなくなつてえ……。うー、今も頭の中からあ、あの美しい御姿が離れないのお……」

自分の両手を両頬に沿え、恍惚とした声色で、エントマは語る。

しかも、初めて言葉を交わしたあの御方は極めて紳士的で、失態を演じ続けた自分の全てを許すと、穏やかに諭して下さった。私の為に、聞き慣れない呪い（まじない）まで唱え、心が静まるまでずつとお待ちになり、叱責をされる事すら無く、何の問題も無かったかのようには振舞われた。

そして自分はこの有様であると、エントマは語る。有り体に言えば、アバ・ドンは心身共に超絶イケムシであった。話を纏めると、こういう事だ。

それでも至高の御方の前で失態を働いて良い理由にはならないが、エントマの話には続きがあるようなので、もう暫く聞きに徹する。

「一番心乱れたのはあ、アバ・ドン様が私を連れて一言だけえ……」

で、デートみたいだつてえ……キヤーー！」

見た目相応の可愛らしい悲鳴を上げると、また机に伏せてしまつた。

エントマはあの一言で、あろうことかアバ・ドンとのその後を想像してしまった。

その後と言うのはつまりはそういう事だ。

ついには心が乱れに乱れ、至高の御方の前で擬態を崩すと言う大失態を犯した。

自身が気づいたときには、既に手遅れであった。

「つまり、アバ・ドン様に恋心を抱いてしまったっすか……」

ルプスレギナは理由を理解し、アチャーと声を出しながら天井を見た。

「……？」

シズは話の流れがイマイチ読み取れず、首を傾げる。製作者の意向により、そういった話には疎いのだ。ユリは無知な妹に分かりやすく説明した。

「シズ、つまりエントマはアバ・ドン様のご寵愛を求めているのよ」

「なるほど……それは大変」

「で、結局どうなんすか？」

「よく分かんない……。でもお、アバ・ドン様の事を考えるとお、お腹がいっぱいにい、苦しいよお……。でも辛くないのお」

「それはお腹ではなく、胸がいっぱいになってるのよ」

ユリが冷静に間違いを正す。今日のユリは突っ込み役に徹していた。しかし、まとめ役というのは得てしてそういうものだ。本来のエントマであれば、そのまま自害しかねない程の体たらくだ。しかし、当の本人は色々とそれどころではなかった。

「ソリュシヤン、良いのでしょうか？エントマが御寵愛を頂くと云うのは……」

「ナーベ、それはアバ・ドン様次第でしょう」

エントマの失態は、アバ・ドン様が気にするなど仰る以上、追及する必要性は薄い。これから気をつけるようにはするべきだが。

それはさて置き、この恋路は極めて繊細かつ重大な問題だ。至高の御方の未来を、アインズ・ウール・ゴウンの未来を、そして可愛い妹の未来を左右する。

下等生物の集落をアインズ様がお救いになって以降、大きな変化が見られなかった中で投下された特大の爆弾だ。アインズ様の正妃を巡って争う守護者にも多大な影響を及ぼしかねない。

「どうしましょう……」

「どうするっすか……」

「どうする……」

「困ったわ……」

「本当ね……」

「アバ・ドン様あ……」

プレアデスの面々は、難儀な春の訪れに何とも言えない気持ちを抱いた。

「そっか、皆は源次郎様とアバ・ドン様の密約を知らなかったわね……」

ユリが、誰にも聞こえないほど小さな声で呟いた。

## 挨拶準備

俺とモモンガさんは男同士の奇妙な友情を確かめ合い、これからのことについて再度話し合う。さつきまでの話は将来的な話。次に話すのは今からどうするかの話だ。

「アバさん直々、皆に挨拶をするべきでしょうね」  
「ですよー」

モモンガさんも最初に、第六階層の闘技場に守護者を招集し、顔見せした後、色々聞き出したそう。となると、俺もナザリックの面々に顔を合わせた方が良からう。

それに……

「俺、実質ナンバー2!？」

「そうなりますねえ。覚悟した方が良いでしょう。みんな忠誠心がガチですから」

「あ、やべ緊張してき……ふう」

「ああ……その感じ、俺も通った道ですよ」

モモンガさんが遠い目をしている。モモンガさんは、俺がアバ・ドゥンに生まれ変わるよりも一足早く、こちら側に来ていた。

それまでの期間はそんな長い訳でもなかったが、短期間で相当な苦労を強いられてきたのは容易に想像出来た。俺ももうちよつと早くに来る事が出来ればなあ。

しかし、モモンガさん曰く、ユグドラシルが終了と同時にナザリックが異世界に転移したと言っていたのだが、となると、ユグドラシル終了時期にご臨終した俺も、同じタイミングで転移してないのは何か違いがあるのか？

モモンガさんの場合はナザリックの中枢に居たからこそ、ロスタイム無しに転移出来たという説が濃厚だが判断材料は少ないので、何とも言えない。

少なくとも、俺達のようにユグドラシルのプレイヤーが転移してきたとしても、時間差が生じる可能性が高い。俺の場合大した差になら

なかったが、一年以上の差、もしくは何百年もの差異が出るのかもしれない。

まあ、これ以上考えても予測の粹を出ないし、モモンガさんに至っては既に推測している事であった。あの人、自分の中身はただのサラリーマンですなんて言ってたけど、少なくとも頭の回転早いと思うわ。俺だったら真似出来そうに無いもん。

さて、話は戻る。

「試してみたんですけど、メッセージを個人仕様でやり取りすれば内緒話も容易に出来ます。なので、こっそりメッセージを使ってお互いフオローするようにしましょう」

メッセージ。名前のまんまだ。プレイヤー同士でボイスチャット等のやり取りが出来る。なんと、こちらではNPCと連絡出来たそうだ。連絡手段に最適だな。

となると、ゲーム時代と今で、魔法やスキルに何かしらの差異があると見て良い。

まあ、モモンガさんは既に検証に当たっているのだが。さすもも。

「ありがてえ話です。役に立てるか怪しいですが」

「いえいえ、居てくれるだけでも本当に違うし」

「そんなもんかなあ？まあやれるだけやってみます」

「了解です。それじゃ、俺はまず皆が跪いたら

”面を上げよ”と言うので、アバさんは……」

「ふむふむ……」

それから暫くの間、挨拶時の流れをおおまかに話し合って、主要な者達を玉座の間に集合させ、ぶつつけ本番と相成った。結構な数の無駄話が飛び交い、NPC達を置き去りにしているのだ。リハーサルする時間が取れなかったのは痛手だったが、自業自得であった、ジーザス。

さて、至急玉座の間に集合せよと命じられた守護者各位は、始めから、指令を待っていたのか、即座に集結した。速さが足りてる！

先程までとは打って変わって、現在の玉座の間には守護者統括のアルベドを筆頭に、各階層守護者とその精鋭達で埋め尽くされている。



モモンガさんは玉座に深く腰掛け王者の風格を漂わせている、気がする。一方の俺は第九階層の個室から引っぱり出してきた豪華絢爛な椅子に腰掛けている。人間時代でも1日中座っていられそうな座り心地だ。

俺の姿勢は背筋を伸ばし背もたれにもたれ掛からず、両主腕はひざの上に、唯一副腕はそのままだ。簡単に言えば、新入社員が面接中に行う正しい姿勢だ。

実質ナンバー2なのに何故この座り方をチョイスしたのか。自分でも謎だ。足を組むぐらいしといた方が良いのだろうか。でも俺敬語キャラだから案外良い姿勢の方が……もう手遅れだし思考放棄。別の事考えよ。

今ここに集まっている面子が会社で言うところの幹部クラスだ。守護者は全員100LVなので中々強い。あ、ヴィクティムは違ってたっけ。あいつ特殊すぎるからな……。

まず、目の前にいる守護者統括、アルベド。守護者のリーダー格であり、ナザリックのナンバー3だ。俺がいるからな。タブラさんが設定しただけに、とんでもねえ程の設定過多なサキュバスだ。胸元の蜘蛛の巣型アクセサリーのセンスが素晴らしい。色々ヤバイ設定が盛り込まれてる筈なのだが、モモンガさんが若

気の至りで”モモンガを愛している”なんて設定に一部変えてしまったらしい。ヤッチマツタナー。その事を告げられた時の気まずさと言ったら……。

そりゃこんな事態になるとは予想だにも出来ないだろうし、本人も悪気は無かったんだよ……。めっちゃ気にしてたので、この件はそつとしておくのが良いだろう。

とりあえずギャップはあるからタブラさんの無問題じゃね？

とは言え、設定をいじったせいでアルベドに何か齟齬が生じないかは気をつけねばならない。要チェックや！

第一、第二、第三階層守護者でトゥルー・ヴァンパイアのシャルティア。

取り巻きのベツピンさん達も集合だ。ぶっちゃけ弱いけどね、彼女達。しかも、シャルティアは能力設定がガチビルドだから、守護者で一番強いんじゃないかなろうか。

一番心配してるのは、ド変態のペロさんが設定したキャラだからそれが動き出す事でどんな事態になるかだ。超不安！要チエツクや！

ところで、この世界には18禁に当たる行為を行っても、何も起らないそうさ。ユグドラシルじゃエツクな行為は一発アウトだったのよね。ではどうやって、モモンガさんはそれを確かめ……俺は考えるのをやめた。

第五階層守護者、コキュートス。

超かっこいい。武人武御雷さんが作ったキンキンの冷気を放つ昆虫武人だ。率いる精鋭は、蟲型モンスターの他、氷系統に特化したモンスターも控えている。一緒に行軍出来たらさぞや幸せだろう。

ただ、そうも言ってもらえないのだ。

実は、コキュートスはエントマちゃんを巡る仮想ライバルだと勝手に思ってる。

本人の気持ちを知らんのに何を馬鹿なと思うが、蟲になってはつきり分かった。あいつ超イケムシ！俺も負けてない自信があるような無いような、な、無きにしも非ずだが、万が一そういう事になったら強敵間違いなし！要チエツクや！

第六階層守護者、アウラ&マーレ。

ペロさんの姉であるぶくぶく茶釜さんが生み出した双子のダークエルフ姉弟だ。ビーストテイマーで男装女子な姉のアウラと、結構遅しいドルイド、女装男子の弟マーレだ。姉のアウラはシャルティアと犬猿の仲なのを除けばかなりまともだ。

問題は、所謂男の娘のマーレ君な訳だが、モモンガさんから貰ったっていうリングオブアインズウールゴウンを何故左手薬指に嵌めているのか？アルベドとシャルティアはともかくとして、君男だよな？モモンガさん多分ノンケだから！

……ぶくぶく茶釜さんの闇は深い。要チエツクや！

第七階層守護者、デミウルゴス。

悪名高きウルベルトさんが生み出した悪魔だ。設定上、相当頭がキレるキャラクターなので、俺とモモンガさんがボロを出さないように最も警戒すべきNPCの一人だろう。しかし、その忠誠心はナザリツクの中でも輪をかけてすごいらしい。一番貢献してるのは専ら彼であると言っていた。

いつその事、何すれば良いか困った時に相談するのも良いかもしれない。モモンガさんとは違う切り口で上位者として接すれば距離感も計りやすくなる。上手く行けば頼もしい味方になるだろう。要チエツクや！

そして、その脇にプレアデスの面々、先頭には執事、セバスがいた。AOG最強を誇る、たっち・みーさんが生み出したNPCだ。生活面の最高責任者という立場で、守護者と同格の待遇を受けている。眼光がカタギじゃないことを除けば分かりやすい程の執事キャラだなあ。ナザリツクでは少数の極善なカルマ値を持っている。それがどういった影響を及ぼすかは留意せねばなるまい。要チエツクや！

つまり、守護者関係は全員要チエツクだな。心の中のシャーペンがいくらあつても足りやしない。

(モモンガさん、第四はゴーレムだからしょうがないけど第八のヴィクティムは?)

(あーヴィクティムはちよつと……)

(そっか。じゃあ後はパンドラ……)

(……)

(いや、なんでもないです)

危なかった、モモンガさんの黒歴史を穿り返してしまうところだった。いや、彼には宝物庫を守るという重大な使命が……。ま、まあそれは置いといて、個人メッセージは正常に機能するようだ。よしよし。

ユグドラシルの頃ならば、さして緊張する場面でもなく、その威容に感動する程度で済んでいたが、今はNPCではなくれっきとした一個の生命なのだ。緊張しない訳が無い。

それに、みんな跪いてる筈なのに、俺の事をじいっと見つめる気配。

俺には分かる、エントマちゃんだ。恐らく中の本当の顔が俺を見てるのだろう。

いや、運命の人だからとかそういうんじゃない、蟲王になったおかげで感覚が鋭敏になってるのだ。でもちよつと嬉しい。その表情から全てを読み取れる訳ではないが、き、嫌われたりしないよね……？見つめられるのは嬉しいんだけどね。ほんと。

(さ、正念場ですよ。お願いします、アバ・ドンさん)  
(了解です。アインズさん)

あ、ここからはうっかりモモンガさんって呼ばないように気をつける為、あえて呼び方を変えている。さー頑張るぞ。

## デミウルゴスの決意

第七階層守護者デミウルゴス。ナザリツク随一の知略を誇る炎獄の造物主。これから、彼の胸中にはある感情が渦巻き続ける事となる。

それは狂喜。

ギルド長アインズを残し、何処かへ去っていった至高の41人。その内の一人、アバ・ドンの帰還。多くのものが騒然とする中、彼は鋼の精神をもって、主の指令を待った。現在、アインズとアバ・ドンは玉座の間で会談を行っているであろう。今の自分は、その場に乱入し兼ねないほどの高ぶりを感じていたからであった。

暫くして、玉座の間へと緊急招集が行われた。

デミウルゴスでなくとも、その理由は容易に理解出来た。

守護者各位とその精鋭達は玉座の間にて一堂に会する。

デミウルゴスは、玉座の間に座す偉大なる御二方を目にし、視界が滲んでいくのを感じた。しかし、感情に流され無様な姿を晒す訳にはいかない。

デミウルゴスは、再び偉大な方へ忠誠を捧げる機会が設けられ、心が数多の喜びと幾ばくかの緊張で占められた。

「面を上げよ」

臣下全てが寸分の狂い無く、同時に顔を上げる。訓練された訳ではない。シモベ達の忠誠心がなせる行動だ。

「よく、集まってくれた。今日、お前達を呼び出した理由は他でもない……」

暫し間を置き、アバ・ドンがアインズを見やり、静かに頷く。

「我が心腹の友であるアバ・ドンさんが帰還された」

シモベ達は身じろぎ一つせず、黙したままであったが、その場の空気が明らかに変わった。理由は言うまでも無い事であった。皆、胸に込み上げる熱い思いを抑えていたのだから。

「さて、彼が今まで何をしていたか、気になるであろう。アバ・ドンさん」

「勿論です。私の親友よ」

アバ・ドンが立ち上がり一步前へと進み出る。思ったより軽やかな足音と共に、身体が数多の彩色を孕んだ輝きを放つ。

「皆さん、立ち上がって、楽な姿勢で」

御指示に従い、立ち上がる。

いささか整い過ぎていると言えるほど、均整の取れた動作。ほんの僅かな所作だけで、至高足る証左と成り得た。一部のシモベが息を呑んだのも無理は無いだろう。美しくも禍々しい容姿からは想像が付かない程、穏やかで丁寧な態度だった。

「遅ればせながら帰って参りました。至高の41人の末席を預からせて頂いておりました、アバ・ドンです。これから、私の身に何があったのか説明しようと思います」

アバ・ドンが語った内容はこうだ。

ある日、己の体内を凶暴な病魔が巣食った。それは、恐るべき力を有しており、魔法での治癒が不可能な程であった。それも、今までのような活動が困難になるレベルで。

そこで、アバ・ドンが下した結論は……。

ナザリツクを去る。最後の最後まで悩んだ末、苦渋の決断だった。

至高の御方を蝕んだ汚れた寄生虫の所業に、配下達が深い憤りを感じたのは当然の結果だ。極小の不埒者は、ナザリツク全ての殺意を一身に浴びる。

「至高の御方を侵した上に、アインズ様を悲しませる所業……絶対に

……絶対に……！」

に……！」

アルベドに至っては声に出ている。

アバ・ドンは長い時をかけ、命からがら病を打ち破り、危機は脱した。そして、ナザリツクへと帰還したのだ。だが、病魔との死闘で消耗した体力は想定以上だった為、第六階層で昏睡状態に陥っていたのだと言う。

「……」

デミウルゴスは己の涙腺がより緩んで行くのを感じた。主の苦悩

を取り払う事が出来なかつた無念からなのか、それとも、かの偉大な御方の慈悲を垣間見たからなのか。

おそらくは両方だろうと結論付け、至高の御方を前にして、込み上げる感情を抑える。横に控える、気の合わない同僚と同じ道を辿るのは癪だ。セバスが微かに震える気配を感じながら、そう考える。

しかし、それは仕方ない事かもしれない。何故、アバ・ドンはナザリツクを去る決意をしたのか？

デミウルゴスはすんなりと答えを導き出した。

至高の方々に比べ、遙かに脆弱な我々を巻き込まない為の措置。

アバ・ドンが苦戦を強いられる程の病ともなれば、部下達の中で抗える者は一人としていないだろう。至高の御方をも蝕んでしまう程の力を有するそれを、病魔と呼ぶのはいささか生温いように感じた。

言うなれば、それは神器級、超位魔法、或いは世界級の呪い。

至高の御方は命を賭し、たった一人立ち向かったのだ。ただ、アインズ・ウール・ゴウンを巻き込まない。それだけの為に。

何とと言う覚悟だろうか。

デミウルゴスは、心中で不甲斐なさを恥じ、至高の御方の秘す偉業に心からの敬意を示した。

「私の独断で、皆さんには多大な迷惑をおかけしてしまいました。本当に、申し訳ありません」

深々と頭を下げ、謝罪の意を示す至高の御方を前に、玉座の間に集ったシモベ達がどよめき立つ。何を持って迷惑とするか。

本当にそうに思う輩がいるならば……。

(私が直々に殺しましょう、一切の慈悲無く)

「払拭の機会が頂けるのであれば、私はこれからの働きで、汚名を返上する事を約束しましょう」

あくまで汚名となされるのか。単に、ひとえ我々の脆弱さが原因だと言うのに。

「私が言うのはおこがましい事かもしれませんが、言わせて下さい。……アインズさんを、ナザリツク地下大墳墓を守り続けて下さり、本当にありがとうございます。私が今ここにこうして居られるのは、アインズさん

と、貴方達のおかげです」

「……………ああ、これではセバスと同じじゃないか。

身を震わせるコキュートスト、嗚咽を隠そうともしないアウラとマーレを尻目に、頬を伝う涙を、懐から取り出したハンケチでそっと拭った。

「……………私からは以上です」

そして、アバ・ドンが再び席に戻った。

「では、お前達に問う。アバ・ドンさんの復帰に異存は無いか？ 私  
は、彼の復活を心から歓迎したい。異を唱える者がいるならば、理由  
を聞こう」

居る筈も無い。仮にそのような不屈き者がナザリツクに居たならば、堪え切れず、この場で殺してしまおうだろう。

沈着冷静なデミウルゴスをもってしてこの結論なのだから、他の守護者達がどういう考えなのかは火を見るより明らかである。

シャルティアが視線だけで周囲を見渡す。その赤い瞳には、僅かな殺意が見え隠れしていた。案の定、デミウルゴスと同意見であった。

「……………無いようだな」

「感謝します。それでは皆さん、これからよろしくお願いします」

「では各員、アバ・ドンさんに恥じぬよう、より一層の忠義に励め！」

玉座の間に、大音量の返事が響き渡った。

至高の御方に恥じない働きを誓った身。より、素晴らしい働きをお見せせねば。しかし、あのお二方に認められる程の功績を出すには一筋縄では行かない。

(ククク、これから忙しくなる。より安全かつ迅速に、素材を確保しなくては)

デミウルゴスは一層、身を引き締める。だが、その表情は深い笑みが浮かべられており、どこからどう見ても嬉しそうであった。



「はあ……緊張した」

「お疲れです、アバさん」

「あれで大丈夫だったかなあ？何か泣いてる人いっぱいいたけど、

まさか泣くほど俺の復帰が嫌なのか!？」

「いやいやいや、そんな事は無いでしょう!？」

「しかも、何か自分が新入社員なんだか上司なんだか立ち位置が曖昧になりました」

「ま、まあそこは個性という事で」

「そつすね。にしても、ほんとに生きてるんだな……NPC達」

「ええ、仲間達の為にも、守り抜かなきゃ」

「専ら守られる事の方が多くなりそうですがね……」

「あんなに気合入ってるなんて予想外だったわ」

「ちよつと誇らしいですよね」

「確かに。何にせよ、これで俺はまたAOGのギルメンです。

「一度と去る事はありませんからね！モモンガさん！」

「はい……。あ、発動した」

「……？ ああ。精神作用効果無効が発動する程何を考えたんすか？」

「そりや仲間が帰ってきたんですから。嬉しくって……また発動したか。」

「感情の起伏が大きすぎると、連続して発動する説は正しいみたいですよ」

「な、なんか照れるなあ……」。

「あ、あれです。精神作用効果無効は便利だけど、たまに煩わしいや」  
「一時的に無効化出来るアイテムならありますけど」

「任意でオンオフできるアイテムがあればなあ」

「この世界のどこかに落ちてると嬉しいかも」

「未知だらけの異世界だからついつい期待しちゃいますね」

「一人の時はそんな事考える暇も無かったなあ。

アバさんが来たおかげか、俺もワクワクしてます。

もしかしたら他の仲間達もいるかもしれないですし！」

「俺がこうやって来た以上、可能性はありますよ」

「ええ、すごく希望が湧いて来ました」

「よし、忙しくなるぞー！お互い頑張りましょう。モモンガさん！」

「はい！アバさん！」

「ギルドメンバー達が帰ってこれるように……」

「アインズ・ウール・ゴウンの名をこの世界に知らしめる！」

「そしてゆくゆくはエントマちゃんど」

「あはは、そっちも大事ですね」

一方、こちらの決意は容姿とはかけ離れた和やかさであった。

アウラの失敗？

「アバさんの装備品とアイテム一式、全てお返ししますね」  
「あざーっす」

おお、懐かしの我がコレクションよ！

引退した折、俺の装備品及びアイテム全て、ギルドに預けていた。せっかく集めたアイテムを死蔵するなんて勿体無いからな。モモンガさんなら大切に扱うだろうと、託したのだ。しかーし、俺が戻ってきた事により、こうして手元に舞い戻ってきた訳だ。

俺は、アイテムの量も質も、モモンガさんに遠く及ばないが、装備の性能だけなら負けず劣らずなのだ。ふふん。社会人特有の重課金を繰り返してきた末路とも言えるべきだが、こうして、役に立つ日が来たのならば、その甲斐があったというもの。

これらのセットは、モモンガさんがわざわざ宝物殿へ取りに行ってくれた。親切心であるのは間違いないのだが、もう一つ重大な理由がある。

宝物殿には領域守護者が一人いる。ああ、領域守護者ってのは、階層守護者の範囲狭い版な役職だ。宝物殿の領域守護者は倉庫番とも管理者とも言える、大事な役目だ。

領域守護者、その名をパンドラズ・アクターと言う。

モモンガさんが生み出したNPCで、種族はナーベラルと同じドツペルゲンガー。A O Gのギルメン全員の技を八割程使うことが出来るという恐るべきNPCだ。レベルは勿論100！ しかも、設定上デミウルゴスに匹敵する知能も有している。間違いなくこの局面において最高の頼もしさを誇るだろう。

だが、この状況下においても表に出ていないのは、モモンガさんが投入を躊躇っている証拠だ。

理由は簡単だ。ずばり、モモンガさんの黒歴史なのだ。

例えばだ、若き日の過ち、ぼくがかんがえたさいきよーきやらくたあが現実息を吹き込まれ、動き回っていたらどうなるだろうか？つまりはそういうことだ……。

正直、久々に宝物殿の財宝を見て回りたかったが、モモンガさんの精神を削ってまで見たい訳ではないので我慢しよう。

確か、宝物殿の整理整頓は源次郎さんが担当してた筈だ。エントマちゃんにとっても、思い入れのある場所なのではないだろうか。セキユリテイが洒落にならん事を除けば、デートスポットに向いてる気がするののでいずれ入る機会があれば良いのだが……。

さて、話を戻そう。

かつて愛用していた装備品が手元にあるのなら使いたくなるのが男心というもの。

という訳で……。

「模擬戦でいいから、ちよつと体動かしてみたいなあ」

「ふっふっふ、そうくると思ってたました。良かったら一緒にやりません？俺とタッグ組んで、適当なモンスター呼んでやりましょうよ」

「うおお！是非是非お願いします！やっベテンション上がってきた！」

「俺もですよー！」

モモンガさんの素晴らしい提案により、第六階層の闘技場で適当なヤツを見繕ってリハビリ戦をすることになった。モモンガさんと肩を並べて戦えるのだ。ああ、俺前衛だから実際肩は並ばんけど……。んなこたあいい。また一緒に戦えるのだと考えると、胸が熱くなる。

「ふう……」

「ふう……」

……また沈静化しおつた。しかもダブルで。

死の支配者 蟲  
オーバーロードとヴァーミンロードのダブル賢者タイムだ！

誰得だよ。

ポジティブな感情まで抑制されるのはやっぱ嫌だなあ。暇があったら解決策を模索してみるのもいいかもな。

「アウラとマールに闘技場を使う事を伝えたら行きましょう」

「あ、それならアウラさんに連絡するの、俺がやってもいいですか？救助して貰ったお礼言っないし」

「ん？……そうですね、勿論良いですよ。じゃあ俺はマールに」  
モモンガさんは暫し考え、快諾してくれた。

早速アウラ宛にメッセージを使用。

『はいーアバ・ドン様、何か御用でしょうか！』

繋がるのはやつ！

頭に直接呼びかけられるとは言え、1秒切るのはヤバくね？

『もしもし、アウラさんですか。二つ程用件がありまして……。まず一つ、ジャングルで最初に私を発見したお礼を言いたいです。極めて迅速な救助だったと聞いてます。ありがとうございます！』

『ええっ!?お礼なんてそんな！……むしろ私は、アバ・ドン様にお詫びしなければなりません！』

『へ？』

アウラは倒れた俺を発見次第、すぐさま回復魔法のエキスパート、メイド長でもあるペストーニヤを呼び、メッセージでモモンガさんに報告。報告後、俺を個室へ運ぶまで、近辺を使役するモンスターで警護し続けた。

全てモモンガさんから聞いた事だ。非の打ち所のない的確な対応、これのどこに謝る要素があると言うのか。

みんな良くも悪くも誠実なんだよなあ。エントマちゃんの時もそうだったけど。

……うし、決めた。今こそ、上司としての威厳を示す時。

『実は……』

『ストップですアウラさん』

『は、はい』

『私は、迅速な対応を下さったアウラさんに感謝してるのですよ。貴方のお詫びとやらに心当たりはありません。従って、私は貴方のお話を聞き流す事にします』

俺はこの子の対応に何の不満もないし、心から感謝している。だからこそ、この話をあえて打ち切ってしまうおう。気にしてないという説得力になれば良いのだが。

『……』

『このお話は、私はアウラさんに救助された。私はアウラさんに感謝している。』

それでおしまいが良いのですよ』

『グスツ……も、もう、マーレじゃあるまいし……。』

は、はい！ありがとうございますー！』

メッセージ越しに鼻を鳴らすアウラちゃん。そういう所は見た目相応なんだなあ。俺の挨拶のときも泣いてたっけ。結構泣き虫さんなのねー。

でも、立ち直りがすごい早かった。えらいっ！

『お礼も不要ですよ。言うのは私の方なんですから』

『……アバ・ドン様もインズ様のように、本当にお優しい方なんです  
ね』

『何のことやら……』

和ませるつもりですつとぼける。

すっかり機嫌は良くなったようだ。よかったよかった。

モモンガさんは既にマーレへの連絡が終わったようで、俺の方を見ると、うんうん頷いた後サムズアップされた。骸骨フェイスはいつもの無表情だが、何となく笑ってる気がする。なるほど、モモンガさんはこの話を知ってたな。俺の対応は正解だったらしい。

ん？いや、ちよつと待て。

……二回とも、アウラを泣かせてる原因は俺じゃね？

やばい、ぶくぶく茶釜さんにバレたら殺される。あの人のキャラ愛はペロさんとは別ベクトルでやばいのだ。おそらく、熱湯に直撃した虫と同じ確率で死ぬ。

うん、再会出来たらスライディング土下座しよう、そうしよう。

アウラが謝ろうとした理由は少々気になるが、今更聞く訳にもいくまい。

『じゃあ、一つ目の用件はこれで以上です。二つ目の用件なんですけど、闘技場を使ってもよろしいでしょうか？私は今、リハビリを兼ね、アインズさんとタッグを組んで、模擬戦をしたいと思っています』

『至高の御方が闘技場を使うのに許可なんて必要ありません！アバ・

ドン様とアインズ様が一緒に戦うのなら、是非見てみたいぐらいです！」

むう、むず痒い気持ちだ。そこまで言うほどの事なのだろうか。しかし、アウラが本当にそう思ってるのならば……。

『じゃ、見てみますか？そんな面白いものでもないですけど』

『えっ!? いいんですか!?!』

アウラの声量が跳ね上がった。嬉しそうなのは良いんだけど、雑魚相手に肩慣らしする程度なので、退屈な戦いになると思うのだが……。まあ、泣かせちゃったのをこれで帳消し出来るなら良かろう。

『勿論です』

『やったあ！あ、でしたらその、マーレと一緒に他の人を呼んでも良いですか?』

『ええ、それぐらい構いませんよ。いくらでも』

『げっ……』

んあ?今、モモンガさんがイケボに似つかわしくない奇声を発した。理由は分からんが、メッセージを切ったら聞いてみよう。

『ありがとうございます！準備次第またお呼び致しますね!』

『分かりました。では』

『はい!』

こうしてアウラへのメッセージは終了。最終的にはご機嫌になってくれたので及第点としよう。ぶくぶく茶釜さんにバレても、半殺し程度で済むだろう。

『……』

モモンガさんが上を向き、片手で両目を覆い、アチャーってポーズしてる。口も半開きになってるので、完全にアチャーな感じだ。その成りでやられるとシニールだな。

『どうしました?モモンガさん』

『やっっちゃいましたね……』

『?』

はて、何の事だろうか?よく分からないという意思表示に軽く90度程、首を傾げた。俺の首はカマキリ並によく曲がるのです。

ユグドラシル時代と違って表情アイコンが使えないので、超ポーカーフェイスな俺達は、こうやって感情表現をする事でコミュニケーションを取り易くする。

傍から見るとただのオーバーリアクションだ。

オーバーロードのオーバーリア……ごめんなんでもない。

「うーん……ま、いいか。闘技場に行ったら分かりますよ。別段悪い事ではないし」

「そうですかー」

「とりあえず装備を整えたら、転移しましょうね」  
「うい」

となれば向かう他無し、俺とモモンガさんは装備を整え闘技場へ転移した。



## 想定外と言う名の必然

(どうしてこうなった)

(ああ、知ってたとも……知っていたとも……)

(あー、ブループラネットさんの作った星空はやっばすげえやー)

(現実逃避しないで、行きますよ、アバ・ドンさん)

(ふあい……アインズさん)

装備を整え、ばっちりフル装備になった俺達は闘技場に転移。部下達の前なので、呼び方もお仕事モード。意思疎通は個人メツセージだ。

### 第六階層中央部闘技場。

そこで目にした光景に、俺はとつても驚いた。

具体的に言うと、二回精神作用効果無効が発動した。

闘技場の観客席は満員御礼。闘技スペースを囲う観客席は見事にナザリックのモンスターで埋め尽くされていたのだ。収容スペースはコロッセオと同じな筈なのだが、まあデカイモンスターもいるので人間基準の収容人数は当てにならない。

ナザリック中の配下達が全員集合したんじゃないかという状況だ。

しかし、その全員が沈黙を保っており、かなり威圧感があった。微かに熱気のようなものを感じるのが尚更怖い。

確かに、知り合いを誘っても良いって俺は言ったださ……。

そうだな、ナザリック内の面子はほぼ知り合い同士なのだからこうなる事はあるよな。でも、いくらなんでも集まりすぎだあ！

(これがナザリックの上位者になるという事ですよ、ハハハハ……)

(心中お察しします。ていうかマジでごめんなさい)

その乾いた笑いは、今までアインズさんが背負ってきた苦労を匂わせる悲しい笑い声であった……。偉い人は発言にも気をつけにやならん事がよく分かりました。超反省。

さて、この闘技場の観客席上には、周囲より高台になった特等席がある。コロシウムに来たお偉いさんが演説してるスペースみたいない場所だ。

そこに、アルベド含む階層守護者全員と（ヴィクティムとガルガンチユアはお留守番）セバス、プレアデスの面々まで集合している。守護はどうした守護は。

後、闘技場の闘技スペース入口の影に、30cm大のゴキブリとそれを取り巻く普通サイズのゴキブリが潜んでいた。おお！恐怖公！恐怖公じゃないか！うわー懐かしいな！

あんなにひっそりと俺の事を見てるのはきつと、周りに気を使っての事なのだろう。すまねえ……俺があまりにもリアルなGの造形にこだわったばかりに……。落ち着いたらゆっくり話でもしよう。今は手を振るだけに留める。

アルベドが、フェンスにお胸を押し付けるよう身を乗り出し、アイズさんにもすごい勢いでアピールしている。その結果、胸元がちらりと見え、挟まれて潰れた胸がなんともセクシーだ。蜘蛛の巣アクセサリー引つかかって痛くないのかなあ？

「……チツ、おっぱいゴリラめ」

そんなアルベドを横目に、シャルティアが舌打ちをした。ハッキリ聞こえちまったよ……視力聴力が良いってのは良い事ばかりじゃないなあ。

「ああん？貧乳ヤツメウナギとどっちが魅力的なのかしらねえ？」

「あ？その下品な乳袋、眷族の餌にしてやろうか」

す、すごい睨み合いだ。顔の横に『!』って書いてありそう。これが女の戦い……！なわけねえ！あれ絶対不運ハードラックと踊ダンスっちゃまう類の喧嘩や！

皆さーん、あつちで好カードな試合が始まりますよー。あれは、俺かアイズさんが止めに行くべきなのだろうか。

「ヨセ……アイズ様ト、アバ・ドン様ガ御技ヲ才見セスル最高ノ機会ダゾ……」

あ、コキュートスに諫められた。その言に納得したのか。二人は渋々従い、大人しくなった。やるじゃん！

そして、プレアデスが全員いる、という事は……。

「……アバ・ドン様あ」

いやっほー！エントマちゃん！視力も聴力も大幅強化されてるからはつきりと見えるぞ！だが、これまたスマートに軽く手を振っておくだけに留める。皆の前だしね。

うーん、反応が悪い。ちよつと目を見開いたから気づいてる筈なんだけど……。

やはり前回のアレが良くなかったのか……。すると、眼鏡と夜会巻きヘアが特徴なプレアデスのお姉ちゃん、ユリがエントマちゃんに耳打ちをした。

「ほら、至高の御方が手をお振りになってるのよ？」  
「う、うん」

おお、良かった。ペコリと頭を下げてくれた。勢いがあつたせいとか、姿勢を戻した反動で触覚がゆんゆんしてる。ユリ超グツジョブ。しかしどうアプローチをすれば、好感度を回復出来るか……。

と、思ったのだがまさに今がチャンスではないか！

この模擬戦で、かつこいい所を見せるのだ。そうすれば、俺の事を見直してくれる筈！

(やるぞお！)

(急にやる気にな……ああ、エントマ効果)

(なんすかその自然現象みたいな呼び方)

「アインズ様ー！アバ・ドン様ー！」

「ま、待って！お姉ちゃん！わーっ!？」

不意にアウラが、マールを掴んで飛び降りてきた。もー！大丈夫って分かってるのにハラハラするわ！

華麗に着地し、元氣ツ娘よろしく俺達の下に駆け寄る。マールが完全に引きずられる形となっているその様は、姉弟の力関係を、雄弁に語っていた。マールも結構強いんだけどねえ。

(初めて会話した時よりも、マールの連れ方が強引だな……)

(急いでるんでしょう。もう全員集合してますし)

引きずられながら、捲くり上がりそうになるミニスカートを修正する姿は

女の子そのものだ。だが男だ。繰り返す、だが男だ。

「ようこそ！アインズ様！アバ・ドン様！この通り、準備完了してます！各階層の警備体制に穴が出ないように、アルベドとデミウルゴスが調整済みです！」

「じ、人員に空きが出るころには、きちんと対策しました！」

「うむ、ご苦労だったな」

「お疲れ様です」

準備つてそういう事かよお！皆で観戦する準備ね！

俺達はアウラとマールをきちんと労う。俺達を観戦するためわざわざナザリックの警備状況を考慮してくれたのだ。この状況は俺のせいであつて、彼女達のせいではない。

「わあ……アバ・ドン様の装備、とてもよくお似合いですよ！」

アウラの言葉にマールも相槌を打つ。

「はは、そう言われると照れますね」

気恥ずかしさをごまかすように、俺は自分の防具をチラリと確認する。俺の防具はそれなりの装飾は施されているがアインズさんよりシンプルだ。

上半身は、肩と胸、手首を保護するプロテクター。下半身は、腰こしみの蓑状の鎧をベルトとバックルで固定し、膝と足首を、上半身と同じプロテクターを装着している。防具の色は全て、俺の体とほぼ同じだ。

その全てが神器級。膨大なデータクリスタルを俺専用のチューンで設定し、希少金属とリアルマネーを注ぎ込みまくった珠玉の一品だ。性能だけならアインズさんに決して引けを取らない。

その名も『究極アの闇ホをもたらす者リユ』！

あ、ヤバイ。アインズさんの気持ち分かった。これすごい恥ずかしい。命名俺なんよ。

ま、まあそれはさておきよく馴染む。装備しても動きを阻害するよ  
うな違和感は一切無い。尚、武器は無い、俺には不要だ。

「僕達、階層守護者は高台で見ようと思います。い、偉大な御方々を見  
下ろす不敬を……」

「あははは、構いませんよそれぐらい」

「我々は気にしないとも、マール。見通しの良い場所で、心置きなく私

達の雄姿を眼に焼き付けなさい」

「あ、ありがとうございますー！」

アインズさんと会話してる時のマーレがアルベドに負けず劣らず恋する乙女ちつくな表情なのは気のせいだ、そうに違いない。アウラとマーレはまた客席に戻っていった。勿論マーレは引きずられながらも。

(これは、恥ずかしい戦いは見せられないですね)

(違いないです……)

(まあライブ配信されながら戦ってると思えば)

(あー、そうですね)

実を言うと、見られながら戦う事自体は慣れっこだ。国内どころか一部諸外国でも、観戦されてたぐらないのだから。

GvG然りPvP然り、見物人も多かつたし、その模様を一部のプレイヤーが撮影し、それをネットで配信する。よくあることである。だが、ゲーム越しではなく生で見られるとなると色々違うなあ。

(なるほど、お二方とも面白い事をお考えになる……。ナザリックの支配者としてだけではなく、御自身の力をお示しになる。この模擬戦は、いわばアバ・ドン様による我々へのアピール。そんな事をせずとも、力量を疑う者などおりませんのに……)

(なんかデミウルゴスさんの眼光が優しみに溢れてる気がする)

(たまにあります)

(さよか)

さてさて、最早賽は投げられた。そろそろこっちに集中しないかね。

模擬戦の相手は悪魔の軍勢。

開き直った俺達は、デミウルゴスに頼んで、イビルロード魔将の悪魔召喚を使う事にした。魔将の悪魔召喚は時間さえあればいくらでも出来るので、モンスターを呼び出すコストも実質口ハという寸法だ。おっとくー。

それならば、スタッフオブアインズウールゴウンの宝石に封じられてる原初の精霊でも良かったのだが、俺は多数との戦いの方が得意な

のだ。何かと気が利くアインズさんの事だ。俺の見せ場を作るために、あえてそうしたのだろう。さすアイ。

基本的にこの戦いは出来レースだ。魔将の召喚する悪魔のレベルはたかが知れている。レベル差とパッシブスキルのせいで、こちらがダメージを負うことは一切無い。俺達に万が一の事故という事も起こり得ないので一安心という訳だな。

一応ハンデはある。まず、アインズさんは広範囲攻撃は使わない事になっている。ネガティブバースト程度でも、ぶっ放せば一瞬で片がついちやうし。

俺のハンデは攻撃を全て避けきる事。どちらかというとなーダメ縛りという奴だ。

それに、こうも皆が集まった以上は、

ゴリ押しでなく合理的な戦いを見せる必要がある。

(後はアインズさんを巻き込まないように気をつけなきゃな)

(アバ・ドンさんのアレは直撃するとヤバイですから……)

(攻撃力あんまり関係無いですからねえ、俺。久々なんで、最初は慎重にやります)

(その方が良いでしょう)

久しぶりの戦闘、上手く行くといいのだが。

エントマちゃんにカッコいいとこ見せちやうぞ！

強くある為に

アバ・ドンの挨拶により、士気が高まったナザリックのシモベ達。程なくして、階層守護者の姉弟、アウラとマーレからメッセージでの知らせが届いた。

『アインズ様とアバ・ドン様が模擬戦で共闘する。見学は自由』

そう聞いて胸躍らぬ者はナザリックに皆無であった。この知らせは、守護者統括のアルベドと、防衛面の最高責任者を兼任するデミウルゴスにも伝わった。

アウラは闘技場へ赴くか否かは問わなかった。聞くまでもないからだ。ただし、アルベドの場合は鼻息荒くするその姿に引いた為である。

愛する主人の勇姿を想像したアルベドは、なけなしの理性で一時の妄想を振り払い任務を遂行。

デミウルゴスと短いながらも入念な打ち合わせをし、ナザリックの防衛面に最小限の影響しか及ぼさぬよう、主要な者達を闘技場へ集結させるプランを組む。

その後、階層守護者を中心とし、模擬戦の知らせは瞬く間に広がった。

先程の緊急招集にも劣らぬ迅速さで、玉座の間に集ったよりも更に多くのモンスターが集合した。

今、観客席をひしめくモンスター達は、各々がどれほど主の戦いが楽しみかを語り合っていた。されど、片時も目を離す事無く入場するであろう偉大な主を待ち焦がれていた。

(ムウ、コレホド待チ遠シイトハ……)

特等席に佇む一体のモンスター。第五階層守護者、コキユートスだ。

自分と同じく、前衛を得意とする蟲ヴァーミンロード王、そして、我等が偉大なる主であるアバ・ドンの戦い。コキユートスがかつて無いほどワクワクするの仕方の無い事であった。

暫く待っていると、ついにその時が来た。闘技スペースの入口か

ら、現れた神々しい異形が二人。アインズとアバ・ドンだ。打って変わって、闘技場内は静寂に包まれた。

(オオ、ヤハリ見事ナ……)

コキユートスはアバ・ドンの戦闘装束に息を呑んだ。玉座の間で見せた、慈愛溢れる姿は鳴りを潜め、その身体は何回りも大きく見える。今ここにいるアバ・ドンに宿る闘志はまさしく戦士のそれだ。

だが、その真相は神器級装備により能力が引き上げられた事と、エントマの前で戦う為大張り切りしてゐるからだった。

『なるほど、魔将の召喚を……はい、ではそのように』

デミウルゴスはメッセージにより、主から戦いのあらましを聞いていた。

こういつた役目を任されるデミウルゴスが羨ましかつた。己の武を活かす機会が中々訪れぬ状況にやきもきしていたが、今この時だけは、心の外へ追いやる事が出来た。

「アバ・ドン様あ……私にい、手を御振りにい？」

「ユリ姉も言つてたじゃないつか！あれ絶対エンちゃんに対してっすよー！」

「……えへへえ」

(エントマガ色メキ立ツノモ無理ハアルマイ……。アバ・ドン様モ罪作りナ御方ダ)

コキユートスは敬愛する蟲王の伊達男ぶりに感心する。それでいて、あれほど純粋な愛情を持たれているとは、エントマは幸せ者だと、心の底から思った。

コキユートスはユグドラシル時代、アバ・ドンの戦いを何度か目にしている。当時、エントマの主である源次郎と、頻繁に決闘を繰り広げていた。自分の主人である武人建御雷がPVPの立会いをし、これに同行。

決闘の理由も無論知っている。だが、至高の方々が密約と決めた約束。何を言われようとも黙して語らぬ事を固く誓っている。エントマとアバ・ドンの関係は、その冷たい身体に反した暖かい目で見守っている。



当時の闘いは未だ、コキュートスの中に深く残っていた。

「ソレニシテモ懐カシイ。再ビ、アバ・ドン様ノ闘争ヲ拝見出来ルトハ……」

「コキュートスはアバ・ドン様の戦いを見た事ありんすか？」

つい先程、コキュートスに諫められたシャルティアは、独り言をしっかりと聞いていたらしい。独特の間違った郭言葉で疑問を口にする。コキュートスは少し迷ったが、アバ・ドンの戦いを話すだけならば、主の意に背く事ではないと判断した。

「……見レバ分カル。アレハ、実ニ恐ロシイ」

「へえ……」

武人たるコキュートスをもってして”恐ロシイ”それはシャルティアの興味を引くには充分な理由だ。が、それに及ばずとも、至高の御二方がどのような闘いを魅せてくれるか既に興味津々であった。「ム、イヨイヨ始マルカ」

その一言を皮切りに、闘技場中の視線が、アインズとアバ・ドンへ更に集約して行く。

魔将によって、場内に召喚されていく雑多な悪魔達。闘技場の半分を覆い尽くすほどの大量の悪魔達が、目の前の獲物に舌なめずりをする。

アインズとアバ・ドンは、既に体制を整えていた。と言つても、そのフォーメーションはシンプルだ。前にアバ・ドンが仁王立ちし、後ろでアインズが魔法の詠唱に入る。

たったそれだけの動作である筈なのに、絶対的強者足る凄まじい存在感を放つ。今この時の主役は、間違いなくアインズとアバ・ドンであった。

少し昔話をしよう。

かつて、ユグドラシル時代のアバ・ドンは、とにかく自分が蟲であり続ける事にこだわった。フリーの頃は、ひたすら虫に関係する名前のスキルばかりをかき集め、バランスもへったくれもないひどい戦闘力であった。

そこに救いの手を差し伸べたのが、当時、ギルド長を襲名したばかり

りのモモンガだ。

「俺、蟲になりたいんですよ」

「いやもうなってるけど……」

アバ・ドンの、蟲に対するただならぬこだわりを感じ、理不尽なPKに遭っていた姿に自分を重ねたモモンガは、キャラビルドのアドバイスついでにと、アインズ・ウール・ゴウンにスカウトした。

「この”蜚ヒの超俊足”とかオススメですよ。パッシブスキルとして安定した効果があります」

「おおー」

モモンガが有する豊富なスキルの知識と、経験に裏打ちされた確かな実用性は、アバ・ドンを確実に強化していった。幸い、レベルもまだ大した値ではなく、パラメータ配分の軌道修正も容易だった。

アバ・ドンにとって、アインズ・ウール・ゴウンでの経験は全てが有用で、有意義で、そして何より楽しかった。課金による金額の消耗が尋常じゃなかったが、それも気にならなかった。今も尚、アバ・ドンにとって最も大切な思い出だ。

モモンガ、たちち・みー。恐怖公製作がきっかけで仲良くなったらし★ふあー。蟲絡みのNPCで話が合った源次郎と武人建御雷。何故かうマが合ったペロロンチーノ。その姉のぶくぶく茶釜。ジャングルの製作に虫を添えて協力した、ブループラネット。

様々なギルドメンバーによる協力の下、なるべく蟲に関係していき、尚且つ、実用性のあるスキルをどんどん身に付けていった。そして、アバ・ドンがLV100に到達し、神器級装備で身を固めた時……

怪物が産声を上げた。

かつて、ユグドラシル時代に誕生した蟲王は、闘技場にて、復活の狼煙を上げようとしていた。

魔将達は、偉大なる至高の御方に刃を向ける罪悪感と戦いながら、悪魔をけしかけた。まず先手を打ったのは、軍勢の中にいた地獄の猟犬ヘルハウンドの群れ。狡猾な狩人である彼らは、およそ20頭がかりで、魔法詠唱者であるアインズに獐シカ猛な牙を突き立てようとする。

「通しませんよ」

その台詞を聞いた刹那、アバ・ドンは既に地獄の猟犬へ肉薄していた。襲い掛かる地獄の猟犬と、アバ・ドンの間にはそれなりの距離があった。それが瞬きをする間もなく急接近していたのだ。

「……転移魔法？」

シズは思った事をそのまま口にする。しかし、魔法を使ったような形跡は無い。

「いえ、あれはただ速く動いただけですね」

答えを教えてくださいましたのはセバスだった。

「ええっ!? 見えなかつたっすよ!!」

「初速から既に最高速に達していたようで……恐るべき加速力です」

レベル差があるとは言え、ワーウルフであるルプスレギナはおろかシズですら認識出来ない速さに、セバスは自身の鋭い眼光を普段よりも見開かせた。下手すると、セバスでも見失う程の瞬発力であったが、至高の二人に視線を集中していたおかげで、辛うじて認識出来た。

アバ・ドンの持ち味の一つはその加速力だ。

例えば、ジャンボジェット機やリニアモーターカー。そのトップスピードは目を見張るものがあるが、それでも、最高速に到達するにはそれなりの時間を要する。

だが、アバ・ドンにはそれが無い。蟲系スキルの恩恵により、加速力が極限まで引き上げられているのだ。アバ・ドンが動き出した時には、既に最高速度に到達している。

「隙だらけです」

瞬間移動に見間違える程のスピードで、地獄の猟犬達に接近したアバ・ドンは両主腕を平泳ぎの要領で水平に薙いだ。

すると、その動きに呼応するかのように、突如として蟲の群れが現れる。色も見た目も大きさも全てが異なる蟲の大群が、地獄の猟犬を全て貪り尽くした。

攻撃中も尚、蟲が動きを止める事は無く、主人の意に従い飛翔して行き、すぐに虚空へと消える。この一連の出来事が、ほんの一瞬で行われた。

傍から見れば、アバ・ドンが両腕を広げたと同時に、地獄の猟犬が

何か色彩豊かな塊に飲み込まれたようにしか見えなかつただろう。

「すごい……」

エントマは感動していた。先程見せた高速移動もさることながら、初めて見るアバ・ドンの技は、自分と同じムシツカイのそれだった。だが、決定的に違う事がある。

「私の蟲より、ずっと素直でえ、速くてえ、強い……」

「ぞっとするっすね……でも、かっけえーっす！」

ルプスレギナもその凄まじい攻撃に舌を巻く。

二人は、アバ・ドンと自分の格の違いを改めて認識した。エントマは、己の蟲を呼び出す時、若干のタイムラグが発生する。無論、咄嗟の一撃を防げる程度の微々たるものだが。

アバ・ドンの技の場合、一切の無駄が無い。攻撃しようと思えば即座に呼応し、用が終われば即座に消える。それでいて、威力は相手が一瞬にして消滅したかと思ふ程だ。

ただ、アバ・ドンの蟲攻撃の威力はそれほどでもない。せいぜいLV80の前衛職程度の攻撃力だ。単純な攻撃力で言えば、前衛として不適切であろう。

「アレハ、ムシツカイトイウ範疇ニ留マラナイ。最早一個ノ武器ダ」

「美しい……機能美という言葉の意味を初めて理解したのであります」

「アア、シカシ……」

「しかし？何であります？」

シャルティアの疑問に対し、コキュートスが半ば躊躇うように言葉を発した。

「アノ技ノ真ノ恐ロシサハ、威力デハナイ」

## 強さの証明

「さあ、お見せしまそ……ヤベ、噛んだ。お見せしましょう。数の暴力を……圧倒的、蟲の暴力を……！」

アバ・ドンが腕を振るう度、現れては喰い消されていく悪魔達。人間の皮を剥がして作ったような筋骨隆々の悪魔も、体中に人間の顔を貼り付けたような太った悪魔も、急接近され、蟲の海に吞まれて一瞬にして消えていった。

(うーん、効果が実感出来ませんね、一撃で死んじゃうから)

(アバ・ドンさん、威力落としてみたらどうです?)

(やってみます)

「ふむ……私の活躍を奪うとは感心しないな？アバ・ドンさん」

「おや、申し訳ない。では……」

ロールプレイでそれらしい理由を付け、大仰に振る舞い戦法を変える。アバ・ドンは忍び寄ってきた影の悪魔シャドウデーモンに顔を向ける事も無く右手を突き出し、蟲で葬り去りながら。同じくアインズも、攻めあぐねている一部の悪魔に顔を向ける事無くドラゴンライティング雷で一蹴しながら会話する。

二人はロールプレイ仲間と再会した事で、ちょっと調子に乗っていた。

「あ、あ、あ、アインズ様、かつけ……くふう！」

「まさしく美の結晶でありんすう！」

「アバ・ドン様かつこいいい……」

ただ、部下を身悶えさせるには効果靚面だ。

そして、アバ・ドンは人差し指を、悪魔の軍勢の一角に突き出した。その動きに呼応するように、大量の蟲が高速展開する。

今度は、蟲が通り過ぎた後にも、一部の悪魔達はその身を完全に残したままであった。しかし、様子がおかしい。蟲の波に巻き込まれた人型悪魔の一体は、身体を直立不動したままガクガク痙攣させ、体中の穴という穴からドス黒い液体が溢れ出している。全身が斑模様になり、その模様も忙しく動き回る。皮膚の一部は焼け爛れ、滴り落

ちる音がした。

「あ、あれは……」

プレアデスの一人、ソリュシヤンは戦慄した。ソリュシヤンはポイズンメーカー、アサシン等、毒に関わるクラスを持っているため、状態異常に対し造詣が深かった。

（あれはなんですか。アバ・ドン様はどれだけの毒……いや、バッドステータス攻撃を打ち込まれたのです？ 猛毒、MP減衰、暗闇、麻痺、火傷、昏睡、混乱、狂乱、朦朧、拘束、裂傷、呪、物理攻撃極限低下、物理防御極限低下、魔法攻撃極限低下、魔法防御極限低下、素早さ極限低下、バフ解除、デバフ倍加、耐性弱化、武器弱化、防具弱化。それら全てを……第八位階クラスで内包。いや、恐らく相当手加減なされています。先程の高威力で放てば……。しかも、それ等がどれほどの多段攻撃になっているの！）

ちなみに、今羅列された状態異常は、表面上辛うじて認識出来ただけ。過剰ともいえるそのバッドステータスの多さと比べつなさに、ソリュシヤンは興奮を抑え切れなかった。奇しくも、手加減をする事で判明した主人の能力は苛烈極まりない。

「痺れます……」

「流石は至高の御方の一柱でありんす……アインズ様も一目を置く筈ですわえ！」

常軌を逸したサディステイクさは、ソリュシヤンとシャルティアを羨望させるには満点だったようだ。初めて、アバ・ドンの能力を目の当たりにした部下達は、その悪魔より悪魔的な攻撃に恐れおののき、そして尊敬した。

（なんとということだ……。これほど凶々しい能力を有されているとは……！ 御二方がお考えになったアピールは私の予想の範疇を超えております。私はアバ・ドン様の御力を過小評価していた！）

デミウルゴスは己の愚かさを反省し、更に一段階深く、至高の御方への忠誠を誓った。

強力な蟲系スキルを重点的に身に付け、それに合わせたステータス調整をした結果、アバ・ドンの能力はひどいものになった。

戦場を縦横無尽に駆け回り、強力な状態異常とバッドステータス系の効果をたっぷり詰め込んだ超多段攻撃をそこら中にばら撒きまくる。装備とスキルを組み合わせたガチガチの耐性に存在する、ほんの僅かな隙間を潜りこんでくるような攻撃。0.1%でも耐性が足りなければ、超多段ヒットによる数の暴力で付け込まれる。反撃しようとも、逃げようとも、脅威となるその瞬発力。

当然、対立ギルドからは蛇蝎の如く嫌われた。その大量の蟲を呼び出してはぶち撒ける攻撃も拍車をかけた。某匿名掲示板では、アンチスレがパート100を超える程の嫌われようである。だが、虫の傍迷惑さを煮詰めて昇華したような戦闘スタイルをアバ・ドンは気に入っていた。

「加減シテ、アノ状態異常……感服致シマシタ」

自分では認識が追いつかない程の有毒ぶりに、コキユートスは敬意を表した。コキユートスは、ふとエントマの反応も気になったので、確認してみる。

「……」

(黙シテ語ラヌカ……?)

エントマは無反応なまま、アバ・ドンを見つめ続けていた。その様子は、まさに釘付けと言う言葉が相応しかった。

「ナベちゃん、何か良い匂いしないっすか?」

「ナーベと伸ばして呼んでください、ルプー姉さん」

「……何の匂い?」

最初に異変に気づいたのはワーウルフのルプスレギナだった。周辺に甘ったるい香りが広がっている。嗅いだ事の無い不思議な匂いだ。

「何ヤラ甘い匂イガ……?」

「ちよつと、誰でありんすか、香水振ったの……アルベド?」

「私じゃないわよ、こんな香りの香水持ってないもの」

「お、お姉ちゃん、この匂い分かる?毒じゃないけど……」

「分かんない。でも嫌いじゃないよ、この匂い」

プレアデスはおろか守護者達を以ってしても、その匂いの正体は分

からなかった。これが無害である事は共通の見解だったが、念の為にその正体をソリュシヤンが解析する。

「ぷっ……フフフ……」

「どうだったの？ソリュシヤン」

急に噴出したソリュシヤンを疑問に思いながらもユリは結果を尋ねた。

「フフ……だ、大丈夫です。この匂いは無害……フフ、ですから」「？」

匂いの正体に、たまらず破顔する。

（どうしてえ……？どうしてそんなに素敵なお？私い……メイドなのにい、あの御方のお……はうう）

それはエントマが生まれて初めて発した性フェロモンであった。だが、それを知る者はソリュシヤンを除き、誰一人として居なかったと言う。

（うわー……ほんとアバ・ドンさんの攻撃だけは喰らいたくないわー……）

（そもその発端はアインズさんですけどね！じゃあ攻撃任せます）（了解です）

「舞台は整いましたよ、アインズさん」

「ありがとうございます、ではせいぜい踊るとしよう」

尚、二人は未だ調子に乗っていた。

アインズは、使う魔法を単体型に限定し、一体一体それぞれに違う種類の魔法を使う。全ての魔法が異なる極彩色であり、虹を収束し、解き放っているかのようだ。

「前衛が動きを止め……」

「後衛が仕留める。雑魚狩りの基本だな」

今行使した攻撃全てが基本的かと言われれば首を傾げるところだが、ナザリックの面々からすればそんな事は些細な事であった。

アバ・ドンが敵を拘束し、アインズが、単体魔法で打ち抜く。最早作業とも言える光景だったが、熟練の技を感じさせるそのスムーズな流れの運び方は、闘技場の観客を魅了させるに足るものであった。



こうして、魔将が召喚した悪魔は、いともたやすく全滅した。

「至高の御方万歳！」

「アインズ・ウール・ゴウン万歳！」

ナザリック中のモンスター達による大喝采が、闘技場中に響き渡る。先程まで悪魔を召喚し続けていた魔将達も、偉大な御方へと最敬礼を送る。

二人がその場を去った後も、闘技場内は惜しめない称賛が飛び交い続けた。

「…………死にたい」

「踊るとしようってなんだよ…………馬鹿じゃないのか俺…………」

その後、円卓で精神を何度も沈静化しながら頭を抱えて突っ伏す二人の姿があった。

## 準備編

### アルベドの野望・確信

「くふっ……アインズ様、本当に素敵でした……。いえ、今も現在進行形で飛びつきり格好良いですけど、すごかった……」

至高の御方々による素晴らしき一戦は、ナザリックのモンスター各位に大きな余韻をもたらした。それは守護者統括であるアルベドも、同じ事であった。

体をくねらせながら、華麗なるアインズの姿を何度も反芻する。少しでも長くその気分を噛み締めたかった彼女は、最後まで闘技場内に残っていた。

アインズは心にゆとりを持つようになったとアルベドは思う。それは他ならぬ、アバ・ドンの帰還によるものと言って間違いはない。

先程まで見せていた戦いは、アバ・ドンの力を示す為に設けた場だ。しかし、それだけではないように思う。あの御方は友人との戦いを心底楽しんでるように見受けられた。古い友人と昔を懐かしむような、穏やかな空気をあの戦いの中で感じ取ったのだ。

愛しい御主人様は己を切り詰めて、針の穴を通すような策謀の数々を張り巡らせた。未知の世界で、何が牙を剥くかも分からぬ状況で、あの御方は何度も最適解を導き出している。それがどれ程の偉業であり、困難な事であるか。

そんな中、至高の御方が一人帰還した。どれほど頼もしい事かは想像に難くない。アインズと一緒に見せた戦いは、正しく阿吽の呼吸であった。

愛しいご主人様の御心を容易く解きほぐすアバ・ドンに少し嫉妬してしまうが、アインズの無二の親友である彼を卑下する程恥知らずでは無い。

あの御方も至高の41人の一人。かつて、病魔を退ける為にナザリックを去った。とうに見捨てられたと思っていた自分の考えは全くの間違いだった。己の抱いた不敬を恥じ、帰還された慈悲深き御方

を、アルベドも心から尊敬している。

「あ、いるう。お話ってなんですかあ？ アルベド様あ」

余韻に浸りつつ考えていると、話し掛けてくる者が一人。プレアデスが一人、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータである。

アルベドは、この余韻を壊す者に軽く苛立ちを覚えたが、皆が去った後、此処へ来るよう命じたのは他ならぬ自分であったので、理不尽な怒りを振じ伏せ、心優しき慈母の表情でエントマに語りかけた。

「ねえ、エントマ。単刀直入に聞くわ」

「はいい？」

「アバ・ドン様に惚れてしまったのでしょうか？」

「ええ!?……どお、どうしてですかあ？」

エントマは困惑した。まだ、定例会議でしか吐露していない自分の想いを、何故アルベドは知っていたのか？

「顔を見れば分かるわ。今の貴方は、戦闘メイド、プレアデスの顔ではない」

「……？」

「女の顔よー」

「……!」

エントマは思わず、余った袖に覆われた手で口元を押さえる。本人の口元は顎下にあるので、手の位置が若干下にズレているのだが。

アルベドはあっさり気づいた。エントマが抱いている熱い思いを。アバ・ドンがエントマに向けて手を振った時に見せたあの表情。自分と同じく、至高の御方へ灯してしまった炎を見出した。が、エントマの顔は擬態した蟲であり、真の貌はその蟲の裏にある蜘蛛の顔だ。にも拘らず、アルベドはエントマの想いを見事に汲み取った。

気づいた理由は最早、女の勘と言う他無い。

「……………えっとお……………はいい……………」

エントマは少し俯きつつも正直に答えた。どうして、言ってしまうかと思っただのか、今一つ分からなかったが、今の自分が抱いている気持ちに嘘を吐いたら、きつと後悔するだろうと、漠然とした気持ちで考えていた。

「何をそんなに慌てているの？私はね、貴方の恋路を応援したいのよ」  
アルベドはさも当たり前のように、言つてのけた。

「ええ？でもお、私はメイドでえ……」

「そんな事、愛の前には関係ないのよ！

御二方は本当に素敵よ。女として想いを抱くのはありえない話  
じゃないわ」

「……」

アルベドはエントマの恋路を支持しながら考える。

そもそも守護者やプレアデスに、明確な地位の差は無い。偉大なる  
創造主が「そうあれ」と設定したから、今の地位に着いているに過ぎ  
ない。レベル差はあれど、NPC達の間にも明確な立場の違いは無いの  
だ。

だから、メイドのエントマであろうとも、偉大な御方に操を立てる  
事はなんら問題ない。エントマの恋路にケチを付けるのは、自分や  
シャルティアの首を絞めるに等しい。

もし、エントマの恋が成就したならば？自分を差し置いて至高の御  
方と結ばれた小娘に凄まじく嫉妬する気がしなくも無い。だが、優し  
く背中を押した自分の行為はエントマを経由し、アバ・ドン様からア  
インズ様へ伝わるだろう。

更に、御友人が伴侶を作ったともなれば、アインズ様も考えを改め、  
婚姻を視野に入れるやもしれぬ。その時が来たら、私の行為はシャル  
ティアを突き放す大きなアドバンテージになるだろう。

そう結論付けたアルベドは、エントマに再度語りかけた。

「私だって、アインズ様に恋をしているのよ。頭の中はいつだって、あ  
の御方とあの御方が築く未来でいっぱいなの。貴方だってそうで  
しょう？」

「……」

エントマはただ黙って、静かに頷いた。自分はシズよりはお喋り  
だった筈なのだが、至高の41人の一人であるアバ・ドンに話し掛け  
られてから、自分が自分で無くなったような気持ちだった。

「アバ・ドン様の御子を身籠りたい？」

「はい、あの逞しくて美しい御体に、組み伏せられたいですう……」

フェロモンを放出した事により、半ば考えが淫靡になったようだ。だが、アルベドはエントマの正直な気持ちに満足した。

「そうね！　つまり私達は志を同じくする同志という事、そうでしよう？　エントマ」

アルベドはその細く綺麗な手を差し出す。ここで、エントマを味方に引き入れれば、既に自分の派閥に組み込んだ、ナーベラル、ユリ、ルプスレギナも入れて、プレアデスの半数以上が私を正妃に推す事になる。ライバルの偽乳ヴァンパイアの一步先を行ける事に、アルベドはほくそ笑む。

その光景を尻目に、エントマは自分なりに考えた。

ここで守護者統括であるアルベド様を味方に付けるのは得策だ。偉大なる創造主であるアインズ様に何度もアタックを仕掛けるアルベド様。今、自分が成そうとしている事は正しく未知の経験。此処で、この人の師事を受けるのも悪いことはない。幸い、アルベド様はアインズ様狙い。自分はアバ・ドン様狙い。

つまり、互いは障害になり得ない。

アルベド様とアインズ様が結ばれれば、片思いのあの御方も、便乗してお嫁さんを作ろうとするかもしれない。その時が来るまでに女としての自分を磨かねば……。アルベド様とシャルティア様の積極性は、今の自分も是非見習いたいところであった。

「よろしくお願いしますう！」

「ええ！」

未来への明確なビジョンを導き出した二人は、硬い握手を交わした。

(アインズ様が、アルベド様とくつつくならあ……)

(エントマがアバ・ドン様と結ばれるならば……)

(私だつてえ、結ばれちゃう筈う！)

(私だつて、結ばれる筈！)

裏に己の野望を押し隠しながら。

## 直属

新たな黒歴史のページを作ってしまった後悔からようやく立ち直った。良い運動をし、精神もリラックスしたとなると……。

「腹減った!」

「ほう、アバさんはお腹が空きますか」

「そりや身体動かせば……あ」

「そういう事です」

俺はモモンガさんの容姿を見て悟った。そっか。モモンガさんは飯が不要だろう、喰えないとも言えるが。どっからどう見ても骨だし、味覚も胃袋も無かろう。そもそもどうやって喋ってるのかとか考えただけで頭痛い。

「何故か嗅覚はあるんですけどね……」

「マジか」

ほんと不思議だな。

「そういう訳で、アバさんいつてらっしゃい」

「すみません、じゃあお言葉に甘えて……」

何も喰えないモモンガさんの目の前で御飯をもっしゃもっしゃ喰うのも申し訳ない。一緒に食べたかったが、今は仕方が無い。

「あ、そうそう」

「はい?」

「あのお願いですが……勿論構いませんよ。アバさんの好きにやっちゃって下さい」

「あざっす! 絶対モモンガさんの役に立ってみせますよ!」

「はい、楽しみにしてます」

わーい、雑談がてらにしてた要望が通ったぞ!俺は、今後自分がやるべきことを見つけ、円卓を後にした。

とりあえず、どっかで御飯食べよつと。ユグドラシルの頃はギルメンの飯食って能力強化とかはよくやったけど、ナザリックのみんなは一体どこで食事してるんだ? どうせならエントマちゃんと一緒に御飯食べたいです。

「ん？」

ナザリック内を散策したかったので、第九階層周辺を適当にぶらついていると、複数の何かに見られてる気配を感じた。こういう能力も鋭敏になってるのか俺、便利だなあ。

……天井ね。不可視化能力も、俺には何の効果もなさない。

「どなたです？御用ならば、直接言つて下さいな」

「……失礼致しました」

俺が天井目掛けて話しかけると、音も無く降りてきたモンスターが一人。人間大の大きさをした蜘蛛型忍者服モンスター、エイトエツジアサシンであった。上にいる残りもそのようだな。計四人か、数的にも丁度良いかもしれん……。

「別に、悪気が無いというのは分かっています。理由をお聞かせ願いますか？」

「ハッ、我々はコキユートス様より、護衛の命を預かっておりました。アバ・ドン様は一人でナザリックの荘厳なる景色を堪能されてる御様子でしたので、不敬ながら、気配を断ち密かに護衛しておりました」  
「なるほど。全員降りてきて構いませんよ。護衛お疲れ様です」

すぐに、天井に張り付いていた残りのメンバーも全員降りてきた。おお……ちよつと感動。最初に話しかけてきた彼がリーダーなのだろう。

みんな気が利くね。つまりは気を使ってこつそり護衛してくれてたのか。ありがたい話だ。こつそり見られてた事について思う所は無くもないが、みんな悪気は無いだろうし、一人になりたい時はそう命じればいいだけの事だ。

……うん、エイトエツジアサシン達は適任だろう。そういう配慮が出来るというのもプラスポイント。ついでに、彼らのフォームはカッコいいと思います。蜘蛛型忍者とか最高じゃね？

「分かりました、貴方達に私の護衛を任せるとしましょう。命令権は私の方にあると解釈してよろしいのですね？」

「勿論でございます。アバ・ドン様の御命令とあらば、最上位に優先するのが我々の義務です。それはコキユートス様も同様でしょう」

「うん、良い心がけです。ところで、貴方達に名前は？」

「名前……ですか？我々には固有名詞は付いておりませぬが……」

「それでは呼ぶ時の区別が難しい。いっそ、私が名前を付けてもよろしいですか？」

「な、なんと!? 恐れ多きことです」

勝手に命名されるのは嫌かと思っただが、そういう事じやなさそうだな。まあ、そういう理由なら問題なからう。

「そう畏まる必要はありません。あくまで今後の為に名前を付けるだけの事。貴方がたが私の名付けた名を名乗る事を、最初の命令としましょう」

「……ありがたき幸せ」

表情は分からないけど、不愉快という訳ではなさそうだな。よしよし。

「では、貴方の名前は……ハンゾーとしましょう」

「御命名、確かにお預かり致しました。」

本日より、私はハンゾーと名乗らせて頂きます」

「よろしく願います。では他の者達は左から」

ナガト、サンダユウ、ドウジュンとします。よろしいですね？」

「承知しました」

「承知」

「御命名、感謝致します」

おお、すごい。物静かながら、やる気を感じるぞ！こりや俺が思った以上に適任だったかもね。彼等に与えた名前は有名な忍者と同様のもの、所属とかよく分からんけど、古代において一流の忍者だったと言う。名乗る名として、彼等にきつと相応しいだろう。

ぶつちやけ、源次郎さんと武人建御雷さんの入れ知恵だな。



## 部下泣かせ

さて、思わぬ所で直近の部下を得られる事となった。これは幸先がいい！とりあえず目下の目的である飯を食いに行くとしよう。

「ハンゾーさん、食事が出来る場所で最寄りの所はどこでしょうか？」  
ユグドラシルの時、ながら飯とかザラだったから腰を据えて御飯食べるのは珍しい。

「ハッ、それでしたら、あちらに従業員用の食堂がございます」

「じゃあそこで食べましょうか。一緒にどうです？」

「「えッ!?!」」

エイトエツジアサシン達が落ち着いた佇まいからは外れた声を上げた。

え、俺なんか変な事言った？

「勿論、ナガトさん、サンダユウさん、ドウジュンさんも一緒ですよ。もしかして、もう食べてしまったとか？」

「い、いえ、そういう訳ではありませんが……」

従業員用の食堂。つまりは、社員食堂みたいなものだ。平たく言えば俺もハンゾー達も此処の従業員な訳だから、利用したって良からう。

「私の知ることわざに”同じ釜の飯を食う”と言うものがあります。

これから私達は苦楽を共にするのですから、交流の機会に丁度良いのですよ」

一緒に御飯食べるのは部下との交流にうってつけた。緊張させないように配慮する必要もあるけど、気さくに振舞えばなんとか……。

「お気遣い、痛み入ります……」

「大げさですねえ、一緒に食べるだけですよ」

俺は副腕で頭を掻きながら、ちよつと困惑する。滅茶苦茶畏まつてるんだけど、やっぱ忠誠心半端無いのね。俺もそれに応えられるようにならなきゃな。

とりあえず一緒に御飯は食べてくれるみたいなので、言われた通り従業員用の食堂へレッツラゴー。

入ってみると、白を基調としたシンプルな造りの食事スペースが設けられている。

ほー、良いじゃないか。こういうのでいいんだよ、こういうので。食べ放題方式というのも嬉しい。飾ってある時計を見るに、お昼時のようだ。こういう感じの食堂って英語で洒落た感じの名前があった筈だけど何だっけ？

食堂では、結構な数のメイド達が食事を楽しんでいる。全員ホームクレス人造人間だっけな。プレアデスと違って、戦闘力は皆無だから丁寧にね。ギルメンの一人、ホワイトブリムさんの気合が籠もったメイド服が眩しい。

……奥の席が素材不明の謎肉の山になってる。随分大食漢な従業員がいるようです。

「……!?!」

暫く間を置いて、俺の存在に気づいたメイドさん達が即座に立ち上がろうとする。

「はいストップ!」

俺が慌ててそう言うと、立ち上がるとうとする姿勢のままメイド達が固まった。こうなる事は予測していたもんね!社員食堂へ二番目に偉い人とその護衛が乗り込んだりできたらそりやビビるだろう。俺のせいで食事を中断させてしまうのは申し訳ない。

「私はあくまで、一従業員として食事に来ただけです。どうぞ、御気になさらず食事を続けて下さい」

努めて穏やかな口調で一言だけ残す。全員着席した事を確認し、適当な席を探す。

五人分座するのに丁度良い場所は……。

はっ!?

俺は周囲を窺っている最中に固まってしまった。さつき目に付いた肉山テーブルにおわす少々風変わりなメイドが二人。

「アバ・ドン様!?!」

え、え、エントマちゃんだー!今日も可愛いぞお!従業員用の食堂とは言え、遭遇できるとは何という幸運!一緒に御飯を食べてる褐色

シスターなメイドは姉のルプスレギナだな。二人とも食いしん坊系だから何かと気が合うのかもしれない。

よ、よーし、ここはさりげなく近くの席へ……。俺だってやるべきややるぜ！適当に台にある食べ物を掻っ攫い、置いてあつた箸を取っていざ出陣。すいません、どれが何の食い物かよく分かりません。箸も置いてあるって事は和食もあるのかな？

「プレアデスの二人がいますね、あちらで食べましょうか」  
「ハッ！」

俺とエイトエツジアサシン達は各々で好きな食べ物を取り、お盆に乗せる。勿論、邪魔にならないようにきちんと一列で、お盆を運ぶ。言わなくても分かってくるハンゾー達に感心感心。そして、エントマちゃんの近くの席へ。

エントマちゃんの隣にいる眼鏡金髪のメイドが空いた席から椅子を持ってきてくれた。わざわざ俺がエントマちゃんの隣に座れるように配慮してくれた気がする。気持ちは超ありがたいが飯に集中してもええねんで？

エントマちゃん、ルプスレギナの他、金髪ショートメイドと、長めな金髪のメイドと、さつき席を用意してくれた眼鏡ミディアム金髪メイドの3人がいる。

金髪率たけえな！ホワイトブリムさんは金髪派だったのだろうか。それともク・ドウ・グラスさんの仕業か。AI担当のへろへろさんの差し金という線もある。

「失礼、一緒にしてもよろしいですか？」

「は、はい、どうぞ！」

「どうぞ！」

二人は快く了承してくれた。……断りづらいつて線もあるけど、賽は投げられた、進むしかない。俺達のせいで蟲率が大幅に上がった。他のメイドが完全にアウエーである。

「いただきます」

手を合わせてきちんと挨拶。ハンゾー達もきつちり手を合わせている、よかよか。にしても適当に取ってきちやっただけ……なんて旨

そうなんだ!! あっちの世界じゃ、何の飾り気も無い固形物が主食だったから感動もひとしおだ。味も禄に無かったし、食の楽しみという概念が今此処で蘇った気分です。

とりあえず黄色いスープを飲んでみよう……旨アアアアアア!?!?

何このスープ! 甘い! でもしつこくない! 中の粒々を噛み締める<sup>!</sup>と芳醇な味が広がる! 後味が素敵な余韻をもたらす。俺は今猛烈に感動している! 具体的に言うと、スープが喉を通る度に精神が安定化してる!

あつと言う間に飲み干し、次に手を付けたのは、豚肉をかりかりに焼いたヤツだ。ベーコンだっけ? 昔食ったことあるけど、あれ味しなかったし妙に固かったしで良い思い出が無い。しかし先程のスープのおかげで期待度は高い。何か分厚いし。

早速、口奥に閉まつてる牙で咀嚼する。

お味の方は……ウンまああくくくくくいつ!!!

外側のカリカリがたまんねえ! 肉は柔らかか! 適度にスパイシー! どうやら、俺が昔食ったベーコンはただのプラ板だったらしい。

……危ねえ。傍から見れば、黙々と食事を続けてるだけなので問題ないが、精神安定化してなかったら昔懐かしの料理漫画みたいに、全裸になったりお城になったり、空の彼方へ消えてたかもしれない。つか俺、ほぼ全裸じゃね? まあいいや。

もうちよつと楽しみたかったが、会話もしなきゃな。最悪食べながら……行儀悪いか。

「遅ればせながら、席を用意して下さいありがとうございます。貴方のお名前は?」

「は、はい! リュミエールと申します! お話しする機会を頂けて光栄です! 至高の石柱であられるアバ・ドン様におかれましては……」

「あはは、そんな緊張しなくても大丈夫ですよ。お二人の名前も教えて下さい」

「はい! シクススです!」

「フォアアイルです!」

「シクスス、フオアイル、リュミエールですね。覚えておきましょう、よろしく」

三人と軽く挨拶を交わす。よく分からんが、メイド三人がとっても嬉しそうだ。まあ喜んでるなら良いか。結果オーライ。

「ルプスレギナです！」

「エントマです！」

「お、おう」

知ってるよ！つか、エントマちゃん散々話したでしょ！慌てんぼさんめ、だがそれがいい。あ、ルプスレギナは会話するの初だから良いのか。

プレアデスはともかくとして、実を言うと、俺はNPCの名前を覚え切れてない。これからはNPC達が俺の部下としても活動する訳なのだから、彼女達の名前も全て覚えねばならない。記憶力はそこまですぐ悪くないので頑張ろう。

えーっと、長め金髪がシクスス。ショート金髪がフオアイル。眼鏡金髪メイドがリュミエールだな。よし、覚えた。

「どうせなら、もつと気軽に接してくれても良いのですが」

「そんな、アバ・ドン様に畏れ多く……」

シクススが申し訳なさそうな様子で話す。あー、あれか。俺のフアイトスタイルがえげつなかつたから恐怖感が……。

「うーん、私としましては、貴方達の有りのままで接して欲しいのです。緊張を強いてしまうというのは、私としても申し訳ない」

「め、滅相もございません！」

困ったなあ。どうあがいても緊張を強いてるよねこれ。

「個室にて使用人を呼びつけければ、御食事の用意が出来るのではないかと愚考致します！至高の御身にわざわざお手を煩わせる等……」

とはリュミエールの言だ。そうだったのか、自分の部屋で使用人呼べば良いのね。何という上流階級。かつて叩き付けられるように配給されたクソマズイ飯が遥か彼方だ。

「それは利用しないでしょうね」

「その理由も……お聞かせ願いますか？」

今度はフォアイルがすごく不安そうに尋ねてくる。別にそんな怒ってる訳じゃないんだが……。さつきから、緊張させまくりのようだなあ。よし、俺の今世紀一番の優しさに満ち溢れた穏やかボイスで理由を説明するぞ。

俺はしばし間を置き、語りかけた。

「だって、貴方達と御飯食べられないですもの」

途端、空気が凍りついたような気配を感じた。え、何この空気。

ありのままの理由言ったのがそんなにまずかったの!? 更に、食堂全体がシーンと静まり返っている。ちよつと、誰か何か言つてよ! 不安になってくるでしょ!

「ふええええん……」

と、思つたら、シクススが声を上げて泣き出した。メイド三人とルプスレギナは涙ポロポロ流してるし、エントマちゃんやハンゾー達も小刻みにプルプル震えてる。

挨拶の時もそうだったが、俺には部下を泣かす才能でもあるのだからか。いらねえよ! そんな才能! 単に交流を深めたいだけなんだつてば!

「なんで……なんでアバ・ドン様はそんなに優しいんすかー!」

ルプスレギナが吠えるように叫んだ。お、地が出たんじゃねこれ?

よ、よし、このままフランクに接してくれる流れを作れば……。

一先ず、メイド達を慰めるところから始めよう。

## メシ友

人造人間メイド三人組をなんとかなだめ、ちよつと打ち解けた気がする。シクスス達は、食事を終え業務に戻るといふ事で去っていった。去る時名残惜しそうだったので、一般メイド達は少し心を開いてくれたかな？

この場に残ったのはエントマとルプスレギナ、ハンゾー達と俺だ。ルプスレギナ、エントマちゃん、俺。向かい側にハンゾー達の順番で座っている。全員の平均LV50くらいかな？やだ……俺だけ、レベル浮きすぎ……。

「二人はメイド達と仲が良いんですね」

「そうっすね、みんな慕ってくれるっすよー！」

ルプーこと、ルプスレギナはだいぶ砕けた物言いをしてくれるようになった。よく分からんが、さっきの台詞は効果的だったらしい。やっぱ一緒に御飯食べるってのは大事だね、これからも積極的に交流の場を作るようにしよう。

「あ、そうそう。エイトエツジアサシン達に私が名前を与えたので、今後はそちらの名で呼ぶようにして下さいね」

「了解っすー！えーつと……」

「チームリーダーのハンゾーです」

「ナガトです」

「サンダユウです」

「ドウジュンと申します」

「よ、よろしくっすー！区別つかないっすけど」

む、やはり、蟲の区別は傍から見ても難しいのか。個別にアクセサリでも与えて差別化してみようか。だが、思ったより良い感じだ。こうして直接話を聞けば、部下同士、仲の良し悪しも分かる。

他にも俺が緩衝材みたいな感じでフランクに接すれば、モモンガさんと他の皆の距離感を計れるという狙いもあったりする。モモンガさんが絶対者として振舞いやすい環境を作るのも、俺の役目の一つだ。いや、勝手に決めた事なだけどね。

「ほら、エンちゃんも何か喋るっす。いつも通りにつすよ」

「うう〜……」

ルプーがエントマちゃんを肘で軽く小突きながら発言を促す。いぞぞ。

「……アバ・ドン様あ、本日もお、ご機嫌麗しゅうう」

ああ……。

こ、これはやばい、聞いてて幸せになってくる……。飯食ってる時を超える精神安定化の嵐が吹き荒れてる。しかも本当の声も可愛いんだぜ……。最高だろ……。

「アバ・ドン様あ……？」

「……失敬。うん、そちらの方がずっと素敵ですよ」

「ツ！ありがとうございますっすう！」

「さ、さて、冷めない内に、いただきましょう」

「はいっ」

エントマちゃんとルプーが食べてるところを観察する。すごい勢いで肉が減っていくなー。エントマちゃんが食べてる物は、どう見ても人間の腕を揚げ物にしたような代物だ。しかし、今そんな事はどうだっていいのだ。裾越しにフォークを駆使し、肉を上手に掴む。人間的に言えば、顎下から食べてる。顔の蟲は口が動かないもんな。

(……いいか、我々はこのまま空気に徹するんだ)

(承知)

(承知)

(承知)

何かハンゾー達が気配を断ちながら御飯食べてるんだけど……。

それにしても、エントマちゃん本体のみがお肉食べるのか。擬態してる蟲達は栄養を採らなくても良いのかな？それともエントマちゃんに共生してる間は栄養も共有するのだろうか。魔法やらが当たり前の世界で、生物学的又は科学的根拠はほとんど当てにならないが、やはり興味深い。他の蟲はどこから栄養を摂取してるんだろうなあ。

「……」

「あ、あのお。私の顔に何かあ？」



「いえ、その、よく食べるなと思ひまして」

やべ、エントマちゃん顔ガン見してた。いっぱい食べるエントマちゃんが好きです。

「アバ・ドン様は少食な子の方が好みっすか？」

「そんな事はありません。たくさん食べる必要があるのは、しつかり働いている証拠ですよ。それに、御飯をいっぱい食べる娘も良いと思ひますし」

「おー！」

俺がそう言うのと、ルプーがエントマちゃんにアイコンタクトらしき事をしてる。何のやり取りだろ？アイコンタクトってより満面の笑みでドヤ顔してるように見えなくもない。エントマちゃんがルプーに対してしきりに頷いているので、何かしらの意味があるのは間違いないだろう。

ルプーが満足したのか食事を再開する。む、今食べてるそれ、台に置いてなかったぞ。豚の腸詰めだったかな、昔朝御飯の定番だったとかいう。

「おや、ルプーさんの食べてる腸詰めはどこで用意したのですか？」

「ウインナーっすか？頼めば使用人が焼くっすよ」

その場で焼く！そういうのもあるのか。

作り置きだけじゃなくて、その場で料理してくれるのか。普段が普段だったので今の環境にすごいギャップを感じる……。いや、悪い事ではない。むしろ今までの職場環境を考慮すれば何千兆倍も良くなってるから、頑張って慣れよう。

俺も食事を再開しよつと……やっぱりうめええええええええ!! このくるくるしてるパンも美味しいぞお!

エントマちゃんとルプーも美味しそうに食事を続ける。ハンゾー達の表情は読み取りづらいが、食べるペースがこころなしか速いので、きっと美味しいのだろう。各々が個性的な食べ方をしてて微笑ましい。

……食事って、こんなに楽しかったんだなあ。

ああ、そうだ。彼女達に聞いておきたい事があったんだ。今聞

いところ。

「そういえば、お二人に質問があります」

「何ですか？」

「何でしよう？」

「例えば、目の前に困ってる人間が一人いるとしましょう。どうしますか？」

「助けるふりして、ゆっくり殺しちゃうっす」

「お腹空いてたらあ、食べますう。いっぱいならほつときますう」

「なるほど」

ふむふむ、やはりか。忠誠心のすごさに失念していたが、人間への扱いはそんな感じね。二人ともアライメントがマイナスなので予想はついてた。

ナザリックの外は人間達の天下なのだそうだ。今後、外の調査が本格化する可能性大なので、派遣する部下を選定する必要があるだろう。モモンガさんはまだ、NPC達の性格は把握しきれてないらしい。俺がなんとかしよう。

そもそも部下達が尊敬するギルメンは皆異形種であり、泣く子も更に泣かすPKギルド。ユグドラシル時代を省みると、人間への扱いが悪いのも当然と言える。確かモモンガさんも昔、理不尽なPKに遭っていたそうなのでその辺も関係してるのかもしれない。

これ、人類の敵になるしか道無いかもなあ……。うむ、エントマちゃんの為だ。俺も心を鬼にしよう。今の俺は人間ではなく、蟲王アバ・ドンなのだ。

「では、人間の社会に溶け込めと言われた場合、我慢できますか？」

「大丈夫っす！こっさり痛めつけるっすよ！」

「お、お腹いっぱいならなんとかあ……」

ふむふむ、ある程度我慢は出来ると。それぞれがどういう思惑で動くかも違ってくるようだ。これは注意せねば。恐らく、街に潜入するにはルプーはまだいけるが、エントマちゃんは不向きだ。てことは俺の要望も……フフフ。

……あ！ついでに良いこと思いついた！よし、後でアルベド辺りに

頼んでおこう。

「参考になりました」

「アバ・ドン様はあ、人間がいたらどうしますかあ？」

「私ですか？アインズさんの役に立つなら利用しますし、邪魔になるなら消します」

「おおーシンプルっすね！かけえーっす！」

「はいい！」

今までの辺がかっこよかったのだろうか。でもエントマが同意してくれたので超嬉しい。お世辞かどうかは分からんがそれでも良い。好きな子に褒められるのは嬉しいものだ。

「ふふふ、ありがとう。さて、お肉でも取りに行きますか」

「あ、エンちゃんの分けて貰ったらどうっすか？いっぱいあるし」

「……いいんですか？」

「どうぞお」

「ありがとうございます」

という訳で、エントマちゃんのお肉を分けて貰う事に。わーい。

そうそう、こういう関係！こういう気軽な関係が良いのよ！ルプー株上昇中。

もぐもぐ……本当にうめえ……。肉って、こんなに柔らかいのか……！もつとこう長靴の底みたいな奴じゃなかったっけ？感動的だな、しかも有意義だ。つつい夢中で食べるが、俺今しれっと人肉っぽいの食っちゃったよ。緑髪の人が本当に食べてしまったのか？とか言いながらニヤリとしてる気がする。

我に返ると、エントマちゃんが口元……じゃないな、顎下を押さえて固まっている。顔の蟲が、目をパチパチ瞬かせてるが……。

「……どうなさいました？」

たつぷり間を置いて、こちらから視線を外しながらエントマちゃんが喋った。

「間接キスう……」

「あ」

今しがた自分が食べた物を思い出す。……明らかに食べかけの奴

だった！

む、夢中になってついやってしまった！くそっ！大失態だと言うのにすごく幸せな自分が憎い。女にでんで縁の無かった俺に間接キスはレベルが高すぎる！エントマちゃんと間接キスしてしまつたあああああ！やったあ！じゃない！しまったあ！

ルプーがヒューツと口笛を吹く。ああ、今はその茶化しが逆になりがたいや……。ハンゾー達の方を見ると、気持ち俺とは反対方向を見ながら黙々と食事に勤しんでいる。見て見ぬふりという奴だろう。ルプーもエイトエツジアサシン達も空気読んでくれてるんですね、分かります。

「も、申し訳ありませんね」

「いええ……こちらこそお、ごめんなさい……汚い物をお」

「とんでもない、むしろ嬉しいハプニングです」

「ええええ!?!」

うわああああ、俺何て事口走ってんだあ！本音でいくスタイルにしても限度があるだろおおおおお!?これ完全にセクハラだよ!!

ハンゾー達はついに気配遮断に合わせて透明化した。一定レベル以下の奴なら食器が空中に浮いているようにしか見えないだろう。そこまで気を使われると逆に辛い！ええい、さっさと食べてこの場を去ろう。充分話したしね、うん！

うおおお、やっぱり美味しいいいいい……はい、完食！

「ぐちそうさま」

「ぐちそうさまでしたあ」

エントマちゃんとハモった。

## 思惑

「はふう……」

「すつげえ慈悲深い御方だったつすねえ……アバ・ドン様」

エントマとルプスレギナが溜息を吐く。それは怠惰や退屈によるものではなく、芸術家が類稀なる美を、美食家が舌鼓を打った時に出す類であった。既に食事は終え、アバ・ドン達も仕事に戻った。最早食堂に用事は無く、二人は足早に退出した。

第九階層の長い廊下を歩きながら、二人は雑談を続ける。

「個室で食べる事を拒否った理由が”一緒に御飯食べられないから”なんて、涙が止まんなかったつす。シクスス達どころか、食堂中が感動してたつすねー」

「本当に、優しい御方あ。でも困ったよお……」

「何がつすか？」

「あのねえ、一目惚れしちゃってえ、たくさん胸が苦しいのに、会えば会うほどお、お話しすればするほどお、アバ・ドン様が愛しくなるのお……。お肉の味い、分からなくなったあ」

「たはー、こりや重症つす……」

今のエントマは、崇拜に達しつつある忠誠心も、尊敬も愛情もゴチャ混ぜで、アバ・ドンに対し並々ならぬ好意を寄せていたのであった。呆れつつも、その気持ちが十分に理解出来たルプスレギナは、エントマの恋心に後押しをする事を決めた。

「エンちゃんは、アバ・ドン様にああやって接するの辛くないつすか？」

「慈悲深いあの御方が決めて下さった事お。平気だよお」

「そりや良かったつす。最初緊張したつすけど、一緒に話すの楽しかったつす！」

本来、プレアデスは至高の41人の前では口癖が成りを潜め、従者然とした態度で拝謁する。今回のような態度で接するなど不敬の極みだ。だが、他ならぬアバ・ドンの願いであった為、脳内でたつぷり格闘した後、普段通りの態度で接することにした。その様子に、アバ・

ドンは大いに満足したようなので二人は安心した。

ルプスレギナは、そんな渦中の人物がエントマに取った行動を思いだし、赤毛の三つ編みを揺らしながら相手に向き直った。

「アバ・ドン様はエンちゃんのことをジツと見つめたり、間接キスを嬉しいハプニングなんて言ってたつすね。真っ先に私達の所に同席したり、あれ絶対エンちゃんに気があるつすよ！」

「そお、かなあ?..」

両手を頬に当てて、首を振りかぶるエントマ。シニヨン髪に擬態するムカデのような蟲が、ハートマークのようになってるのは愛情表現だろうか、ルプスレギナは考える。

「絶対そうつすよ!ただ……」

「ただあ?..」

「あの御方は絶対百戦錬磨の女殺しつすよ!間違いないつす!だって、蟲系にかけらも興味なかった私がドキツとしちゃったつすもん!チャームも無しにあれは反則つす!」

「そつかあ、そうだよねえ。んう、罪作りな御方あ、不意打ちはずるいよお……」

ずるいと言いつつも、彼女は終始機嫌が良かった。エントマの心を心地よく搔き乱し、鮮やかに去っていった至高の石柱。初恋の女の子がコミュニケーションを取るには、些か刺激が強すぎたように思える。ルプスレギナは、アバ・ドンの美しい容姿にあの見事な手管は、数々の女を紳士的に虜にしてきた猛者のそれだと感じ取った。

「しかもあんなに強くてキラツキラだし、入れ食いってヤツつす!」

「そうだねえ」

「一筋縄じゃ、いかないつすね」

「うん……」

一般メイド達にもエントマの恋心は打ち明けた。まさかその直後、護衛を引き連れて本人が乗り込んでくるとは思わなかったが。

その時、リユミエールがとっさに気を利かせエントマの隣にアバ・ドンを誘導してくれた。しかも、休憩時間はまだまだあったにも拘らず、すぐさま退出までしてくれたのだ。

まさしくメイド達のファインプレー。しかし、千載一遇のチャンスであったにも拘らず、エントマは終始翻弄されてしまった。今のままでは、アプローチもままならない。

「アルベド様みたいにい、いっばい誘惑できるようになりたいなあ」

「あー、あそこまでやったら引かれる気もするっすけど……」

「そっかあ」

あの愛しの御方をどうすれば振り向かせる事が出来るのか？実は振り向きっぱなしなのには気づかず、エントマとルプスレギナは頭を悩ませた。一突きで容易く崩れる要塞に、二人共身構えていたのであった。

「とにかく今はチャンスを窺うっすよ。エントマが好印象なのは間違いないっすから、今はアインズ様とアバ・ドン様のお役に立って、地道に良いところ見せるっすよ！」

「うん。愛しちやっただからあ、私がんばるう！」

「私も精一杯助けるっすよ！」

「ありがとう」

エントマの戦いは、まだ始まったばかりである。

「やして……」

円卓に一人座る影が一つ。豪華絢爛とも言うべき神器級装備に身を固めた、骸骨の風貌を持つ異形種。アインズ・ウール・ゴウンギルドマスター、モモンガは骨の奥に赤く灯る眼窩を細めながら考える。(まさか、これ程早くにギルドメンバーが帰還するとは……。嬉しすぎる誤算……。いや、奇跡と言っても良い！)

今、モモンガは言いようの無い歓喜に打ち震えていた。病気で泣く

泣く引退したギルドメンバー、アバ・ドンの帰還。知らせを聞いたときは、思わず部下の目の前であるにも拘らず「マジか!？」と叫んでしまった。精神作用効果無効が連続で働いていることにも気づかず、意識が無いと聞いて取り乱しそうになったが、かろうじて無効の効果が勝った。

アバ・ドンと話し合ったことを思い出す。最も、現状を把握する重要な内容は数える程しか無く、ほとんどがユグドラシル時代の思い出話ばかりだった。

(一先ず、当初決めていた計画通りに事を進めよう。まだ、アバさんにも言っていない。何の断りも無いのは流石にまずいから……旅に出る事を言っておこうか)

こちらの世界に来て一人だった頃、モモンガは冒険者として偽名で活動する計画を打ち立てた。今、それを実行に移すべきと考える。自分自身に上司としての能力は無いし、直接現場を見てみたいという狙いもあった。ついでに資金調達も兼ねている。

ちなみに、最近一人になると独り言を呟く癖が形成されつつあったのだが、アバ・ドンの帰還に伴い、影も形も無くなった。

(ギルドのみんなが帰ってくる可能性も、これでゼロでは無くなった。何ヶ月……何年、何千年だって探してみせよう)

アバ・ドンの復活は個人的に嬉しいだけでなく、今後の展開に大きく希望を見出せるものだ。アンデッドになった自分の寿命がどうなったかは定かではないが、今の自分はいつまでも待ち続けられる自信がある。そして、アバ・ドン本人もそのつもりで動いてくれている。

(ほんっと、頼もしいなあ……)

まさしく百人力だ。自分一人ではどうにも出来ない局面であろうと、切り抜けられるという確信もあった。

(だが、やはり油断は出来ない……。スレイン法国とやらにも魔法封じの水晶以上の切り札があるのかもしれない。世界級アイテムに匹敵する何かがあればこそ最悪だ。万が一、アバさんの身に何かあるうものなら、俺は何の為に活動を始めたか分からない。旅に出る同行者、ナザリツク外に出る者を用意するならば、最大級の備えとして



世界級アイテムを持たせるべきだろう……)

モモンガは、今までと比べるまでもないほど冷静に思考を巡らせる。精神作用効果無効による強引なものではなく、本人の心に余裕が出来た事による副産物のようなものだ。余裕があると言っても、予断を許さぬ状況は変わりない。親友が居着くことによつて、モモンガはこの世界への警戒度をより高く持つ決意をした。

(ま、何をするにしても、まずはアバさんにも話を聞いてみよう。こういう状況の事をまさしく、”持つべきものは友”と言うべきなのだろうな)

大切な後輩、親友とも言えるメンバーが帰つてきた。本人も快く協力を申し出てくれている。自分一人で話を進めようとはせず、相談してみるのも良いだろう。モモンガは、円卓で過去の思い出に浸りながらも、来たるべき時に備え、今後の策を練り続けた。

## 蓼食う虫も好き好き

『ええ、今からそちらの黒<sup>ブラックカプセル</sup> 棺へ向かいますので。……ああ、それはこつちで配慮しときますから大丈夫ですよ。それでは』

これでよしと。向こうにもアポは取つたし、準備万端だ。

それにしてもさっきの食堂の一件は恥ずかしかった。エントマちゃんと間接キスだなんて俺進歩しすぎだろ……。逃げるように撤回したが、とつても楽しかった。これからも、食事をする時は部下達に同伴出来るようにしよつと。

「楽しい食事でした」

「それは重畳でございます」

「また一緒に食べましょうね」

「ハッ、機会があれば是非に」

「ただ、ハンゾーさん達とほとんど会話出来ませんでしたね、すみません」

「いえ、とんでもない」

（男女の仲に割ってはいるのは……）

（我等は暖かく見守る事しか出来ぬ）

（エントマ殿程の器量良しに、見初められるとは。流石と言うべきか……）

ちよいと一緒になってみて分かったが……。エイトエツジアサシンは寡黙な仕事人という印象だ。もう少し、彼らが何を考えているかもある程度分かるようになればなあ。長く付き合っていけば分かるかもしれないし、こういうのはあせらずじっくりね。さて、精神が安定し、腹も膨れたところで次の目的地へ。

「第二階層の黒棺へ行きます。あちらに少々入用がありましたね」

「それでしたら、リング・オブ・アインズウルゴウンで……」

「ダメですよ、それじゃハンゾー達が置いてけぼりじゃないですか」

勿論、終始空気になってくれてたハンゾー達も連れていく。今後、俺直属の護衛、又は部下になる者にもリングオブアインズウルゴウンを貸与できるようモモンガさんに頼んどかないとな。

「第九階層から第二階層は少々遠いですが、私に良い考えがあります。付いてきて下さい」

ハンゾー達に同行を促した。着いたのは九階層廊下の一角、一見ここには何も無いように思えるが……。ふんぬ、スキル『虫の知らせ』による罫探知だ！

「ああ、あつたあつた」

「これは……転移の罫ですか」

これは転移魔法が込められたトラップだ。敵対者が知らずに範囲内に入ると、対象者と周辺の奴らを強制的にテレポートさせる。この罫の転移先は第二階層。任意で発動する奴なんて俺ぐらいだろう。

この罫はギルド屈指のトラブルメーカー、るし★ふぁーさん考案だ。こいつは侵入者への嫌がらせの為に作られた代物。散々命懸けで突破し、ようやく第九階層にたどり着いたと思ったら第二階層に逆戻り！つてな具合に使う。実にあの人らしい嫌がらせっぷりである。

第九階層までたどり着けた敵はいないから使わず終いだつたがな。せっかく転移障害や罫無効化を掻い潜れる特別仕様にしたのになあ……。

「はい、ハンゾーさん達には、これも」

彼らにアイテムを人数分渡した。羽の形を模したアクセサリーが特徴の”飛行のネックレス”だ。フライの魔法が込められており、これで空が飛べる。それなりにレアだが、結構持つるのでハンゾー達に渡しておこう。当然だが、俺は自前の翅で飛べるのでいらん。

「飛べるようになれば、何かと便利でしょう、今後は自由に使つて下さい。早速、転移してから必要になるので準備の方をお願いします」

「ありがとうございます」

その微妙な間は一体何を意味しているのか。

「無知で申し訳ありません、転移先で必要になる理由をお聞きしたく……」

と、ハンゾーが頭を垂れて尋ねてきた。ああ、モモンガさんの護衛だったからあんまり行ったことないのね。

「黒棺は小さな眷属達が大量にいます。単に、踏み潰さないようにす

る為ですよ」

「成程、承知しました」

（我々と恐怖公の為に何程の配慮を……。本当にアバ・ドン様は……。）  
何かハンゾー達から力強い視線を感じる。まあ、穏やかな気配だし  
良いや。

転移の罫を発動し、みんなで第二階層、黒棺へ転移する。まさか罫  
としてでなく移動用途して使う日が来るとは、世の中分らんもんだ  
ね。

到着すると案の定、女子は皆嫌うあの眷属達でいっぱいだったの  
で、自前の翅で空を飛ぶ。俺の翅は騒音対策してるので羽音はない、  
地味に便利。ハンゾー達も飛行のネットワークスを使いこなし、滞空した  
まま転移してきた。眷属が俺達に道を譲る。モーゼが海を割るかの  
ように、眷属達が左右に分かれ道が出来ていく。

「お待ちしております、アバ・ドン様。本当に、本当にお久しぶりご  
ざいます……」

その先で、俺を出迎えてくれたのは二足歩行するでつかいゴキブ  
リ。杖とマントを着こなし威風堂々たる風貌である。どうやってる  
のか不明だが、昆虫特有の脚で歩き、俺の事を出迎えてくれた。そう、  
ご存知恐怖公だ！

「本当に久しぶりですね、恐怖公。まあ、闘技場で目が合いましたけ  
ど」

「はい、アバ・ドン様の勇姿、我輩の眼にしかと焼き付けておりました  
ぞ」

「本当なら、特等席でも良かったんですけどね。私の作った身体で何  
かと不便をかけてしまってます……」

「滅相も無い！」

恐怖公は矢庭に顔を上げた。どうやって動いてるのか我ながら謎  
だなあ。

「我輩は領域守護者の一角を担えた事、至高の御方々よりこの御身体  
を賜った事を心から誇りに思っておりますぞ！創造なされた我が身  
は、かけがえの無い宝でございます！」

「恐怖公……」

恐怖公が胸を張って（正確には前胸腹板）宣言した。

泣かせる事言ってくれるじゃないか……。こんなに良い奴なのに、不憫な思いをさせちまったなあ……。

「ありがとう、恐怖公」

「勿体無き御言葉……」

最早お礼を言うぐらいしか無い自分のボキャブラリーの無さにちよつと落ち込む。そんな中、眷属達がひしめき合い微かに騒めく。此処は虫がぎつしり詰まって癒されますなあ。

「あ、これお土産です。みんなで味わうと良いでしょう」

俺がどこからともなく取り出したのは、人間大サイズの酒瓶。中にはたつぷりと”最高級植物性油脂”が入っている。食材アイテムの一つで、料理スキル持ちが主に使うことになる。

「おお、我々の大好物ですな！感謝致しますぞ」

「これぐらい安い物ですよ」

ゴキブリは主に雑食性だが、特に栄養価の高い物を好む。その中でも油は群を抜いて食いつきが良いのだ！後は砂糖とかチーズとか肉もいける。もし与えるなら、小さくて柔らかいものが良い。というわけで凝固する事もない油がオススメ。覚えとけよ！

眷属達を潰さないように、油は隅っこにそつと置いておく。

「ところで……アバ・ドン様の後ろに居られるのは護衛の方々ですな？」

「そうです。あ、命名したし、自己紹介ときましましょうか」

「畏まりました。恐怖公殿、私はチームリーダーのハンゾーと申す」

「ナガトです」

「サンダユウです」

「ドウジュンです」

「これは、丁寧に……。ハンゾー殿、ナガト殿、サンダユウ殿、ドウジュン殿。お互い至高の御方に仕える身、良き関係を築いていきましようぞー！」

お、ルプーと違ってちゃんと区別出来るようだ。流石恐怖公。

「後はコキユートス殿とエントマ殿、餓食狐蟲王殿がいれば、主要な蟲モンスターが勢揃いですな」

「おや、中々タイムリーな事を言いますね、恐怖公」

「と、申しますと？」

「実はですね、一つ大事な用事があつて来たのですよ。これはまだアインズさん以外誰にも言っていないのですが、一つ計画を考えてまして……」

「……差し支えなければお聞きしたいですな」

「ハンゾーさん達も関係する事だから聞いておいて下さいね」

「ハッ！」

俺は、皆が注目するのを確認し、考えていることを話した。

「私直属の独立部隊を作りたいのです」

恐怖公と眷属、そしてハンゾー達が目を見開いた気がした。みんな  
瞼無いけどな！

## 大役

エイトエツジアサシン達は無表情であるが、驚愕を隠しきれなかった。心から敬愛する蟲の王、至高の一柱が明かした計画。それは、言うなれば幼い子供なら必ず憧れるような役職。ナザリツクの誰もが夢を見るであろうモノだったからだ。

先程の、アバ・ドンが渡したネックレス。至高の御方より授かったマジックアイテムを身に着ける時、常人ならば飛び上がり大声で叫ぶほどの喜びを押し殺して感謝するに留めたが、今回ばかりは興奮を抑えきれぬ。エイトエツジアサシン達と恐怖公は色めき立っていた。

「私の指揮下で動ける者が必要なのです。無論、アインズさんからは許可を頂いてますよ。貴方達さえ良ければ、是非にと思います」

「ハッ！我々も貴方様に尽くし、何処とも馳せ参じたく思います！」

「至高の一柱であられるアバ・ドン様の手足としてお役に立ちたくー！」「何なりとお申し付け下さい！死地であろうとも任務を遂行してみせますー！」

「アバ・ドン様の下へ付き従えるならば、これに勝る喜びは二度とありえませぬ！」

「この恐怖公も末席に加えて頂きたく！必ずや、貢献してみせますぞ！」

それはまさに即答であった。ハンゾーの志願を皮切りに、他のエイトエツジアサシン達も付き従い、跪く。恐怖公も例外ではない。黒棺内は、蟲達のやる気で充満していた。物理的な意味でも充満している為、その様子がより顕著に感じられる。

「気合充分ですね、嬉しいことです。この話は近い内に公表します。それまでは暫しご内密に」

(そうしないと、みんな志願する可能性高いらしいしね……)

アバ・ドンは副腕で頭を掻きつつ、まだ内緒話にするよう周りのモノ達に頼んだ。

実際、この懸念は大当たりである。アインズ公認で、表立って直属の配下を募れば、アルベドとデミウルゴスが四苦八苦する程に相当な

志願者が出る事は确实だった。ちなみに、実働部隊としてデミウルゴスも参加しかねないので、アルベド一人が苦勞する可能性もある。「承知しました！」

黒棺内にいるシモベ達は皆例外無く、口を嚙む事を誓った。恐怖公の眷属達も前肢で口を塞ぎ、内緒にするという誓いを立てている。領域内を埋め尽くす眷属達が全て同様の仕草を取る姿は、微笑ましくも規律ある軍隊を彷彿とさせるものであった。

彼らはその日が来るまで、文字通り死んでも言わない。アバ・ドンの手足となる為の最初の任務だと認識したからだ。

「部隊名も決まっています。私が決めました……。少し恥ずかしいですね」

至高の御方直々に名をお決めになった直轄部隊。その響きは、甘美なものであると同時に、大役であるという重圧をもたらす。しかし、彼らにとっては全てが神の祝福であるかのように感じた。

「さて、残りは……ん？少しこの場を離れます、失礼」

アバ・ドンが黒棺の隅で主腕を耳に当て、何かと交信するような動作をする。ハンゾー達と恐怖公は、メッセージ伝言によるものと推測した。

『はい、アバ・ドンです。どうなさいました？アインズさん』

全員に緊張が走った。生憎とこの程度の距離の声ならば耳に届く。果たして二人の会話を聞いても大丈夫だろうか。個人メッセージによる内緒話ではない為、公にしても問題の無い話だとは思いますが、彼らの会話を勝手に聞くのは不敬に当たるのではないかと、黒棺内の蟲達は考えた。

『ん？ ああ、すみません。近くに部下がいたもので。ええ、ええ、そうですね。別に聞かれても大丈夫ですね』

シモベ達の心配は杞憂に終わった。アバ・ドンがこちらに向けて鷹揚に手を振る。この御方の事だから、我々に配慮して下さったのだらうとハンゾーは確信する。この短期間で、アバ・ドンがどこまでも慈悲深い君主であることを思い知った。ならば、我々がすべきことは主の会話が終わるのを暫し待つのみだ。

『ほうほう、話が……了解です。少ししたら向かいますね、では』



そのメツセージは手短に終了し、すぐにアバ・ドンが戻ってきた。「すみません、アインズさんと個人的に話をしに行かねばなりません」  
「畏まりました。それでしたら、我々は恐怖公殿と交友を深めておきます故、指輪をお使い頂いても問題ないかと」

ハンゾー達は、至高の方々が個人的に話をするとなれば、自分達は邪魔になるだろうと判断した。神にも等しい至高の御方、更にその総括直々の呼び出しともなれば、自分達シモベ等よりも遥かに優先すべき事だ。

「本当に気が利きますね。では、私はアインズさんの下へ行きます。準備が済めば招集命令が下される筈です。それまでは、暫しお待ち下さい」

そう言い残し、アバ・ドンは転移した。黒棺に残ったのはエイトエツジアサシンの4人と恐怖公。そして、領域内を埋め尽くす眷属達のみとなった。のみと言っても、黒棺は未だ床もロクに見えない状態であった。

「行つてしまわれたか……」

至高の御方に同伴するというのはとても名誉な事だ。そのせいか、主と離れ離れになったハンゾー達は少し寂しげであった。

「アバ・ドン様は病み上がりであるというのに、よくお働きになる……」

「左様ですな。それを我輩達の手で支えていく事になるでしょうぞ」  
恐怖公は、どうやっているのか本当に謎だが両前肢を組み同意している。

「それにしても、ハンゾー殿がアバ・ドン様とよく会話をするのですな」

「……実を言うとりーダーの立ち位置が非常に羨ましく思います」  
「ドウジュンよ、それは致し方なき事。チームリーダーが私でなければ、私も同じ気持ちを抱いていたであろうからな」

ハンゾーは、その気持ちは抱いて当然のものだと思った。

アバ・ドンとの会話を交わすのは主にチームリーダーであるハンゾーが多い。

アバ・ドンならば、全員がいちいち話しかけたとしても、きちんと会話を交わすであろう。しかし、常に指示が無い限り付き従い続ける自分達が、幾度となく話しかけたとしたら、それはいらぬ手間になってしまう。

そういつた考えから、エイトエツジアサシン達の総意をリーダーであるハンゾーが代表して話す事にした。偉大な創造主から預かった役割分担の為に我慢していたが、ドウジュンとナガトとサンダユウは、ハンゾーのポジションにかなり嫉妬していた。

「お気持ちはよく分かりますぞ。でしたら、定期的に会話役のみを交代してはいかかでしょう」

「ほう？」

「皆様方は能力的に均一とお見受けします。業務に支障をきたさないのであれば、アバ・ドン様の御意志を聞く役目を交代するようにすれば良いのです」

「ふむ……」

「あの御方の事ですぞ、我々とのコミュニケーションも望まれているでしょうな」

「なるほどー」

ドウジュンは膝を叩いて唸る。確かに会話役を交代する程度ならば、チームワークにも綻びは出ない。それに、アバ・ドン様はシモベとの交流に積極的、あの御方の意に合った行動である可能性はある。ハンゾーとしても、公平に役目を分担出来るならば異議は無かった。

「アバ・ドン様がお許しになるならば、今後はそうするとしよう」

「そうだな」

「ところで恐怖公殿、アバ・ドン様が個人部隊を完成させたとして、我々はどう動くべきと見る？」

サンダユウは恐怖公に個人的な疑問を話した。アバ・ドンが直接指揮を執るとなれば、命令次第で護衛以外の役目を預かる事になるかもしれない。ならば、そういった事にも対応出来るように準備をしておくべきだ。しかし、近辺の護衛や監視以外は未知の経験となる。どんな任務であろうともこなす覚悟はあるが、成功率は上げておきたい。

至高の御方々の智謀を理解する。それは、屈指の知恵者であるデミウルゴスをもつてしても難しい。それでも、懸念する事柄を早速相談したのは、既に恐怖公の聡明さを高く評価している証左であった。

「そうですね……。まず、アバ・ドン様は個人部隊を作る上で、蟲モンスターを主要にした部隊にするおつもりでしょうか。あの御方は我々に恩恵をもたらすスキルも多数お持ちになっておりますので。とすると、今ナザリックに必要な事であり、我々蟲系のモンスターが得意とする事。すなわち、敵地偵察の可能性が高いですぞ」

「うむ、それならば我々も得意とする所」

「ご命令次第で、どんな所でも」

「潜入ならば容易い」

「頼もしい限りですぞ。更に、あの御方の口ぶりから察するに、恐らくコキユートス殿、エントマ殿、餓食狐蟲王殿にも御声をかけるつもりでしょうか」

「む、コキユートス様まで参列するとなれば、百人力！」

「ナザリックの主要な蟲系モンスターが一堂に会するという事か……」

「アバ・ドン様の御力添えを直接預かる蟲モンスター部隊……」

「その列に加えて頂けるとは、何たる光栄か！」

ハンゾー達は、アバ・ドンを筆頭に集結する蟲モンスター達を想像し、いつか訪れるその素晴らしき光景に武者震いを起こす。普段は静かな彼らにはありえない程に、血が騒いでいた。

「全くですな！非力ながら、我輩も力になりますぞ」

「うむ、共に力を合わせて、アバ・ドン様とアインズ様に貢献しよう」  
黒棺の蟲モンスター達は、お互いに連携が取れるよう誓い合った。

ハンゾーは恐怖公に感心する。恐怖公は、ナザリック内にいる主要な蟲モンスターとして、戦闘力はそれほど高くなかったが、決して侮るつもりはなかった。

(……アバ・ドン様の個人部隊。頭脳担当は恐怖公殿になるであろう。我々もそれに負けぬ働きを見せねばなるまい)

エイトエツジアサン達と恐怖公の交友は順調に深まっていった。

## 決心

「モモンガさん、何か用ですか？」

俺が呼ばれたのは円卓の間だった。ここで話をするって事は、だいたい俺達同士の内緒話になるだろう。わざわざ呼び出した上での事だから、何か大事な用事かもしれない。

モモンガさんは既に円卓の一席に腰掛けてたので、俺もいつもの席に座る。お互い全盛期の定位置を陣取ってる辺り、昔の癖は抜けないものだど少し可笑しくなる。

「いらつしやいアバさん。一大決心した事があるんですよ」

「藪から棒に……まさか、ついにアルベドさんとシャルティアさんの事を」

「ち、違いますよ！説得が必要なのは確かですが」

なんだ、違うのか……。アルベドは設定上で、シャルティアは性的嗜好が元でモモンガさんに好意を寄せているそうなのだ。俺もエントマちゃんに好意を寄せられたらなあ……。まあがんばろ。

「それじゃ、何をしようとしてるんですか？」

「実は俺……旅に出ようかと」

「え、ッ!？」

モモンガさんの一大決心とやらは俺の予想の斜め上であった。旅に出ると言ったって、外に出るリスクを散々語ってたモモンガさんの事を考えるとありえないとすら思えた。しかし、リスクを承知して尚行かねばならぬワケがあるのだろう。

「……理由聞いてもいいですか？」

「勿論です」

モモンガさんが旅に出たがってる理由は至極単純なものであった。曰く、ナザリツク外を、自分自身の目で確かめたいとの事。現場を把握出来なければ指示を出すのもままならないからという切実な理由であった。後ついでに異世界の資金稼ぎな。

「そういう事か……むむむ」

俺はとつても悩んだ。モモンガさんが話す理由も尤もだ。俺もモ

モンガさんも、絶対的上位者がどういう風に采配を取るか等知る由も無い。確かに、最前線で把握すれば動きやすくなる。それでも……「やっぱ危なくないですか？」

「仰る通りです。なので、最大限の警戒として、俺も含め外を調査する者には世界級アイテムワールドを所持させた上で行動を起こしたいと思いません」

「世界級アイテム!!」

ワールド世界級アイテム。一言で言うならば、とてつもなく、本当にとてつもなくヤバイアイテムだ。世界中を覆う程凶悪モンスターを呼び出すだの、運営にシステムの変更を要求できるアイテムだの、とにかく正気を疑いたくなるような性能の代物ばかりだ。

そのアイテムのレア度も筆舌に尽くし難く、一つも所持出来ない上位ギルドなんてのもザラだ。だが、そんな中、我らがAOGは世界級アイテムを11個も所持しているのだ!ドヤア……。そんなアイテムを、現実化した世界で使えばどうなることか。

なるほど。モモンガさんは、異世界への警戒を緩めた訳ではない。てことは下腹部のアレを携帯して行くつもりだな。実を言うと、モモンガさんは常に世界級アイテムを所持している状態だ。

アバラ骨の下にある赤い玉、あれこそ世界級アイテムなのだ。正式名称は忘れたが、まあ敢えて言うならモモンガ玉とも呼ぼうか。ユグドラシル時代、襲撃してきた1500人のプレイヤーをほとんどぶっとばしたトンデモアイテムだ。

「それが良いでしょうね。光輪アフラマズダーの善神並の代物があるかもしれません。外歩いてる時にぶっぱなされでもしたらヤバイですよ。モモンガさんなんて、ただでさえカルマ値マイナス寄りなのに」

光輪アフラマズダーの善神。世界級アイテムの一つで、カルマ値が低い奴程被害を受ける超広範囲攻撃アイテムだ。使われるとナザリックが本当にヤバイ事になる。

「俺が一番恐れてるのは聖者殺しの槍ロシギヌスですかね」

「あれかー。使用者と喰らった奴のデータを抹消する究極の自爆アイテム……確かに怖いわ。聖者殺しの槍って、レベル差とかは」

「一切関係ないです。LV1のモブが使ったとしてもアウトです」  
「うへー……」

外に何かあるかも分からない。近辺の村……カルネ村だっけか。その村を襲ったスレイン法国のなんとか聖典とかいう奴らは、中位程度ドミニオン・オーソリテイの威光の主天使を最高位天使と言い張る残念な人達だったらしいが、油断はできないだろうな。

「それと、俺の他に誰か一人同行させようと思います。危険は承知ですが、俺が旅に出るのは必須の事だと思っんですよ」

「うーん……」  
「……」

俺は主腕を組み、肩の鎌をワキワキさせながら思考を巡らせる。何か勝手に動くねん。

何かあるか分からないであろう地雷原にモモンガさんが行く。やはり、止めたいのが本音だが……。外に出るにしても、俺は変装出来る類の能力は無い。いや、出来なくもないのだが、ちよつと注目されたらあつという間にバレる。自分にそういう能力が無いのが恨めしいな。止めようにも、他に良い手は俺には思いつかない。

そうだな、モモンガさんがそうだと決めたのならば、俺がやることは一つだ。

「分かりました。そういう事なら、俺はモモンガさんの行動を精一杯サポートします」

「アバさん……！ありがとうございます」

「ただし、ただしですよ！二つ条件があります」

「聞きます。どんな条件ですか？」

「まず一つ、出立するのは最低でも3日後って事にしてください。丁度役に立ちそうなアイデアがありますので」

「それなら大丈夫です。元からそのぐらいのタイミングで出ようかと思ってました」

「OKです。そして、もう一つが……もう、一つが……」  
「……？」

俺は視線を円卓の下に向け、最後の条件を話す事を数巡躊躇った。

口の中が乾くような感覚さえする。それは、モモンガさんに突き付け  
る事として、あまりにも残酷なものだからだ……。

それでも、何があるか分からない外に赴くのならば、きつと必要な  
ことだ。俺は心を鬼にして、モモンガさんに最後の条件を提示した。

ナザリツクの主要な面子に招集をかけ、玉座の間にヴィクティムと  
ガルガンチュアを除く階層守護者達と、セバス率いるプレアデスが集  
結した。相変わらず恐ろしい速度で集合して、正確に一礼する姿には  
舌を巻く。どんな練習すればそんな事が出来るのやら。全員顔を上  
げ、アインズさんの言葉を待ち構えていた。

俺はアインズさんの隣に設置された豪華な椅子に、無駄に良い姿勢  
で座っている。

「苦勞だったな……。あー、呼び出した理由なのだが……お前達に  
紹介したい部下がいてだな……」

アルベドが微かに心配そうな表情を浮かべている。無理もないか  
……アインズさんの歯切れが明らかに悪い。心の中で必死に葛藤し  
ているのがハッキリと分かった。最早何度精神が沈静化されたかも  
分からない。俺はその姿にどうしようもない程の罪悪感を抱いた  
……。

シモベ達は、その紹介されるであろう部下に注目していた。

アインズさんの横に控える、一体の人型モンスター。顔はピンク色  
のツルツルした奇怪なもので、そこに目と口らしき黒い丸が三つ。ド  
イツの親衛隊だかによく似た黄色い軍服に制帽を被っている。

「……さあ、お前のことを皆に紹介せよ」

「畏まりました」

踵を合わせて俺以上の良い姿勢で敬礼をし、アインズさんの指示に従う。

「皆様、お初にお目にかかります」

そのモンスターは両手を水平に広げて自身の存在を一心にアピールした。その動作は劇場で踊るように役を演じる男優のようだ。

「私の名はパンドラス・アクター！第八階層、宝物殿の領域守護者を任されておりました！どうか、お見知りおきを……」

一息に自己紹介を終えると、彼は大仰に振りかぶり一礼をした。モ  
ンガさんはちらりと横目でその姿を見ると、静かに天を仰いだ。

「親愛なる皆様 Seher geehrte alle Danke」

「うわぁ……」

今の眩きは果たして誰の声だっただろうか。俺はたまらず、指二本で目頭を押さえる。

そう、俺は開けてしまったのだ……開けてはならぬ、パンドラの箱黒歴史を……。



## 抜擢

「では、ナザリック内の配置については追って伝える。各員、持ち場に  
戻れ」

「あ、待って下さい。コキュートスさんとエントマさんはこの場に  
残るように」

俺はアインズさんが話し終えた直後に滑り込ませるよう切り出し  
た。

「畏マリマシタ」

「はい、この場に待機致します」

あぶないあぶない、コキュートスとエントマちゃんを残して俺の個  
人部隊の事を話す手筈になっていたのだが、アインズさんは先程の  
シヨックのあまり忘れていたようだ。

後、エントマちゃんの口調がお仕事モードに戻ってる。ちよつと寂  
しい。でもやっぱこつちも捨てがたいなあ……。顔の蟲もシヤキ  
ンとしているのがよく分かる。

俺の一言に、一旦動きを止めていたシモベ達は一礼すると、コ  
キュートスとエントマちゃんを残して持ち場へささっと戻っていつ  
た。この行動の迅速さは避難訓練でも花丸を余裕で貰えるレベルだ  
ね。尚、パンドラス・アクターも一旦宝物殿へ帰した。まだ、受け入  
れるには時間が必要なんだ……。

(すみません、アバ・ドンさん)

(いえ、ぶつちやけ俺のせいみたいなものですし……)

本来であれば、人事異動についても話す予定だったが、さつき  
の黒歴史紹介によるモモンガさんの精神的ダメージを考慮し、一先ず  
話を切り上げることにしたのだ。ここから先は俺が喋るだけで何と  
かなるしね！

玉座の間に残ったのは俺とアインズさんとコキュートスとエント  
マちゃんの四人。

蟲率75%でございます。アインズさんのアウエー感よ。エント  
マちゃんが纏う蟲や、俺の蟲をカウントするといよいよ持って蟲密度

1000%だがノーカンでよからう。

「二人に残って貰ったのは個人的なお願いの為です」

「才願イデゴザイマスカ……」

「お願い等と仰らず、ご命令頂ければ即座に遂行致します！」

エントマちゃんは仕事熱心だなあ。偉いなあ……あー、頭などでほしい……。とか考えてる場合じゃない、用件を言わなきゃ。

「単刀直入に言います。私専属の独立部隊を作るので、貴方達にも参加して欲しいのです」

次の瞬間、二人が固まった。

「……マコトデゴザイマスカア!？」

「ワッ!？」

少しして、コキュートスが口から大量の冷気を噴出し、イカした蟲ボイスが特大音量で玉座の間に響き渡った。どんだけ驚いてんだよ！多分室温4度は下がったぞ！つか、冷気にエントマちゃんが巻き込まれたあ！大変だ！

「エントマさん！大丈夫ですか？」

「……はい、大した問題はありません」

すつと佇まいを正すエントマちゃん。健気だなあ……。だが、顔と顔の蟲が若干痙攣してるんだけど……。これはもしかして氷殺ジエツトされてしまったのではなからうか。少し見てみよう。

「念のため、エントマさんの蟲を検査します、少しじっとして下さい」  
「は、はいー」

了承を得たので、早速エントマちゃんの頭部の蟲をつぶさに検査する。べ、別にセクハラじゃないからな！

……良かった、急な冷気に当てられてビックリしただけか。敵意のある攻撃でなかったおかげか命に別状はない。蟲達の耐性もそれなのようだ。俺は蟲のステータスが敵味方問わず手に取るように分かるのだ。心までは読めんがな。

言っておくが、近くで見た方がステータスがよく分かる気がするからそうなのだ、別にエントマちゃんの頭をクンカクンカしようとかちつとも考えてない！何か食べ物とは別ベクトルに滅茶苦茶良い

匂いがしたとかちつとも思っていないのだ。

何はともあれ、一安心した俺は結果を教える。

「問題無いようです、どちらの蟲もちよつと驚いたただけのようですね」

「ありがとうございます。ただ、その……」

「なんででしょう？」

「御言葉ですが、ご尊顔が……若干近いかと……」

「……へ？」

……ヴァー！ほんとだよ！顔近いよ！これ後数センチでエントマちゃんとキス出来る距離じゃねーか！中の本当の顔込みでも擁護不能の近さである。先程と同じく頬筋があつたらユルユルになつてる自信があるほどの幸福感だよ！心は正直ですね、ほんと。

「おや、失礼しました」

「い、いえ……」

そしてこの澄ました対応である、死ぬよ俺。またも気まずい空気しかも、よりによつてコキュートスとアインズさんに見られた。

(青春)

(急にどしたんですかアインズさん)

よく分からんが、アインズさんにも余計なダメージを与えてしまったかもしれん。

「アバ・ドン様、情ケナイ所ヲオ見セシテ誠ニ申シ訳アリマセン！エントマ、スマヌ！失礼シタ！」

「いえ、お気になさらず！むしろ大丈夫です！」

「オオ、ソウカ」

すぐさまコキュートスが頭を下げてエントマちゃんに詫び、エントマちゃんはそれを許す。お互い大人の対応だ。しかもエントマちゃんは、下手すればダメージに成りかねなかったのに、コキュートスに對して明るく振舞う氣遣いまで見せている。心が広いんだなあ。

しかし、こういうちよつとしたアクシデントから恋が始まってしまふのでは……。俺は妙な危機感を抱いた。コキュートスのこういう所は見習わないとな。間違いがあればきちんと訂正出来る上司を指そう。

「で、では話を戻しましょう。この話は既に、主要な蟲系モンスター達には発表しています。近い内に、ある計画と一緒に大々的に発表するので覚えておいて下さい。それまでは内緒ですよ?」

「承知シマシタ、ソノ時ヲ心カラオ待チシテオリマス!」

「畏まりました。正式な通達があるまでは通常の業務に戻らせて頂きます」

コキユートスとエントマちゃんが二人揃って一礼する。くそー! 絵になるじゃないかー!

あ、そうだ。俺はハンゾー達と恐怖公には「お待ちください」としか言っていないから、普通の仕事に戻っても良いよう伝えた方が良さそうだ。ありがとうエントマちゃん。こういう所も直していかんとなあ……。暫くすれば、アイنزさんの心も落ち着きを取り戻すだろう。

「私は御二人の力を高く評価しています。期待してますよ」

「オオ! 勿体ナキ御言葉。必ズヤ、アバ・ドン様ノ剣ニ相応シキチカラ、ゴ覧ニ入レマシヨウ!」

「私の全てを、アバ・ドン様に捧げます!」

ブフォ!? え、エントマちゃんがとんでもない爆弾発言した! い、いや、あれはやる気のアピールであってだな……。今の台詞で真っ先にいやらしい事考えてしまう自分がやだ! つーか、なんかさつきからムラムラするんだけど、俺はこんなにひどい奴だったのか……。何か良い匂いがする。

いや、今は二人の忠義に応えなければ。俺は満足した事をアピールするべく静かに頷いた。

俺は決して察しの良い方ではないが、今までスカウトしたみんながやる気に満ち溢れてるのはよく分かった。まだ蟲モンスターが全員集合した訳ではないが、既に期待度MAXだ。俺は基本、お世辞は言わん。心からそう思ったら褒めるようにしてるが、皆よく頑張るから褒める頻度が上がっちゃうんだよ。困った。

(ほら、アイنزさんも何か一言)

(あ、はい)

「では二人共、アバ・ドンさんの力になれるよう邁進するように」

「ハッ！」

「はっ！」

さて、これでアインズさんと再び二人きりになるし、何かフオロー出来ればいいんだけど……。

・

・

・

「はあ~~~~~……」

「……」

モモンガさんが長大な溜息を吐く。精神的な影響は沈静化するというのに、この調子が続くということは相当堪えてるようだ。

「モモンガさん……」

俺は前世の自分なら気まずい表情を浮かべてるであろう感情を持ちつつ、モモンガさんに話しかける。だが、どのツラ下げて話せば良いんだ。俺はモモンガさんにひどい事をしてしまった。

「……いえ、分かっています。パンドラがこの局面において力を発揮するのは分かっていました。俺も覚悟を決める時だったんです」

「そうですか……」

「ただ、やっぱり宝物殿の守護を空けるといのは……」

「モモンガさん！その台詞3回目ですよ！宝物殿の管理は俺がやりま  
すってー！」

「で、ですね。すみません」

モモンガさんらしくもないうっかりだ。しかし、この疲労感を漂わせた哀愁漂う姿……。

こんな凹んだモモンガさんを見たのは、昔、るし★ふぁーさんが  
スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンに付いてる神器級オーブ

を、和歌山県タイヤアップアイテム紀州特産梅干しにすり替えた時以来だ。悪にこだわるウルベルトさんすら「お前越えちやいけないライン考えろよ!」と、ガチギレしてたのが印象に残っている。

だが悔やんでも仕方ない。いつの日か通らざるを得ない道だったのだ。

「そ、そんな気に病む事じゃありませんよ」

「……」

「それにほら、俺、パンドラズ・アクターが着る軍服のデザインとかアクションとか、時々出るドイツ語とか超格好良いと思いま——」

「やめてえ!!」

モモンガさんの悲痛な叫びが、玉座の間に響き渡った。

## 変化

コキユートスとエントマは、今まで味わったことの無い程の美酒に酔いしれていた。

天命にも勝る至高の御方の命令。それは、至高の一柱であり、ナザリック最強の蟲モンスターと名高いアバ・ドンにより設立される独立部隊への所属。冷静さを滅多に欠かないエイトエツジアサシン達をもつてしても興奮を抑えきれなかったその栄転は、二人の心を奮わせるには些か過剰とも言える衝撃を伴っていた。

「……」

「……やったあ」

コキユートスは、隣を歩く蟲メイドがひっそりガッツポーズしたのを見逃さなかった。あえて、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで転移しなかったのは、これから肩を並べて至高の御方に仕えるエントマに、一言挨拶をしておこうと思ったからだ。

(エントマノ返事ハ微妙タルモノダロウガ、礼ヲ欠ク理由ニハナラヌ)  
ただ、一言挨拶するだけで終了するだろうとコキユートスは思っていた。彼女はコキユートスに対して全くの無関心だ。恐らく、コキユートスが命を散らそうとも、エントマは、それほど親しくない隣人が死んだ程度の認識しかしないだろう。淡々と、アインズかアバ・ドンに報告するのが目に見える。

それはさておき、コキユートスは周囲に他の者がいないことを、鋭敏な気配察知と強力な聴覚によりしっかりと確認した後、エントマへ話を切り出した。

「エントマ……」

「はいい？」

「コレカラハオ互イニ、至高ノ御方ト密接ニナル。ドウカヨロシク頼ム」

念の為に話をぼかして用件を伝え、コキユートスは軽く会釈をする。今までならばエントマから軽い返事を貰い、そそくさと持ち場に戻ってこの話はおしまいだっただ。だが、今回は違った。

「水臭い事を言わないで下さい。これからはしっかりと協力してえ、至高の方々のお役に立てるよう頑張りますよう」

「……!?」

コキュートスは最初、エントマが何を言っているのか理解できなかった。いや、言っている意味は分かるのだが、エントマの口からそのような言葉を聞く事になるとは思ってもみなかったのだ。自分のよく知る盟友も、体をひっくり返して仰天する事だろう。

「私の能力が必要になる時は言ってお下さい、御協力致しますう」

「……」

「……?」

エントマがコキュートスの反応に対し小首を傾げた頃、話を噛み砕いてようやく理解が及んだ。

「良いノカ? 本当ならバ助カルガ……」

「当然ですよお、私達は言うなれば同志い。これからはアバ・ドン様の為にもお、円滑な協力関係を築いていきましょう」

「……ソウダナ、頼りニシヨウ。私モ手ヲ貸セルモノナラバ協力スル」  
「畏まりましたあ、ありがとうございますう」

エントマが、コキュートスに対しペコリと頭を下げた。

コキュートスは未だ困惑していたが、実際にエントマの符術や幻術は応用性に富み、自分では出来ない事でもエントマならば可能な局面が多々ある。アバ・ドンの側に仕えるならば、手数は増やした方が良い。戦いにおいても同じ事、切れる手札が多い方が戦局が有利に働くのは必定だ。

(コレハ良い傾向ト言エルダロウ……)

だが、そんな損得を抜きにしても、志を同じくする者が出来るというのも嬉しい事だ。コキュートスはそう思いながら、エントマの言葉を快く歓迎した。

(コキュートス様もお、アバ・ドン様の威光の下で手足として奉仕するのだからあ、今までのような態度で接するのはあの御方に不敬だよねえ)

エントマはナザリックの蟲系モンスター達は例外無く、アバ・ドン



の所有物になると認識している。偉大なる至高の一柱にして、己が愛してしまつた御方の私物を汚してしまうのは、死よりも遥かに辛い事だ。その事によって、どこまでも慈悲深いあの人が嘆き悲しむならば、何としても防がなければならぬ。

(所有物う……私もお、アバ・ドン様の所有物になれるということお……?)

”アバ・ドンの所有物”というワードに反応して、エントマはまた少しフェロモンが漏れ出てしまったのだが、コキユートスはそれに気づく暇が無かつた。

(あつ、おやつも我慢しなきゃあ。でもお、アバ・ドン様の為ならあ、全然平気い！)

彼女は生まれて初めて、目の前にいる階層守護者と、第二階層で己と同じく張り切っている領域守護者に対して仲間として接する事にしたのだ。

「……」

コキユートスは、エントマとの会話を終え、第五階層氷河の住居、大白球にてその時を待つ。来たるべき、至高の蟲王に仕える時を。

(エントマハ、ナザリックニイル大半ノ者達ニ対シ、無関心ヲ貫イテキタ。ソレガアアマデ変ワツテシマウトハ……ダガ、ソレハ当然ノ結果トモ言エル)

コキユートスはエントマの変化に尚も驚いていたが、それと同時に納得もした。

惚れた異性のためならば、生ある者はいくらでも変化する。求愛の為に己を違う姿に変えて見せる者。己の力を誇示し、優れた種である

ことを証明せんとする者。愛した雄を喰らつてしまう者。コキユートスを知る範囲でも著しく様変わりする者は多数だ。

(好イタ相手ガ、アバ・ドン様デアレバナ……)

あれ程の相手に惚れたとなれば、どんなに大きく様変わりしたとしても驚くに値しない。結果的に、エントマとの連携が取りやすくなった事は嬉しい誤算だ。至高の御方のお役に立てるといふのは、シモベ達からすれば至福の時なのだから。

(雪女郎達モソウナノデアロウカ……?イヤ、ソレハ気ニスル事デハナイナ)

自分が考えるべきことではない。コキユートスは、浮かんだ素朴な疑問を軽く首を振り消し去った。その後、最も興味深く、最も重要な疑問を浮かべる。

(アバ・ドン様ハ何故、エントマニ告白サレナイノカ。アレ程ノ心躍ル戦イヲ繰リ広ゲ、源次郎様ノ許シヲ得ラレタ事ハ、私モ確力ニ見タト言ウノニ)

アバ・ドンは、常に優しくエントマを見守り続けている。お互い両想いであるならば、既に結ばれてもおかしくない。どういう訳か、アバ・ドンは少しずつ歩み寄る姿勢を貫いている。今すぐにも閨を共にしようと誰も文句を言わないだろう。他ならぬエントマ自身もそうであるのに拘らずだ。そもそも至高の御方に文句を言う輩まで、ナザリックに許す者も実行する者もない。

色恋沙汰にてんで疎い自分では理由が分からない。こういう時こそ、頼れる同僚に相談したいと思うが、密約なのだからそれは出来ない。

(思イノ外、出来ル事ハ限ラレル)

自分に協力出来る事はほとんど無い。そういった事に鈍い頭の硬さに辟易するが、最終的にコキユートスは、この恋の行方に直接関与しない事にした。

(アバ・ドン様ガ機ヲ見テイルナラバ、手出シハ無用。ナラバ、私ニ出来ル事ハ二人ノ未来ニ阻ム輩ヲ断チ切ルノミ)

自分の特技で二人を陰ながら支えよう。アバ・ドンとエントマの傍

らに立つならば、必ず機会は訪れる。それが自分に出来る最善だと、コキユートスは信じる事にした。

「……ママナラヌモノダナ」

コキユートスの呟きは僅かな冷気を運び、空へ溶けていった。

## 名探偵デミウルゴス

パンドラズ・アクターの紹介が終わり、第七階層守護者デミウルゴスは、自身の持ち場に戻り思考を巡らせる。彼が守護する溶岩の園。並の人間ならば、溶けた大地が発する熱にやられ、その場にいるだけでも焼け死ぬ程の熱量だが、彼にとっては考えに没頭するには丁度良い空間であった。

(まさか、長らく謎であった宝物殿の領域守護者を外に出すとは。アインズ様は外の世界にそれほど警戒を……)

宝物殿。あらゆる階層から隔離された場所であり、至高の41人を除き、ほとんどの者が踏み入れた事のない領域。数々の世界級アイテムも保管されている、ナザリック内でもトップクラスの最重要エリアだ。アインズ本人により創造されたモンスターが守護している事からも、その重要度が窺える。

脳内の整理を続けながらも、アインズからのお達しを部下に伝えるべく、魔将達の下へ向かう。

本来、自分の配下は呼び寄せれば手っ取り早いのだが、デミウルゴスにとって、至高の御方から預かった第七階層を歩き回る事は、己の任された仕事の重要性を再認識する儀式でもあり、心を癒す生きがいであった。

(そうすると、宝物殿の守護者が空席になる。空いた守護は誰が務めるか？それは、アバ・ドン様以外考えられない。今まで、パンドラズ・アクターが宝物殿にかかりきりだったのが、あの偉大なる御方の御帰還によって、改める機会になったのは確実。何しろアバ・ドン様以上の適任者は、今ナザリックにいない)

歩み続けるデミウルゴスは、パンドラズ・アクターが外に出た穴埋めはアバ・ドンがするものだと結論付けた。宝物殿の全貌は、パンドラズ・アクターを除き、シモベ達も知らぬ所。しかも、至高の御方が守護をする場所以上に堅牢な拠点は無いだろう。

行き着いた理由は間違ってるようでだいたい合っているという不思議なものであった。

丁度、アバ・ドンが宝物殿を守護すると当たりを付けたところで、魔将達の所へたどり着いた。デミウルゴスの存在に気づいた彼らは、気を張って炎獄の造物主からの言葉を待つ。彼を怒らせてはいけない事は、嫌になる程知っているのだ。

「ああ、君達。領域守護者のパンドラズ・アクターが配置替えする事になる。今後顔合わせをする筈なので覚えておくように」

「畏まりました」

「それと、例の件について経過報告を」

「はい、万事滞り無く進行中です。痕跡一つ残さず、着々と」

「稀に、何らかの異能を持った人間も見つかりますが、残さず確保しております。このままなら、牧場として機能するのも時間の問題かと」

「よろしい。この計画はほんの僅かな失敗も許されない難しい物だ。些細な変化でも良いから、何かあればすぐに報告したまえよ？」

「心得ております。至高の御方に捧げる供物、慎重かつ迅速にご用意致しましょう」

魔将達の返事に満足すると、デミウルゴスは踵を返してその場を後にする。

(アインズ様は詳しい配置については追って伝えると仰った。しかし、パンドラズ・アクターとアバ・ドン様の入れ替えと言えば済む話を何故持ち越されたのか？人員の変化は微々たるものであるにも関わらず。容易く出せるであろう結論を出さずに後に回した訳は……？)

去っていくデミウルゴスの背を見守る魔将達は、今日もまた自分達の上司が至高の御方の策謀を見抜こうとしているのを察した。

「デミウルゴス様はまたもお考え中のようなだな」

「ああ、今日も至高の御方の真意を汲み取ろうとしておられるのか」

「流石はナザリック一の知恵者……」

そんな魔将達の言葉を知ってか知らずか、デミウルゴスは振り向く。

「君達も、せめて先読み程度は出来るようになりたまえ」

「……善処致します」

魔将達の返事は色良い物とは言い難かった。デミウルゴスの知能をもつてしても読み取れぬ真意等、自分達では到底理解出来ぬ領域だったからだ。

「それと、ナザリック一の知恵者とは至高の御方の事を指す。私など遠く及ばない。分かったかね？」

「し、失礼しました……」

許し難い部下の言を訂正させ、今度こそその場を後にした。

考えながら歩いてる途中、微妙な温度の変化で溶岩が弾け飛ぶが、デミウルゴスは全く意に介さない。溶岩弾はまるで意思をもつていくかのように、炎獄の造物主を避けては粘着質な音を立て地面に散らばって行く。実は、潜伏している領域守護者、紅蓮の配慮なのだが、第七階層ではありがちな光景であつた。

そんな中、尚も思考は続く。アインズとアバ・ドンは多くを語らない。二人きりの時に、どれ程崇高な会談をしているのか想像だに出来なかつた。

だが、その深遠なる思考を少しでも理解し、偉大な方々に貢献する事こそシモベの務めであると、デミウルゴスは思っている。

(……もしや、何か大きな計画を実行に移されようとしているのか?)  
大雑把ではあるが、糸口が掴めたような気がした。少しでも至高の御方の真意を見抜き、これからの計画に貢献しようと、デミウルゴスは更に思考を重ねる。答えの鍵は、先程残らせたコキュートスとエントマが握ってるのではないかと考えた。

(何故、あの場に残らせたのがコキュートスとエントマか。二人の共通点は、双方共アバ・ドン様と同じ蟲系統の異形種である事。数あるシモベ達の中から蟲に關係する者達を意図的に残されたのか? 創造主様の大半がナザリックを去られてから、全てのシモベ達はアインズ様の配下として活動してきた。では、アバ・ドン様がご健在の今であれば……)

この事は、本人に話を聞けば早いが、二人を残して自分達を持ち場に戻らせて話をしている以上、首を突っ込んで良い話題ではない。二人に直接話を聞くのは、至高の御方の意向に沿わない物であると考

え、控える事にした。

だが、デミウルゴスはまた一つ結論を導き出した。

(やはり、アインズ様は、アバ・ドン様の下にシモベ達を預けるおつもりか！だとすれば、答えを持ち越した理由にも納得が行く。守護者の一角であるコキュートス。プレアデスの一人であるエントマ……それだけでは明らかに少ない。あれ程の蟲の統率力。何らかの、蟲系モンスターに恩恵を与えられるスキルをお持ちだろう。ならば、主要な蟲系統のシモベ達をアバ・ドン様の下に据えるのが道理。これは大きな異動になる)

本当にそうであれば、早急に対応せねばならない。自分の仕事を察知したデミウルゴスは、アバ・ドンが居る事によるナザリックへの影響は計り知れないと再認識した。無論、良い意味でだ。

(アインズ様はアバ・ドン様の御力を私以上に理解なされている。アバ・ドン様の能力を高く評価した上での采配を取る事は最早必然……そうか！先の模擬戦には、アバ・ドン様の御力を示すだけではなく、御健在ぶりを下々に理解させる意味合いも含まれていたのですか、アインズ様)

デミウルゴスは、玉座の間で話をしているであろう、至高の二人への尊敬度をもう一段階引き上げた。蟲系モンスターを全て指揮下に置き、更に、最重要とも言える宝物殿の守護を兼任。アインズがいかにアバ・ドンを信頼し、重用しているかはその采配だけで十分に垣間見えるものであった。

(アバ・ドン様が病み上がりでおられる事を想定し、専用部隊を薦めるのは後回しにしていたが、杞憂だったようだね……)

自分が抱いていた心配は、傲慢と言えるほどに不敬な考えであった。アバ・ドンとアインズは、再会した時点で既に計画を進めていたのだ。結果、至高の御二方にお手を煩わせてしまった。そう理解したデミウルゴスは考えを改め、今後のナザリックの動向を考慮する。

(場合によってはコキュートスやエントマも本来の役職と兼任になるか。それはこれからの動き次第となる。私の考えが真実であるならば……やれやれ、コキュートス達が羨ましい)

デミウルゴスは、大抜擢を受けたであろう同僚について嫉妬する。それでも、自分が為すべき事は何一つ変わらない。

(では行こうか。どちらにせよ、アルベドと相談しなくては。仮に間違っていたとしても、遅かれ早かれシモベ達の配置が大きく変わるの  
は間違いない。……ふむ、私が考えつくのはこの程度か。だが、アイ  
ンズ様の事だ。これらの計画による変化も、何らかの大きな狙いが含  
まれていると見て良い。いやはや、そこまでは分からない己の浅はか  
さが恨めしいよ)

デミウルゴスは、またもや勝手に忠誠心を上昇させ、これから起こ  
るであろうナザリック内の異動を見据えて行動を開始した。



## 黙示録

「アルベドさん、お願いがあるんですけど！」

「はい、アバ・ドン様。私で宜しければ」

「ありがとうございます。では、これを皆に配って下さい。全員の記入が終わったら提出をお願いします」

「この紙の束は……畏まりました。すぐに手配致します」

「お願いします。ああそれとですね」

「何なりと」

「個人部隊作るから準備をお願いします」

アバ・ドンが主要な蟲系モンスターに声を掛けてから二日が経過した。舞台はまたも玉座の間なのだが、その様子は今までとは少々異なっていた。

(ふふ、やはりこうなったわね)

(アバ・ドン様が放つ御威光の壮麗たるや……この場に立ち会えたこと、心から光栄に思います)

デミウルゴスとアルベドは心の中で静かに笑う。目の前の光景は、アインズ・ウール・ゴウンに安寧をもたらすと確信出来る雰囲気を持っていたからだった。

玉座の間における立ち位置は、アルベドを前に、階層守護者達が控えるのが本来のものだ。しかし、コキュートスを除く階層守護者及び、セバス率いるプレアデス達は皆脇に控えている。玉座の下、中心にいるのは、コキュートスやエントマを代表とした、蟲系モンスター達。

千差万別の逞しき蟲系異形種。コウチュウ目、ハエ目、チョウ目、それらを混合したような人型の者、虫の原型を残したままな者の他、ありとあらゆる種類が揃っている。

ついに、アバ・ドンの為に据えられた専属部隊のお披露目と相成ったのだ。

玉座に座すは変わらずアインズのままだが、今日に限っては主役は自分ではないと言わんばかりに、沈黙を保っている。その眼光に灯る光は、暖かく優しいもののようにも見受けられた。

アインズの隣に控えていたアバ・ドンが、開口一番、沈黙を破った。「皆さん、お集まりいただき感謝します。いよいよこの日がやって参りました」

たったそれだけの言葉で、蟲達の闘志とも言える程に力が迸る。熱狂的な空気を無理やり押し込んだような重圧感だが、アバ・ドンはその様子に満足したかのように、頷いた。

「アインズさんの許可を得ましたので、独立部隊設立の宣言を玉座の間にて行いたいと思います。コキュートス、エントマ・ヴァシリツサ、ゼータ、恐怖公、ハンゾーは前へ」

名を呼ばれた四人が静かに前へ出る。

「尚、餓食狐蟲王は一身上の都合の為、第六階層の大穴にて待機としております。ご了承下さい」

アバ・ドンがそう前置きをし、宣言を開始した。

「私はアインズ・ウール・ゴウンの力となるべく独立部隊の設立を宣言します！」

一拍間を置く。深呼吸をし、意を決したアバ・ドンは宣言の続きに入った。

「部隊の名は『アポカリプス黙示録』。私の直属となる貴方達へ厳命する事は二つ！一つ、状況が不利と悟ったら即時撤退する事！二つ、アインズ・ウール・ゴウンに貢献する事！この二つは絶対に守りなさい！これは私自身も含めての事です！」

厳命する事が即時撤退。一見情けないようにも思える命令を、臆病などと嘲笑う者はいない。三千世界をあまねく照らし続けるが如し

慈悲を湛えた、偉大なる御方の厳命。それはシモベ達の身を案ずるが故。その命に背く事は、至高の御方を大いに悲しませる事になる。

身をも惜しまぬ決断でナザリックを去り、シモベ達の下へ帰還した至高の御方へ最大限の忠義を尽くす。集ったシモベ達を選択肢はその一択。他は決してありえない。

「第五階層守護者、コキユートス。偉大ナル御心ノママ、御身ノ剣トシテオ振ルイ下サイ！」

「プレアデスが一人、エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。万物に勝る輝きを放つアバ・ドン様に、絶対の忠誠を誓います！」

「第二階層領域守護者、恐怖公。御身に叶う働きを、必ずやお見せ致しますぞー！」

「エイトエツジアサシン代表、ハンゾー！偉大なる我らが主の盾となりましょう！」

（最早コノ命、捨テルモ不敬。ナラバコソ、我が身全テヲ、至高ノ御方ニ）

コキユートス含む、蟲系モンスターの総意。それは、先もあつた通り、生ある限りその身の全てを以てアバ・ドンへ尽くし続ける事。失態を演じたとしても、死をもって償うなど以ての外、失態を禊ぐ働きをもつて返すのみだ。

一つの大きな意思であるかの如く『アボカリプス黙示録』は動き始めた。

「ナザリック地下大墳墓の絶対なる主、アインズ・ウール・ゴウン様！そして、我らの下へ再び顕現なされた偉大なる至高の御方！アバ・ドン様の為に！」

「我らが偉大なる造物主様に栄光あれ！」

「永久に幸あれ！」

「アインズ・ウール・ゴウン様！アバ・ドン様！万歳！」

他の蟲系モンスター達も例外無く忠誠を誓う。アバ・ドンが指揮下に置いたことで、配下すべての蟲に、変化が訪れた。

蟲達の体が一回りも二回りも大きく見える。大きさは変わっていない筈なのだが、ただでさえ高かった威圧感が更に増した。

これは、アバ・ドンのスキル『ゼバの施し』『ンの統率』『蟲王の風

格』などによる、配下の強化が発生したのだ。蟲に重点を置いたスキルは結果として、配下の蟲達をプラス10レベル程度強化する事にも繋がった。

ちなみに、レベルがカンストしているコキユートスは、やる気に満ち溢れすぎてそう見えるだけである。

その光景に、他の者達はそれぞれが思いを馳せる。

(アバ・ドン様に部下を預けられた事によって、戦力の増強……いや、増強では生温い。戦力が倍増したわ……！アインズ様、見事な采配です！)

アルベドは、ナザリックの戦力増強に見事成功したアインズとアバ・ドンに畏怖と敬意の念を抱く。アインズに対してはどろりとした感情が見え隠れするのだが、ご愛嬌だろう。

(優れた指揮者がおられると、こうも美しい輝きを見せるのでありますね……)

(なんて力強さ！私のペットもあれに負けないぐらいにならなくちゃ！)

(す、すごい数……こんなにいっぱいいるのに、皆強くなっちゃった！)

蟲への苦手意識があつたシャルティアとアウラの二人ですら、目が離せぬ魅力を孕む。マールは、アウラの隣で、影響下に入った蟲達の規模に心底驚いていた。

(まるで、集う者全てを合わせて一個の生命体。蟲達の力も格段に跳ね上がっている。やはり真なる蟲の王としても絶大な力をお持ちであつたか！)

デミウルゴスは、レベルを引き上げられた蟲達の様相に、アインズとアバ・ドンの偉大さを思い知る事となった。

(エントマ、千載一遇のチャンスよ)

(エンちゃん、ファイトっす……！超羨ましいけど応援するっす)

ユリとルプスレギナは妹の恋路を応援した。

(むう、アバ・ドン様直下だなんて羨ましい。私も機会があれば……！)

ナーベラルはエントマの栄達にちよつぴり嫉妬した。

(蟲、いっぱい)

(私の分の人間が食い尽くされそうな勢い。ああ、いいわねえ……) シズは、比較的プラスな思考でその光景のありのままを受け入れ、ソリュシヤンは蟲達にジワリジワリと食い尽くされていく人間をちよつと観察したいと思った。

(おお。アバ・ドン様の威風堂々たる姿、真に喜ばしく思います……。ナーベラルは嫉妬を隠しきれてませんね……)

セバスは、主人の完全復活を祝いつつも、プレアデスの様子を気にする。

(これなら、安心して留守を任せられる。ありがとう……。アバさん)

アインズは、一丸となっている蟲達とアバ・ドンに大きな安心感を抱いた。

(素晴らしい……。本当に素晴らしい光景だよ)

そして、この場に居合わせて、最も喜びの感情を露わにしたのはアバ・ドンだ。

多種多様な彼ら全てが、嘘偽り無く忠義を誓う。みんなの思いが、持て余すほどの熱意を持ってアバ・ドンにぶつけられた。彼らの掛け声は、時に牙を動かす異音、金属質な関節の駆動音、高低様々な羽音が混じる歪なモノであったが、全く気にならなかつた。むしろ、アバ・ドンにとっては全てが心地の良い音色であった。

(これで、やる気が出なきや嘘だな……)

その姿は彼のモチベーションを、生前ならば決してありえなかつた程に引き上げた。

(俺もみんなに当てられたかもな。……それで良い。モモンガさんは、帰る場所を残してくれた。自分を再び暖かく出迎えてくれた。またエントマちゃんに出会うことが出来た。全てがモモンガさんと、ナザリック地下大墳墓を守り続けてくれたみんなのおかげだ。この身が役に立つなら、みんなの為に、しっかりと働こうじゃないか)

アバ・ドンは生まれ変わった己の身で、受けた恩を少しずつでも返そうと誓った。

「アバさん専属部隊、通称『アポカリプス黙示録』ですか……」

「しかも、黙示録の四騎士に該当する部下もいますよ！モモンガさん！」

「ほほう、誰の事なんですか？」

「エントマさん、コキユートスさん、恐怖公、餓食弧蟲王さんで四騎士です。あ、ハンゾー達は騎士ってより忍者なので別枠です」

「エイトエツジアサシンが忍者なのは納得ですが……エントマって騎士と言うより秘書兼専属メイドって感じですね？」

「ま、まあそうです」

「アバさん、それってちよつとした職権乱用……」

「さささささ最初で最後です！」

「あははは、うん、まあそれは置いといて……アポカリプスかあ」

「良いでしょう？」

「んー……あっ！」

「どしたんですか？」

名案が浮かんだとばかりに、モモンガさんが手のひらを握りこぶしで打った。

「略してポカリ隊」

「えー」

何か爽やかな感じになった。

## キャラ紹介

### アバ・ドン (挿絵付き)

◇アバ・ドン「異形種」 A b a · d d o n  
エントマとギルドをこよなく愛する蟲の王  
害蟲(蔑称)

◇身体能力(特撮風)

身長：200cm

体重：120kg

パンチ力：80t

キック力：100t

肩の鎌の威力：90t

副腕の握力：50t

速度：光よりかは遅い

◇嗜好

趣味：昆虫採集及び観察

好物：ナザリック地下大墳墓の食事全般

好きな人：エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ

尊敬する人：モモンガを主とするギルドメンバー

◇役職

至高の41人

ナザリック地下大墳墓副統治者

蟲系異形種軍団『アホカリブス黙示録』最高司令官

宝物殿領域守護者代理

◇住居

ナザリック地下大墳墓

第九階層にある自室。

◇属性  
アライメント

中立「カルマ値：-10」

◇種族レベル

バグズヒューマン  
蟲人：15LV

インセクトインフアイター  
昆虫の武闘家：10LV

ヴァーミロード  
蟲王：5LV

「課金」グ未確認生命体ロ：5LV

◇職業レベル  
クラス

ムシツカイ：10LV

ムシマスター：5LV

レギオン：5LV

マーシャルアーツ：10LV

ハイ・キックジャンパー：10LV

ポイズンメーカー：10LV

カースメーカー：5LV

インカーネーション・オブ・アブノーマルステート：5LV

エンチャンター：5LV

◇「種族レベル」+「職業レベル」：計100レベル

種族レベル：35

職業レベル：65

◇能力表（最大値を100とした場合の割合）

HP（ヒットポイント）：80

MP（マジックポイント）：70

物理攻撃：80

物理防御：80

素早さ：???（限界突破）

魔法攻撃：40

魔法防御：80

総合耐性：100

特殊：???（限界突破）



◇主要なスキル

ンの統率：指揮下に入った異形種の全能力値を30%上昇させる。  
ゼバの施し・指揮下に入った蟲系種族のモンスターに、擬似種族『ゼバの眷属』を追加し、レベルを10上昇させる（但しレベル90以下限定）

蟲の軍勢：大量の蟲を自在に呼び出し、多段ダメージを与える。  
バッドステータス付与：通常攻撃（蟲）に手持ちの状態異常を付与する。

蜚の超俊足：加速力を絶大に引き上げる（名前のせいで不人気）。  
状態異常強化V：状態異常の発生率が絶大に上昇する。

バッドステータス強化V：バッドステータスの発生率が絶大に上昇する。

My name is Legion／我が名はレギオン：???

for we are many／我々は、大勢であるが故に：???

隠しクラス、レギオンのスキル。上は攻撃スキル、下はパッシブスキル

☆切り札

：超位魔法と言う名の……。

：レギオン絡み

な????????

◇解説

見た目はアカガネサルハムシのような、美しい玉虫色。怪人的な人型の肉体に、巨大なカマキリをそのまま背負わせたような風貌で、顔には四本の角が付いている。内側二本は触覚の役割を担う。

武器は基本素手で、蟲を呼び出す。データクリスタル、希少金属、リアルマネーを惜しみなく注ぎ込んだ専用防具  
『究極の闇をもたらす者』を愛用する。元々蟲王は防具が装備出来ないのだが、課金種族の『未確認生命体』によって、飛行能力と装備能力を獲得した。

蟲系ビルドにこだわり続け、モモンガのアドバイスを参考にすくすく育った結果、縦横無尽に高速移動しながら超物量状態異常攻撃をバ

ラ撒きまくるといふ恐ろしいキャラクターになった。某匿名掲示板でもアンチスレがパート100超の大盛況になる程の嫌われぶりで、特にギルドメンバーとチームワークを發揮した時は手が付けられない事になる。

ただし、広範囲攻撃には弱く、ワールドデイズスター等がいた場合すんなりやられる事もあった。本人曰く、それもまた虫らしいとして満更でも無かったと言う。

#### ◇前世

モモンガこと鈴木悟と同じく、ギルドとギルメンを大切にしていた社会人。虫をこよなく愛しており、昆虫採集も研究もロクに出来ない時代に嫌気が差していた。元末端の研究職で、生まれた時から身体が貧弱だった為、仕事中に体を壊してしまふ。そして、皮肉にもユグドラシルオンライン終了と共に命を散らす事となった。

ユグドラシル時代、PK狩りに遭いながらも虫の中の虫になるべく奔走していたところ、当時ギルドマスターになりたてのモモンガにスカウトされる。アインズ・ウール・ゴウンの入団条件を全て満たしており、本人も比較的温厚で素直だったおかげで、ギルメン達には暖かく歓迎された。

入団の折、ギルドメンバーの一人である源次郎が生み出したNPC、蜘蛛人のエントマ・ヴァシリツサ・ゼータに一目惚れ。2・5次元の叶わぬ恋と知りつつも、思いを寄せる事となる。執拗な土下座とPvPの果てに源次郎公認となった。ギルドメンバーに同行していたNPCの何人かはその光景を覚えている模様。ちなみに、エントマ本人はその事実を知らない。

自分専用の蟲系NPCを作ろうと思っていたが、ぶじんたけみかづち武人建御雷製作のコキユートストと、源次郎製作のエントマを見て心が折れた。その為、ウルベルトとるし★ふぁーがゴキブリ型NPCを作ろうと企んでいた際、造形のアシストをするに留める。

実は、入団当初の蟲人時代はほとんど蟲寄りな見た目だったのだが、コキユートスやエントマを見て、人型も有りだと考えを改めた経緯がある。現在のアバ・ドンのはきは、アインズ・ウール・ゴウン無し

にありえなかった。

特に親交が深かったギルドメンバーは、キャラビルドが本格化した時、すぐくお世話になったモモンガと、”お義父さん(?) エントマちゃんを僕に下さい” 事件に感銘を受けたペロロンチーノと姉のぶくぶく茶釜。エントマ絡みの関係者だった源次郎、ホワイトブリム。コキユートスが縁でPVPの立会いもした武人武御雷など。

他には、あまりにもリアルすぎる蟲の造形に定評があった為、それがきっかけでウルベルト、るし★ふぁー、ジャングル製作の縁でブループラネットとも仲が良かった。女性プレイヤーから怒られる事は多々あったが、本人に悪気は一切ない。

生前、散々な人生を送ってきたアバ・ドンだが、今現在は本人的には叶わないと思つてた願望のほとんどが満たされてしまったので幸せ一杯。今の環境を得られたことは、モモンガとNPC達のおかげだと心から思っており、一生をかけて全面協力するつもりで専ら活動中。つまり、本人は元の世界に帰る気ゼロである。

## お供面接編 選別

「アバ・ドン様、頂いた用紙への記入、全てのシモベが滞り無く終了しました」

アルベドが恭しく礼をし、紙の束を渡してきた。

「なかなか早かったですね。メッセージを使うにしても、もう少しかかると思っただのですが……」

「防衛網の構築と共に連絡網も形成しておりましたので、それを利用して転移魔法で用紙を配布致しました」

「ほう」

既にそういう準備も整ってたのか。アルベドはアインズさんが絡むとすごい事になるけど、守護者総括というだけあって優秀な人だなあ。タブラさんも大満足だ。

「そういうやデミウルゴスも『黙示録』アポカリプスの話をした時には既に準備万端だったよな……。満面の笑みで「ご心配なく、あくまで予測していただけです」って言ってたが、ここまできるとこえーよ!?部下達がバラすとは到底思えんし、本当に予測してたのだろう。恐ろしや……。……」

「それと、こちらの用紙は行き先までシモベ達に運ばせますが……」

「お気遣いはありがたいのですが、自分でやろうと思えます。直接アインズさんの所へ行きますから」

「畏まりました」

アルベドから紙の束を受け取る。昔の俺ならひいひい言う重さだが、今なら楽勝です。

きちんと揃えて提出されてるが、この付箋は何だろう。

「そちらに貼ってる付箋は種族別に分けて貼り付けてます。差し出がましいようですが、検証がしやすいかと思い、整頓しました」

「それはそれは、ありがとうございます。アルベドさん」

気が利くなあ。こういう事してくれると本当に助かるね。

「見事な手際、感心しました。これはアインズさんの計画において必須となるものですからね。貴方の働き振りは、私がよおしく伝えておきます」

「くふー！も、勿体無き御言葉です。これからも入用の際は何なりとお命じ下さいませ」

「ええ、その時には遠慮なく」

アルベドは暫し頭を垂れ、また他の仕事をしに戻っていった。

優秀なのは間違いないのだが、アルベドはヤンデレを超越したナニかになりつつある。俺がモモンガさんと仲良くしすぎて後ろからブスリなんてことにならないよう、話をする時はなるたけモモンガさんを話題に出すように気をつけている。タブラさんはどんな設定をねじ込んだのやら。

まあそれはともかく、助かった。まさかこんなに早く集まるとはな、これ。じゃあモモンガさんの所へ持っていくか。

「アバさん。その紙の束は何ですか？」

「ふっふっふ……これはですね……」

丁度執務室で外の世界に関する報告書を確認してたモモンガさんに、アルベドから受け取った書類の山を見せる。

「外の仕事で重要になりそうな質問を纏めた用紙作って、みんなに書かせました！」

「おおーこ、これは……アバさん、ありがとうございます！」

モモンガさんが席を立って、紙束に興味を示してくれた。そう、これら全てナザリックの配下達に書かせたアンケートなのだ。エントマちゃんやルプーに食堂で聞いた話を更に掘り下げたような質問が

この紙には書かれている。他にも、部下の性格を把握するために、細々とした性格診断的な質問も付けといた。

「モモンガさんの同行者に、誰が向いているか、これ参考にして話し合いましよう」

「正に今の俺に必要な物です！早速見てみましょう」

「アルベドさんが整頓してくれてるのでかなり見やすいですよ」

「あ、本当だ。うん、後でアルベドにも礼を言っておきます」

「やったぜアルベド、明日はホームランだ。」

机の上に紙をザツと広げてみる。机がでかいからこれぐらい余裕だね。お、種族や特技に絞って整理してある。こいつはやりやすいぞ。

「さあ、モモンガさんに随伴する部下を決める重要な会議だ。慎重に取り組もう。」

念の為、アンケートに虚偽を書いてないかも気にしたいところだが、考えたらキリが無い。一応、”嘘偽り無く思ったままを書いて下さい”って前書きに入れといたけど、じっくり話し合いたいところだな。

ここからはスーパー会議タイム。適当に椅子を置いて、モモンガさんの向かいに座る。立派な執務室に俺が座ると浮くなあ。モモンガさんは割と似合ってるけど、俺の場合、場違い感が……。

「そーいや、モモンガさんの中で候補は決まってるんですか？」

「はい。色々考えた結果、ナーベラルに頼もうかと」

「プレアデスの娘ですか、良いですね。パツと見、人間種にしか見えませんし。確かナーベラルさんはエレメンタリスト。魔法職だけ……ああ、モモンガさんは戦士化するからその方が良いのか」

「はい。カムフラージュになると、様々な実験も兼ねてます。それに、彼女はドツペルゲンガーと言っても、あの姿を保つだけの設定です。他には、アルベド辺りも考えたんですが、彼女は人間への忌避感が強くて……」

「あー、やつぱさそうなんだ。俺、食堂でエントマさんやルプスレギナさんから話を聞いたんですよ。大半はそんな感じで、少なからず人間を

軽視するのはデフォオみたいですよ」

「そっか……」

モモンガさんが頭を押さえて唸る。やっぱり……という呟きも聞こえたので、想定してた事だったのだろう。まあ、こればかりはA OGの宿命と言わざるを得まい。

「うーんと、とりあえず第一候補のナーベラルさんの用紙を見てみましょうか」

「そうですね」

ナーベラル・ガンマ。ポニーテールの黒髪黒目メイドさんだ。見た目的には何ら問題は無い。えーっと……人間関係の質問は……。

氏名：ナーベラル・ガンマ

Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：何の価値もないゴミです

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：至高の御方の御命令とあらば、どうか、どうか耐え抜いてみせます。

Q30：外へ出るに当たっての意気込みがあれば、何かお願いします

A：アインズ様に群がる 虫ケ ゴミ屑のような人間共を薙ぎ払ってみせます

「……これは」

「アバさん。」 どうか耐え抜いてみせます” の所、筆圧が強すぎて

所々穴空いてますよ……」

「ほんとだ……そもそもどうにかしなきゃ我慢出来ないんじゃないや厳しいかも……」

「うーん……」

「後このQ30の所、多分虫ケラって書こうとして訂正してますね。なんでわざわざ……」

「……アバさんに気を使ったとか」

「ああ、俺が虫好きなのはバレバレでしたか」

「そもそも隠す気も無いですしね」

「あはは……。それにしても、ナーベラルを引き連れると思わぬリスクを招くかも」

「そうですね……人間の扱いはもう仕方ないですけど、きちんと我慢出来る人が好ましいです。ただ、能力的に彼女の力は必要になると思いますし、候補として考えておきましょう」

「了解です。じゃあ、ナーベラルさんは”△”っと……。よし、他の人も見てみましょう」

「はい。では見た目が人間種に近い部下を優先で……」

「ほいほい」

俺は別途用意していた名簿に記号を記入する。○、△、？の三段階評価で外への適性を評価しているのだが、これは余り必要なかったかもなあ。使ってるペンは、一見ただの羽根ペンだが、書き心地は旧ボールペンと遜色無く、インクも無限に出続けるといふオシャレアイテムだ。

記入後、とりあえず用紙を何枚か抜き取って二人で確認する。こういう時副腕のある俺は何かと便利だ。人間種に近いとなると、選ぶ部下もかなり限定されてくるので、ささっとピックアップする。

「こんなもんですかね？」

「パーフェクトです」

ゲーム時代なら”グツジョブ!”のアイコンを出してそんな雰囲気だ。さあ、まずはプレアデスの面々から行ってみようか。まずは、ユリ・アルファ。夜会巻きに眼鏡姿と、大人びた外見のプレアデス副



リーダーだ。

氏名：ユリ・アルファ

Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：価値があるならば、手段の一つに成り得ると思います。

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：至高の御方の意のままに

Q30：外へ出るに当たっての意気込みがあれば、何かお願い出来ます

A：ナザリック地下大墳墓に有益な結果を持ち帰り、アインズ様、アバ・ドン様の糧となるよう精進して参ります。

「モモンガさん、ユリさんはどうですか？アライメントが善寄りですが、アンケートの結果は中々良い感じですよ」

アライメント善よりな部下は、俺達の行動に忌避感を抱くリスクがあるので、控えるつもりだったのだが、アンケートの回答や、直接話を聞いて考慮するのも悪くないかもしれんな。

「悪くないです。ただ、ユリは武器的にちよつと特殊だから……」

「あー、やまいこさんとはほぼ同じなんだ」

「でも、やりようはありますね。ナーベラルよりは安定してるし、任せられるとは思いますがよ」

「じゃあ、ユリさんは暫定候補という事で〇」にしときますか」

「はい」

「モモンガさん、ナザリックのみんなには近い内に直接話を聞いてお

きます。機会を見て、コミュニケーション取るようにして、性格を把握しておきますので」

「ありがとうございます。是非お願いしますね。匙加減はアバさんにお任せしますよ」

「ういっす」

頼られるというのは嬉しいものだ。プレアデスの面々は、エントマちゃんの姉にも当たる訳だから一杯交流しとかなきゃね。それを差し置いても部下との交流はこれから大事にしようっと。

「あ。でも最終候補までに絞った部下達は俺も話が聞きたいですね」

「じゃあ候補に残った相手は俺とモモンガさんで面接つてことで」

「わかりましたー」

というわけで、面接も行うことになりました。あ、ちよつと楽しいかもこれ。

さて、ユリは武器的要素を除けば問題なさげ。かなり有力候補だな。

「次はルプスレギナさんです」

「どれどれ……」

ルプスレギナ・ベータ。赤い三つ編みに褐色肌の活発なメイド。食堂で会った限りだと中々の食いしん坊だ。

氏名：ルプスレギナ・ベータ

Q3：趣味はありますか？

A：人間が絶望と苦痛に表情を歪ませるのを観察するのが好きです。自分の手でそこまで持っていったら尚良しです。

Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：使い捨ての玩具です！でも、捨てるまではそこそこ大切にします！

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：余裕です。そいつが不幸になる事は祈りますが、暖かく見守ります。

・  
・  
・

Q30：外へ出るに当たっての意気込みがあれば、何かお願いします

A：お役に立てるよう頑張ります！後、嘆き苦しむ人間が一杯出ると良いですね！

「これ最後が余計だよ!？」

「俺、食堂で話しましたが、概ねこの通りですね……」

「……………まあ、ナーベラルよりかは融通が利きそうか？」

「確かに、能力的にもバランス良いですし、回復もいけます」

「じゃあルプーさんは〇〇で良いですか、モモンガさん」

「OKです」

えーっと、ルプーは〇〇っと。

よし、この調子で他の部下も査定を続けよう。プレアデスの面々が終わった次は守護者もだな。まさか元研究職の俺が人事の仕事をする事になるとはな……。面接もする予定だから完全に人事部だ。

## 憂慮

さて、これでプレアデスのメンバーはユリとルプーとナーベラルの三人は査定が終わったので、残り半分もこの調子で進めていこう。俺とモモンガさんは引き続き、執務室の机に向かい合って部下の選定を行う。

「じゃあ次はシズさんですね」

「シズか……」

シーゼットニイチニイハチ・デルタ。赤金ロングヘアと眼帯が特徴の、所謂ロボ娘だ。

氏名：CZ2128・Δ

Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：喋る生物

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：支障無し

Q30：外へ出るに当たっての意気込みがあれば、何かお願いします

A：頑張ります

文字数がやたら少ないが、とても丁寧な書き方だ。まるでキーボードで入力した文字のような精密さ。流星はオートマトン。

「モモンガさん、シズさんは中々良いのでは？」

「んー、アバさん。すみませんがシズは”?”で……武器がちよつと」

「あ、そっか」

そうか、あつちは魔法がメインのファンタジー的な異世界。シズの特技は全てがオーパーツだ。そりゃあかな。アンケートの結果を見る限りだと、人間に対しては良くも悪くも無関心だから良さげだったんだけどなあ。ユリはまだ行けないこともないかもしれないが、シズはフォローが利かん……。

「それにしてもこのQ4の質問……」

回答の一つを俺が指差す。

Q4：何か欲しい物がありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：小動物（抱っこ可能な者が好ましい）

「シズ、結構女の子してるな」

「ですね……」

もしかしたら、シズの感性が人類視点で一番まともなものかもしれない。それだけに勿体無い……。ステゴロで戦わすわけにもいかないしね。シズは“？”と……。静かな執務室に、ペンを走らせる音だけが響く。

「うん、じゃあ気を取り直してソリュシャン行ってみましょう」

「了解です、モモンガさん」

氏名：ソリュシャン・イプシロン

・  
・  
・

Q3：趣味はありますか？

A：人間が溶けていく様を観察するのが好きです。

Q4：何か欲しい物がありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：活きの良い無垢なる者を所望致します。

Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：下等ですが、時折見せる表情や悲鳴は価値があると思います。

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：至高の御方を前にすれば、私の意向は無用の長物です。

・  
・  
・

Q30：外へ出るに当たつての意気込みがあれば、何かお願いします

A：至高の御方のお役に立てるならば、どんな指令にも応えてみせましょう。

俺とモモンガさんは少々頭を抱えた。

「し、嗜好がダントツでヤバイですね。”無垢なるもの”ってまさか……」

「も、もう、そこは考えないでおきましょう、アバさん。確かに危険ですが、隠し通せる強かさは感じますよ」

「能力的には諜報任務にも向いてそうですね」

「ええ、俺は他の仕事に回す事を考えてます」

「うーん、じゃあ別件を優先で回す事想定して”△”にしときますか」「良いと思います」

じゃあソリユシヤンは”△”ね。

プレアデス、ラストはエントマちゃんだあ！ちなみに、末っ子のあの娘は色々といレギュラーすぎるので除外してます。

「いっそ、アンケに”好きな人はいますか？それは誰ですか？”とか書いてとけば……」

「アバさん、それはどうかと……」

「ですよね」

氏名：エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ

Q 3：趣味はありますか？

A：食べ比べとか楽しいです。

Q 4：何か欲しい物がありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：ア、出来れば、老若男女の人間が欲しいです。

Q 15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：食料です。

Q 16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：お腹いっぱいなら大丈夫です。お腹いっぱいなら。

Q 30：外へ出るに当たつての意気込みがあれば、何かお願いします

A：至高の御方の為なら、何だつてやらせて頂きます！お腹が空いても死ぬ気で我慢します！

「たまんねえ……」

「アバさん、判定判定」

「ハッ!?すみません……。お腹いっぱいを2回念押ししてる辺り、大

事な事なんでしょうね……。Q4の”ア、”は何を思っ書いてたんでしょう?」

「至高の41人を除く条件に後から気づいて訂正した線が濃厚です。こういう事って割とよくあるんですよ」

「おお、流石はモモンガさん。リアルで社員だっただけある……」

「いえいえ。”ア”で止まってるから俺かアバさんの何かに関係してるのかもしれませんが」

「今度聞いてみます。……エントマは”?”で良いですか?」

「ええ、そのつもりですよ、アバさん専属ですし」

「それも理由の一つですけど……俺はおそらく、彼女がピンチになった瞬間、無断で飛び出していきますよ。光を超越する自信があります」

「わ、笑えない……。洒落になってませんよ」

「そりゃまあ、洒落じゃないですからね」

「う、うん、エントマは大規模な作戦でも無い限りは外に出さないのだから……」

「助かります」

死ぬ気で空腹を耐えさせるのは良くないという理由もあるが、超個人的な事情からエントマちゃんは”?”になりました。ちよつと罪悪感……。

一先ずプレアデスの評価は全員分終わったな。ユリが○。ルプーも○。ナーベラルは△。シズは?。ソリュシヤンは△。エントマちゃんは?と……。

「じゃあ、面接するのはユリさんとルプーさんにしときましようか」  
「分かりました!いやー、とても参考になりましたよ。……アバさんに薦められずにナーベラル選んでたらどうなってたか」

「本人は精一杯努力するでしょうけど、他の子に比べて支障を来す可能性があります」

「やっぱりそうか……うん、そうなるでしょうね」

これ、もし俺が口出ししてなかったらナーベラルがお供になったんだよなー。彼女もこのナザリツク内でも例外無き仕事熱心な娘だ



と思われるから、仕事を奪ってしまった穴埋めをどこかで出来ると良いんだけど。

「じゃあ、次はレベル100で人型に近い部下をピックアップしますけど……」

「うーん……」

お互いに難色を示し合う。俺等と同じくレベル100である以上その力は強力だ。では何故平均レベル50〜60のプレアデスに仕事を回そうとしたか？

理由は、もしその矛先がモモンガさんに向いたとしたら？という事だ。万が一裏切られたりした場合、モモンガさんがピンチに陥ってしまう。切り抜けられるとは思うが、その損害は無視出来ないものになるだろう。その点、プレアデスならば、どう頑張っても俺等には勝てないので安全という訳だが……。

「……」

「……」

俺とモモンガさんはポーカーフェイスの筈なのに、目に見えて落ち込む。今のこの人が抱える心情は、痛いほど分かるんだよ……。俺もそうだから。

「アバさん、やっぱり、皆が生み出したNPC達に裏切られるなんて考えたくないですね……」

「……俺だってそうですよ」

命を吹き込まれ、活動するNPC達。言うなれば、俺達の親友が残した子供達を疑いながら接してるのだ。正直な話、辛い。こういう事も想定しながら活動しなくてはいけないのはものすごく悲しい。あの素晴らしい忠誠ぶりのおかげで、杞憂に終わる可能性があるのは本当に幸いだ。

「……あ、治まった」

「……俺等どんだけ凹んでたんですか」

またダブルで精神が沈静化した。が、今回ばかりは助かった。選考に支障を来す程だったしね。

「……アバさん、真偽の程は面接次第ということで、とりあえずは裏切

らない事前提で選定しましょう。アバさんがこの機会を設けてくれたおかげで、疑う必要も無くなるかもしれないですよ」

「そっか。うん、ですね！よし、そうしよう！」

安定化してしまったので、気持ちを切り替えて作業を再開しよう。一刻も早く、彼らの気持ちを理解出来るようになりたいものだ。それがナザリツクの為になるし、俺の為にもなる。そして何より、モモンガさんの為になる。

さあ、次は守護者を始めとするレベル100NPC達だ。張り切っ  
て行こう。

## 守護者

さあ、レベル100のNPC達がどんな事を書いたのか、とくと見せて貰おうじゃないか！副腕を活用した素早いピックアップの技術を見よ！ニグレドとかルベドとかパンドラはひっそり除外だ。

ニグレドは能力的にナザリック内に居た方が良いし、そもそも氷結牢獄から出られない設定になってる。ルベドは色々あかん。ニグレド、アルベド、ルベドの三姉妹はどうにも癖が強い。流星はタブラさんだぜ。

そしてパンドラは……能力的に”◎”を付けたいぐらいなんだけど、そんな事したらいいよもってモモンガさんが死んでしまうので除外だ。

「じゃあトップバッターはシャルティアさんにしときましようか」

「OKです。階層的にも丁度良いですしね」

氏名：シャルティア・ブラッドフォールン

・

Q3：趣味はありますか？

A：女性を#お見せできません#ありんす。後は死体とか#お見せできません#も良いんすね。

Q4：何か欲しい物はありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：一番はアインズ様の愛でありんすが、至高の御方に関係しんす物なら、人間や#お見せできません#ありんすえ。

・

Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：下等生物でありんす。

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられた

ら、我慢出来ますか？

A：愛しの君に命ぜられたんならば、辛くとも耐え抜いてみせません。

Q30：外へ出るに当たつての意気込みがあれば、何かお願い出来ます

A：アインズ様！私は貴方様の奴隷！何なりとお命じくだしんす！  
例えば#お見せできません#を#お見せできません#したり#お見せできません#から#お見せできません#で#お見せできません#なのも良いでありんす！#お見せできません#は#お見せできません#いつそアルベドを交えて#お見せできません#他にも#お見せできません#なんて良いであり

「アウトオオオオオオ!!」

「ペロロンチーノオ!!」

俺とモモンガさんは吠えた。

直接女の子の視点からこんなのが出るとか耐性無いんだよ……沈静化したし、仕方ないので気持ちをリセットして評価を下そう。「と、とりあえず一部見なかったことにするとして、どう思います？モモンガさん」

「性的嗜好は最早憑いて廻る宿命だから仕方ない……仕方ないんだ……。えーつと、シャルティアは……。能力的には非常に強力なんですけど、『血の狂乱』が懸念材料ですね」

「あれか。確かに、現実化した今だと、恐ろしい事になりそうで……」  
シャルティアは100万歩譲って性的嗜好を置いといたとしても、結構な問題児なのだ。1200年程前に一世を風靡し、散々外伝やらリメイクやらが出た某世紀末救世主漫画のデブよろしく、血が原因で暴走するという厄介なスキル『血の狂乱』を持っている。シャルティアが暴走してるところを生で見たことないのだが「いてえよく!」とか

叫ぶのだろうか。

”?”で

「はい」

やる気は感じられるが、いくらなんでもこれはあんまりなので”?”つと。別の意味でモモンガさんが危険だ。

次は、流れる的にガルガンチュアとコキュートスなのだが、ガルガンチュアは地底湖の底にいて書くのすら困難だし、そもそも書けるのか疑問だ。コキュートスは人間離れしすぎなので除外。それに、彼も『黙示録』の一員だ。

「じゃあ次はアウラさん！シャルティアみたいな回答にはならなさそうですよ」

「はい、子供らしさを感じましたが、守護者の中では真つ当な部類です」

氏名：アウラ・ベラ・ファイオーラ

・

Q 3：趣味はありますか？

A：ペットのお世話が趣味でもあるし、大事なお仕事です！

Q 4：何か欲しい物がありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：異世界のモンスターをペットに出来たらなあって思います。

・

Q 15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：弱くて情けなくて、不愉快な奴らです。

Q 16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：アインズ様の命令なら、目一杯我慢します！

Q30：外へ出るに当たったの意気込みがあれば、何かお願いします

A：分からない事がたくさんあるけど、至高の御方の為に頑張ります！シャルティアよりは役に立つと思いますよ！

うん、少なくともシャルティアよりはずっと健全な働きが出来そうだ……。

「アバさん、まともな回答でしたよ！良かった……」

「良かった良かった。でも、人間嫌いは最早デフォか……：そーいやアライメントはマイナスだったような」

「ですね、改めて言われると意外な気がします。性格的には良さげですけど、見た目のせいでかなり目立ちそうです」

「耳は偽装で何とかなるけど、モモンガさんと旅するにはちよつと幼すぎるかな？」

見た感じ、アウラとマーレの身長は110cmいかないぐらいだ。

幼女が強くても違和感の無い世界なら良いが、恐らく浮くだろう。黒鎧の男が幼女を連れ回す絵面も少々危険な感じがする。

「アウラは”△”かな」

「限りなく”○”に近いんですけどね……」

ままならないものだ。ダークエルフだし、数百年後なら立派な大人になつてるとは思うが……いや、待てよ？

「モモンガさん、NPCって肉体の成長はあるんですかね？」

「今は生きてる訳ですから、可能性はあると思います。……成長を阻害しそうなアイテムは極力外しましょうか」

「賛成です」

思わぬ所で疑問が湧いたが、それは置いて次は弟のマーレだ。

「マーレさんは能力的に申し分無いですよ」

「内気なのが心配所ですかね」

マーレは多分守護者の中で二番目に強い。茶釜さんの性格設定で内気だけど、いざ戦いとなれば頼もしい子だ。相性的にアウラと組ませると非常に強力なチームになるだろう。

氏名：マーレ・ペロ・ファイオーレ

Q 3：趣味はありますか？

A：アインズ様から賜った指輪を眺めると幸せです。

Q 4：何か欲しい物がありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：ニ寵↑括弧の内容を確認せずに書きちゃいました！ごめんなさい！ごめんなさい！僕は特に無いので、お姉ちゃんの好きな物が良いです。

・  
・  
・

Q 15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：怖いけど、必要ならやっつけます。

Q 16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：怖いけど、アインズ様の言う通りにします。

・  
・  
・

Q 30：外へ出るに当たつての意気込みがあれば、何かお願いします

A：怖いけど、命令通りに任務を達成出来るよう頑張ります。

「心なしか”怖いけど”が取って付けた感あるような……」

「そうですね?・ところで、この”ご寵”って何を書きかけたんでしよう」

「俺にはちつともさつぱり、全くもって分かりませんが、確か”寵”って漢字は慈しむとか可愛がるって意味合いだったかと」

「……俺やアバさんに可愛がって欲しいって事?」

「ははは、ほほえましいなー」

俺は敢えて微笑ましいと言い張ったが、これは少々危険な匂いがする……。いや、今は考えないでおこう。

「マレも”△”ですかね」

「やっぱ見た目がな……」

能力的にも性格的にも悪くないのだが、アウラと同じ理由で”△”

になった。うーん、難しい。女装男子が違和感の無い世界だったら……それはそれでやばいな。

「じゃあ次はいよいよ……」

「デミウルゴスか……」

能力面、人格面、表面上パーフェクトなんだがどうしても不安感が拭えないデミウルゴス。さて、どんな回答か……。

氏名：デミウルゴス

Q3：趣味はありますか？

A：最近日曜大工に凝っております。珠玉の一品を完成させた暁には、是非とも至高の御方に捧げられればと思います。

Q4：何か欲しい物がありますか？（至高の41人に一切関係しない事で）

A：お恥ずかしながら、鳴く類の玩具を所望致します。ですが、今のところは自前で用意が整っておりますので、お手を煩わせるまでもありません。御配慮、痛み入ります。



Q15：貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：下等ですが、可愛い所はあります。個人的に、彼らの事は大事に思っております。

Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：問題ありません。強く我慢する必要はありませんが、至高の御方の御命令ならば、仰せのままに。

Q30：外へ出るに当たつての意気込みがあれば、何かお願いします

A：偉大なる方々への忠誠を証明すべく、最大限以上の働きをお見せしましょう。

「さっきの返しって訳じゃないですけど、アバさんはどう思いますか？」

「うん、すつごいまともですね。表面上」

「嘘を吐いてるとは思わないけど、鵜呑みにしたら不味い気が……」  
「俺もそんな気がします……」

心なしか解答用紙からドス黒いオーラが滲み出てる気がする。悪意も敵意も全く感じないのが逆に怖いというか……。俺らに悪意があるとは思えないが、すつごく嫌な予感がする……！

「モモンガさん、ちよつと気は進みませんが……」 ○ ” にしときます」

「はい。面接は気をつけて臨みましょう」  
「うい」

デミウルゴスは超多忙な上に、頭が良い分ボロを出した時が怖い。本来ならソリクションに似た理由で”△”にしたいところだが、一度面接しといた方が良さそうなのもあり、敢えて”○”にした。虎穴に

入らざるばなんとやら。

まあ優秀なのはよく分かったので、場合によっては一時的に冒険者として同行させる事もあるかもしれない。耳と尻尾ぐらいならなんとかなるし。

では残りは……。

「アルベドさんとセバスさんですよ。モモンガさん」

「元々アルベドは除外のつもりでしたが、一応解答を見ておきましょう」

「分かりました」

守護者統括に専念して貰うのもそうだが、専ら爆弾な彼女の解答は見ておかねばなるまい。シャルティアと同じような危険性を感じる……。表にするのが怖くて、ピックアップ中につい裏向きにしてしまったが、いぎオープン！

氏名：アルベド

Q3：趣味はありますか？

A：趣味と言うよりライフワークですが、アインズ様の事を四六時中思う事が生き甲斐です。アインズ様の愛情を受けるに相応しい女として#お見せできません#して私とアインズ様は永遠の愛を誓い#お見せできません#のように#お見せできません#中で#お見せできません#アインズ様の逞しき#お見せできません#を#お見せできません#かけて#お見せできません#時には#お見せできません#にしては#お見せできません#繰り返し#お見せできません#でも#お見せできません#この#お見せできません#で奉仕して#お見せできません#あの時のように#お見せできません#からお見せできません#するぐらいのつもりで

”?”  
”ウー!”

「はいーい！」

俺は元気な返事をして”?”を記入。その後勢い良く用紙を再び裏返した。

のっけから全開な分シャルティアよりひでえ!?今時天井なんて流行らん!モモンガさんの貞操が危ないので”?”!……エントマちゃんにこんな風に想われたらなんて思っていないからな!”

「まあ、想定範囲内です。俺が悪いとは言え限度があるだろうに……タブラさんめ……」

そう言うモモンガさんの、指を組んだ手がちよつと震えてたがそつとしておこう。一先ず、アルベドの解答は色々長引きそうなので後にする。これ以上読むのは気が進まないけどな。

「よし、トリのセバスいきましよう、モモンガさん」

「セバスは期待出来そうです。アライメント”極善”がネックですが……」

「今はそれが何よりの救いに感じますよ」

「うん……」

氏名：セバス・チャン

Q 3 : 趣味はありますか？

A : 趣味と言うに些か不謹慎ではありますが、人を助ける事に使命感を持っております。

Q 4 : 何か欲しい物がありますか？ (至高の41人に一切関係しない事で)

A : 個人的に所望する物は特にございません。

Q 15 : 貴方にとって人間とはどういう存在ですか？

A：困っているならば手を差し伸べ、守るべき者と思っております。  
Q16：もし、アインズさんに人間と友好に接するよう命じられたら、我慢出来ますか？

A：他者を陥れる者でなければ、我慢の必要はありません。しかし、アインズ様のご命令とあらば逆の命令であろうと従う所存です。至高の御方へ忠義を捧げることこそが、最も優先されるべき事柄でございます。

・  
・  
・

Q30：外へ出るに当たったの意気込みがあれば、何かお願いします

A：最後まで残られたアインズ様、御身に鞭を打ってお帰りになられたアバ・ドン様。慈悲深き御二方に報いられるよう、誠心誠意努めて参ります。

「やばい、セバスさんの解答が眩しくて直視出来ない」

「デミウルゴスとは正反対なオーラを感じますね……」

「文句なしに”○”かと」

「人間に対して甘い気もしますが、そこは面接で話をよく聞きましたよう」

「ほい」

これで、候補のチェックは全員終わった。シャルティアは”?”。アウラとマーレは”△”。デミウルゴスは”○”。アルベドは”?”。セバスは”○”だな。

面接する相手は、プレアデスからはユリとルプー。レベル100勢からはデミウルゴスとセバスで、計4人の面接になる。結構少人数になったが、ナザリックは人型が貴重なんだなあと改めて思ったよ……。4人程度なら纏めてやっても良いかもな。

「じゃあユリさんとルプーさん、デミウルゴスさんとセバスさんを面接するという事で」

「了解です、アバさん。……少し緊張してきました」

「微妙な緊張感は無効化されないんですね。少し休憩してから始めますか？」

「そうします。得られる物は大きかったです、結構疲れました……」

主にモモンガさんに気のある誰かのおかげでな……。

他のアンケート用紙も一段落したら全て目を通すとして、執務室の本棚に収納しておこう。……おっと、面接する部下の用紙はキープだ。よし、少し休憩したら面接だ！ビシツとキメなきや。

## 面接

プレアデスのユリとルプスレギナは、一時間ほど前にアインズとアバ・ドンの呼び出しを受けた。指定された時間通り、執務室へと向かう。

曰く、面接をするから執務室に来て欲しいとの事。

何はともあれ、至高の御方の招集ならば一秒たりとも待たせる訳にはいかない。自分達の業務をキリ良くこなした後、全力疾走はせず、されども最高の速さで目的地を目指す。メイドなら誰もが持つ、ナザリック地下大墳墓の景観を損なわないテクニックだ。ユリが発する雰囲気のせいか、その空気は緊張感が漂っている。

「ユリ姉、面接って何するっすかね?」

そんな中でも我関せずと、思った事をそのまま口にするルプスレギナ。

「アインズ様とアバ・ドン様は到着次第話すと仰っていたわね」

「そこまでは私も知ってるっすけど……」

「これ以上の事は分からないの。ほら、今は至高の御方の下へ向かう事を優先しなさい、ルプス」

「はいっすー」

面接と言う以上、自分達が敬服する方々と向かい合って話をするのは間違いない。それは大きな荣誉であると同時に責任重大だ。ユリは、そんな中でもマイペースな妹に呆れるも、少し緊張が解れた。本人に言えば、調子に乗るのは間違いないのでこれ以上は何も言わないが。

ルプスレギナも、言われた通り執務室へ向かう事に集中する。

程なくして、執務室の入口が見える。出た当初と寸分も変わらぬ速度で扉を目指していると、反対側の通路からよく知る人影が二つ向かってくる事に気がつく。

「……セバス様」

「デミウルゴス様もいるっす」

対面したのは、自分達の上司である家令のセバス。第七階層守護者

デミウルゴスだ。四人は、ほぼ同時に執務室前へ到着した。この二人が自分達と同じく呼び出されていたのは知っていたが、いざこうして揃ってみると、些細な用事で無い事是否慮に分かる。

(あー、完全にアインズ様とアバ・ドン様に向けて集中してるっすねー……)

ルプスレギナは何か聞けないか一瞬だけ考えてすぐにやめた。既に扉一枚を隔てて、偉大なる主の前に立っているのだ。私情は捨て、他の三人と同じく、まだ見えぬ至高の御方の意向に全意識を傾ける。「失礼します。アインズ様、アバ・ドン様。招集を受けた四名全て揃っております」

デミウルゴスが扉をノックする。この中では一番地位が高い。同格のセバスも候補に入るが彼は執事である為、先を譲った。

『入室を許可する』

扉越しにアインズの許可を貰うと、四人は入室した。

(うひゃー、偉大な方々が揃い踏みっす……)

目の前の光景は、ルプスレギナを以てしても極度の緊張に苛まれる。執務用の机の前に設置された、横に細長い簡素な金属製テーブルと2脚の椅子。そこに腰掛けるのは入室者四人が心から忠誠を誓う至高の二柱、アインズとアバ・ドンであった。

屹立する巨大な山脈を思わせる絶対者のオーラと、自分達を見抜く鋭い視線に、ルプスレギナは自然と汗が流れた。

他の三人は汗こそかかなかったが、彼女と同じく緊張していた。”

面接”と言う以上、結果次第で栄えある至高の御方勅命の任務に就けるのは間違いない。それがどういった内容かは明かされていないが、二柱の命であるなら刹那の迷い無く拝命するだろう。

「どうぞ、おかけになってください」

アバ・ドンは、禍々しい相貌からは想像出来ないほど穏やかな口調で着席を促した。アインズ達に向かい合うように、等間隔に設置された4脚の椅子。人数分用意されたそれに、各々が腰掛ける。アインズ

達から見て左から、ルプスレギナ、ユリ、セバス、デミウルゴスの順だ。その動作は一切の無駄が無く、優雅さを感じさせるものだった。

(アインズさん、自己紹介する前の俺より良い姿勢してるよ……)

(本当ですね……入社面接した頃を嫌でも思い出すな……)

(玉座の間の時とはまた違ったハラハラ感です)

(アバさん、お互い腹を括りましょう)

(そうですね。……圧迫面接にならないよう気をつけよう)

個人メツセージを用いて、威厳を崩さぬよう内緒話をする二人。シモベ達を感じた極限まで張り詰めた空気は、単純に二人も緊張していた為に生じたもの。緊張のあまり、アバ・ドンの副腕の一つが机を等間隔に小突く姿は、シモベ達の焦燥感を煽りに煽った。完全に手遅れである。

至高の御方の言葉を静かに待つと、まず最初に言葉を発したのはアインズであった。

「さて、この四名に集まって貰った訳だが、私が外へ旅立つにあたって、同行するに相応しい者を探していたのだ」

四人は微動だにしなかったが、表情に僅かな変化が見られた。場の空気は一見変わらなかつたように思えるが、その胸中は驚嘆で渦巻いていた。

「……ええええー!?……あつ」

だが、ルプスレギナだけ留める事が出来ず、つい声を上げてしまった。視線を向けずとも分かるほど、他の従者三人から剣呑な空気を感じ取った。至高の御方に割って入り、声を荒げるなど言語道断だ。だが、アインズとアバ・ドンは対して気にしていない様子だった。

「ルプスレギナさんが驚くのも無理はありません。何しろ今までの方針からはかけ離れた行動ですし」

「……」

まさにその通りである。デミウルゴスは理由が見出せなかつた。慎重な行動を心がけていたアインズが、突如として打ち出した大胆な作戦。わざわざ危険を冒してまでナザリツクの頂点が旅立つ理由とは?デミウルゴスは敬愛する二人の言葉に集中すると共に、この計画



の狙いが何なのか、思考を重ねた。

「私は外の世界で冒険者に扮し、情報の収集と通貨の確保を行う。これは私とアバ・ドンさんが共に決めた事だ。セバスに諫められた一件とは全く違う。我々が行動する上で必要不可欠な計画である事を理解して欲しい」

「無論、私達も危険性は重々承知しています。だからこそ、こうして同行者を決めようとしているのですよ。先程書いて貰った用紙と本人の能力を考慮し、最終的に貴方達の誰にするかという段階まで来ました。最終選考という訳ですね」

驚愕の次は歓喜。数多のシモベ達の中から自分達が選ばれた事実は、四人にとって至福であった。何しろ、冒険者として活動する以上、常にアインズに付き従う事になるのだ。ルプスレギナは危うく飛び上がって大喜びするところを辛うじて留めた。これ以上失態を演じると、ユリからの手痛い制裁が待っているだろう。たとえ制裁が無かったとしても至高の御方の前で恥を晒す事は、ルプスレギナとしても絶対に望まぬ事だ。

「では、この段階まで選ばれたお前達から、直接話を聞きたいと思う」  
「皆さんの発言を許します。左から順番に行きましょう、まずはルプスレギナさん、外に出るに当たって何に気をつければ良いと思いますか?」

「はい！アインズ様をお守りする事が大事だと思います！怪しい奴が近づいてきたら速攻で始末します！」

「次はユリさんどうぞ」

「外の世界は未だ未知の部分が多く、ご不便を強いられるアインズ様の為、身の回りの御世話をさせて頂く事も重要になります」

「続いてセバスさん」

「アインズ様と交流を重ねようとする者が現れると思います。その者がどういった考えで接近するのかを見極め、時には振じ伏せ、時には円滑な関係が築けるよう行動致します」

「最後はデミウルゴスさん」

「三名の意見も勿論の事、利用価値がある者の確保を念頭に入れます。

効率良く情報収集すべく、何らかの組織を掌握する必要があるでしょう。冒険者として名声を得る為にも、足がかりになる団体が必要かと」

「なるほど、皆さんは既に確たる考えを持っていますね。頼もしい限りです」

「うむ」

満足そうな二人の様子に、自分達の回答に不備が無かった事を理解した四人は胸をなで下ろした。

(デミウルゴスは散々意見が出た後によく思いつくな……)

(頼もしいけど恐ろしい……!)

この手の意見は最終的に出尽くして、似たり寄ったりな意見になりがちだ。喉がカラカラになるほどの緊張の中、はつきりと各々の考えが出るのは従者足るものであった。アインズとアバ・ドンは四人の回答に満点をあげたい気持ちだった。尚、アインズがカラカラなのは元からだが、一方でアバ・ドンはちよつと水が欲しい等と考えていた。「お前達が私と同行する心構えが出来ているのは理解できた。さて、次は少々答えるのが難しい質問になるが……」

アインズの前置きに少々身構えるが、既にどんな言葉にも答えてみせる覚悟は出来ていた。

「主観的で構わない。お前達から見て、選ばれた他の三人についてどう思う?」

ルプスレギナは「あ、これヤバイやつす」と、心の中で呟いた。

## 評価

「単純に、アインズさんに同行する上で良い点悪い点を言えば良いですよ」

今、執務室で面接をしてる訳だが、アインズさんから投げかけられた質問にみんなが悩んでいる。そりゃ、本人の前で自分がどう思っているかなんて答えにくいだろう。……デミウルゴスは冷静そのものだけだ。

ついでに言えばこれが面接官として正しい質問なのかも分からない。俺もアインズさんも正しい面接の仕方なんてほとんど分からないのだ。形だけ取り繕い、威厳を崩さない程度に、聞きたい事を聞く事にした。

「じゃあ、最初は……おや？」

誰かが扉を叩く音が聞こえた。

『エントマです。アバ・ドン様に飲み物をご用意致しました』

エントマちゃんあーん!!

「ありがとうございます。どうぞ!」

ついつい声が大きくなっちゃう。……変じゃないよな？

(アバさん、明らかに音量が倍違いましたよ。ていうか面接中に飲み物持ち込ませるのがって良いのかな……?)

(あっ)

まあやつちまったもんは仕方ない。ここでエントマちゃんを追い返すなんてできねえ!

エントマちゃんは「失礼します」と一言言って、トレイに乗せた多彩な模様の入ったクリスタル製カップを持ってきてくれた。中身は何だろう? 綺麗な琥珀色だ。

「千年樹の樹液を濃縮して作られた特製ジュースです。お飲み物の要望についてお聞きしてなかったのですが……」

「ああ、大丈夫ですよ。飲み物を選んだのはエントマさんですか?」

「はい、アバ・ドン様の容姿や食堂でのメニューからお口に合いそうなものを選びました」

「なら、美味しいのは間違いありません。エントマさんが選んでくれたのですから。ありがとうございます」

「……あう、う、光栄です！で、では失礼します」

エントマちゃんは、コースターを敷き、ストローが刺さった樹液ジュースとやらを置いて退室した。アインズさんはアンデットなので不要、俺の分のみだ。一瞬、もうちよつと欲しいなーとか思っ  
てほんの少し手を伸ばすが、面接中なのを思いだし泣く泣く我慢。

ルプーがこつちをすごい見てるが、怪しまれたかな……？ええい、話題逸らしもかねてさつきと本題に入ろう。

「じゃあ先程と同じ順番で、ルプスレギナさんから三人の印象を」

「あ、はいーえーつと、ユリ姉……ユリ・アルファは冷静沈着に仕事をこなせると思います。戦わせれば、近接戦で大きな力になるでしょう。ただ、ナーベラル・ガンマ程じゃないですけど、少し融通が利かない所があります。セバス様は、ユリや私なんかよりずっと強いですけど人間に対して甘すぎです。デミウルゴス様は頭が良いし何でもこなせると思います」

こういう事言わせるのはちよつと申し訳ないが、非常に参考になる。やっぱり、セバスの方針は部下であるルプーからしても気になる所だったようだ。……そういや、ルプーからすると、他の三人は全員上司に当たるんだよな……かなり酷な事を聞いたかも。

「なるほど、参考になりました。では、次はユリさん」

「ルプスレギナ・ベータは性格的に難がありますが、職務に対してとても真面目です。セバス様は面倒見が良く、人間に対する心証を良くするでしょう。デミウルゴス様は機知に富み、アインズ様の深謀をよく補佐出来ると思います」

ほう、ユリはアライメントが善寄りだからセバスに肯定的なのかな？

「ええ、ルプスレギナさんが真摯に仕事をこなす事はよく理解しています。二人共、皆の能力をしっかりと見ているのですね」

「……お褒め頂きありがとうございます」

「あ、ありがとうございますー」

ユリとルプーが恐縮している。あ、やべえ樹液ジュースめっちゃうまい。超濃厚な甘みが麦茶並のスッキリ感で喉を潤す！エントマちゃんパーフェクト。

で、問題はこつからなんだよ……アライメント極悪と極善がどういう反応を示すかは知っておく必要がある。この質問によって、何らかのトラブルが起きることは承知の上だ。だが、後から大事な所で大きなトラブルを起こすよりは対処が利く。アインズさんと俺も内心ハラハラしている。

それに、そもそもセバスとデミウルゴスが対極的なのは……む、ジューズ無くなった。

「……それでは、続いてセバスさんお願いします」

「全ての者が例外無く、至高の御方々に深く忠誠を誓っており、真剣に任務へ取り組むでしょう。ただし、デミウルゴス様は人間に対して遊びすぎるくらいがあります。能力も忠誠心も目を見張るものがありますが、冒険者として活動するには少々危険かと」

能力の高さはきちんと認めてるようだ。目の前で見た訳ではないが、デミウルゴスの人間に対する扱いはセバ斯的によろしくないようだ。デミさん、何してるんやろ……。

「……では、デミウルゴスさん」

「はい、この場の者全てが一丸となり偉大な御二方に尽くす事。私も疑っておりません。しかし、セバスは愚かな人間に無用な慈悲を振り撒く悪癖がございます。それなりのメリットもありますが、アインズ様の計画に支障を来たす可能性が高いものと思われませう」

案の定人間がらみで対極的な意見に分かれた！妙に共通点があるのは不思議な所だ。

「アインズ様の計画に沿った行動を心がけておりますので、ご心配無く。デミウルゴス様こそ、余りお楽しみが過ぎると余計な不備を生むのでは？」

「敬称は不要だよセバス。私情など二の次、至高の御方の命令を至上とするのは当然の事。そのぐらい分かっているとも。君こそ人間に対して余計な深追いをしご迷惑をかけたらしらないかね？」

「……」

「……」

アルベドやシャルティア程露骨ではないが、セバスとデミウルゴスの視線から火花が飛び散ってるような気がした。ユリとルプーがすごく困っている。諫めれば良いのだがレベル差的に難しいのかもしれない。

もの静かな分逆に怖い……。怖い筈なのだが……。

(モモンガさん、この光景……)

(これは……)

「私の仕事に興味が込み入ってるのは否定しないよ。だが、ナザリツクに有益な結果をもたらすと自負しているし、支障は決して来さない。君のソレは果たしてどうなのかね？」

「人の可能性は、思わぬ所に結びついてくるものです。時として、思いがけない力を発揮する例もあるのですよ。それらを無下にする物言いは、情報収集を重んじる貴方にしては少々短絡的な発想のようにお見受しますが？」

「あ、あの……お二人共、御身の……」

ユリがおずおずと仲立ちをしようとするも、効果は芳しくない。二人共こめかみに青筋が立ってる気がする。

……あははは、本当に仲が悪いんだなあ。

嘲笑っているのではなく、ただただこの光景が懐かしかったのだ。この、光景は気持ちの良いものでない筈なのに、心底愉快的な気持ちで眺め続けた。

(アバさん、俺、たちさんとウルベルトさんを思い出しましたよ)

(ええ、しかもですよ？やまいこさんを挟んで喧嘩したことがありますね。)

(そうですよ、この光景は……あの時のままです……)

デミウルゴスの製作者であるウルベルトさん、セバスの製作者であるたちち・みーさん。ユリの製作者であるやまいこさん。NPCの行動を当てはめると、そこに蘇るのはかつてのアインズ・ウール・ゴウンで繰り広げられた喧嘩そのものだ。やまいこさんの強化の為に、お

互いが主張するどちらのダンジョンに行くかなんて些細な理由だったっけ。

(モモンガさん。俺、断言出来ます。NPCの性格は、製作者に似る！)

(俺もその通りだと確信しました。もっと詳しく言えば、設定されていない性格部分が反映されると言ったところでしょうか。仮説は立てていたけど、これほどとは……)

口論を尚も繰り広げる二人に対し、モモンガさんの機嫌がものすごく良いのが分かった。俺もモモンガさんも、さっきまでの緊張感はとうに霧散していた。

(ふう……)

(ふう……)

暫く眺めていると、精神が沈静化してしまった。この出来事は、予想以上に喜ばしいものだったのだろう。おかげで部下の前でこっそりダブル賢者タイムするハメになった。

どうやら、設定外の性格部分が製作者に似る事は間違いなさそうだ。これは大きい、余りにも大きすぎる収穫だ。ならば、もう一つ確認したい事があるのだが……。

(セバス様がここまで感情を露わにするところ、初めて見たっす！)  
(聞きしに勝る……)

「セバス様VSデミウルゴス様、これはたのしくごお！」

鈍い音と共にルプーが横腹を押さえて悶絶する。俺は見逃さなかつた、ユリが神速で肘を入れたのを。ユリさんは怒らせちゃいけないタイプやな……。

……さて、このままにするのも良くない。

(もう少し眺めてても良いのですが、面接ですし、そろそろ……)  
(そうですね……)

「二人共、それくらいにしましょう。そろそろ面接の続きを」

「……ッ！失礼しました！」

「見苦しいものをお見せしてしまい、申し訳ありません！」

セバスとデミウルゴスは我に返り、俺達に向き直って深々と謝罪し

た。執務室内の空気は悪いと言えるが、俺とモモンガさんはちつともそうは思わない。

「お気になさらず、良いものを見せて頂きました」

「そうだな、礼を言うぞ、二人共」

「さ、左様ですか」

「……それは良かったです」

「……?」

「?」

四人共上機嫌な俺達に困惑している。そりや理由分からんわな。俺は確認を取るべくセバスに尋ねた。

「先程のやり取りを見るに、御二人は余り仲がよろしくないようですね?」

「はい……頭に血を昇らせてしまい誠に……」

「いいんですよ、セバスさん。そこで聞いておきたいのですが、例えばの話、他の配下が人間に対して何らかの危害を加えたとしても同じような気持ちになりますか?」

「いえ、そのような事には決してなりません。ナザリックへもたらす益を考えれば、私の個人的感情など些事でございます。このように不満を漏らしたりするなど以ての外です!」

セバスは力強い口調でそう主張した。嘘を吐いてるようには到底思えない。

「ふむふむ、しかしデミウルゴスさんに対しては……」

「お恥ずかしながら、彼の言に対してはどうしても不快に思ってしまう事があります」

「なるほど」

「……」

デミウルゴスはその事に対して何も突っ込まなかった。目立った理由もなしに食いかかるといふ失態は、セバスを糾弾する格好の口実になる筈なのだ。

「デミウルゴスさん。貴方も同じ気持ちなのでは?」

「……慧眼恐れ入りました。私もセバスの言が過剰に癪に障ります。



理由は……説明する事が出来ぬ愚かな身をお許し下さいませ……」

デミウルゴスは、理由が説明出来ないことを心から悔しそうにしている。そりゃ難しかろう……。――

（こりや確定ですね。モモンガさん）

（ですね！）

間違いない。セバスとデミウルゴスが不仲なのは、製作者の性格に引っ張られている。セバスの言っている事が本当ならば、カルマ値マインナスな行動をしたところで、大した影響は無い。別に積極的に悪事を働く訳ではないが、異形種になった以上はそういう行為も増えてくるだろう。

「二人共、気にすることはありませんよ。これ程たくさん部下がいるなら、仲の悪い同僚の一人や二人いるのもですから」

「我々もそうだった相性の善し悪しを判断材料にするつもりだが、どうしても共に行動させる局面もあるだろう。その時には、私情を捨て、連携を取るようにせよ」

「畏まりました」

「畏まりました」

先程の喧嘩ぶりはどこへやら、二人仲良く頭を下げ、アインズさんに了解の意を示す。

「妙な質問が原因で、二人には辛い思いをさせてしまったようだな、すまなかつた」

「いえーアインズ様が謝罪なされる必要は全くありません！」

「元々の原因は私達が個人的な感情で諍いを起こしただけの事！責任は私達にあります！」

二人共大慌てだ。責任を感じてるのがよく分かる。うん、一先ずこの場合は丸く収まった。今後はセバスとデミウルゴスの関係にも気を配るとしよう。

（セバス様とデミウルゴス様の仲を容易くお諫めになられるなんて……）

（流石は、アインズ様とアバ・ドン様っす！）

ユリとルプーが目を輝かせて、俺等をじーっと見ている。ごめん

な、止めるの遅くなって。

(さて、誰を連れていきましようか?)

(決めましたよ、アバさん)

(おお、誰です?)

ついに同行者が決まる瞬間が来たか。この中の誰かを選んだならば、俺は異論を挟む必要が一切ない。誰にするつもりかな?

(……セバスと、ユリを連れていきます)

そうきたか。

(決め手はあつたんですか?)

(逆転の発想です。冒険者として名声を得るなら、いつそアライメントが善寄りな部下を連れて、英雄的な行動をした方がプラスに働くでしょう? アイーンズ・ウール・ゴウンの名の下で、非人道的行為を働いた場合カモフラージュにもなります。俺が戦士として活動するとなると、パーティバランスが少々良くないですが、ここは緊急性を重視して、本来の力を発揮した時に連携を取りやすいパーティにしようと思います)

(なるほど)

(アバさんのおかげですよ。やっぱり俺、かつての仲間達によく似た彼らが裏切るなんて考えたくないです。身内によるリスクより、外の世界のリスクを優先して考えますよ)

(俺もそれが良いと思います。モモンガさん)

どうやら、俺もモモンガさんも、部下への信用度が上昇したようだ。そうだな、冒険者になったのであれば、人道的行為を働いて名声を得るのも悪くないだろう。ナザリック側が悪さをしたとして、冒険者扮するモモンガさんと結びつく確率はかなり減る。

……未だ危険は大きいが、面白くなりそうだ。

メシ友？

ナザリツク地下大墳墓、従業員食堂。白が基調のシンプルな食事スペースである此処は普段、一般メイドやプレアデスが利用する墳墓内でも比較的ささやかな場だ。その中で際立つ程に異彩を放つ集団がいる。

彼らは四人組で、内二人が違和感の大きな原因となっており、この場からは明らかに浮いていた。

「まさか、君と食卓を共にするとはね。セバス」

「全くです。アバ・ドン様が設けて下さった貴重な機会。お礼を申し上げなければいけません、デミウルゴス」

「そうだと。偉大なる方々のお気遣いに感謝しなくては」

にこやかに談笑をしているのは家令のセバスと、第七階層守護者デミウルゴス。会話の内容、二人の様子は温和そのものだが、この場に居合わせた者達は全員冷汗が止まらなかった。それもその筈、セバスとデミウルゴスの不仲はシモベ達にとって常識なのだ。

四人用の席に、ユリとセバス。デミウルゴスとルプスレギナの組み合わせで向かい合うように座る。セバスとデミウルゴスが向かい合わないように、微妙な配慮がなされているのだ。

「ユリ姉、一般メイド達が怯えてるっす」

「……仕方ないわよ」

それは四人組の残り二人、ユリ・アルファとルプスレギナ・ベータも例外ではない。感情は表に出さなかったが、ナザリツクの生活面最高責任者と軍事面最高責任者がいる事による影響は、プレアデスの二人も免れなかった。

表面上和やかではあるがメイド達からすれば、レベル1000のNPC達が放つプレッシャーは食事を阻害するには十分すぎる程のものだ。実際に、戦闘時のような殺気を放っている訳ではないが、それでも落ち着いて食事が出来る状況とは言い難かった。

「あー、でもやっぱー、御飯おいしいっす」

「そうね……」

とは言え、至高の二柱が放つプレツシャー程ではないので、ユリとルプスレギナは食事に勤しむ程度の余裕はあった。

プレアデスの二人はともかく、一般メイド達にとって今の環境は、導火線に火が付いた爆弾を抱きかかえたまま食事をするに等しい。プレアデス程に肝の太い者は皆無であった。

「よよよ、どうしてこうなったんだか……」

ルプスレギナは、今の状況に陥った経緯は知っているが、それらを粉碎する程の衝撃を現在進行形で受けており、無意識の内から言葉を漏らしていた。

事の発端は面接終了時に遡る。

「アバ・ドンさんとの協議の結果、私に同行する者はユリとセバスの二名に決定した」

「何か意見があれば聞き入れます。どうですか？」

「異存はありません」

「セバス様とユリ・アルファの同行に賛成します」

デミウルゴスとルプスレギナが、優雅に一礼をする。平常時ならば、ルプスレギナもまともな対応が出来るのである。両者共、自分が選ばれなかった事が内心悔しかったが、至高の二人が決定した事に異議を唱える必要性は薄く、言われたままに従う。

「素晴らしき榮譽を与えて頂き、感謝致します！」

「至高の御方の御希望に沿えるよう、努力して参ります」

採用されたセバスとユリは湧き上がる超特大の歓喜を押し殺し、忠誠を誓う絶対者二人に臣下の礼を取る。

「無論、デミウルゴスとルプスレギナの事も高く評価している。だが、今回の場合はユリとセバスが適任だったのだ。今後お前達にも重要な仕事を任せる予定なので、留意しておくように」

「畏まりました」

「分かりました！」

「では、準備はこちらで整えておく。シズとアルベドを連れて宝物殿に行かねばならんのでな。それまでは待機せよ。本来ならばユリも連れていく予定だったのだが……」

「時間的にも丁度良いでしょうし、四人で食事を取るのも良いかもしれません」

「食事……でございますか」

アバ・ドンの提案に、デミウルゴスは面食らう。ユリは、至高の御方に丸投げして食事を取る等無礼極まりないと思い、慌てて具申した。

「し、至高の御方が準備を下さっている間に食事など……！私も宝物殿へ赴きますー！」

「良い。セバスとデミウルゴスの交流の機会としても、悪くない提案だと思ふぞ？ お前もセバスとよく話をしておきなさい」

「私はついこの間メイド達と食事を摂りました。おかげで、皆さんの事を理解する一助となった覚えがあります。ただの経験則ですし、デミウルゴスさんとセバスさんの関係から強制はしません……」

「いえ、素晴らしき提案かと。仰られる通り、四人で食事を共にし交流を深める事にします。セバス、構いませんか？」

「はい。アバ・ドン様、我々への配慮ありがとうございます」

デミウルゴスにはこやかに同意を示し、セバスもそれに追従した。だが、横に控えるユリとルプスレギナの表情が少々固くなった事にアバ・ドンは気づいてしまった。

「そ、それは良い傾向です。会話を交わさずとも、何か兆しが見えるかもしれません。たとえ仲が悪くとも、相手の事はよく知る必要はありますから」

「全くでございます」

「では、私とデミウルゴス、ユリとルプスレギナの四名で食事をして参ります」

「う、うむ、では以上で解散とする」

「いつてらっしゃい……」

アバ・ドンは、失敗したかなあと後から後悔した。

(モモンガさん、俺達もしかして余計な事しちゃった？どっちみち離れ離れになるからって踏み切っちゃいましたけど)

(微妙なところですよ……。ただ、セバスとデミウルゴスは今の関係を改善しようという気持ちが見えました。損は無い筈です。悪い結果になっただけで、今後を考えましょう)

(そうですね……。良い結果に転んでくれると良いなあ)

「ところで、デミウルゴス様は何で食べる場所を食堂にしたっすか？

……お、この肉血が滴ってていい感じ」

微妙な静寂が醸し出す恐ろしい空気を打破すべく、ルプスレギナは勇気を振り絞って話題を振り、更に食事を再開した。食べながら話を聴ける程度には打ち解けたようだ。

「……」

ユリとしてはルプスレギナの態度に物申したい気持ちだったが、今回に限っては良い方向に話の流れを導いているので黙認した。

「アバ・ドン様はメイド達と食事をしたと仰った。交流を重んじた配慮をなされたからこそ、あの御方と同じ結論に至るのは当然。至高の御方の真似をするだけでも、深謀慮を理解する手がかりになるのだよ」

「おかげでみんなが怯えてるっすけどね……」

「どうにも、彼女達は誤解しているようだ。別に取って食いはしないと云うのに」

デミウルゴスが頭を振る。彼は、セバスを除いたナザリックの面々には基本的に温厚だ。本人が言っている事は紛れも無い事実であり、メイド達もその辺の理解はある。

だが、今回に限っては取合せが余りにも悪すぎた。よりにもよって、セバスと一緒になのだから。

「日頃の行いを省みるのも重要ですね」

「忠言、痛み入るよ」

「そう言うセバス様も原因の一人つすよー?」

「今の発言は、私も含めてです。彼との関係は改善したいと思つています」

「偉大なる主が心を痛めているのだよ? 私だつてそうさ」

「うーん、どつちも仲間思いなのに……本当に不思議つす」

二人の謎とも言える仲の悪さは折り紙付きだが、至高の御方への忠誠心も屈指であるが故に、こうして苦心しているのだ。

(この食事会でセバス様とデミウルゴス様の仲が余計悪くなったら、アインズ様とアバ・ドン様に泥を塗る事になるつす)

ルプスレギナは肉類を味わいつつ軽口を叩くように会話している。しかしその実、内心は綱渡りをしているような気持ちだ。アバ・ドンの好意を補助しようという彼女なりの親切なのだが、本人は今の状況を楽しんでる節があるので、同情の余地があるかは疑問だ。

「はあ、セバス様とユリ姉がうらやましいな……アインズ様と一緒に旅出来るとか最ツ高じゃないつすか! 枕を濡らしちゃうほど大洪水つすーシクシク」

「全くだよ、私も嫉妬を隠しきれない。セバス、粗相の無いようにね?」

「無論でございます」

「しかし、私もセバス様と同じく同行者に選ばれたにも拘らず、何故アインズ様ご本人が危険を冒してまで旅立とうとお決めになられたのか分かりません……。こんな有様ではやまいこ様にも申し訳が……」

ユリは、同伴する者として選ばれたが、その真意が汲み取れない事に焦っていた。御側に仕えるにも拘らず、至高の御方の意に沿わぬ働きを見せてしまえば、無能の烙印を押されたとしても文句は言えない。

「そうそう、それつすよ。しかも、何で人間と仲良くしよう? 後から叩き潰しちゃうなら納得つすけど……うひひ、想像したらぞくぞくしちゃう」

「ルプスレギナの想像は私としても心躍るよ。だが、それは禁忌になるだろうね」

「どうしてつすか？」

咀嚼していた食べ物飲み込んだルプスレギナの疑問に対して、デミウルゴスは優しく答えた。

「いいかい、セバスとユリの組み合わせで、何が良いか考えてご覧？アインズ様とアバ・ドン様のご両名は、人間への扱いが温和な者をお選びになっている。恐らく、容姿が人間に近ければペストーニヤも候補に入っていたのではないかな？彼女はレベルこそそれほど高くないが、神官としての能力は申し分無い」

セバス、ユリ、ペストーニヤなど。アライメントが善性に偏ってる者は、ナザリックでは極少数だ。選抜した中から二人が選ばれた理由の二因になってるのは間違いないと、デミウルゴスは当たりを付けていた。

「デミウルゴスの言う通りです。外で仮初の冒険者として名を上げるなら、その方が効率も上がるでしょう。表立って活動するなら、友好的であれば都合が良い」

「はー、セバス様の謎思考も役に立つ事あるんすねー、びつくり」  
「そう、セバスのような考えの持ち主はナザリックでは少数派だ。しかし、それを否定するのは間違いだよ。創造主様がそうあるべきとしているならば、我々は快く受け入れるのが義務なのだから。……であるにも拘らず、私はどうにもセバスに対して否定的になってしまおう」  
「私も、彼が至高の御方の事を一心に考え、シモベ達に配慮した行動を心がけている事を理解しています。しかし、どういう訳か対立してしまおうのです……」

デミウルゴスとセバスが改めて胸中を吐露する。その物珍しい光景を見たユリとルプスレギナは、あの方々による提案が、少なからず効果を発揮しているのだろうかと思った。

「失敬、話が逸れてしまったね。では本題に入ろうか」  
「よろしくつす」

デミウルゴスが仕切り直すと、ルプスレギナは肉を頬張りながら話に集中した。

「ユリの疑問は尤もだ。アインズ様の狙いは非常に大きなものだし、



見抜くのは困難。私も先立って計画を練っているが、かなり大規模な作戦になることは間違いないよ。そこで、私が垣間見た偉大なる方々の真意だが……」

「聞かせて欲しいっす！ひはへへほひいつふ！」

「デミウルゴス様、是非お聞かせ下さい！」

二人はすぐさま食いついた。ルプスレギナに至っては口の中に食べ物を残したままである。

「デミウルゴス、差し支えなければ私もお聞きたいのですが」

「当然セバスにも教えるとも。君はこれからアインズ様のお供として身辺を補佐しなければならぬ。喜んで手を貸そう」

「感謝します」

（す、すごい。デミウルゴス様がセバス様に協力を……！）

（やっぱ至高の御方はねえっす！）

ユリもルプスレギナも、目の前で繰り広げられているやり取りを信じられないという気持ちで見ている。至高の御方の意向を以てすれば、このような事も容易なのかと驚愕する。だがそれよりも今は、デミウルゴスが推理した至高の御方の狙いについて聞かねばならないと、気持ちを整理して次の発言に注目した。

「アインズ様は、『正義の大英雄』になろうとしているのだよ」

ルプスレギナは頬張っていた肉を吹き出した。

## 墓穴

「あ、アインズ様が『正義の大英雄』ってどういう事っすか?!」  
「……」

ルプスレギナが吹き出した肉は、向かい側に座っていたセバスに直撃するものかと思われたが、彼は目にも止まらぬ速度で気功を発動。目前に迫る肉を圧縮し、空の皿に飛ばして戻した。肉汁が周辺に飛び散らぬよう気を遣う念の入れようである。

「ルプスレギナ、行儀が悪いですよ。」

「君は少々落ち着きが無いようだね。こういった場ではとやかく言わないけど、至高の方々の御前では気をつけるように」

「も、申し訳ありません……」

「全く、ルプーは……」

流石のルプスレギナも丁寧に謝罪した。余談だが、皿に乗った圧縮肉は使用人が回収し、第一階層から第三階層にかけて居るアンデッドや蟲達が美味しく頂いた。曰く、「硬い」との事。

ルプスレギナはデミウルゴスの出した結論が理解出来なかった。どうして、私達の偉大な主が人間共の味方なんてしなければならぬのか？

「デミウルゴス、理由を説明して貰えますか？」

「お願いします」

セバスとユリは個人的に好ましい考えだと思ったが、それでも疑問は尽きない。

「勿論だとも。ルプスレギナの気持ちはよく理解できるよ。どうしてアインズ様がそんな事をしなければならぬのか？ とね」

「その通りっす！」

「一先ず『正義の大英雄』は置いておこう。『アインズ・ウール・ゴウン』の威光を知らしめる象徴として最も相応しいのは誰かと問われれば、君達はどうか答えるかね？」

突如として湧いた質問だったが、三人はすぐさま答えを導き出す。

「……アインズ様かアバ・ドン様っす！」

「至高の41人の皆様方が適任かと」

「私達ではあの御方に比べて霞んでしまいます」

「その通り、アインズ様を始めとする至高の御方以外では成し得ない。何事においても頂点に立つと言うならば至高の御身が相応しい。たとえ人間風情の営みであつてもね。そう考えれば、この度の任務は現総括であられるアインズ様が最も適任と言える。アバ・ドン様がおられる事で、ナザリック地下大墳墓は任せられると判断したのだよ」

三人は、この任務を実行するのがアインズでなければならぬ事は理解した。だが、ここまでの話ではアインズが人間の味方をする理由は分からない。三人は話の続きを今か今かと待ち構えていた。

「例えばの話、私がアインズ様の御指示で国を一つ征服、又は滅ぼしたとしよう。その時、人間側は我々を滅ぼそうと躍起になるのは間違いない。ではその時、討伐軍の旗頭になるのは誰かな？」

「人間側の強者。それも英雄と言われる程の」

ユリの回答に、デミウルゴスは満足そうに頷く。

「そう、ではその役目を、押しも押されぬ大英雄となったアインズ様が請け負ったとしたら、どうなるかね？」

「……おおー！」

ルプスレギナはデミウルゴスが言いたかった事を理解した。人間共が希望を抱いて祭り上げるのは、我らがナザリックのトップ。これほど間抜けな事はあるだろうか。人類は、アインズの手玉に取られ、操り人形となった挙句に平伏する事になるのだ。その光景を想像したルプスレギナは、心底愉快的な気持ちになった。

「そういう事ですか。アインズ様とアバ・ドン様はそこまでお考えに……」

セバスは至高の御方々に、より多くの尊敬の念を抱いた。人間側をアインズの手で掌握すれば、無用な血を流さずに済む。力のみで侵略するよりも、お互いのダメージを抑えられるだろう。人類側への配慮をしている訳ではないのは分かっている。それでも、ナザリックの事を考えて計画を練っているのがセバスにははつきりと伝わった。

「皆、ようやく分かってくれたようだね。そう、アインズ様は表から世

界を制圧しようとお考えだ。表からアインズ様が、裏からはアバ・ドンの補佐で。そうすればどうだろう、この世の全てが『アインズ・ウール・ゴウン』に頭を垂れる」

「す、す……いっす！滅茶苦茶ワクワクしてきたー！」

今までの少々気まずい空気は吹き飛んだ。食堂内のシモベ達は、ナザリックの栄光ある未来に憧憬した。

「アインズ様はそんな計画を立ててたんだ！」

「まさに智謀の王……！」

「よし、他の子達にも教えちゃおっと」

「アインズ様は比類なき英傑としての力をお示しになるのね」

いつの間にか話を聞いていた一般メイド達も、至高の御方の計画を絶賛する。お互い知り知らぬ所ではあるが、以前アバ・ドンがこちらに来てなかった頃、アインズが冗談で放ったつもりの世界征服宣言が余計な所で機能してしまった。

「デミウルゴス様、ありがとうございました。……い、今の段階でアインズ様はそれほどまでにお考えを？」

「うん、有り得ない話ではない。ユリも分かってくれたようだね。ということでは、君は今まで以上に羽を伸ばして任務に勤しめる。良かったじゃないか」

「……私にとって、最良の天職になりそうですな」

セバスはやる気が今までの何倍にも膨れ上がった。何しろ彼は堂々と、創造主であるたち・みーのような活動が出来る。しかも、アインズと共にだ。セバスはかつてない程の喜びに包まれると共に、はち切れんばかりの気合を充分に溜め込む。

「ふん、嬉しそうで何よりだよ。セバスは人類に希望を与え、私は人類に絶望を与える。見事な采配です、アインズ様……。しかし、本来の目的は宝石箱であるこの世界の全てを制圧し、至高の御方に捧げる事。それをゆめゆめ忘れぬように」

「分かっております」

「畏まりました」

二人はこれからの計画を理解し、デミウルゴスの言葉を念頭に入れ

て励む事にした。

「さて、一区切りついたので話を変えよう。私も少々気になった事があってね」

「どうぞどうぞ、私なんかで良ければ答えるっすよ！」

「……私でよろしければ」

ルプスレギナとユリは乗り気だ。セバスは静かな様子だが、彼女と同じくデミウルゴスの言葉に応えるつもりであった。先の話は此処にいる全ての者にとって有意義な話だったのだから、それに応えるのは当然だ。

「エントマが飲み物を持ってきた時、彼女の様子が少々おかしかったのだが、姉である君達は何があったか知っているのかね？」

「え!? さ、さあ……?」

「ああ、あれっすか」

「ちよ……」

面接中エントマに居合わせた者は皆、挙動が些か怪しかった事に気付いていた。デミウルゴスもその一人である。だが、ユリは知らないフリをしてお茶を濁す。この話題はアバ・ドンと源次郎の密約に触れかねない。彼女としては一刻も早く終了して欲しい気持ちでいっぱいだった。

「エンちゃんはアバ・ドン様に惚れちゃったんすよ」

「ほうーやはり!」

(ルプスウー!?)

ユリは後でルプスレギナをしばき倒す決意をした。デミウルゴスの笑みが、非常に深いものになる。ユリは背筋が凍る思いだ。”やはり”と言う事は薄々感づいていたのだろう。

「そういう事でしたか……」

セバスは納得したという表情を浮かべる。彼は人間に対し類稀なる観察眼を持つが、プレアデスの胸中もある程度予測出来る。それは真の貌を覆い隠しているエントマも例外では無い。ここ最近彼女は浮き足立っていた。

「成程……成程……!それは結構な事だよ。その事をアバ・ドン様は

「お気づきに？」

「きつと気づいてるっす！しかもあの御方も満更じやなさそうだし、エンちゃんが帰る時、ちよつとだけ手を差し出したっす。アバ・ドン様はシモベ達全てに優しいけど、エンちゃんに対しては特にすごい気がするっす！あ、私も陰ながら協力してるんで」

「……」

床に陥没する程しばき倒そう。ユリはルプスレギナを今の内からロックオンした。

尚、ルプスレギナ自身に一切悪気はない。デミウルゴスの力を借りられるのならば、エントマの為にもなるだろうと判断したのだ。

「ほう、先の行動はそういう意味が。確かに、アバ・ドン様はアインズ様に比べて女性に対して積極的な姿勢をお見せに……。良いでしょう！私も一時悪魔である事を忘れて弓を構えるとも。二人の仲を結ぶ、キューピッドの射手になってみせましょう」

「デミウルゴス様が居れば百人力っすー！」

デミウルゴスの眼光が、セバスに負けぬ程の火を灯す。ルプスレギナは密かに「それ、矢も燃えてね？」と口出したかったが、非常に心強い味方が得られたのは間違いないと思い、そのまましておく事にした。

「お待ち下さい、至高の御方に失礼が無いよう、見守るべきでは？」

「そ、そうです。私達が手を出すべき問題ではありません」

セバスの助け舟に乗るように、ユリは反論した。

「何言ってるっすかセバス様もユリ姉も。アバ・ドン様とエンちゃん  
の恋路がかかっているっすよ！デミウルゴス様ならきつと大丈夫っす  
！」

「安心したまえ。密かに、そう、ほんのささやかな援護をするに留めるから。アルベドやシャルティアのようにやりすぎると良くないのは私とて知っているよ」

「そ、そうですか……」

「いやはや……デミウルゴスの気持ちも分かりませんがね」

「セバス様まで!？」

これは最早私では止められない。ユリはえらい事になってしまったと嘆く。ルプスレギナに恨めしげな視線を送るが、本人はどこ吹く風だ。ナザリツクの未来に思いを馳せて沸き立つ食堂内で、ただ一人ユリは気落ちする思いであった。

## 二巻編

### じじい無双

城塞都市エ・ランテル。リ・エステイーズ王国にある都市で、バハルス帝国、スレイン法国の二国との境界に位置する王国の要だ。

そこにある宿屋の一室。高級とは言い難い部屋の一角に人影が一つ。性別は分からない。金縁に紫の紋様が入った全身鎧を身に纏っているのだ。背中には二本のグレートソードを背負い、真紅のマントが柄以外を覆い隠している。如何にも屈強な戦士と言った出で立ちだ。

彼は耳に手を当てて、何やら会話をしている。魔法、メッセージによる遠距離の会話だ。

『冒険者登録は無事終了……晴れてモモンガさん、いや、冒険者モモンのデビューが決定した訳ですね』

『ええ、宿屋を借りて一段落したところですが、思いの外夢の無い仕事ですよ、冒険者って……』

『まあ現実はそのなもんですよ。どうです、あの人なんて言っちゃった……、ああそう、ガゼフさんより強い人はいそうですか？』

『現時点では皆無と言って良いでしょう。予断は許されませんが、ナザリックの配下を超える強者は、少数だと思えます』

『そりゃ良かった。調査が進めば、俺もいずれはあの大森林に……』

『ポカリ……』アポカリプス『黙示録』の一部にも手伝って貰いつつ、アウラに調査させる予定ですから、安全が確認出来るまでは待つて下さいね』

『了解です……まあ、ナザリックと森林調査は任せて下さい。ちゃんと見てるんで』

『よろしくお願ひします。それじゃ！』

『はい』

定期連絡という名の愚痴こぼしを終え、アインズは一段落した。ロボロの硬いベッドに座り、これまでの行動を振り返る。セバスとユリは外に出している。セバスはアインズが居る一室の番を、ユリは挨



撈回りだ。

(……このままだと、セバスとユリが優秀すぎてやる事がほとんど無い！)

時間は宿屋へ顔出しをしたところまで遡る。

・

・

・

別の任務で送り出したシャルティアと、『黙示録』の一部隊を見届け、アインズ、セバス、ユリの三名もナザリツクを後にした。出発後、早速行った組合での冒険者登録で少々怪しまれたが、ユリとセバスの見事な応対のおかげで、滞り無く完了した。宿屋に向かうまでの道中も、様々な視線が自分達に降りかかる。

「……格好良い、おじ様」

「佇まいが綺麗よねえ。きつと、名のある方よ」

「でも、銅のプレートを付けてたわ」

「没落貴族の末裔とかそんな感じかしら？」

「お、おい、誰だよあの美人」

「分かんねえ、でも眼鏡なんてしてるぐらいだから相当裕福なんだろうよ……」

「リーダー格っぽいあの黒鎧、さしずめ漆黒の戦士か。ありや見事なものだけだな」

「冒険者プレートは銅か……どこぞの貴族の道楽かね？」

「さあな、少なくとも只者じゃなさそうだぞ？」

「あつちの爺さんは間違いなく強いぜ」

「へえ、お前から分かるのかい？」

「少しはな。っーかさ、何かあの爺さん見ると寒気がするんだわ」

「そうそう、俺は昔トロールに出くわしたことがあってさ、あん時の感じに近い」

「そりゃあ、舐めてかからない方が良さそうだな……」

登録中も、男女両方からの注目が痛かった。理由は勿論従者二名によるものだ。ただ、悪い意味の注目ではない。どうやら、こちらの世

界観においても、セバスとユリは相当な美男美女のようだ。すれ違ふ者のことごとくが、セバスかユリに見惚れて立ち止まる。

アインズは、ユリはともかくとして、まさか老人の見た目であるセバスすらそうとは思ひもしなかった。セバスがナイスミドルなイケメンであることを、アインズも認識していたが、ここまでとは想定外である。

確かに、両者共茶色いローブに極普通の冒険者装束だというのに、周囲の人間とは雰囲気が一線を画していた。アインズは、これはどうあがいても目立つだろうと、半ば諦めた。

「こちらが冒険者用のプレートになります。紛失した場合罰金が生じますのでご注意ください」

「分かった」

「これから、お世話になります」

「よろしくお願いします」

「い、いえ……」

セバスとユリがにこやかで丁寧な対応をすると、受付の女性はどことなくぎこちない様子で返事をする。

(見惚れてるように見えなくもない。本当に美男美女なんだな……)

クローズド・ヘルムの中に灯る眼窩の光を狭めながら考える。幸い大きなトラブルは無かった。何より二人は愛想良く礼儀正しい。冒険者登録をした際にも、周囲の人間には良い印象を抱かせた。

三人の組み合わせは、所謂金持ちの遊びだと思われる可能性があった。実際にそれは正解で、周囲の視線は様々だったが、セバスが強者としてのオーラを放つ事により絡まれる事態は回避出来た。実によく出来たもので、周囲が怯えずされど嘗められない絶妙な匙加減を、セバスはやってみせてくれた。

そして、冒険者モモン一行は紹介された宿屋に到着したのだが……。

「なあ、身なりは一丁前だがよう、金持ちの道楽息子にや冒険稼業は厳しいんじゃないの？」

「なんならコツを教えてやるぜ？そっちの姉ちゃんを一晚貸してくれ

「たらな！」

「なあ姉ちゃん、名前何て言うんだい？可愛がるぜえ……」

「マイコと申します。そのお誘いは遠慮させて頂きます」

「まあ、そう言うなつて」

マイコことユリの魅力は、男達を燃え上がらせた。それこそ、目の前の鎧男に絡む目的を忘れそうになる程に。芸術的とすら言える顔立ちと、透き通るような肌の色、艶やかに整えられた髪。ローブ越しにも分かる抜群のプロポーションに男達は夢中になり、眼鏡属性を開花させていった。

「……分かりやすい程にチンピラだな」

「ああ？」

彼らはセバスの強者オーラによるフィルターをくぐり抜けた辺り、力には自信があるのだろう。この世界に来て初めてのトラブルである。こういうのをチュートリアルと言うのだろうか、アインズは呆れながらもぼんやりと考える。

「モモン様。ここは私タッチが」

「任せる。殺すなよ？」

「畏まりました」

タッチことセバスがすかさず前に出る。彼は、調節が甘かったかと反省し、自分の責任で接近を許してしまった相手に対処しようと思っていた。

そんな事は露知らず、アインズは手持ち無沙汰であった。見ているだけなのでやる事が無いのだ。目の前の男は、カルネ村で遭遇したスレイン法国の誰よりも劣る。

一応、前哨戦という事で、セバス達の動向には目を光らせているし、周辺の警戒も怠ってはいない。今は、自分の視界に入る一挙一動全てが重要な情報になる可能性がある。

だが、どうにも妙な安定感があって、油断してしまいそうになる。アインズ自身も元営業マンとして、トーク術をそれなりに齧っているが、二人の処世術はそんなレベルではない。自分よりも二人に任せただ方が、余計な軋轢を生まない事が嫌でも分かった。

ちなみに、セバスとユリの偽名についてだが、アインズは自分と同じノリで二人に偽名を与えた。ユリには創造主のやまいこに由来するマイコ。セバスにも創造主由来でたち・みーからタツチだ。当初は、本名を縮めた偽名でも付ければ良いだろうと考えてたが、ユリとセバスの名前が短すぎた為、急遽代案として浮かんだ。

この名付けは予想以上に受けが良く、提案した直後はものすごい勢いで、それこそアインズが引くレベルで恐縮していたのだが、一度名乗らせてみるとやる気が何十段もアップしたように感じられた。自分のセンスも捨てたもんじやないと誇らしげになり、ギルメン達に感謝した。

そんなタツチとマイコだが、様付けで自分を呼ぶ姿に、ふとナザリックの留守番を任せている友人と交わした会話を思い出す。

『見た感じ、様付けの方が違和感ないですし、ナチュラルな態度でいかせれば良いんじゃないですか？二人の雰囲気じゃ、金持ちの道楽息子って考えは絶対出てくるでしょうし、思い切って開き直っちゃうのも手ですよ』

『なるほど。まあ、遅かれ早かれ目立つでしょうしね』

『そうそう』

『あ、ユリの眼鏡どうしよう。向こうの時代背景考えて取った方が良いんじゃない？』

『な!?モモンガさん！それだけは絶対にやっちゃだめです！』

『な、何故です？』

『眼鏡は本体ですから、取ったらユリさんがユリさんでは無くなってしまふんです！』

『ええ!?そんな設定が……!』

『って、ペロさんが昔言っていました』

『ペロロンチーノ……』

眼鏡はさておき、実際アバ・ドンもナチュラルに敬語を使って周囲に接している。それが一番やりやすいのが大きな理由だ。どうやらセバスの方も素である言葉遣いらしく、いつそ様付けのまままで冒険させるのも良いだろうと考えた。ユリも似たような様子だった為、アバ・ドンの提案通りに行くのも良いかと判断したのだ。

チンピラ男はガントレットを装着すると席を立ち上がり、怒り肩で威圧するように近づいていく。宿屋内の人間達はタツチの事を、過去の栄光にしがみつくロートル程度にしか見ていなかった。顔立ちはハツとする程整っており、醸し出される気品に一部の女冒険者はい見惚れてしまったが、男共には余り関係無かった。むしろ、癪に障るようだ。

「ようよう、老いぼれた爺さんが何の用だよ。俺とやろうってのか？」  
「そうですね。本来ならば、貴方のお話を伺うべきなのですが、現在は急務でして、時間を割くわけにはいかないのです。ご了承下さい」

「は？何を言って……カツ……ハ……」

タツチが何か言ったかと思うと、チンピラが腰を抜かしガクガクと震え出す。数秒ほどで、白目を剥いて気絶した。その様子を見ていた者達は、アインズとユリを除いて呆然としている。

「ご安心を。軽く殺気を飛ばしただけです」

「……投げ飛ばすよりは穏やかで良いか」

どうやら、絡んできたチンピラのみ、タツチの殺気に当てられたらしい。その余波は宿屋内の全員にまで及んでいたが、許容範囲だろう。実に穏やかに対処してくれたとアインズは評価する。

タツチが男の仲間と思わしき者達の座る座席へ向かうと、座っていた男達はやにわに立ち上がり頭を下げる。今のやり取りだけで、格の違いを思い知ったのだ。

「お連れ様は気絶なされたようですね。申し訳ありませんが、お引き取り頂きますか？」

「あ、はい！も、勿論ですよ。連れがご迷惑をおかけしました！」

「いえいえ、お互い無事なようで何よりでございます」

白目を剥いて泡を吹く男が無事とは言い難いが、無傷で事を成したのは確かなので、この話はこれで終わりでもいいだろう。と言うより彼らは「終わって下さい」という気持ちで頭がいつぱいだった。余波だけでも、男達の心をへし折る程度の威力はあったようだ。

「さて、私達は二人部屋でいいな？相部屋は好まん」

「お……おう。好きにしろや。あ、連れ用の寝床も用意すつから少し待ってろ」

「感謝する」

ビビらせて試すつもりが、自分がビビらされてしまった。宿屋の主人は、個室に寝床を追加しつつ己の隠居を検討した。

「それでは皆様、お騒がせして申し訳ありませんでした」

そうタツチは言い残し、三人は宿屋の一室へと去っていった。

「……おっきやあああああ！」

女冒険者の一人は、ナイスミドルなタツチに見とれて、弾みでポーションを床に落として割ってしまい絶叫するのだが、それはまた別の話である。

（もうちよつと苦勞すると思っただけだなあ。俺、ほぼ何もしてないぞ……）

楽なのは良いが、もつとこう、自分の見せ場みたいな物は無いのだろうか、アインズは贅沢な悩みを抱いていた。

## 眼鏡&鎧無双

宿を取り、定時連絡を終えたアインズ達。明朝、冒険者として依頼を受ける為に再び冒険者組合へ赴いた。組合に入ると、自分達に集まる数々の視線が突き刺さる。

(短期間だというのに慣れてきた気がするよ……)

我関せずと、さっさと受付嬢の前へ行く。

尚、対応はもうセバス<sup>タツ</sup>かユリ<sup>マイコ</sup>任せだ。先日、アインズは楽をするか自分も頑張るかで葛藤した結果、どうあがいても二人に任せた方が良い事に気づいた。正確には現実を直視したとも言うのだが、アインズは開き直った。

「タツチ、仕事を持ってこい」

「畏まりました」

アインズの態度は”銅プレートの新参者が偉そうに”等と思われそうだが、タツチことセバス<sup>タツ</sup>が放つオーラのおかげで静かなものだ。セバス<sup>タツ</sup>も強いものだから、偉そうにしてるあいつも強いのだろうという理論が働いているのか、こちらを小馬鹿にしてるような気配は感じられない。

セバス<sup>タツ</sup>が近づくと、受付嬢は仕事を果たす仕事人の表情を見せる。ほんのり頬を染めている辺り、仕事人として合格かどうかは疑問だが。

「おはようございます。依頼はございますか?」

「はい! タツチさん、おはようございます! あちらに貼り出している羊皮紙に依頼が書かれております! お選びになって、こちらまでお持ち下さい!」

「分かりました」

朝からハキハキと元気なものだ。それが仕事によるものなのかセバス<sup>タツ</sup>によるものなのかは分からない。

受付嬢が言った通り、向こうの掲示板にびっしりと貼られた羊皮紙が仕事のタネのようだ。どんな依頼があるか確認する為、アインズとユリ<sup>マイコ</sup>も羊皮紙の前まで行く。適当に目に付いた紙を確認してみるも、何が書いてあるのか見当が付かない。

「知らない言語か……読めないな」

「でしたら、こちらを」

「うむ」

セバスタツチが取り出したのは、以前自分が渡した文字解読アイテムであった。渡したままでどうしようと思っていたが、丁度セバスタツチをお供にしたことで手元に舞い戻ってきた。心の中でラッキーと思いつつ、さも当然のようにアイテムを受け取り、周囲にバレないようにこっそりと使用した。

無事、文字が読めるようになり、一先ず自分達のランクで最も難易度の高い依頼は無いだろうかと三人がかりで探していると、革鎧を着用した冒険者らしき人物がこちらに近づいてきた。

髪は金髪。体は細めだが、ひ弱な訳では無い。首からぶら下げているのは銀のプレート、多少は腕に覚えがあるのだろう。アインズは心中で軽く警戒するが、彼の目的は自分ではなく、ユリマイコの方らしい。

「マイコちゃん！また会えたじゃん、俺ってば超ついでるう！」

「あら、この間の……ルクルットさんですね？」

「覚えててくれたのかい。嬉しいねえ！」

想定していた展開の一つだと、アインズは思った。先日、ユリマイコには軽く挨拶回りをさせていたのだが、釣り針に引っかかったのは彼だったという訳だ。銀プレートの冒険者ならば、成果としてはまずまずだろう。

「いきなり告白するような殿方ですもの。印象に残りますわ」

「いや、俺さー、マイコちゃんみたいな美人さん初めてだもん」

「そう、お上手ですね」

「ほんとなんだってー！もー、マジ一目惚れっすー！」

ユリマイコがルクルットを軽くあしらっていると、彼に続いて冒険者らしき人間が三人やって来た。

「ルクルット！この馬鹿！」

「いでっ!？」

仲間と思わしき男の一人が、ルクルットに制裁の一撃を見舞う。様子から察するに、こういった出来事はよくあるみたいだ。



「モモン様、彼の仲間が来たようすな」

「ああ」

マイコ  
ユリのおかげで冒険者一行と縁を作る事が出来た。

チーム名は『漆黒の剣』。

チームリーダーで、剣士のペテル・モーク。レンジャーのルクルツト・ボルブ。スperlキヤスターで生まれながらの異能持ち、二つ名『術師』持ちのニニヤ。ドルイドのダイン・ウッドワンダーからなる四人組のチームだ。異能の概念については陽光聖典の捕虜から聞き出していたが、実際に目にしたのはニグン以来だ。

お互いに自己紹介を済ませ、今回の縁から周辺のモンスター狩りを手伝える事になった。実に幸先の良いスタートと言える。

(ニニヤの異能は、魔法に対する適性。こちらとしては取るに足らぬ能力だが、彼らの口ぶりからして向こう側からすれば優れた力なのだろう。ここで何かしら恩を売れば、将来的に名声を高めるのに一役買ってくれそうだな)

「申し訳ありません、ルクルツトが……」

「いえ、随分と情熱的で面白かったです」

「おほっ！もしかして脈有り!?!」

「……ルクルツト」

「確かにマイコ殿は美人であるが、迷惑を掛けるのは良くないのである」

「悪かったって。ペテル、ダイン。マイコちゃんもごめんな」

「お気になさらず」

「若い内はそういう事もあるものです。余程、見初められたのでしよう」

「そうなんだよ、タッチさん。ガチで一目惚れなんだぜ?」

(セバスとユリのおかげで、今のところ、彼らとの仲は順調だな)

『漆黒の剣』とコミュニケーションを取りつつ、世界観についてそれと

なく聞き出ししていく。セバス<sup>タツチ</sup>達のアシストもあり、順調にこの世界への理解を深めていくことが出来た。有用な異能持ちであるンファイアレアが、エ・ランテルで祖母と共に薬屋を営んでいる事等、彼らと話をしながら南方の森に向かっていると、一行をルクルットが手で制した。

「お出ましましたいませ」

アインズ達も、既にモンスターの気配は察知していた為、準備は万端だ。

「そうだな、タッチは昨日働いたから、私とマイコが行こうか」

「畏まりました」

「モモン様、ご武運をお祈りします」

「ああ」

「……!？」

アインズ達の様子に『漆黒の剣』は驚きを隠せないでいた。三人でもチームとしては少数だと言うのに、二人で充分に事足りるとも言わんばかりの自信だ。しかし、彼らの行動には、言葉では表しきれない説得力のようなものを帯びている。

向こう側から飛び出してきたのは体長三メートル程の大きな人型モンスターと小型の人型モンスターが複数。

（ゴブリンとオーガ……容易いな）

ゴブリンが主に生息するとは聞いていた。一口にゴブリンと言っても、ユグドラシル時代のゴブリンの強さはまちまちで、レベル1からレベル50前後までに及ぶ。現れたのは、その中でも最弱の個体であった。オーガもアインズ達からすれば赤子程度の強さだ。

「では、行きます」

マイコが先手を切り、ゴブリンの一角に凄まじい勢いで突進する。

「せいっー」

彼女が右拳を突き出した瞬間、ゴブリンが爆散した。虚を突かれた形となったゴブリン達が、次々と正拳突き of 餌食になっていく。その凄まじい攻撃力に、敵も含めて静まり返る。細身の美女が繰り出した一撃としては、余りにも強烈過ぎた。

(よし、予め確認してた通り、一見普通のパンチにしか思えない。威力の高さについては、印象付ける要素として丁度良いと思えば問題無いだろう)

アインズはユリマイコに問題が無い事を確認すると、背負っていた二本のグレートソードを抜き放ち、突進してくるオーガ達を三体両断した。片手で持つ物としてはありえない程の重量を、悠々と振り回すその姿も『漆黒の剣』に大きな衝撃をもたらす。

「モモンさん……マイコさん……貴方達はなんという……！」

「これ程とは、驚きである！」

「ヒュー！マイコちゃん超強いんだな、惚れ直すぜ！」

(こいつもすごいな……)

アインズは軽く感心した。ルクルットは、あの攻撃力を見せつけられてそのたまう辺り、中々肝が据わっている。アインズは草食系な為、ああいった人物の精神には舌を巻くのだ。

無事、『漆黒の剣』には自分達が強者であるというアピールが出来た。これで、彼らを通じて、自分達の冒険者としての力が広まれば良い。

昼を少し過ぎた頃、近辺のモンスターがあらかた片付いた。開けた場所で食事を取り、帰還する事になった。本当なら、もう少しモンスターを狩るべきなのだが、アインズ達がほとんどのモンスターを駆逐した為、戦う相手がいなくなったのだ。現在、一行は昼食を取りながら、雑談を交わしていた。

「モモンさんとマイコさん、あれほどとは思ってもみませんでした」

「モモンさんは王国最強の剣士にさえ匹敵しますよ！」

「マイコちゃんのパンチもすごかったな！」

『漆黒の剣』が先ほどの戦いを手放しに称賛する。だが、アインズは少し困っていた。自分にも振舞われた食事だが、不要な上にそもそも食べる事すら出来ない。

(それとなく、セバスにごまかして貰おう)

今後もお世話になるであろう、部下への丸投げである。アインズは、人間時代の上司みたくなならないよう、ほどほどにしなくてはならないとは思っているが、余りにも楽なので癖になりそうだと軽く恐怖する。

「皆さんこそ、素晴らしいチームプレイを見せて下さいました」

「お互いをよく理解なされているのですね」

実際、『漆黒の剣』が見せてくれたチームワークは中々の物だ。お互いの力量を理解し、モンスター達に対して安定した連携を取っていた。

「やはりタッチさんも、モモンさんとマイコさんに匹敵する程の力をお持ちなんですか？」

「はい、あの人は私より遥かに強力な拳撃を放てます」

ペテルの質問に、マイコが答える。

「うへー……マジかよ」

「察するに、二人は師弟関係であるか」

「そんなところですよ」

セバスとユリを、師匠と弟子だと予想したようだ。その設定は確かに違和感が無い。今後はそういう事にしておこうと、アインズは決めた。

「ニニヤさんも二つ名に違わぬ良き魔法をお使いになられる。連携を重んじ、仲間を思いやる気持ちがよく分かりました」

「そ、そんな、照れます」

ニニヤが頬を赤らめてむず痒い表情を見せる。この短期間で、彼は随分とセバスに懐いたようだ。今回、セバスは特に何もしていないのだが、不思議と人を安心させる包容力があるためか、ニニヤは積極的にセバスと交流を深めようとしている。男同士だと考えると、少々危険な気配を感じると、アインズは危惧していた。

(いや、アルベド達のアンケート結果がトラウマになってるだけであって、そういうアブノーマルな考え方は良くないな……)

アインズは、今はシモベ達のアンケートについて忘れる事にした。

『漆黒の剣』と再会を約束しつつ別れを告げ、宿に戻った三人は彼らの印象について話し合う。時刻は目測で夕暮れ前だ。

「さて、タッチ、マイコ。お前達の主観で良い。『漆黒の剣』の印象について聞かせてくれ」

「一言で言わせて頂きますと” 発展途上” といったところですか。このまま彼らが道を踏み外さねば、大成する可能性が高いかと。互いが支え合う、良きチームとお見受けしました」

「人柄は良いと思います。ルクルットは少々しつこいところがありますが、仲間思いな一面もあるようで、悪党ではないと思われま

「……お前達としても好印象だった訳だな」

「はい」

「仰る通りでございます」

幸い、良いチームと組めたようだ。将来性があり、人格もある程度信用出来る。彼らとは、この調子で引き続き仲良くしておこう。

「分かった。今後も彼らと一緒にいる事があれば手助けしつつ有用な情報を聞き出せ。方法はお前達に任せる」

「畏まりました」

「はッ」

後は名声を高めるのに有効な、手強いモンスターが居れば良いとアインズは考える。

(カルネ村の村長が言っていた森の賢王とやらも興味があるな……)

「それとモモン様、ニニヤさんについてお伝えしたい事が……」

「何だ？」

「彼……いえ、彼女は殿方に扮した女性のようです」

「は？……んん！成程、今この場で言ったのも、ニニヤが男装しているのも、余計な問題を避ける為か」

「左様でございます」

セバスは、ニニヤの細かい動作や筋肉の付き具合から、彼女が女性で

あることを看破したのだ。別にアブノーマルな関係という訳では無かった。ちよつと驚いたが、アインズは懸念事項が一つ片付いた事にほっとした。

「ああ、それとマイコにはもう一仕事任せたい」

「はッ！何なりと！」

「今回の報酬がどの程度の価値になるか確認が必要だ。手始めに、彼らが言っていた薬師の店でも良い。この世界の物価を確かめてこい」  
「畏まりました」

## 悲劇

「では私は、この街で相場について調べて参ります」

「頼んだぞ。それと出来れば、バレアレ一家との接触も試みるように。冒険者としてやっていくなら、街一番の薬師と言われている者達とも渡りを付けておきたいからな」

「はッ」

「お待ち下さいモモン様。一つ具申したい意見がございます」

ユリを外へ向かわせようとすると、セバスが待ったをかけた。アイ  
ンズは、聞いておいて損は無いだろうと思い、一旦ユリを止めてセバ  
スの提案を聞いてみる事にした。

「許す。言ってみるが良い、タツチ」

「はッ。相場を調べると共に、薬師の方にアインズ様が所有なされて  
いる治癒薬を鑑定させては如何でしょうか？現地のポーシヨンの  
差異から、判明する情報があるのではないかと愚考致します」

「ふむ、そうだな。確かに我々の所持するアイテムが異世界側と同等  
とは限らない。お前の言う事は一理ある。……分かった、鑑定させる  
だけならば構わん。但し、鑑定させるアイテムは最も安価な下級治癒  
薬にせよ。それと、売るのも止め。あちら側の手元に渡れば、問題に  
なる可能性がある」

「畏まりました」

「では、セバス様の提案とアインズ様の御指定通りに、下級治癒薬を鑑  
定してもらおう手筈も整えておきます」

「分かった、それとマイコ。お前もタツチのように考えが浮かんたの  
ならば、遠慮無く言うが良い。お前達がナザリックの事をよく考えて  
いるのは、私も分かっているからな」

「はッ、慈悲深き配慮感謝致します……。それでは、失礼します！」

こうして、ユリは街へと向かった。セバスからの提案で、現地に  
下級治癒薬を鑑定させる事となった。自分達が所持するアイテムか  
ら、出所が割れる危険があるが、鑑定させる程度に留めておけば後か

らごまかしが利く。場合によっては、リスクを排して売却する機会が設けられれば、あらゆるアイテムを査定してくれるエクステンジボックスに放り込むより得になる可能性も僅かにある。目立つ云々の問題は、とつくの昔に手遅れだ。

とは言うものの、最初はリスクを考慮して反対するべきかと思っただ。だが、アインズは意見を聞き入れる事にした。NPCが命を吹き込まれ臨機応変な対応を見せてくれている事が嬉しかったのだ。密かに称賛したい気持ちで胸がいっぱいだった。仲間達が残っていたNPCは、こんなにも優秀なのだと。

「モモン様、計画をお引き止めしてしまい、申し訳ありませんでした」「気にするな。マイコにも言ったが、お前なりに良いと思っただ事ならば何度でも意見するが良い。聞き入れる余裕ぐらいはあるぞ?」

「はッ、感謝致します!」

相変わらず大げさだとアインズは思う。もう少し気安くても良いと思うのだが、これもNPC達の個性として受け入れるとする。何にせよ、ナザリツクにとつての最良を考慮した上で、素直に指示に従ってくれるのは本当にありがたい事だ。

マイコ  
ユリは薬屋を探した。『漆黒の剣』に教えられた、何でもアイテムが使用出来るという異能持ちの薬師、ソフィーレア・バレアレと、その祖母のレイジー・バレアレ。二人に接触を図る事も重要な指令だが、そもそもその任務は相場の調査だ。薬屋を探しつつ、道すがら店の食品や日用雑貨品等の相場を調べて、街の地理も把握するよう歩き回っていると、思った以上に時間がかかってしまった。

(いけない……これでは薬屋が閉まる可能性が……)

それなりに調査を終わらせると本命の薬屋へと現地に案内を頼んだ。ユリの姿を見て、快く案内を引き受けてくれたおかげで、すんなりと到着する事が出来た。

(始めからこうすれば良かったかしら……)



ユリは先にやっておけばと後悔した。想定よりも薬屋への到着が遅れ、日は沈み辺りは薄暗い。至高の御方からの指令を疎かにする結果になってしまったと言って良い。ユリは自分の要領の拙さを反省し、足早に薬屋に入店した。ドアのカウベルが大きな音を立て、薬屋に客が来た事を告げた。

「なんだい、今日は終いにしようと思つてたのにまた客かい……。あれま、随分と美人だね」

ユリに応対したのは老婆であつた。活気があり、はつらつとしているのが見て取れる。老いてなお盛んという言葉が何より似合う人物だ。店の様子、漂う独特な薬品臭から、探していた人物の一人だと推測した。

「夜分遅くにすみません。リイジー・バレアレさんで間違いないでしょうか？」

「如何にも、私がそうじゃが」

「私は冒険者を務めるマイコと申します。貴方の腕を見込み、お頼みしたい事があつて来ました」

「ほう」

一言で言えば“怪しい”。リイジーはそう思つていた。長年生きてきた中でもお目にかからなかつた程の美女。ナリは冒険者のそれだが、明らかに不釣り合い。治安も悪くなる夜遅くに足を運んでまで見て欲しい物とは何か？コネが無ければ適当にあしらう事もあるのだが、ただ事では無さそうな案件に好奇心の色が宿る。

「その椅子に座つてブツを見せてみな」

話の早い人で助かつたとユリは安堵する。リイジーが指差したのは、入つてすぐの場所に設けられた応接間だ。お互い向かい合うように席に座ると、ユリは懐から一つのポーションを取り出した。

「こいつは……まさか、伝説の……神の血……」

件の品を受け取りしげしげと眺めると、リイジーの顔色が変わる。それとほぼ同時に、ユリは魔法を使用した気配を察知した。〈道具鑑定〉に〈付与魔法探知〉。どちらもアイテム鑑定に使う基本的な魔法だ

「……くく、ふあふあはあははははー！」

鑑定を終わらせた途端、急に笑い出すリイジーにユリは困惑した。アインズ様は、アイテムに混乱系の攻性防壁を仕組んでいたのだろうかなどと妙な発想にまで及ぶ。

「いや、すまんね。怪しい娘が来たもんだからどんな素っ頓狂な代物が出てくるかと思ってたけど、これ程とは思わなかった！一応身構えてはいたが、予想の遥か上をいっておった！」

「そ、そうですか」

「全くの不純物も介さない完成された一個のポーション！これは私ら薬師、錬金術師が、何十年何百年かけても辿り着けない境地にある究極のポーションなんじゃあー！」

「……」

レベル差的には、自分より遥かに劣るこの老婆だが、ポーションに対する執念からか、ユリは気圧されていた。

「んで、この神の血とも言える完成された品をどうしたいのかね？もし売ってくれるならば、たっぷり色をつけて金貨32枚は出す！」

「金貨32枚……ですか」

つい、オウム返しに提示された金額を口にする。先程調査した相場や貨幣価値、初仕事の収入等を考えて、相当な大金である事が分かる。この下級治癒薬ですら、エ・ランテルにとっては相当なレアアイテムとなるらしい。

「申し訳ありません、それはお返ししなければならぬ物なので……」  
ユリがそう言うと、リイジーは目に見えて残念そうな表情を浮かべた。先程に比べて十年は年を取ってしまったようにも見える程の落ち込みぶりである。

「……仕方あるまい、お前さん、これを一体どこで？」

「さる、偉大な御方からの大切な預かり物とだけ言っておきます」

「それが誰かは……聞かないでよくよ。安心おし、私が興味あるのはそのポーションのみ。何なら今回の話は儂とンフィーの中で留めておいてやろう。それと、今後もうちの店を利用してくれるなら、色々融通する。どうだい？」

リイジーは、なるべくこのポーションの持ち主にとって都合の良いであろう振る舞いをする事にした。彼女とこれからも付き合いを続けなければ、いつかは考えが変わって、ポーションを売る機会が訪れるのではないかと思っただ。エ・ランテルと言われるポーションババアの飽くなき執念が導き出した結論であった。

「感謝します、良き関係を築けるようにしましょう」

「おう、よろしく頼むわい」

ユリは素直にお礼を言う。その方がこちらとしても都合が良かった。バレアレ家と仲良くしておく事は、エ・ランテルで冒険者を続けるにはプラスとなるのは間違いない。

リイジーの狙いがポーションにあるのは心が読めなくとも分かる。一つの物に執着する人間とはこれ程の熱を持つものか。好奇心や探究心が人間を大きく動かす原動力になっているのだと、ユリは強く実感した。こういった人間はある意味信用出来る。

「それと、これは忠告だがね、持ち歩くのなら闇夜には気をつけな。そのポーションは、殺してでも奪い取ろうとする輩が現れる程の品じやよ」

「分かりました」

ユリは心の中で冷や汗をかく。もし、当面の資金に目が眩んでポーションを大々的に売りさばいていたなら、どんな問題が舞い込んでくるか分かったものではなかった。

まさに、アインズが危惧していた通りの結果であった。しかも、下級治癒薬一つで老婆が凄まじい勢いで変貌したのだ。これ程までの想定外を想定していた事に、絶対者への尊敬を禁じ得なかった。

「ところで、お孫さんがおられると思うのですが、今はどちらに行かれてるのでしよう？」

「ンファイーかい。ああ、もう一人冷やかしに来た客がいてね。奥の方で相手してるよ。いや、その客がね、ポーションが割れたとかで涙目になってるんだよ。困ったもんさ」

「私もお会いしてよろしいですか？」

「好きにしな。それとついでだ、そのポーションとうちのポーション

と見比べてみな。お前さん、どうにもそいつの価値を分かってないみたいだからねえ。私が教えてやろう」

「はあ、ではお願いします」

年寄りのお節介とも言えるが、この世界の情報は少しでも集めておきたかったので、素直に申し出を受ける事にした。

用事の一つは無事(?) 済んだ。後は、冷やかしの相手をしているというンフィーレアと渡りを付けつつ、現地のポジションを確認すれば、残りは結果を報告するのみである。等と考えつつ、ンフィーと客がいるであろう奥のドアを開ける。

「あらあ、見つかったやつた」

「……ひっーご、強盗!」

奥に続くドアを開けた先では露出度の高い服を着た金色のミディアムヘアの女性がいた。金髪の女性は、ステイレットを片手に赤髪の女冒険者を追い詰めている。丁度その現場に居合わせたと言わんばかりに、彼女が握り締めるステイレットは血が付着していた。

「た、助けて……」

追い詰められていた女冒険者は尻餅を付いて壁際で歯をガチガチ鳴らして怯えていた。彼女の足から相当の出血が見られ、店の床を赤く染め上げていた。出血箇所から足の臍を切ったものとユリは推察する。

ユリとレイジーがやり取りをしている間にこの凶行が行われた。だが、物音一つ無かったのは、何らかの阻害魔法によるものだろう。

「チツ、遊びすぎたな……。クレマンティーン」

奥側から、ローブを纏った痩せこけた土気色の肌の男が現れた。まるで死人のようにも見える。その男は、仲間らしき女性に不満の目を向けている。

「ごめーん、カジツちゃん。見られたんじゃ、仕方ないよねー。こいつらも殺すしかないよ?」

男の責めるような視線に、クレマンティーンと呼ばれた女が、ちつとも反省していない様子で詫びを入れる。それどころか、獲物を見つけて喜色満面といったところだ。

「ああ、ンファイヤー！なんてことだよ！」

リイジーが目に見えて狼狽している。彼女の視線は男の後ろを向き、その先では瘦躯の男の部下らしき者が少年を担いでいた。その様子から、ユリは担がれている少年がンファイレア・バレアレであると断定した。どこからどう見ても誘拐現場に遭遇したとしか言えない状況だ。

「貴様は元よりそのつもりだろうが……」

「あつ、分かるー？」

「……」

この二人は我々にとっても重要人物であるバレアレの者に対し、害する行為を働いているのは明らかだった。個人的な気持ちからも、二人の成す仕打ちは看過出来ない。

「どうやら、仕置きが必要みたいね……」

「あん？」

ユリは、目の前のカジツチャンとクレマンティーンなる人物を敵と認識した。

## テイクアウト

(クレマンティーヌと呼ばれた女性はステイレットを使っている上に軽装。近接職の可能性が高いわね。後ろのカジツチャンとあの子を担いでいる男は装束と漂う死の気配からネクロマンサー、死霊使いの線が濃厚。捕らわれている彼を保護するには……)

暫定名カジツチャンがアンデッドにまつわる能力を有してる事を看破した。マイコは種族がゾンビ派生のデュラハン。つまりアンデッドである為、アインズと同じく気配を感じ取る事が可能だった。(近距離担当と遠距離担当ってところかしら。こちらを引っ掛けるブラフにも見えない。それなら……)

マイコは目の前の敵を無力化するべく動き出した。万が一戦闘にハマってポロリ(首)してしまうとアインズ達に多大な迷惑をかけるのは間違いない。早めに決着を付けたいと考える。

「名前も教えちゃったしねー、殺さなきゃ!」

クレマンティーヌが女冒険者を切りつけたステイレットでマイコの右眼を穿つ。正面突破だろうが当てる自信はあった。何しろ目の前にいる夜会巻きの冒険者は無手。隠し武器を持っていたとしても、取り出すには手遅れだ。

ガキンと、金属同士を激突させたような澄んだ音が火花を散らし響き渡る。

「オリハルコン。しかもコーティングしただけの……武器の質には有り得ない程の頑丈さですね」

「お前……」

マイコはクレマンティーヌの刺突を左手で掴み取っていた。ステイレットをへし折るつもりで迎撃したのだが、ヒビ一つ入っていない。色々と興味深い相手であると彼女は思った。

一方のクレマンティーヌも、自分の攻撃を受け止めた相手に少なからず驚愕し、自身の中で警戒レベルを引き上げた。だが、余裕の笑みは崩れていない。

「受け止めるのはすごいけどさー」

そう言うと、クレマンティーヌはステイレットに仕込まれていた  
マジックアキュムレート  
魔法蓄積を発動した。

「こういう事も想定しなきゃねえ!」

目が眩む程の眩い電流が迸り、マイコユリの体に流れ込む。その眩しさと惨劇に、女冒険者は目を覆った。

「ああ!」

武器内に蓄積されたライトニングによって、対象を行動不能にしようと目論んだ。電撃により苦しむ姿を想像し、その後動けなくなったこの女を痛めつける楽しみに笑みが深まる。

「いきなり突っ込んで来てくださいましたので助かりました。油断せずに、カジツチャンとやらも迎撃態勢を取っておけば良かったですのに」

「な、え?」

だが、蓄積されていた魔力の奔流が途絶えた時、想像とは全く異なった結果が現れる。彼女は先程と何ら変わる事のない平静のまま、電流の高熱による焦げ痕すら無い。

「マジックアイテムを装備していたか!」

カジツトは目の前の思わぬ強敵に驚嘆する。こいつは相当な装備で身を固めている。銅プレートはそれを隠すカモフラージュの一環だったかと。

「ハッ!」

「ふぐう!」

「魔法的効果を仕込まれていたようですが、第三位階では足りません」  
虚を突かれた形になったクレマンティーヌの腹部に突如、衝撃が走る。掴まれたステイレットを捨て、距離を取る刹那、マイコユリの右手が深々とめり込んでいた。攻撃箇所からこみ上げてくる熱を吐き出すと、嘔吐物と血が入り混じった液体がドチャドチャ音を立てる。

それすらも避ける眼鏡女の、子供に勉学の手ほどきをする先生のよ  
うな物言いが鼻につく。そんな思いを抱きながら、クレマンティーヌ  
の意識は闇に沈んだ。

「ぬうー!こうなれば……」

「ぐはあ!？」

「なっ!？」

「またも、先程と同じような光景が目の前に繰り広げられる。高速接近による奇襲だ。」

少年を担いでいたローブの男は突然、宙に浮いた感覚を味わう。背後を取られ、背中を突き飛ばされたのだ。マイコは投げ出されたンファイアが怪我しないよう、軽く受け止めて床に転がした。

「出ですよ！」

自分の弟子が吹き飛ばされた事を認識しながら、瘦躯の男は止むを得ず、切り札であるスケリトルドラゴンを召喚しようと試みる。あれ程の高速移動が出来る相手から逃げるのは困難。建物が崩れる事も承知の上で、手に持っていた黒く歪な石を掲げる。

「スケリトルド……」

「させません」

「あがあ!？」

結果は先程と同様の光景が物語っていた。

瘦躯の男の腹にめり込むマイコの拳が、肘の先まで隠れる程深々と突き刺さっていた。クレマンティーンの遊びの一撃を受け止める程度の技量はあるにも拘らず、相手の不意打ちに何の対応も出来ず打ちのめされた。

「貴様、何も……の……」

正体こそ分からなかったが、相手の強さが自分達を遥かに凌駕している事を悟りながら、瘦躯の男が静かに倒れ伏した。

「色々面白い技をお持ちのようでしたが。クレマンティーンにカジツチャン、もう少し鍛え直した方が良いかと思われます」

マイコは眼鏡のフレーム部分に軽く触れながら、相手の力量を指摘した。几帳面な彼女は、軽く身体を動かした事により、装着中の眼鏡がズレていないか確認したのだ。

「た、助かったの……?？」

「おお……」

壁際に避難していた女冒険者とリイジーは、目の前の女性が尋常



じやない力量の持ち主である事に軽く恐怖するが、自分達を助ける気で行動していたのはよく分かった為、安堵の気持ちがある。自分と大切な者の命を脅かす脅威が取り払われたのであった。

翌日、エ・ランテルで一つの話題が持ちきりとなった。秘密結社ズーラーノーンの高弟を無傷で倒し、人質の救出に成功した銅プレート冒険者、マイコ。リイジーとンファイレーアから冒険者組合を通じ、噂話は瞬く間に広がった。

冒険者モモンの従者と思わしき彼女の力量も、タッチに劣らぬものと認識される事となる。タッチとマイコを通じて、モモンの名声もそれなりに上がったのであった。

アインズは、この大手柄に喜んだ。バレアレの者に恩を売ることが出来た上に、ンファイレーアを狙った刺客は異世界基準ではかなりの強者だったらしく、冒険者組合では特例でランク上げを検討していると聞く。棚からぼた餅とはこの事だと小躍りした。

「では、ンファイレーアさん救出の報酬。確かに受け取りました」

「ンファイレーアを助けてくれて本当にありがとう。お前さんがいなければどうなっていたことか……」

「ありがとうございます！」

現在、冒険者組合で事情説明が終了した当事者達とモモン一行は、薬屋に集まって報酬のやり取りをしていた。組合を通じた仕事では無かったが、リイジーとンファイレーアはアインズ達に礼を渡す気満々である。

「あんたも人が良いって言うか……。変わった娘さんだよ」

「治療の為に必要でしょう？ブリタさん、もう割らないように気を

つけるんですよ」

「……貴方つて本当に良い人なのね。私、マイコさんの親切は絶対忘れないから!」

ブリタと名乗った鉄プレート鉄プレートの女冒険者は、目元に涙を浮かべながら礼を述べている。マイコマイコは、ンファイレア救出の際に貰った報酬の一部として、彼女にポーシオンを二つ程無償提供させる事にしたのだ。一つは足の治療用に、もう一つは割ってしまったポーシオンの替わりだ。

「あんな物、おまけみたいなもんさね。ポーシオン二つ程度で報酬を割安にする気はないよ。神の血を見せてくれた礼でもあるんじゃないよ」  
「ありがとうございます」

孫の命に比べりや格安だよと、リイジーはカラカラ笑う。

「ブリタさんは、療養の為に暫く稼業をお休みする事をお勧めします」

「そうする。今はどうせ歩けないし……。あんなトラウマ抱えてちや眠れるかも怪しいわ……」

切られた足の腱はポーシオンのおかげで治る目処が付いた。だが、時間がかかるだろう。異世界の治癒薬は、効果が少しずつ現れる仕様らしく、アインズ達が所持する物とは異なるのだ。

「貴方のお仲間も相当強いんでしょう?どうせランクも抜かれると思うけど、困った事があつたら言ってよ、絶対力になるからさ!」

「その時が来れば、お願いしますね」

ブリタはこの恩は絶対に返すと固く誓う。いつになるかは分からないが、復帰したら力を付けて、マイコマイコの強さに少しでも及ぼうと努力するつもりでいた。

「ところで、ンファイレアさんを攫おうとした二人はどうなったのでしょうか?」

「ああ、クレなんとかとカジツチャンとやらは今頃牢屋じゃないかねえ」

「なるほど……」

二人は衛兵に引き渡され、装備を全て没収の上で、牢屋に囚えられ

ている。

「マイコさん！これからも、僕達のお店をご利用下さい。優遇しますよー！」

「おう、何ならポーシヨンを一生無料で提供しても良いぞ？」

「一生無料提供!?!す、すごい……。流石マイコさん！」

「そこまでして頂くのは……」

マイコは三人の述べるお礼を一心に聞いている。皆、心から感謝の気持ちを含めており、不要な殺生を未然に防ぐ事が出来た事実を、素直に喜んだ。

「――」

「……畏まりました」

その背後で、アイNZはタツチに耳打ちをしていたが、誰も気付く事は無かった。

「あんのクソ女、次に会ったときは……」

「よせ、計画は変更だ。エ・ランテルにはあいつらがいるせいで迂闊に手が出せん。一度隠れ家に戻って態勢を立て直すのだ」

「分かってるっつーの！あー……くそがあ!!」

苛立ちを隠せないでいるクレマンティーヌとカジットは、囚われた翌日には意識を取り戻し、既に脱走していた。英雄すらも逸脱した力量を持つクレマンティーヌを以てすれば、あの程度の牢屋等容易いものであった。牢を噛み切るといふ荒業を、彼女はやってのけてしまった。

「ちくしよお……。まずは装備か」

「うむ……」

身ぐるみを剥がされた二人は手持ちの装備が無い。お互い利用し合う関係の二人だが、この時ばかりは協力体制を取る事にした。今のままズーラーノーンの本部に帰還したとしても、制裁されてしまうのは目に見えている。暫くは潜伏し、牙を研ぎ直すしかない。二人はいずれこの借りは返すと、復讐を誓った。

「愚かな真似を……。貴方達も大人しく罪を償っていれば、あちらの世界で楽に逝けましたのに……」

「へっ?ぐう!?」

「ぐわあ!」

突如、薬屋で味わった物と類似した衝撃を首後方延髄部分に受け、またも意識を刈り取られる。二人は、ぼやけていく視界の中で家令らしき老人の姿を見る。

「色々知り得る事もあるでしょう。貴方達には、至高の御方々の下へ来て頂きましょう」

この日、ズーラーノーン高弟、クレマンティヌとカジットは姿を消した。

## 三巻編

### 同乗

モモンガさんを始めとする異世界調査組の旅立ちを見届けた。あの人ならきつと上手くやってくれるだろう。

さあ、いよいよもって俺はナザリック副総括としての業務をこなさねばならぬ時が来た。ナザリック地下大墳墓副総括兼『黙示録』最高司令官兼宝物殿領域守護者代理とかいう何か凄まじく壮大な役職を得てしまったのだ。色々やるべき事があるだろう、気合を入れねば！

と、思ったのだが。

「想定外なまでに暇ですな……」

「アバ・ドン様のお手を煩わせないように、みんな一丸となっておりますからあ」

「……優秀な部下が持てて私は幸せ者ですよ」

「光栄ですう！」

エントマちゃんがとても嬉しそうで何よりです。専属メイドだったり秘書だったり護衛だったりと大忙しなエントマちゃんと違い、俺の場合はナザリック内の管理はアルベドが完璧にこなすし、宝物殿に侵入者が現れた場合は放った蟲のアラームですぐに分かるようになってる。

せめて食堂の皿洗いでも手伝おうと試みるも、ものすつつつつつごく丁寧に断りされるし、みんな優秀すぎてやる事が無い！いや、常にエントマちゃんが傍にいるから超幸せだけど！

シモベ達の重すぎるとも言える忠誠心はプレッシャーだが、エントマちゃんが傍にいれば何のそのだ。惚れた女の子の前で無様な姿を晒してたまるかあ！

「派遣した者からの報告が待ち遠しいですよ」

「はい」

そうそう、モモンガさん達とは別行動で異世界へ派遣した部下がい

るのだ。シャルティアとハンゾー率いるエイトエッジアサシン達、現  
地人拉致組。パンドラス・アクターとソリュシャンによる、王国情報  
収集組だ。

俺の親衛隊なのに、ハンゾー達が旅立つのはどういうこっちゃと思  
うだろうが、彼らは偵察に拉致に暗殺にと色々と適任なんだなこれ  
が。それと、シャルティアの血の狂乱に対するストップパーという重要  
な役割も持っている。

俺のスキルでパワーアップしているとは言え、ハンゾー達がシャル  
ティアに勝てる訳が無いのは分かっている。そこで、暴走シャルティ  
ア用に最強の秘策を二つ程用意した。上手く機能するかは少々賭け  
だが、少なからず効果はあるだろう。

パンドラとソリュシャンは、商人に扮して王国で情報収集をする。  
二人は本をメインに据えた行商人を演じるつもりらしいが、パンドラ  
は何を企んでるのやら……。

「では、個人的な用事から手を付けましょうか。エントマさんも付い  
てきて下さい」

「畏まりましたあ」

自分なりにやる事はあるっちゃある。そっちからこなしていくと  
しよう。早速、《メッセージ／伝言》でアウラに連絡を取った。

所変わって第六階層の闘技場。何かしら実験をするならここが一  
番だ。

「アバ・ドン様！ようこそおいでくださいました！」

「アウラさん、また闘技場を使わせて頂きますね」

「はい、好きだけお使い下さい！」

アウラが元気良く答える。お言葉に甘えて、好きに使わせて貰お

う。

「何をなされるんですかあ？」

「一言で言うならリハビリですかね」

「差し支えなかったらあ、私もお手伝いさせていただきます」

「私もお役に立てるなら！」

「助かります」

まず、一部のスキルを検証したいと思う。模擬戦の際、いつもの蟲攻撃は問題なく機能したが、他の技は試さず終いだった。モモンガさん曰く、現実化した事で魔法の影響やらなんやらに色々と変化があると言っていたので、俺なりに確認がしたいのだ。

「少々大きめの蟲を呼び出すので私の側を離れないで下さい」

「畏まりましたあ」

「わ、分かりました」

アウラの表情が若干引きつる。もしかして蟲は苦手なのだろうか。……ぶくぶく茶釜さんも苦手意識持ってたからかもしれない。だとしたら、これから見せる光景はかなりショッキングなものになるな……。

「〈上位蟲召喚・超変異体千鞭蟲〉」

スキルを発動させると、地面が振動する。どうやら呼び出せたらしい。俺のモンスターが地中から這い上がろうとしているのだ。……断

じて卑猥な意味ではない。

揺れ具合から、その力強さが窺い知れた。エントマちゃんやアウラが巻き添えにならない場所に呼び出したので、事故は起こらないと思うが……。

「キイイイイイイイ！」

「わー!？」

アウラがびつくりしている。大きな金切り声を上げて地中から這い出したのは一匹の巨大ムカデ型モンスターだ。高さは2メートル幅は4メートル。体長は大よそ200メートルといったところか。うーむ、でかい！

頭はオレンジ色、足の色は全て真紅に染まっている。昔、日本に多く生息していたトビズオオムカデに長い牙を付け足した姿と考えると分かりやすいだろう。

トビズオオムカデは肉食性なので、ゴキブリやバツタ、ガ、ネズミなど小動物を捕食する。恐怖公逃げて……まあ、敵味方の区別はちゃんと付いてるようだ。おまけに、大きな身体で闘技場を損壊させないように身体をくねらせて裝飾に接触しないよう這い回っている。賢い子だな。

そんな超変異体千鞭蟲が、全身で俺達を囲むように佇む。

ムシツカイが呼び出せるモンスターに千鞭蟲という蟲がいる。本来はその名の通り、長い身体を活かして鞭のように振り回すのがメインだが、その上位に位置するムシマスターとして呼び出せるのがこいつだ。デカアアアアアイツ説明不要!!

ぶん回す事も出来なくは無いが、最早普通に使役するのが一番である。

レベルは俺のスキル込みで70つとところか。呼び出すと敵からも味方からも嫌な顔をされるという不憫な子だ……。HPの高さと素早さを活かした壁役が出来る良いヤツなものなあ。

「おつきいいー!」

「うひゃー……」

よし、エントマちゃんには好評っぽい。アウラは若干引いてるけど……。

「上手く行きましたね。どれ、乗ってみましようか」

「これに乗るんですか!?!」

「ええ、アウラさんだってビーストテイマーとして騎乗する事はあるでしょう?」

「そ、そうですけど……」

超変異体千鞭蟲を呼び出した理由はこれだ。いつか、俺が外へ出るようになった場合、上位者として何かに騎乗した方が良いんじゃないかとモンガさんからアドバイスを貰ったのだ。あの人も騎乗する機会があれば魂食ソウルイーターに乗るかもしれないと言っていた。



俺の目の前で頭を差し出す超変異体千鞭蟲を撫でる。体表から何か分泌してるって事はなさそうだな。実はヤスデでした！なんて才チだと俺の体が分泌液まみれになってしまう。頭は平べったいし、触觉が丸まっているのでムカデには違いない筈だが、現実世界をかなぐり捨てたファンタジー世界なので、そういうヤスデがいる可能性が無きにしも非ずだ。

「みんなで乗ってみましようか」

「ええ!?アバ・ドン様と同乗するなんて無礼はあ……」

「ああ、そんな気構え無くて良いですよ。場合によっては他の人を乗せる事もあるかもしれませんから、第三者の意見が聞きたいんですよ」

「……わ、分かりましたあ」

エントマちゃんはムシツカイなので、彼女の意見は間違いなく参考になるだろう。

「アウラさんも乗ってみますか?」

「いえ!私はその……フェンに乗って並走しようと思います!」

「なるほど、私は騎乗に不慣れですから、参考にさせて頂きますよ」

「こ、光栄です!」

流石にムカデに乗るのはキツイよなあ。何にせよ、アウラは様々な魔獣を使役するビーストテイマーだ。その中のお気に入りの一匹であるフェンリル、通称フェンに乗る姿は良い見本になるだろう。お手並み拝見ってヤツだ。

「じゃあ闘技場を飛び越えて、ジャングルを走り回ってみましよう。千鞭蟲、木々を踏み倒さないように気をつけて下さいね」

キチキチっと、小気味の良い牙の駆動音が聞こえる。返事をしたのだと直感で分かった。

## 大パニック

(どうしよう……)

エントマは、最初こそアバ・ドンが呼び出した超変異体千鞭蟲の威容に感動するのみであったが、次にアバ・ドンが試みようとしている内容が不味かった。よりにもよって、自分を同乗させて走らせようと言うのだ。

個人的な感情としては脳内薔薇色で、きりもみ回転しながら飛び上がりたくなる程嬉しい。今回の話だけで、半年は断食出来る自信がある。

だが、ナザリツクの従者としてはどうか？

先程も、従者として多忙に過ごす事で、アバ・ドンの顔をついつい見つめてしまわないように気をつけていた。至高の御方の為に、身を粉にして働けるだけでも幸福で満たされるのに、更にはアバ・ドンの隣で陰日向から尽くす機会を得られた。今度こそ無様な姿を見せない為にも、個人的な感情を押し込めて、従者として務めを果たさねばならない。

だが、エントマにまたも試練が与えられた。今度は、白馬に乗った王子様に手を差し伸べられたような気持ちに味わう事になる。女としての喜びと、従者としての使命感に挟まれて、頭が真っ白になりそうだ。

(あう……)

大きくて逞しい千鞭蟲に乗るアバ・ドンの姿は、蜘蛛人であるエントマからすれば、どうしようもなく格好良かった。

「ほら、エントマさんも乗ってみて下さい。この子は頭が平べったいから丁度良いです」

「……ではあ、無礼な身をお許し下さい、失礼しますう！」

結局悩んだところで、至高の御方に逆らうという選択肢は無い。エントマは意を決し、超変異体千鞭蟲の頭に乗るんだ。

「……さて、行きましようか。振り落とされないように気をつけましよう」

「準備は整っておりますう」

自分のすぐ隣には至高の御方の凛々しい姿。七色に光り輝く堂々とした立ち姿と、どこまでも整った禍々しき狂貌に見とれてしまいそうになるが、何とかこらえて前方を見据える。

「私もいつでも大丈夫です！」

「分かりました。では行きなさい！千鞭蟲」

超変異体千鞭蟲が無数の足を波状に蠢かせて走りだした。

「フェン、走り回るよー！」

それと同時にアウラが指笛を吹くと、闘技スペースの入り口からフェンが駆けつけた。よく手入れのされた漆黒の大狼に、アウラはヒラリと乗り込み千鞭蟲の後を追う。

超変異体千鞭蟲とフェンリル。お互い今の速度は同じだが、恐らくフェンは加減しているのだろうとアバ・ドンは考える。フェンリルは、レベルも機動力も千鞭蟲に勝る。それでも道を譲り、幼いながらも自分の顔を立ててくれるアウラに感心する。

主人を乗せたモンスター達は、闘技場を軽々と飛び越えてジャングルに突っ込んだ。

（おお、思ったより良い感じだ。このポーズでも割となんとかなる！流石は運動性に優れたムカデがベースのモンスター。おまけに思った通りに進んでくれる！これは大当たりだ）

超変異体千鞭蟲に乗った第一印象は悪くない。頭を変に動かすこともないし。地に足を付けて安定した速度で歩を進める。今、自分が取っているポーズでも問題無い。

「あれ……アバ・ドン様？」

アウラは走り出してすぐ、隣を走る上司の違和感に気づく。自分は、フェンの背中に跨るオーソドックスなスタイルだが、一方のアバ・ドンは走り出した今も尚、腕を組み、立ったままであった。その姿はアンバランスなように見えて結構サマになっている。それでも気になって仕方が無かった為、疑問を包み隠さず伝える事にした。

「アバ・ドン様はどうして立ったままなんですか？」

「えーっと……その、視界が広がりますから」

「その状態で走られても平気なんてすごいですね！」

「アバ・ドン様はあ、ナザリツクに君臨する偉大な御方あ。その御姿はとても良くお似合いですう！」

「エントマの言う通りです！」

「ははは……」

アバ・ドンはエントマとアウラのストレートな称賛に照れ笑いを浮かべる。

(どちらも小学生の平均身長。アウラは多分110cm行かないぐらい。エントマちゃんは149cm。そんな子達に純粋な瞳で見られるとむず痒いなあ……。つーかまたエントマちゃんに褒められた！ひやつほう！)

当初は、千鞭蟲の上に座ろうと考えていた。だが、イマイチしつくりこない。あぐらは微妙にキヤラじゃないし、正座も何か変。体操座りは論外だ。アウラのように跨ろうにも、平べったいムカデの頭では柔軟体操みたいになる。

己の姿勢に幾許か悩んでいると、一つのひらめきが光明をもたらす。それすなわち、逆転の発想。

——立ったままが一番かっこいいんじゃない？

こうしてアバ・ドンは、千鞭蟲の上で主腕を組んだまま直立不動するに至った。受けが良かったので一安心だ。だが、超変異体千鞭蟲の頭部は金属質かつ綺麗な表面をしている。エントマも自分も虫の脚である為、踏み止まれる自信はあったが、滑らないよう意識しておいた方が良さだろうと軽く警戒した。

「それならば私もお」

偉大なる主がそうするとお決めになったのならば、自分も続こう。そもそも、主を差し置いて座るなど無礼というもの。エントマはアバ・ドンに倣うよう、隣に寄り添う。

「エントマさん、座ってても構いませんよ？」

「そんなカツコイ……至高の御方が御立するならばあ、私も続きますう」

(エントマちゃんまで立つのか。俺がひっくり返ったりして巻き込ま

ないよう気をつけよつと……。ああ、隣にいただけでもすごい幸せだ……)

アバ・ドンは、人間時代なら気持ち悪い程の笑顔を浮かべているであろう心境だ。一方のエントマも、蟲で擬態した人間の顔に満面の笑みを浮かべる。今こうしてアバ・ドンの同じ行動を共有出来る事が何より嬉しかった。

そして、アウラはというと、フェンリルとの意思疎通が出来ているのか、入り組んだジャングルの地形を、平地と変わらぬ速度で疾走する。

「良い動きです。フェンと一体化しているかのようですね」

「アバ・ドン様もジャングルの中をスイスイじゃないですか!」

「……ん? まあ、覚えていますから」

そして、アバ・ドンはアウラに負けず劣らず、ジャングル内を巨大ムカデで走り抜ける。立ちふさがる木々を躲し、地を這う木の根に躓くこともなくスムーズな移動を維持しつづけた。最早、意思疎通を通り越して、自転車や軽自動車を扱うような取り回しの良さに、すっかり慣れきっていた。

しかも、第六階層内は庭も同然だ。何しろ、ギルメンであるブループラネットに協力して、蟲系異形種を隅から隅まで配置したのだ。蟲達の生態系を意識した上で、徹底的にリアリティを追求した。どこにどの蟲を置いたか全て把握している為、副産物的に地形も暗記済みであった。

尚、その蟲達はレベル制限の都合上戦闘能力が一切無い。あくまで観賞用である。多大な労力を費やしたものの、得をしたのはアバ・ドンのブループラネットだけであった。

「ところで、こんな時にアレですが、大森林の調査は順調ですか?」

「はい! 現在はマーレが探索に当たってますが、今のところ目立つた所はありません。森の魔物達も、シモベの時点で恐れて我先にと逃げていく奴ばかりです。物資蓄積の予定地に足を踏み入れる者は、ナザリックの関係者を除き、皆無になりました」

「そうですか……」

乗り回しにも慣れ、つい会話を挟むが、アウラは喜々として報告してくれる。エントマとも会話をしたかったのだが、どうしても気になっただけの進捗具合を、先に聞く事にした。

アウラとマールに命じられていたのは大森林の調査及び物資蓄積場所の確保。滑り出しは順調なようで、表情は明るい。アバ・ドンもその様子を嬉しく思ったが理由は少々異なる。本人は気付いてないようだが、彼女達は、早速一つ手柄を立てているのだ。

「順調そうで何より。おまけに、一つお手柄ですよ」

「え、ええ!？」

「どういう事ですかあ？」

唐突な褒め言葉に、アウラとエントマは面食らった。

「そうですね……。今から私が言う事は、エントマさんも覚えておいて下さい」

「畏まりましたあー!」

「良いですか、私達に恐れを成した臆病者でも、その森林内では強者として君臨していたかもしれません。他の生物にとって弱者とは限らないのです。それでどうなるかと言うと、生態系の変化が起こるでしょう。食物連鎖の上位が移動をする事は様々な影響を及ぼすのです。私とアインズさんは、弱者であろうとも些細な変化が影響をもたらす事は、よく知っています」

「そ、そうなんですか!」

「流星は至高の御方あ」

アウラとエントマは目を輝かせている。一応至高の41人の一人として格好付けてみたが、そこまで思い付いたのは単なる偶然だ。虫趣味が高じて、生物学的な知識を持ち合わせていたアバ・ドンは、異世界の生態系の変化にも気を配っていたのである。

「生態系が崩れて郊外に魔物が出るようになったのなら、アインズさんが冒険者として腕を振るう機会が出来る筈です。貴方の行動は思いがけず、ナザリックの助けになりました。嬉しい誤算ですね」

「そっかあ!ありがとうございます!」

(モモンガさんが依頼で魔物を蹴散らすなら、森林の制圧も案外早く

終わるかもな……くっくっく)

アバ・ドンは、森林での虫採集が早くも出来そうだと内心ほくそ笑む。出来れば、生態系を崩さなかったありのままを見たかったが、自分達の影響下でそれが難しい事は百も承知だったので、何も言わなかった。

「……………むう」

エントマはアウラの方をじっと見つめた。その顔の下にある本来の視線には明らかに嫉妬の色が込められていた。

「あれ、エントマどうしたの？私の方を見て」

「ツ！そお、それはあ…………」

言葉に詰まる。以前の自分なら流している筈なのに、咄嗟に言葉が出てこない。至高の御方の前で嘘を吐くなんて死んでも嫌だ。だが、醜い本音を曝け出すのも辛い。等と矛盾した考えを持つ。何故これほど優柔不断になってしまったのか、自分でも分からなかった。

「……………ああ、もしや」

「アバ・ドン様は何か分かったんですか？」

アバ・ドンは、エントマに向き直った。主人が纏うただならぬ雰囲気、気に気圧され、アウラとエントマは佇まいを正した。

「エントマさん！」

「……………は、はいい」

「私は貴方の働きぶりを誰よりも理解しているつもりです」

「ふええ!？」

「専属に出来た事、心から幸せに思っています」

「ええ……………あうう……………あう……………」

穏やかな声で言われた言葉に、エントマは心臓が止まりそうになった。

まず、彼女は己の愚かさに絶望した。褒められているアウラに嫉妬した挙句、至高の御方に気を使わせてしまったのだ。まるで、至高の御方に自分を褒める事を強要させたが如き暴挙だ。これは断じて許される事ではない。

(こんなのお……………恥ずべき事なのに、至高の御方に死んでお詫びし

なければならぬのにい！どうしてえ……！)

すぐに謝らねば。自分の我儘に応えた主に、先の言葉を引き出させた事を恥じなければならぬ。であるに拘らず。

(どうしてえ、こんなにい、こんなに幸せなのお？頭の中あ、とろけちやうよお……！)

今のままは決して良くない。理性でそう考えるエントマに反し、女としての自分のはしたなく喜び続けてしまう。自分を専属に出来た事でアバ・ドンは幸せだと言った。その台詞が頭の中で何度も繰り返される。謝ろうと思っても、喜びの感情が大きすぎて、言葉が出てこない。

相反する感情と感情のぶつかり合いを行っている最中、正しく隙だらけだったその時、突如、超変異体千鞭蟲が頭を軽く振った。

エントマは、咄嗟に踏みとどまる事が出来ず、目の前のある者にしがみついた。



フツトー

(ぴやあああああ！)

エントマは絶叫した。辛うじて心の中で。

隙だらけになってバランスを崩した結果、至高の御方に抱きついてしまった。頑強な肉体の感触が否応無しに伝わる。至高の四十一人特有のオーラと、アバ・ドンの眩い輝きに当てられて頭がクラクラする。またも無意識の内に性フェロモンを放ってしまう。

(うおわあああああ!?!いい、良い匂いがあああ! 感触がああああ！)

アバ・ドンも絶叫した。辛うじて心の中で。

痛覚が無くなったとは言え、身体に触れられる感覚ぐらいは分かる。それが好きな女の子相手ならば尚更だ。

煩惱を誤魔化すべく、超変異体千鞭蟲が突如頭を振りかぶった事に疑問を持ち、一体どうしたのかと戦犯の表情を窺うと「後は頑張れよ、大将」と言っているような気がした。

(千鞭蟲め、余計な事をしやがって……!この御恩は一生忘れません!)

アバ・ドンは、時が落ち着いたら千鞭蟲の為に活きの良い動物を用意してやろうと誓った。ムカデは肉食性で生食を好む為だ。ちなみに、ゴキブリの卵なども好物に挙げられるが、恐怖公に配慮して除外した。

ムカデはゴキブリの卵がきつかけで民家に侵入するパターンが多いので、家は清潔にしましょう。

「あ、アバ・ドン様あ！申し訳ありません！」

「かかか、構いません。立ったままは辛かったですでしょう。そういう事ならば、しっかりと掴まって下さい。エントマさんを支える事に、何の問題があるかと思う……ます、ですく下さい」

「は、はい……」

(ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイエントマちゃんがががが)

不動を貫くアバ・ドンの胸中はそれはもう大変な事になった。千鞭蟲への意識が逸れた途端に、現在進行形で襲い掛かるエントマの感触が脳内を焼き尽くさんとする。敬語が崩れてよく分からない何かになっているのが良い証拠だ。

ラブコメやラノベの主人公はこういったハプニングには紳士的、又は拒否的対応を見せるが、あれは聖人の領域だ。等と、半ば現実逃避気味に考えた。実際、アバ・ドンの場合、エントマが密着する時間を延ばそうとしている節がある。エントマが発しているフェロモンも原因の一端とは言え、紳士的とはいえない。

(……触り心地がたまらんナニコレ)

昆虫類、蜘蛛類等の節足動物は、表面が外骨格で覆われており、腹部分が柔らかいのが大半だ。だが、蜘蛛人(アラクノイド)であるエントマの場合がどうなのかは不明であり、その触り心地が具体的にどうたまらないのかはアバ・ドンのみぞ知る。

(こお、こんな至近距離い……！えつとお、掴まるう……掴まらないきやあ！)

『しっかりと掴まる』

エントマは、ほぼパニック状態になりながらも、指令を完遂するべく体を蠢かせる。

(あー、エントマったら何してんだか！)

アウラは頬を膨らませて怒りを露わにする。別に嫉妬している訳ではなく、従者として相応しくない姿に腹を立てただけだ。

(……あれ？エントマの背中が……つてまさか!?)

一部始終を眺めていたアウラは違和感に気付いた。エントマの背中が異様に膨らんでいる。背部に別の生き物を隠していたかのような動きを見せると、すぐさま四本の脚が飛び出した。黒い体毛に包まれた鋭い足先を持つそれは、巨大な蜘蛛の脚であった。

「んしょお……」

(ちよおおおおおおお!?)

体格に不釣り合いな程の長い脚が、アバ・ドンに絡み付いた。エントマは、和式メイド服に袖を通した手足も含めた全ての脚を駆使し、

アバ・ドンにガツチリとしがみ付いた。幸い、前方では邪魔になると認識出来たのか、アバ・ドンの背部によじ登った。もし、まかり間違つて正面から試みていた場合、ペロロンチーノ流で言う”だいしゆきホールド”になるところであった。

(あ、アバ・ドン様にあんなにくつついて……！)

この状況下で冷静を保てなかったのはアウラも同じであった。巨大なムカデの上で大胆な行為を働くメイドと、それを受け入れる偉大なる御方は何とも刺激的であった。自分のよく知るヴァンパイアでも、御身にあれ程密着する事は無い。捕食してるとは無いかと勘違いする程の熱烈さだ。

「あ、アバ・ドン様はエントマにくつつかれても平気なんですか？」

「はっはっは、これくらいへっちやらです！」

内心全くへっちやらではない。不動を維持し続けているのは少しでも体を動かさそうものなら、本能のままにエントマへセクハラする可能性が高かったからだ。この時、アバ・ドンの精神沈静化は自己最高記録である分間60回をマークしたが、アウラのような子供の前で不埒な事は出来ない。

尚、その懸念は既に手遅れで、副腕の二本がエントマのお尻を支えていた。残念ながら、アバ・ドン自身はその事に全く気付いていない。

(ああ、お尻い……！)

勿論、エントマは気付いている。言葉には出さなかったが、フェロモンの量をブーストさせるに至った。変温動物である筈なのに、自身の体温が急激に上がっていく。

「で、では、少々トラブルはありましたが、走り回る事に集中しましょう」

「分かりました！」

先の出来事を少々と言ひ張つたのは大人の矜持か。惚れた異性と密着する初体験を、少々と言ひするのは厳しいものがある。

アバ・ドンは、千鞭蟲を走り回らせる集中力が切れそうの中……と言ひより、エントマの感触に集中したいと思つてしまったせいで、操作がままならない。

だが、それでも超変異体千鞭蟲の動きは精彩を欠かなかった。何故なら、千鞭蟲は己の主人がのつぴきならなくなっている事に気付いていたからだ。今は、千鞭蟲自身の判断で、ジャングル内を駆け抜けている。

二人の蜜月を邪魔しないように。それと、なるべくアウラには見えないよう頭を持ち上げて。尚且つ、頭部を微かに揺らしながら走り続ける。ムカデ的に無理のある体勢になってしまったが、自身の神とも言える創造主の役に立てるならば大した問題ではない。

超変異体千鞭蟲は、賢かった。

(んー？千鞭蟲は何で頭を持ち上げながら走ってるんだろ？もしかして、アバ・ドン様がエントマに配慮してるのかなあ……)

アバ・ドンとエントマを隠すような姿勢を見たアウラは、エントマの姿を隠す事で、彼女の名誉を守ろうとしてるのではないかと考えた。

(アバ・ドン様の事だから、そういう配慮もしそうだよね)

アウラは、アインズとアバ・ドンは慈悲深く配慮に優れた御方だと心から思っている。自分の推理はあながち間違いではないだろうと思っただ。

(それなら、エントマを咎めるのは間違いかな？うん、それなら見なかったことにしちゃおっと)

こうしてアウラは、”知らないフリ”という大人の対応を覚えたのであった。

アウラがまた一つ成長を見せた一方で、アバ・ドンの精神は新たな局面を迎えていた。

「んう……はあ……うう……」

(やめてー！色っぽい声出さないでえー!!)

アバ・ドンとエントマは興奮していた。不可抗力とは言え、想い人との密着がこれ程続くのだ。エントマは、専属メイドとして働く中でも、しよっちゅう漏らしていた性フェロモンがまたも溢れ出た。性的な声とフェロモンがアバ・ドンの精神を更に擦り減らす。

(エントマちゃん最近すごく良い匂いするんだよ……。色気を感じる

……！)

鋭敏になった感覚が、エントマの発する全てを余すこと無く感知。艶めかしく荒い息遣いと、甘い香りが興奮を誘った。どうあがいても、エントマを意識してしまふ。だが、それでもアバ・ドンは不動の姿勢を貫き通した。

(あうう、頭がポワポワするう)

エントマのフェロモンは絶えることが無かった。アバ・ドンも、性フェロモンに対する知識は持ち合わせていたが、自分に対して発情しているという発想を持てなかったせいで気づかなかつた。女の子特有の良い匂いだと思い込んでしまったのだ。

そして、精神の沈静化も功を奏し、大事には至らなかつた。とにかく、何か気が紛れる方法が欲しいとアバ・ドンは心から思った。尚、離れるという選択肢は無い。

(あー何か、会話をーそう、他愛無い会話をすれば……！)

アバ・ドンは、苦肉の策としてエントマに話し掛けた。

「エントマさん、私の体は痛くないですか？ほら、私って棘々しいですから」

「平気ですう。ずっとこのままでもお、良いぐらい……」  
「……ッ」

自分の体で傷つかないだろうかという心配もあつての話題だったが、耳元で艶めかしく答えるエントマに色々と吹っ飛んだ。

『ずっとこのまま』

何と甘美で恐ろしい響きだろうか。自分に気遣つての発言だと思いなながらも、獣欲が膨れ上がっては沈静化していく感覚にゴリゴリと蝕まれていく。もしも、精神異常無効化のスキルを持ちあわせていなかったら、とうの昔にエントマを押し倒していただろう。

「分かりました。では、何周か走り回ったら休憩しましょう」  
「畏まりい……ましたあ……」

精神が危機的状況だというのに、躊躇なく周回を宣言してしまつた。だが、後には引けない。

エントマの抱擁がより力を増した気がした。エントマの力ではダ

メージが入らないので心配無用だが、アバ・ドンにもたらす衝撃は生半可ではない。

(本当にいい、ずっとこのままだったらあ、良いのいい。えへへえ……)

エントマが正気に戻るのは暫く後の事だ。

(遅しくて美しい御身体あ、素敵い)

(死にそう)

第六階層は広い。アバ・ドンとエントマの密着状態は、長い事続いた。

「……」

アバ・ドンは、第六階層を去ってエントマに休憩を命じ、自室に戻ってベッドに倒れ伏していた。うつ伏せのまま無駄に良い姿勢で寝転がっており、上の空なのか肩の鎌が四方八方に振り回されている。

「エントマちゃん……」

精神への負担は大きかったが、それでも夢のような一時だった。エントマの感触は忘れたくても忘れられない。否、忘れたくない。

(このままじゃあ、俺はエントマちゃんに良からぬ事をしてしまうかもしれない……)

だからと言って、エントマと距離を取るのには論外だ。専属に命じたのは自分自身であるし、エントマと離れ離れになるなんて絶対に嫌だ。最悪、エントマに見切りを付けた等と周囲に思われる可能性もある。そんな事になったら、彼女を傷つけかねない。

アバ・ドンは腹を括り、現状維持のまま理性を高く持つ事にした。

(絶対本能なんかには負けたりしない!!)

精神が強制的に安静化するにも拘らず、煩惱を抑えようとする修行

僧の気分であつた。決意は本物だったが、うつ伏せのまま肩の鎌を振り回し続ける状態だったので、イマイチ格好が付かなかつた。

余談だが、とある使用人室では、虫の嘶きのような叫び声が響き渡つたと言う。

## 蟲野郎共

突然だが、俺やモモンガさんが元いた世界……現実是最悪だった。対策しないと呼吸もままならぬ大気。綺麗な空を見上げる事すら叶わない。死んだ目をして幽鬼の如く出勤する防毒マスク着用済みの社会人達。食事も娯楽も、荒んだ心を到底癒せる物ではなかった。ユグドラシルオンラインを除いてな！

で、そんな環境からか、ナザリック地下大墳墓第九階層には、個室の他に娯楽施設が多数あった。食堂や大浴場。エステなどなど。自分には到底縁の無かった施設が目白押しだ。凝り性なギルメン達が作った、何の効果も無いアクセントの一つだったのだが、ナザリックが現実化した今では、俺の心を落ち着けるのにうってつけの場所となった。

「メロンリキュールをベースとしたカクテルでございます」  
「頂きます」

キノコ頭の副料理長が鮮やかな緑色のカクテルを差し出す。微かに立ち昇る気泡が良いアクセントだ。  
「……」

俺は今、第九階層にある副料理長運営のショットバーで飲んでいて。副料理長はバーテンダーの正装に身を包み、カクテルをシャカシャカするアレ……名前が分からん。とにかくシャカシャカする奴を清潔な布で静かに磨いている。

食堂で腕を振るう傍ら、このバーの管理も彼(?)が行っているそうだ。

暗すぎず、明るすぎず照らす仄かな光。清潔でシツクなカウンター。何も言わず静かに佇むマスター。何とも落ち着いた雰囲気だ。静かだが、張り詰めた空気は感じられない。酒の銘柄だとか作法だとかはさっぱり分からなかったが、ただ静かにちびちび飲んでみると、心が安らぐ。

過ちを洗い流しているような気分になるなあ……。カクテルの味も良い。メロンの香りがたつぷりと込められているが、甘さは控えめ



でスッキリとした後味だ。耐性の都合で酔っ払う事は恐らく無いが、それでも良い気分だ。

ストローで飲んでるのでイマイチ締めりは無いが、体の構造上仕方ないね。

暫くバーの雰囲気浸っていると、グラスの中が空になった。

「……良いカクテルです」

「恐悦至極に存じます」

副料理長が深々と頭を下げる。大きな感情の変化を覆い隠すような震えた声に、悪感情は感じられない。俺の作法はこのバー的には問題無かったのかな？俺が上司なもんで気を使ってくれてる可能性もあるけど。

「もう一杯頂けますか？」

「畏まりました」

色々と感謝したかったが、何となくこの静かな雰囲気壊したくなくて口数が少なくなる。二杯目を要求すると、副料理長もといマスターが見事なテクニクでシャカシャカする奴をシャカシャカして先ほどのカクテルを振る舞ってくれた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

さて、何で俺がこんなアダルトイな空間で癒やされているかと言うと、あれだ、ちよつとした後悔タイムだ。

先程エントマちゃんに抱き付かれた時、俺は超幸せだった！今も余韻が残っててドキドキしている。それだけならまだ良かったのだが……。エントマちゃん俺に気があるんじゃないかね？ぐへへ等と、残念な男にありがちな思考に陥ってしまったのだ！甘ったるい声色ですつとこのままとか言われたらもうね……。

自己嫌悪した俺は、一先ず酒に逃げようとしたのだが、バーの雰囲気何ともまあ良い事。だいぶ気分が良くなってきたぞ。副料理長に感謝やね。

「失礼スル」

「お邪魔しますぞ」

バーの扉が開き、小気味の良いカウベルの音と共に来訪者二名が姿を見せた。その二人は俺にも馴染み深い蟲物だ。

「おや、コキユートスさんに恐怖公も」

「……ムオ!?アバ・ドン様!」

俺の姿を見ると二人は驚いていた。コキユートスはビックリすると勢い良く冷気を出すのが癖なのだろうか。

「これはこれは……。まさかアバ・ドン様とこの場でお会い出来るとは、一生の幸運を使い果たした思いですぞ」

「ははは、大袈裟ですねぇ」

偶然にも、恐怖公とコキユートスも飲みに来たらしい。そういや、時間的に今は夜頃か。特に意識してなかったが、飲むには丁度良い時間だったようだ。

「宜しければ、二人に同伴しても良いですか?」

「無論デゴザイマス!」

「光栄ですな。是非に」

歓迎してくれた。副腕がワキワキしてるのが微笑ましい。俺を挟む形で、両隣にコキユートスと恐怖公が座った。蟲野郎パラダイスや!

あ、それと、恐怖公がバーに居る事に難色を示すなかれ。基本的に清潔だからな! 衛生面に何ら問題はないのだ!

「マスター、いつものを頼みますぞ」

「私モダ」

「(こちらに)」

手慣れた様子で二人がオーダーすると、様々な種類の酒が置かれた陳列棚から二本のボトルが取り出された。恐怖公側のウイスキーグラスに注がれた液体は赤みがかった黄色で、とろりとしていた。氷も何もなしなのでストレートって奴だな。

どう見ても油です。本当にありがとうございました。……ん?

「恐怖公、それってもしかして……」

「はい、アバ・ドン様より賜った”最高級植物性油脂”ですぞ。これをバーで愉しむのが最近の楽しみでしてな……」

「最近ノ恐怖公ハ、自制ト安息ヲ兼ネ、ヨクココデ飲ンデオリマス」  
「ラウンジで飲むと、あつという間に無くなりそうですから。我輩としては長らく愉しみたいという思いなのです」

「やっぱりそうか。この様子だと、恐怖公の口にも合ったらしい。」

「気に入って貰えてたようですね」

「ええ、眷属共々舌鼓を打っておりますぞ」

（羨マシイ）

コキュートスが恐怖公の飲む油をジツと見つめている。油をバーで飲むのは奇妙だもんなあ。一方のコキュートスのグラスに注がれたのは、丸々とした大きな氷が入った、透明感あるブルーの飲み物だ。知ってるぞ、ロックって奴だな！

各々の飲み物にはストローが刺してある。昆虫特有の牙なら必須だもんな。

三人で乾杯すると、二人共飲み始めた。皆揃ってストローで飲むと連帯感が生まれる……ような気がする。

「コキュートスさんもよく此処に来るのですか？」

「ハイ、デミウルゴスト共ニ来ル事モアリマス」

「ほう」

コキュートスはデミウルゴストと仲が良いのか。色々と属性が違う者同士だけど、セバスと違って仲が良いんだな。やっぱり製作者の影響ってでかいのね。

「今後、私もちよくちよく通うかもしれません。その時は一緒に飲みましょう」

「アリガトウゴザイマス。キット、デミウルゴストモ喜ブデシヨウ」

「お気遣い感謝致しますぞ」

「副料理長も、よろしく願いますね。私は此処がとても気に入りました」

「……はい、好きなだけ御利用下さいませ」

この空間を共有出来るのは良いなあ。少しばかり賑やかになったが、バーの雰囲気は損なわないよう姦しい会話は避けてるから大丈夫だろう。

「ところで、アバ・ドン様はバーでのリラックスを好むのですかな?」  
「……ま、まあそんなところですよ。私は、こうして気持ち落ち着けて、ナザリックの今後についてを考えたりしています。どうすれば部下達を悲しませずに済むか、とか。どうすればナザリックに利益をもたらせるか、とかですね」

「オオ……」

「真にナザリックの事をお考えになられてるのですな。流石はアバ・ドン様」

流石に本当の事は言えなかった。エントマちゃん相手に悶々としてますなんて言えねえよ!

(素晴らしい、至高の御方の御用達!バーをやって本当に良かった……!)

心なしか、副料理長が頭をプルプルさせていたのは気のせいだろうか。俺達は、野郎同士での飲み会を静かに楽しんだ。コキユートス達と親睦を深められた気がする。

「はい……はい……成程。では、帰還するという事で。分かりました。お待ちしております」

「どうでした?」

「モモンガさん、シャルティアさんが……シャルティアさんが……」

「シャルティアに何かあったんですか!?!」

「チャイナ服拾ったって」

「はあ」

## 急展

冒険者としてある程度の目処を立たせたモモンガ達は、一旦ナザリック地下大墳墓へと帰還。第九階層の円卓で合流したアバ・ドンとモモンガは、改めて近況の報告をし合う。

「ただいま帰りました」

「おかです。モモンガさん。成果はあったようですね！」

「ええ、冒険者としての地位とコネクションの確立。おまけに身寄りの無い現地人を拉致出来ました。幸先の良いスタートと言えるでしょう」

モモンガの機嫌は良い。下地作りが上手く行ったので、第一段階はクリアしたといったところだろうか。尚、人間の拉致に関して、二人に罪悪感は湧き上がらなかった。何しろナザリックのNPC達や自分達の命が掛かった計画な上、人間には何の同情も湧かなかった。漆黒の剣に対しては愛着が湧いていたが、それに危害を加えようとした上に、計画の邪魔になった二人には何の躊躇いも無い。

「おお、バッチリじゃないですか！拉致した人間は？」

「氷結牢獄に監禁しています。早いところ情報を引き出したいのですが……」

「まずは、尋問対策の魔法が無いかの確認と解除ですね」

「ええ、それが終わり次第つてところでしょう」

モモンガは以前、カルネ村を襲撃したスレイン法国の陽光聖典隊長であるニグンを尋問し、法国が施した”特定の状況下で質問に3回答えたら死亡する”魔法で還らぬ人にしてしまった。その失態を反省し、エ・ランテルでセバスが捕えたクレマンティーヌとカジツチャンは氷結牢獄に拘束し、部下達に魔法の解除を命じている。

「アバさんの方はどうですか？」

「まだ、何とも……。そろそろハンゾーさんから連絡が入る筈なんだから……」

アバ・ドンは、シャルティアとハンゾーに様々な対策アイテムを与え、作戦と策を懇切丁寧に説明した上で旅立たせた。

彼女達の目的は武技や魔法を習得した犯罪者の拉致。奇しくもモモンガが達成してしまったが、どちらにせよサンプルは多い方が良い。二人は、シャルティア達の報告を待ち遠しく思っていた。

「ん……」

「来ましたか」

すると、アバ・ドンの頭の中で何か糸が繋がったような気配を感じた。紛れも無く〈伝言〉によるものである。

『アバ・ドン様、定時報告及び緊急の報告に入ります』

それはハンゾーからの報告だった。スクロールによる〈伝言〉なのだが、当然消耗品の為少々勿体無い。実は、エントマならば符による報告が可能なのだが、それをするとアバ・ドンが飛び出す可能性がある故の代案であった。

今の状況下で消耗品を使用する事にはモモンガもアバ・ドンも抵抗があったが、背に腹は代えられなかった。

『ハンゾーさん、無事で何よりです。では報告をお願いします』

『はッ、此の度シャルティア様が——』

・  
・  
・

「チャイナ服拾ったって」

「はあ」

報告内容の第一声は何とも奇妙であった。何故いきなりチャイナ服等という単語が出てきたのだろうか。チャイナ服と言えば、あの独特のスリットが入った中華圏の衣装であるあのチャイナ服で間違いないだろう。だが、このタイミングで出てくる単語としては些か奇妙である。モモンガは気の抜けた返事しか出来なかった。

「えーつと……犯罪者の拉致は、上手く行ったんですよね？」

「はい、そっちは完璧にこなせたと言っていました。ただ、緊急に報告したい事があるとか……」

「それがチャイナ服と関係あると」

「はい。何でも、シャルティアさんの全力攻撃で消滅しなかったそう

です」

「何ですって!?!」

アバ・ドンの話した事はモモンガを驚かせるに値するものであった。レベル100NPCの中でも高い戦闘力を誇るシャルティアの一撃で破壊されない衣服。その事実だけで、性能の高さが窺い知れたからだ。

「そりゃモモンガさんも驚きますよね……俺もびつくりしましたよ!ちよつと信じ難い話です。とにかく拾った経緯もハンゾーさん達から詳しく聞きませんと」

「ですね、じゃあいつも通り玉座の間に集合させましょう!」

「お願いします」

これは、全員に周知させなくてはならぬ大事になると確信したモモンガは、即座に緊急招集を掛けた。

「私達も行きますよ、アバさん」

「うい」

二人はリング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンを使用し、第十階層玉座の間に転移した。二人はそのアイテムの性能から非常に緊急性の高い内容だと認識していた為か、気が引き締まる。

「シャルティアさんの一撃を受けても壊れなかったアイテム……かなりヤバイぞ」

「攻撃にもよりますが、彼女の一撃に耐え得るならば伝説級<sup>レジェンド</sup>は固いですよ」

「下手すりゃ神器級<sup>ゴツ</sup>もあり得る……!むむむ、報告が待ち遠しいです」  
「それを持ち帰ってきたとあれば、かなりの手柄ですね」

「楽しみだなあ」

暫く、二人で雑談をしていると、モモンガの呼び掛けに応じ、第十階層玉座の間にはお馴染みの面子が揃った。

アルベド、アウラ、マーレ、コキュートス、デミウルゴス、セバスはシャルティア達が帰還するよりも早く馳せ参じ、上段に居るアイズとアバ・ドンのすぐ下、横に控える。これから帰ってくる犯罪者拉致組がアイズに報告する為だ。

皆一様に黙して待っていると、玉座の間の扉が開かれた。

「失礼しんす。第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールンただいま帰還しんした」

『黙示録』親衛隊。ハンゾー、ナガト、サンダユウ、ドウジユン、帰還致しました」

入室した人物こそ、件の報告者たるシャルティア達だ。シャルティアを先頭に、エイトエツジアサシンのハンゾー達も後に続く。アインズとアバ・ドンは、無事な様子の部下達にほっと一息吐いた。犯罪者拉致の為派遣したチームは誰一人欠ける事無く帰ってきてくれた。

(ヨクゾ帰ツテキタ……)

コキユートスも安心した者の一人だった。『黙示録』に課せられた厳命として、誰一人欠けてはならないのだ。自分が推薦した思い入れもあるエイトエツジアサシン達であるし、何より至高の御方との約束を遵守出来た。コキユートスとしても、一安心だった。

「シャルティア、ハンゾー、ナガト、サンダユウ、ドウジユン。皆が無事に戻ってきた事を、私もアバ・ドンさんも嬉しく思うぞ」

シャルティア達は溢れる思いをこらえ、臣下の礼を取る。いつでも報告が出来ると言った様子だ。実はシャルティアの下半身は溢れる思いを少々抑えきれなかったが、アインズとアバ・ドンが気づく事は無かった。

「任務達成お疲れ様です。お疲れのところ、申し訳ありませんが、報告を聞かせて貰いましょう」

「畏まりんした」

——時間は、犯罪者拉致の為異世界に赴いた頃に遡る。



暗い夜道、エ・ランテルの外れを大きな馬車が走る。遅しい馬が四頭がかりで引いて走る。月明かりに照らされその姿は見えなくもないが、走らせるには危険な暗さである。舗装された道路を外れ、少々揺られる馬車の中の顔ぶれは不思議なものであった。

馬車に乗る面々は、透明化して上部に張り付くハンゾー達。シャルティアと愛妾の吸血鬼の花嫁とソリュシャン。そして……。

「不思議ですわえ。やっぱり、貴方とアインズ様は似ても似つかないであります」

「それは無理もありません、シャルティア殿。私の有りようは今のアインズ様の趣きとは少々異なります故。ですが、貴方とペロロンチーノ様のように容姿は大きく異なれど、通ずるものはあるでしょう。私はそう確信しております」

ピンと軍帽を弾き、パンドラズ・アクターは答えた。足を組み堂々と座る姿は役者のようであり、軍服も相まって容姿が整っていれば絵になるのだが、顔がハニワの為どうにも格好が付かない。

馬車の中は広い為、窮屈では無かったが、隣に座るソリュシャンはもやっとしていた。

(アインズ様が創造なされた宝物殿領域守護者、パンドラズ・アクター……。やっぱ変わりでいんす)

愛しの君への侮辱は絶対にしたくないので心に秘めるが、目の前にいるハニワ顔の軍人とアインズの接点を見出そうと思っていた。アイテムフェチの気や厨二気質等、共通点は割かしあるのだが、残念ながらシャルティアは読み取れなかった。

「世界をも変える世界級アイテムを派遣者に貸与。そして私とソリュシャンを王国の調査担当に。ふふ、アインズ様は我々の任に強い関心を持つておられるようですね」

「慈悲深きアインズ様とアバ・ドン様は、わらわと共に『黙示録』のエイトエッジアサン達も預けてくれんした。失敗は許されなんし」

シャルティアは自身の爪が不揃いでないか眺めながらもやる気を見せた。アバ・ドン直轄の『黙示録』が初めて外に赴く任務。それを率いて協力するのは他ならぬ自分だ。万が一、シャルティアが失敗を

すれば、それはナザリツクの威信を地に落とす、至高の一柱であり、アインズの親友であるアバ・ドンの顔に大量の泥を塗る事となる。

「シャルティア様。我々エイトエツジアサシンも、全力を以て任務に当たらせて頂きます」

「はいな、あの御方の御命令はよく理解していらす。必要時は貴方が遠慮なく指示しなす」

「御意」

アバ・ドンは、一定の条件下ではハンゾー達の指示に従うようシャルティアに命令した。プライドの高そうなシャルティアにとつて辛い事かもしれないと思つたが、アバ・ドン直々に命名した直轄部隊のリーダーという事で、然程抵抗は無かつた。至高の御方の肝入りならば、彼女も弁えるのだ。

「特定のタイミングではハンゾー達に命令権を譲渡……。シャルティア様の『血の狂乱』対策でしょうか？」

ソリュシャンは、シャルティアの言に質問をした。

「それもありませんけど、私が探知系のスキルを持つてない事も理由の一つですわえ。ハンゾー達が主な拉致を担当。私は手に負えない強者担当であります。こちらのチームで世界級アイテムを持つのは私だけでいんすから」

「見目麗しい薔薇のようであるシャルティア殿の棘は些か鋭い。皆が傷つかず、生還させようとする故の配慮なのでしょう」

「……分かつていらす。アインズ様とアバ・ドン様は私達に気をお掛けになつていらす」

パンドラの言葉に少々苛ついたが、紛れも無い事実であつた。アバ・ドンの取つた処置は、シャルティアを決して信賴してない訳ではなく、生還率を引き上げる為の措置だと全員理解していらた。厳命する内容が命を落とさない事だと断言する程の上司だ。そう考えても何ら不思議ではない。

「至高の御方々は慎重に事をお進めですな。私もパンドラ様の足を引っ張らぬよう精進します」

「王国で一芝居t a n z e nを披露しなければ。ソリュシャンの補佐

も重要になる」

「パンドラとソリュシャンは王国での情報収集……具体的にどうしんす?」

「商い事を少々、ですな。本屋を営もうかと」

「本……?」

「色々理由はありますが、必ずや、アインズ様に最良の結果をもたらすと約束しましょう」

「よく分かりませんが、お任せするわ」

何故か本屋の営業をするという謎の計画を聞いたシャルティアは、一先ず思考を放棄して目の前の任務に集中する事にした。適度に話を続けていると、馬車が大きく揺れ、窓から見える景色が動かなくなつた。

「……馬車が停まったようでありんすね」

雇い入れた御者がいよいよ本腰を入れたらしい。警護の任に付かせたチンピラが、我儘お嬢様として外で振舞っていたソリュシャンを慰み者にしようとしているのだ。罨に掛かったのがどちらの方かは言うまでもない。

「ではシャルティエ殿、ハンゾー殿。

Wirwunschen Ihnen eine Krীগsgluck

パンドラズ・アクターのよく分からない言語を尻目に、シャルティアとハンゾー達は馬車の外へ向かっていった。

## 最強の切り札

馬車を操作する御者を務めていた男、ザックは野盗達とグルであった。

深い森の中、月夜が照らし出す馬車の半周を男達が包囲している。チグハグな装備に身を固めた男達は皆一様に下卑た笑いを浮かべており、馬車の中に居るであろう令嬢を相手に舌なめずりをする。

「ここまで手引きしたのは俺ですぜ。分け前は頼みますよ」

「分かってる。お前にも美味しい思いをさせてやるよ」

武器を出して威嚇していると、馬車の扉が開いた。いよいよ、お出ましかと馬車の前へ半歩進み出るも、中から誰かが出てくる事は無かった。

「今更萎縮してんじゃねーよ！とっとと出てこいやあ！」

野盗の一人が声を荒げる。男が一人、馬車の中に乗り込んで我儘令嬢を引きずり出そうと馬車の中に向かう。

「……………」

最初に異変に気付いたのは後方で待機していたザックだった。馬車へ乗り込もうとした野盗の動きがピタリと止まったのだ。そして、糸が切れた人形のように、地面へと崩れ落ちた。

「ッ!? 気をつけろ！既に攻撃されている！」

「アカッ!」

男の異変に気付いたりリーダー格の男が野盗達に指示を飛ばす。危機管理能力はそれなりにあったようで、武器を構えて前方の敵を警戒する。

「ぐっ!」

「ひえあ!!」

「ぬわあ!!」

「ぎえ!」

次々と男達が倒れ伏していく様に、ザックは慌てふためいた。

「な、なんだよこれ！どうなってんだよお!」

街から完全に外れた辺りから、作戦は開始していた。馬車の外から

追いかけて別行動していたドウジュンは野盗の群れを発見。ザックが馬車を止め、扉をそつと開かせたタイミングで、馬車内で待機していたハンゾー達と共に一斉に奇襲した。透明化と気配遮断を用いての背後からの不意打ち。麻痺の効果を伴った一撃に、野盗達は次々と餌食になった。

アバ・ドンが打ち出した方針は至極単純なものである。

——見敵必殺。

話を聞くのは敵対勢力を無力化してから。相手の戦闘力を根こそぎ削ぎ落とし、危険を最小限に抑えた。

周辺の野盗を粗方無力化した辺りで透明化及び気配遮断を解除し、エイトエツジアサシン達の姿が露わになる。

「ば、ばけも……うぐっ」

目の前に現れた忍装束の何か。八本足全てに鋭い刃を備えた蜘蛛型の化物と認識した時には、既にザックは何らかの手段で体が動かなくなっていた。全身が鉛のように重い。だが意識は鮮明で、今の状況下もハッキリと理解出来てしまうのが恐怖感を煽った。

ザックの目に映るのは、蜘蛛型の化物に尋問されては首の骨をへし折られて殺される野盗達の姿。端的に、自分の末路もアレらと同じだと悟ったザックは、しめやかに失禁。

「お前がリーダーか？吐けば助けるぞ」

「ち、違う！う、後ろで指示していたヤツがまとめ役だあ！頼む、命だけは……アガツ!？」

「武技を使える者は居るか？」

「きよ、拠点の方に！用心棒がいる。そいつなら……ギツ!？」

また二人程、首の骨をへし折られて物言わぬ骸と化した。

「拠点はどこにあるの？答えなさい」

「はい……森の外れ……あちらの方角に……」

時には、美人だが死人のように白い肌をした女が魅了魔法を用いて尋問をする場合もあった。

まるで生産工の作業風景のような、人間の命を何とも思わぬ機械的所業に、ザックは目を覆いたくなる。だが、目は見開いたままピクリ

とも動かない。眼球が乾いていく痛みに苛まれるにも拘らず、体が全く言う事を聞かなかった。

余談だが、エイトエツジアサシンは決して嘘を吐いた訳ではない。比較的楽な死因で息の根を止めてやる事は、ナザリツク地下大墳墓の面々からすれば紛れも無い”助け”なのだ。

「ご要望通り、ザツクなるものはソリュシャン殿の為に残しておきました」

「御苦労様」

エイトエツジアサシンの面々が、次々と野盗の首をへし折るのを尻目に、ハンゾーはシャルティアへ報告をした。ザツクは元々、ソリュシャンのターゲットになっていたので、一人生き延びることとなった。それが良い事であるかは言うまでもない。

「今のところ、シャルティア様のお力添えが必要な人間はおりません」  
「つまらないですわえ。人間達にはもう少おし頑張って欲しかったではありません。血しぶきもロクに見れんしんす」

「御辛抱下さいませ。『血の狂乱』対策の一環ですので」

「ま、優秀なのは良い事……」

シャルティアとしては退屈な思いではあったが、なるべく血の出ない殺し方をする事で、ペナルティスキル発動のリスクを抑えているのだ。その為に、不慣れな首折りを使って野盗達を殺害した。勿論、全員から尋問を行い、情報の整合性を高めた上でだ。

「シャルティア様、盗賊のアジトを発見しました」

エイトエツジアサシンの一人、ナガトが野盗達の拠点を見つけた。尋問の末大まかな場所を把握していた上に、探索系スキルを所有している彼らにとっては朝飯前だった。

「では野盗の巣へ奇襲を仕掛けるであります。ハンゾー達は吸血鬼の花嫁と協力して奇襲してくんなまし」

「御意」

「畏まりました」

ハンゾー達に続いて吸血鬼の花嫁二人も行動を開始した。

パンドラス・アクター、ソリュシャンとはここから別行動だ。吸血

鬼の花嫁に横抱きにされたシャルティアとハンゾー達は森の奥へと歩を進めた。

「ギィイヤアアアアアアアアア！痛い！痛いィィィィ！」

背後から、ソリュシヤンのお愉しみタイムによる悲鳴と、肉が焼けるような音が響き渡った。だが、それは最早どうでも良い事だった。シャルティアは少しだけ見てみたい気持ちもあったが、ハンゾー達の手前もあり我慢する事にした。

(遊び心が欲しいでありんすねえ……)

迅速なのは良い事だけど、もう少し遊ばせて欲しいとも思うシャルティアであった。

「吸血鬼の花嫁殿。そこにはベアトラップが仕掛けられています」

「これは……。足止めを喰らうところでした」

「後は、ナガトの後ろに続けば、目立った罠はございません」

「分かりました」

ナガトがアジトまでの引率をする。吸血鬼の花嫁は、誘導に従い疾走する。探索中、道中の罠も把握しておいた為、彼の後ろに続けば、罠にかかること無く疾走出来る寸法だ。

「探索系スキル持ちが居ると便利でありんすねえ。贅沢を言えば、私もそろそろ仕事をしたいのだけど……」

「野盗の根城に行けばマシな輩が居るのではと愚考致します」

「尋問の結果、野盗の拠点には武技を使いこなす用心棒が居ると分かっております」

「……ふん、望み薄でいんすが、期待しんしょう」

大まかな話を聞いている内に、野盗のねぐらと思わしき洞窟に辿り着いた。風景が切り替わっただけで、繰り広げられた光景は似たり寄ったりであった。

「拠点内部にも幾つか罠があるようです。念の為お気をつけ下さい」

「はいはい」

すたすたと、歩を進めるシャルティア。ここからは自分の足で歩いている。吸血鬼の花嫁達はシャルティアの後ろに控えている。

「引き続き、拠点内の探索をドウジユン達が行っております」

「はいはい……」

シャルティアは抜けた返事しか出来なくなりつつあった。先程と似たり寄ったりな、麻痺攻撃によるアンブツシユを背景として、ナガトに引率される。ここまで作業感溢れる上に何も出来ない、良い加減飽きる。「武技は持ってない？では死ぬ」「ギャア！」等と聞こえる中、次に届いた知らせは退屈のぎに最適なものであった。

「申し訳ありません……。どうやら、私の気配に気付いた者が居るようです」

「あら？そうでありんすか」

サンダユウが悔しそうに報告する。拠点内の探索中、細心の注意を払ったにも拘らず、彼の気配を看破した者が現れたのだ。『黙示録』としての仕事にケチを付けてしまった事が、どうしても歯がゆかったのだろう。己の気配に気付く程の手練。恐らくは武技持ちの可能性が高い。そう見たサンダユウは、まずシャルティアに報告する事にした。

そもそも、ハンゾー達が現在行っている仕事は、気づかれる事無く相手を無力化する事と、周囲の探索だ。出来なかった場合はなるべくシャルティアへ回す事になっている。

「貴方に気付くようでありんすから、少しだけ期待できそうですわえ。そいつの強さはどうなの？」

「恐らく我々でも単騎で勝てますが、他の人間に比べ、時間が取られるかと」

時間が取られるであろう事も、シャルティアへお伺いを立てる理由の一つだった。エイトエツジアサシンで単騎撃破が可能ならば、シャルティアが苦戦する事は無い。彼女は暇つぶしがてら、サンダユウの尻拭いでもしようかと動き出した。

「じゃあ、そいつの相手は私が担当しんす。貴方は洞窟内の探索を続行しなんし」



「……恐縮です」

スツと頭を下げ、音もなく消えた。偉大なる至高の御方に創造された守護者の一人へ、仕事を押し付ける事に罪悪感があったが、それが最善である事は嫌でも分かる。サンダユウは再度探索に徹した。

エイトエツジアサシンの気配に気付いた少しは出来る人間。シャルティアはようやく仕事に取り掛かれると目の前から来るであろう遊び相手を心待ちにしていた。洞窟の奥から現れたのは青い髪をした刀を携えた男であった。

「貴方が私のお相手でありんすか」

「……そうなるな。あんたは余り楽しそうじゃなさそうだが」

「暇を持て余していたでありんすえ。吸血鬼の花嫁に相手させようと思いましたが、良い加減運動をしたかったの。お相手してくんなまし？」

「はん、言われなくとも」

武技持ちなら引つ捕らえよう。吸血鬼の花嫁を相手の退路に立たせつつ、シャルティアは遊戯を開始した。

「シャルティア様。どうやら先の相手をシモベになさったようですね」

「汚い男でありんしたけど、アバ・ドン様が仰っていた異能与武技を所持していいんした。持って帰るのが良いでありんす……」

「ブレイン・アングラウスです。よろしく願います」

刀持ちの男、ブレイン・アングラウスとの雌雄は決した。ハンゾー達に感化されて、さっさと打ちのめしたところ、彼は涙目で敗走しそうになった。そこを吸血鬼の花嫁が取り押さえて、シャルティアが血を吸って吸血鬼化したのだ。

ラツキーな事に、彼は異能与武技の両方を所持していた。貧相な男を連れ帰るのは嫌だったが、こいつを持ち帰ればアインズから褒められるだろうと思いい、ぐつと堪える。だが、それとは別に、シャルティ

アの内から沸々と別の衝動が湧き上がる。

「あはっはははあ、でもでもでも、やつと血があ……」

「シャルティア様……?」

突然狂ったように笑い出したシャルティアに対し、ブレインは呆気に取られた。先程までの落ち着いたお嬢様の雰囲気からはかけ離れた様子だ。

「血が見れたああああああ!! あははははははははははああああああ!!」

一言で言うならば、豹変した。シャルティアは、異形の化物へと姿を変えた。眼光は赤くギラギラと光っており、口はヤツメウナギのように乱雑な牙が剥き出しになっている。

「ああああああああ!! 血が飲みたいなあああああああ!!」

(いかん! シャルティア様の『血の狂乱』が!)

ブレインを吸血した際にシャルティアは血を見てしまった。退屈の余り、少量の血にも拘らず興奮状態に陥ってしまった。餓えた狼が肉に齧り付くのも同じ原理だ。この状況は、ハンゾー達としても想定外であった。

(血を見せないようにしたのが裏目に出たか!)

「吸わせろおおおおおお!!」

「ぐわあ!」

近くに居た吸血鬼化ブレインに齧り付くシャルティア。ブレインの命が、確実に削り取られようとしていた。

「いけません! シャルティア様! これはアインズ様への供物に等しい物! このままでは干乾びてしまいます!」

「うるさいいいいいいい!!」

吸血鬼の花嫁の忠言にも聞く耳を持たない。完全に衝動に引っ張られている。

「やむを得ん! リーダー! 今こそアレを!」

「分かっている!」

(使うしか無い……! この冒流的恐るべき切り札を!!)

ハンゾーは、アバ・ドンから受け取った対シャルティア用切り札を

使う決意をした。

「シャルティア様！これをご覧下さい！」

「なあああにいいいいいい！………え？」

ブレインにしがみつくシャルティアは、ハンゾーの言葉に反応して振り向いた途端、先程までの狂乱が嘘のように静まり返り、固まってしまった。ハンゾーは、己の懐から紙のようなものを取り出し、シャルティアに見せつけるよう差し出している。

ソレを見せられた瞬間、シャルティアは物言わぬ石像のように固まった。

（ほ、本当に効いた……！）

（アバ・ドン様恐るべし……）

（これ程とは……）

（あの御方の思惑通りだったと言う事！）

（だが、本当に良かったのだろうか……？）

ハンゾー達は、アバ・ドンから託された対シャルティア用切り札の絶大な効果に舌を巻く。しかし、本当に使つて良い物だったのかという疑問が脳裏をよぎる。たとえば、アバ・ドンから託された物であり、使用を許可されたとしてもだ。

「こ、これは……これえ……」

ブレインの拘束を解き、ハンゾーの前へ急速接近したシャルティアはワナワナと震えている。

「何を……見せたと言うのです？」

「……？」

吸血鬼の花嫁達も、ハンゾーが何を見せたのか気になったのか、取り出した物に目をやると、シャルティアと同じように固まった。ただできえ良くなかった顔色が更に悪くなった。

「そ、そんな！何故そんな、そんな恐ろしいアイテムを貴方が持っているのですかっ!？」

「な、なんて冒瀆的な……!!で、でも……!!？」

辛うじて立ち直った吸血鬼の花嫁達は、目に見えて狼狽している。ハンゾーが提示した代物は、ナザリック地下大墳墓に所属する者達に

とって、見てはならぬ禁忌と言っても良い。  
「これは……これはあああああああ!?!」

「アインズ様の、<sup>もも</sup>腿チラ写真ツツツ!!」

## 奇襲

洞窟の外、シャルティアが『血の狂乱』を発動させてしまった際、ハンゾーが取り出した一枚の写真。余りにも衝撃的なその一枚に、居合わせた者全てが釘付けとなった。いつの間にか、異形の姿からいつものお嬢様姿に戻っていたシャルティアも、眷属の吸血鬼の花嫁達も目が離せない。

「こ、これが、アインズ様の大腿骨……大腿骨！ 大腿骨う!!! はあはあ……何て官能的なの……」

シャルティアは鼻息荒く頬を紅潮させ、廓言葉を忘れる程興奮していた。

その写真に写っているのは、死の支配者然としたアインズその人。玉座の階段を降りる姿を撮らえた一枚は、ローブが下からフワリと翻り、人間で言う所の太腿まで見えている状態だった。何故階段を降りただけでこんなにもローブがめくれるのか？ 大きな違和感があったが、そんな事は些事と言わんばかりの破壊力が、大腿骨には確かに存在した。

「これは、エルダーリ……ぶげあ!？」

ブレインが”エルダーリツチ”と言うよりも早く、シャルティアの裏拳が顔面に叩き込まれた。木を2、3本程へし折りつつ、ブレインは吹き飛んでいった。頭に血が上った故の一撃だったが、幸い致命傷には至らなかった。

「お前、今なんつったあ!?! この世で何よりも尊く美しい至高の御方を、言うに事欠いてエルダーリツチだ?!? 何て口の利き方をしているっ!!」

「ず、ずびばせん……」

ひしやげた顔をじわじわと回復させつつ謝罪をする。ヴァンパイアとしての再生能力のおかげで、ブレインの傷は回復していた。もし、彼が武技と異能を所持していなかったら、満場一致で処刑されていたであろう失言だったが、利用価値を優先して今はまだ不問とした。

ブレインは、写真の人物（？）がとてつもなく偉い人であり、これから自分が所属する組織のトップなのだろうと認識した。彼女程の強者が狂信とも言える程の忠誠を誓う、この御方がどれ程の力を有するのか？今のブレインには想像だに出来なかった。

「これはアバ・ドン様より託された物。シャルティア様にご乱心なされた時、即座に使うよう命じられておりました」

「そ、そうなのですか……」

「これを、アバ・ドン様が……」

顔を擦るブレインは放っておき、吸血鬼の花嫁は愕然とする。アバ・ドンがどうやってこの写真を入手したのかは分からなかったが、冒険の極みと言えるこのアイテムを、躊躇無く投入出来る決断力。そして目の前の完璧と言える結果は、至高の一手だと言わざるを得なかった。

「おかげで正気に戻れたでありんすえ。礼を言いんす。……すごい写真。はあはあ」

「……いえ、役目を果たしただけの事です」

「……」

ブレインは、今のシャルティアを正気と言えるのか疑問だったが、口が災いの元になる事をさつき理解したばかりなので、口をつぐんだ。

「で、その素晴らしい写真は役目を果たしたらどうするでありんすしやう？」

「分かりかねます。至高の御方々に乞う他ありません」

「やっぱそうなるでありんすね。名残惜しんすが、今はそれよりも……」

写真が気になって気になって仕方が無いが、今は状況を改めて把握せねばならない。『血の狂乱』のせいで記憶が曖昧になっている部分を埋め合わせる為だ。たとえ暴走が短時間だったとしても必要不可欠であった。

「改めて、戦況はどうなっているでありんす？」

「はッ、野盗は壊滅しました。サンダユウが拠点内部に隠し通路を発

見しましたが、使用された痕跡は無く、逃がした者はおりません。ブレイン、一応聞く。間違いないか？」

「えー、間違いない……です。傭兵団『死を撒く剣団』七十名弱、全員死にました」

「名前はどうでも良いでありんすけど、それは重畳」

「それと、野盗の性欲処理に使われていたと思わしき女が何人かおりました。意識は朦朧としており動けぬ状態ですが、如何致しましょう？」

「うえ、ちよつとばつちいでありんすね……。供物には程遠そうでありんすが。ちよつと興味があるから、暫く残してくんなまし」

「御意」

シャルティアが気を取り直して平静になった頃、宵闇の中から、音もなく現れた影が一つ。拠点周辺の偵察に当たっていたドウジユンが戻ってきた。

「シャルティア様、所属不明の団体を二つ発見致しました」

「聞кинしょう」

「はい、まず一つは、野盗達と大差無い程度な上少数でした。姿を見られる事無く、眠らせて無力化しました」

「眠らせた？殺したのではなくて？」

「恐らく、野盗討伐の団体と推測致しました。正規の人間らしく、冒険者モモン様の同僚である可能性を考慮して、命は奪っておりません」

「納得したのでありんす。で、もう一つは？」

「それが——」

ドウジユンの表情が曇る。話によると、もう一つの集団は十二人の男女で内一人が老婆。個性的な装備を持つ者ばかりだったが、一部の装備がかつて捕えたスレイン法国の者と類似していた。

距離は取っていた筈だが、即座に迎撃態勢に入られた為、撤退した。装備の格も、着用している者達の強さも段違いだった。特に、老婆が着用していたドレスからはただならぬ気配を感じる。

生憎、エイトエツジアサシンはアイテムを鑑定するスキルを持ちあわせていない為、詳細は掴めなかった。それでも、謎の集団がかなり

ハイレベルである事と、装備がかなりのクラスである事は察知出来た。ハンゾー達の危機管理能力の高さが功を奏する結果となったのだ。

尚、追跡を避ける為、スキルを併用してフェイントをかけつつ逃げた為、自分達の場所は割れていないらしい。

「ブレイン、お前の話も参考に聞かせろ」

「……多分、眠らせた方は仰る通りの冒険者。もう片方の強い集団つてのは……すみません、俺も分かりません。えーっと、貴方は……」

「ハンゾーだ」

「どうも。シャルティア様はおろか、ハンゾーさんより強い冒険者はアダマンタイト級ぐらいなものでしょう。アダマンでも怪しいですがね。この近辺にそれ程の団体が来てるなら、俺達の耳にも届いてた筈ですよ」

「ふーん」

シャルティアはほんのちよっぴりだけ感心した。これの意見は中々どうして参考になる。守護者等に比べて遥かに矮小な分、物差しサイズもそれ相応。おかげで思わぬ所で役に立った。

(もう、何回心が折れたか分かんねえな……はは)

ブレインは、シャルティアの眷属になつてからもエイトエツジアサシンの殺戮作業を見ていた。その技術と強さは、何故自分を見た途端撤退を選択したのか分からなかった程だ。最早言葉も無い。

「スレイン法国に近しいならば、既にアインズ様とは敵対関係。さつさと対処した方が良いでありんす」

「畏まりました」

「よし、ようやくアインズ様の為に働けるでありんすね！待ちくたびれたわよ!?!もうー!」

「はあ……」

ブレイン相手は働く内に入らなかつたらしい。今のところロクな仕事が出来てないどころか、『血の狂乱』で足を引っ張ってしまったシャルティアは、やり場の無い怒りを感じていた。シャルティアはやつと本腰を入れられると躍起になる。怒りをやる気に変えて、職務



を全うする所存だ。

「それでハンゾー。相手は偵察に気付いて警戒態勢であります。どの作戦で行くでありますしょう？」

「……………では、”プランA”で行きましょう。我々が蟲玉を投げたら手筈通りをお願いします」

（プランA？・蟲玉？）

ブレインは首を傾げる。詳細を知るのは自分以外の者達のみだ。

”プランA”でいんすね？分かりんした。……………それにしても」

「何でございましょう？」

シャルティアは、ハンゾー達が懐に忍ばせているアイテムに付いて、気になる事があった。

「その蟲玉とやらは、アバ・ドン様お手製のアイテムであります。使うのが勿体無いと思いません？それを持つてる事実だけでも羨ましいであります！」

「お、思わなくてもありませんが…………。アバ・ドン様からは『使ってななぼ』と仰せつかっております。出し惜しみは致しません」

「…………それなら仕方ないわえ。じゃあ後は任しんす」

「はッ」

「吸血鬼の花嫁とブレインは、この場で新手が来ないか見張ってくんなまし。私とハンゾー達ばかりきりになるでありますから」

「はい」

「行つてらっしゃいませ、シャルティア様」

吸血鬼の花嫁とブレインに待機を命じ、行動を開始した。

シャルティアは、空高くへと舞い上がる。その最中で、衣装が真紅の鎧へと変化し、スポイトの形によく似た槍のような物を装備する。その様相は、ユグドラシル時代で言うところのヴァルキリーに近い物であった。

（プランAねえ…………。そこまで警戒する必要がありませんでしょうか？まあ、アバ・ドン様の言い付けなら守る他ないですわえ）

相手に対して過剰に警戒しすぎではないかと思うが、それでも主の言い付けを破る理由にはなり得ない。完全武装した姿が月明かりに

照らされている。その姿は、戦乙女のようにも、極限まで美化された悪魔のようにも見えた。

「では、準備をしておくでありんす。＜眷属召喚＞。そして……＜エインヘリヤル＞」

呼び掛けに応じ、無数の蝙蝠が呼び出され、シャルティアの傍らから、自分と同じ強度を有した白塗りの分身が現れた。

## 汚食事会

スレイン法国は浮き足立っていた。

法国神官長直轄特殊工作部隊群、六色聖典が一つ、陽光聖典。リ・エステイーゼ王国の派閥争いを止めるべく、ガゼフ・ストロノーフの抹殺を試みようとしたが、部隊は壊滅。隊長のニグン・グリッド・ルーインも消息を絶つ。

陽光聖典の監視を担当していた土の巫女姫は突如として爆発四散。周辺の建造物を巻き添えにしながら無残な最期を遂げる。

カタストロフ・ドラゴンロード  
破滅の竜王の復活が予言されていた中、法国は数々の損害を被った。いよいよもって予言が真実味を帯びてくると、スレイン法国最強の特務部隊、漆黒聖典が立ち上がる。更に、破滅の竜王に対抗すべく、スレイン法国の秘宝中の秘宝、ケイ・セケ・コウクを携えたカイレも同行。万全の備えを以て、近隣の調査に赴いた。

現在地は、エ・ランテル近郊の森。鬱蒼と生い茂る木々の合間を縫うように進み、開けた平地に差し掛かったところだ。

（カイレ様は、何としてもお守りせねば……。頼むぞ、セドラン）  
鏡のような反射光を放つ大盾を構える筋骨隆々とした男。”巨盾万壁”の異名を持つセドランが、カイレの前に立ち、周辺の警戒をしている。銀色のチャイナドレス、ケイ・セケ・コウクを纏う老婆、カイレを囲むように陣を組み、歩を進める。

そんな最中、正体不明の魔物に遭遇した。八本の刃を持つ蜘蛛型の魔物、気配遮断を用いて接近してきたが、それを看破するとすぐに撤退した。魔物の筈なのに、高位の装備を身に纏っており、漂う殺しの気配は漆黒聖典を以てして手を焼く程のモノであった。

「隊長、先の魔物は、斥候か……？」

「恐らくそうだろう。しかし、あれ程の魔物を斥候として使う等……。差し向けてきた輩は相当な力量を持っているだろう」

「ああ」

セドランは、いずれ接触するであろう恐るべき魔物を警戒する。先程の八本刃の魔物は、異形の様相を持ちながら、一定の秩序と技術を

感じさせる諸策を見せた。高位悪魔が差し向けた眷属である可能性がある。それこそ、カタストロフ・ドラゴンロード法国が最も恐れていた破滅の竜王の刺客かもしれない。

漆黒聖典のメンバーには相手の強さを計測出来る探知系能力者がいるので、敵の力量をある程度推し量る事が出来た。

「……む!?」

全方位を漆黒聖典で固め、中心にカイレがいる状態を維持しつつ魔物を警戒していると、外れの茂みからソフトボール大の大きさをした紫色の結晶体が三十個程飛んできた。

放物線を描きながら輝く水晶は、禍々しいオーラを放つ。

「……魔封じの水晶!?」

「破壊しろ!」

危険を察知した漆黒聖典は、すぐさま魔法によって迎撃。対象を消滅させようと試みる。

「割れないっ!? 回避!」

結晶体は、攻撃が当たる直前に防護壁のような物に阻まれ、全て地面に落下すると粉々に砕け散った。漆黒聖典は、魔封じの水晶に酷似した紫の結晶から現れるナニかに注意を向ける。割れた水晶から、蠢く大量の生物らしき物が飛び出した。

「蟲か!」

拳大程度の大きさをした、極彩色の蟲達であった。漆黒の羽蟻。青い金属光沢の羽を持つ蝶。鋭い顎を持ち、飛翔する赤茶けたクワガタ。毒液を蓄えた蠅など、雑多に渡る。容貌に統一感は無かったが、全ての蟲が例外無く、漆黒聖典へと牙を剥いた。水晶の質量からは考えられない程の、膨大な数の暴力が、獲物に襲いかかった。

「クアイエッセ!」

「出る! クリムゾンオウル!」

漆黒聖典第五次席、通称一人師団。クアイエッセ・ハゼイア・クインティアは優れたビーストテイマーだ。数対数に持ち込む為、自身の手駒であるモンスターの中でも数多く呼び出せる物を召喚する。このような事態は、彼の得意分野だ。

「キー！」

現れたのは真紅のフクロウだった。

従来よりも二回り程大きく、鋭いクチバシと爪を持ったフクロウは、現れるや否や蟲達に迎撃を始める。色とりどりの蟲と真紅のフクロウによる激突。クリムゾンオウルが鋭い爪で蟲の一匹を蹴るが、素早く身をかわされ空振りに終わる。

「ギイツ!？」

クリムゾンオウルが悲鳴を上げる。横合いから飛んできた別のクワガタ形の蟲がクリムゾンオウルに密着したのだ。バタバタと羽ばたき振り落とそうとする前に、グシャリと水風船と木の枝を握りつぶしたような音が響いた。

クワガタ形の蟲は持ち前の顎でクリムゾンオウルの首を切り落としたのだ。半端に切り落としたせいで、首が付け根からダラリとぶら下がっている。

「強い!？」

噴水のように首元から鮮血が噴き出すも、そんな事はお構いなしにクワガタ蟲は切り落とした患部からクリムゾンオウルの体内に潜り込んだ。クアイエツセは、得意の使い魔が餌食になっていく光景に驚きを隠せない。

首を切り裂かれたクリムゾンオウルが、ボコボコと泡立つように体をゆすり動かす。潜り込んだクワガタが暴れているのだろうかと警戒している、クリムゾンオウルの死体が破裂し、質量からはありえない量の蟲が飛び出した。先程潜り込んだクワガタ蟲と同型の魔物だ。

「クリムゾンオウルを餌にして増殖しただと!？」

おおよそ蟲の生態系からは考えられない繁殖と成長は、クアイエツセの顔色を悪くする結果だ。使役するモンスターを媒介に、余計な敵を増やしてしまった。クリムゾンオウルを引っ込めようと思った頃には既に手遅れで、真紅色の体を更に色濃い鮮血で塗りつぶされる。地に落ちたフクロウの体へ蟲が次々と侵入する。

クリムゾンオウルは全滅し、全て蟲達への贄となってしまった。

だが、漆黒聖典もただでやられる訳には行かない。各々が迎撃をし、蟲達は少しずつ数を減らしていく。セドランの盾が金属をぶつけたような異音を響かせていると、ここで更に増援が現れた。月夜に照らされ羽ばたく、漆黒の群れが押し寄せてくる。

「エルダー・ヴァンパイア・バット  
古種吸血蝙蝠!」

弱り目に祟り目とは良く言ったもので、蝙蝠系の魔物としては最高峰と言われている古種吸血蝙蝠の軍勢までもが、漆黒聖典に襲い掛かった。夜空の向こう側から現れた漆黒の大蝙蝠が涎を垂らし、大口を開けて喰らいつこうと跳びかかってくる。

「嘘、何で撃てないの!? ツ!」

隊員の一人である女性が悲鳴にも似た叫び声を上げる。

魔法で迎撃しようにも、何故か行使する事が出来ない。自分が貯蔵する魔力が、穴が空いたかのように次々と抜け落ちていく感触は、恐らく蟲の毒による効果だろうか。

「うっ!」

女性の頭上で、青い蝶が羽ばたき鱗粉を撒き散らしていた。体に纏わり付いた鱗粉から、風船が萎むかのように、魔力が漏れだしていった。原因はこの蟲だったようだ。

一匹一匹ならば仕留めるのも容易だが、数の差が大きすぎる。範囲攻撃を封殺された状態での数の暴力は、隊員達の体力を削り取っていく。幼い容貌をした漆黒聖典隊長が、槍を用いて次々と払い落として奮戦するも、他の隊員が何人か餌になっていった。

「何て魔物だ! 魔封じの能力を有しているのか!」

「いッ! 痛い! 痛い!! イギッ! イギギイイイイイ!!」

蟲達は、隊員の一人らしき眼鏡をかけた女性の服に潜り込み、次々と皮膚を食い破る。潜り込んで突き立てた牙に含まれる毒と酸は、隊員が金切り声で叫ぶ程の苦痛を伴った。肉が焼かれ、腐り落ちていく音が耳に響くが、蟲達の無節操な足音で掻き消されていく。

耳元で脳みそを食い荒らされる感触を味わいながら、女性隊員はゆっくりと絶命した。

「何故だ!? 装備が、装備の効果が見れない!」

更に、変化が見られたのは隊員達の装備だ。法国より貸与された珠玉の装備が、羽蟻にたかられ、酸のような液体を塗りたくられる。瞬間に装備が色を失い、高速で腐り落ちるミシミシとした音を立てている。古びた木製の廊下を歩くような異音だ。

実は、装備の質が良かった為、一時的に装備の効果を無効化、又は劣化させるだけで済んでいたのだが、隊員の隙を作るには充分すぎる効果があった上、そうだと理解する暇も漆黒聖典には無かった。頼みの綱の一つが千切られた事は、漆黒聖典への大きなダメージとなった。

「魔力封じに装備劣化の能力まで……。我々の装備に通用させるとは、何て蟲だ……！」

「うわあああああああ！」

「エドガール!？」

蟲と吸血蝙蝠による数の暴力で、隊員が一人また一人と犠牲になっていく。第七席次、通称“神領縛鎖”のエドガールは魔力を根こそぎ奪われ、一時的に装備の能力も失った結果、為す術無く蟲達の餌になった。人型の蟲塊と化したエドガールを媒介に、ボコリと蟲が湧き出した。

「ぐぎいつ……ぎつ……あが……」

「……」

「セドラン!?クアイエッセ!!」

大盾を構えていた男は既に、蟲の海に吞まれていた。朽ち果てたような変色を果たした大盾がガランと転がった。ほぼ同時に、クアイエッセも喰われた。

隊員の悲鳴が掻き消え、変わりに夥しい羽音が体の穴を通して響く。犠牲になった隊員が繰り返し媒介となり、追いつかぬ打ちをかけるかの如く蟲が飛び出した。漆黒聖典を取り囲む周辺は、空も大地も全て蟲と蝙蝠で埋め尽くされている。犠牲になった隊員は既に影も形も無く、装備を除いた全てが蟲達に捧げられた。

(カイレ様だけは！なんとしても！)

生き残ったのはカイレと隊長のみとなった。カイレを守り抜くべ

く、無数の蟲と蝙蝠を持ち前の膂力で払い落とし薙ぎ払っていく。いよいよ地面まで蟲達に埋め尽くされ、ジリ貧に嘆いていると、一部の蟲達が不意に隙間を空けた。異種同士だというのに統率された動きを見せ、蟲と蝙蝠の壁にぽっかりと人間大の穴が空く。

「ッ!?!」

空いた穴の向こう側から真っ白な飛行体が急襲してきた。飛来したのは羽を携えた鎧を纏う少女。奇妙な事に、鎧も、顔も、手に持つ槍も、全てが不気味な程真っ白であった。

「……」

——強い。装備も戦闘力も、自分を凌駕する相手だと隊長は確信した。

肌も鎧も真っ白な少女が襲い掛かる。全てが白で統一された少女は、不思議な形状の槍を振りかぶり、隊長の体を貫こうと無表情なまま槍突撃を繰り返す。無造作でありながら、その一つ一つが恐るべき破壊力を秘めていた。凄まじい集中力を用い、辛うじて受け流していたが……。

代償に悲劇を招いた。

「カイレ様ー」

「ぐううー」

白い少女に気を取られている内に、カイレが蟲にたかられてしまった。白銀のチャイナドレスを残し、全身が蟲まみれになっていく老婆を助けようにも、目の前にいる白い悪魔が邪魔をする。

「くっ……」

これ程の力を持った相手が、ここまでの奇襲作戦を取るなど考えられるだろうか。だが、今日の前でそれが起こっている。最早死を覚悟する他無い。隊長は命を賭してカイレを守り通そうと動くが、それは徒労に終わってしまう。

「せめてケイ・セケ、ぐふっ……がっ」

隊長は突如、胸部に焼けるような痛みを覚えた。それと同時に、白い少女の槍が腹部を貫く。

計二つの槍が突き刺さったようだ。



胸元を見てみると、白い槍の真上で、青白く輝く光槍が心臓を貫いていた。眩く輝く光の槍は、間違いなく隊長の急所へと突き刺さっている。

「こ、こ……これ……は……」

口から大量の血を吐き出した。地面を埋め尽くすほどにまで増殖した蟲の何匹かにかかり、膝から崩れ落ちる。己の肉体が蟲に吞まれていく感触は、怖気が走った。

「カ……イ……」

意識が途切れたのは、カイレが光槍に顔面を貫かれ、脳漿を撒き散らすと同時だった。

## 狂喜乱舞

シャルティアの報告が終了。臣下の礼を取ったまま延々話した上に、ちよつともぞもぞする事があったけど、何か事情でもあるのだろうか？

……まあいいや、事の詳細を俺とアインズさんは把握した。周囲にいる階層守護者達もそうだろう。ハンゾー達も良い仕事してくれたように何よりです。

「以上で、報告を終了致しんす」  
「うむ」

（蟲玉はバツチリ効果があったようですよ）

（蟲玉……。蟲封じのアレですか）

（はい、アレです。使わず仕舞いだったので大盤振る舞いしました）

蟲玉。核となったアイテムの正式名称は蟲籠の水晶。この世界でも見つかった、魔封じの水晶の蟲系異形種限定版と考えれば良い。魔封じの水晶と違い、蟲系モンスターでさえあれば複数閉じ込められるのが特徴で、俺の持っている蟲の中でもとびつきり強力なヤツをたっぷり詰め込んだ。

課金アイテムなので、おいそれと使える物ではなかったのだが……。昔、俺とるし★ふぁーさんとウルベルトさんで、この蟲玉を利用した対敵ギルドバイオテロ計画を打ち立てたんだっけ、懐かしい。これ、割り勘で買ったんだよなあ。その時の余りがこの蟲玉って訳。（敵の具体的な強さは分からず終いでしたが、危機を回避出来たので御の字でしょう）

（ですね。アバ・ドンさんがシャルティア達の作戦を具体的に煮詰めたのは正解でした）

「プランAは上手く機能したようですね」

「はっ！アバ・ドン様が立案された作戦により、不確定要素を排する事が出来ました！」

「あはは、まあ、立案と言うよりは昔取った作戦の再利用とでも言いましょうかね」

「……そうなのですか？」

「ええ」

「アバ・ドンさん。プランAって、ぷにつと萌えさんが提案した戦法の一つでしたよね。どんな作戦でしたっけ？」

「囷を使った奇襲作戦です。対ギルド戦に使った時は確か……。俺が攪乱して、茶釜さんが盾になって、ペロさんが遠距離ぶっぱだったかな」

「うわあ」

「うわあってなんですか。ん？と言うことは……」

「アインズさんとの内緒メッセージで、俺はある事に気が付いた。」

「今回の作戦が上手く行ったのは、ある種必然だったかもしれないよ？」

「と、申されますの？」

「アバ・ドン様、どういう事でありんすかえ？」

「シャルティア達は興味津々の様子だ。説明するでしょう。」

「プランAは昔、私とぶくぶく茶釜さんとペロロンチーノさんで実行した作戦です。私が担当した所にハンゾーさん達。ぶくぶく茶釜さんがエインヘリヤル。ペロロンチーノさんがシャルティアさんに当てはまる訳ですから、中々に縁を感じましてね」

「そ、そうだったでありんすか！」

「おお……至高の御方の足跡を辿れた事を光栄に思います！」

「シャルティアとハンゾー達は随分と嬉しそうだ。それ程の事なのだろうかとも思うが、アウラが小声で「良いなあ……」って言ってる辺り、NPC達にとっては重大な事だったのかもしれないな。」

「ギルドメンバー達の作戦をお前達が引き継ぐ……。確かに、縁を感じるな」

「アインズさんがしみじみと呟いた。ギルメン達との思い出であるが故に、アインズさんとしても思う所があるのだろう。」

「……さて、本命に入るとしよう。報告されていたアイテムを見せて貰おうか」

「はッ、こちらに」

話題はアイテムの件に移る。アインズさんが促すと、ハンゾーが綺麗に畳まれた銀色の服を俺達の前に差し出した。……誰が畳んだんだろう。まさか、ハンゾーか？

「……」

俺もアインズさんも、そのアイテムが放つ雰囲気と言葉が出ない。銀色をベースに、金色の龍が編み込まれたチャイナドレス。一見普通の高級服にも思えるそれだが、俺の勘が告げている。これは……ヤバい！

（あ、アインズさん……これ……）

（分かっています。では早速……）

「……よし、鑑定するでしょう」

「……この瞬間はいつでもたまりませんね」

「全くだ。では、《オール・アプレーター・マジックアイテム／道具上位鑑定》」

未知のアイテムを鑑定する瞬間と言うのは良い物だ。それがレアアイテムであるのなら尚更。

「……これは」

アインズさんが道具鑑定をすると、様子が急変した事に気付く。鑑定の為に差し出した腕がふるふると震えている。表情は分からないが、何か大きな驚きに遭ったかのような動作だ。急にだんまりしちやった為か、アルベドが心配そうだ。

「あ、アインズ様？」

それが伝播したのか、他のNPC達もアインズさんの様子に居ても立ってもいられないといった様子。よし、ここは俺が話を聞くべきところだろう。

「……」

「アインズさん、どうでしたか？」

「……やった」

「へ？」

何をやったと言うのだろうか。

「……お前達っ！よくやってくれたあ！大手柄だぞ!!」

「は、はひ!?!」

静寂からの急転に、シャルティアが変な声を上げた。玉座の間にいる一同が、目を白黒させている。みんなアインズさんの大声に驚いたのだろう。こりや相当だな……。

## 褒美

「あ、アバさん！アバさん！世界級！世界級アイテム手に入った!!」

魔法による鑑定を終え、シャルティア達を褒めたアインズ。彼は興奮をそのままに、アバ・ドンへと結果を伝えた。

「まま、マジっすか!？」

世界級との言葉に、アバ・ドンは飛び跳ねるよう立ち上がった。座ったままの姿勢、膝だけで凄まじい跳躍を見せたその様子は、熱気が彼にも伝染した事をありありと証明していた。先程まで冷静にアインズの事を見守っていた様子はどこへやらだ。

「そうですね！名前は傾城傾国！効果は対象への洗脳！連続使用は限られるみたいだけど、それでも世界級であることは事実ですよ！」

「それだけ聞くと微妙な気がしなくてもないですが……そう、世界級となると……!」

クワツと、アバ・ドンの目が見開かれたような錯覚さえした、そもそも瞼が無いのだが。

「ええ！ええ！まだ未検証ですけど、恐らく相当なクラスの敵でも問答無用なんでしょう！なにせよこれは大きいです！ああ、アトラスさえ取られてなければ数は……」

「そこは、取られた分をトントンに出来たと考えましょう、モモンガさん。これは再びアインズ・ウール・ゴウンが一桁クラスのランカーギルドとして返り咲く日も近いですよ！」

「そうですね！いやー……あつ」

「え？……あ」

ふと、アインズとアバ・ドンは我に返った。今、自分達がどこにいて、どのような状況であったかを失念していた。一部の異形種特有の精神安定化が発動し、ようやく思い出したぐらいだ。世界級アイテムが手に入った事実はそれだけ二人にとって大きかったのだ。

自分達に注ぐ視線の気配をそつと辿り、そちらを見てみれば。

そこには階層守護者を始めとするナザリツクの配下達が呆然としていた。

「……」  
「……」

—— やっちまった。

皆が皆それぞれに驚いているのか呆れているのか分からないような状態。それぞれが目を見開く等し、そのままの表情で固まっている有様である。デミウルゴスに至っては、眼鏡越しに彼固有である宝石型の眼がよく見える。あれ程目を見開いているデミウルゴスは初めて見たな—と、現実逃避気味にアインズは思った。

アインズ、もといモモンガとアバ・ドンは大失敗をしてしまった。自分達が配下を緊急招集し、その場でアイテム鑑定を行った直後であることをすっかりと忘れてしまっていた。よりにもよって、主要な配下を招集したこの場での失敗。余りにもタイミングが悪すぎた。繰り返し言うが、それだけ世界級アイテムの衝撃が大きかったのである。

まずい、どうするか。

幸い、再び精神が安定化したため、この場をどう切り抜けるかに考えがシフトしていたが、いかんせん良い手が思いつかない。この場でぽか—んとしている部下達に先程の大はしやぎな姿についてどう弁明したものか。

固まり切った空気を流動すべく、最初に口を開いたのはアバ・ドンであった。

「……ふふ、失敬。年甲斐も無く大はしやぎしてしまいましたね」  
「……あ、ああ、私達としたことが。少しばかり喜びすぎてしまったよ  
うだ。すまないな、忘れてくれ」

二人は潔く客観的な事実を述べた。これはもう弁解ではなく事実を認めて謝罪した方が見苦しくないだろうと判断したのだ。モモンガも、ならば自分もそうするしかないと後に続く。最後の”忘れてくれ”の一言がとても切実だった。忘れたいとも言える。

セバスに伸されたどこかの冒険者達に近い気持ちを、自分達も味わ

う羽目になった。

「畏まりました。アインズ様、アバ・ドン様」

しかし、二人がそう言った後ならば、部下達の行動は早い。デミウ  
ルゴスを皮切りに、素早く気持ちを切り替え、至高の二人からの言葉  
を姿勢を正して待つ。この時ばかりは高すぎるとも言える忠誠心に  
感謝せざるを得なかった。

気を取り直し、二人は玉座に座り直した。

「今しがた、私とアインズさんがつい、ほ、ほんの少し大喜びしてし  
まったのには理由があります。先程アインズさんが仰った通り、この  
チャイナ服、えー……」

(傾城傾国です)

(すみません、モモンガさん)

「失礼、この傾城傾国。最高峰のレア度を誇る世界級アイテムが手に  
入ったからに他なりません」

玉座の間が、ほんの一瞬程どよめいた気がした。ナザリックの配下  
としてこの場にそぐわない程、部下達の反応も大きかった。

「アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーを以てしても、二百ある  
内十程度の入手に留まっている。たとえば、アイテムのレア度が推し  
量れるでしょうか？」

そもそも世界級アイテムを二桁も所有しているアインズ・ウール・  
ゴウンが異常なのだが、部下達の信奉をよく知るアバ・ドンは事の大き  
さを理解させるために、敢えてこのような言い回しを取ったのだ。

招集された部下達の中から感嘆の声が上がる。今の一言で、目の前  
にある龍の刺繍が施されたチャイナ服への注目度が更に増した。

「はい、確かに承っております」

アルベドが然りと返事をする。

モモンガが事前に世界級アイテムの超絶レアっぷりとあまりにも  
強大な効果。そして、他の世界級アイテムへの対抗手段となる事な  
ど、その重要性和希少性を口が酸っぱくなるほどしっかりと説明して  
いたからだ。

アインズ・ウール・ゴウンが所有する世界級アイテムを貸与するに



当たり、アバ・ドンの発言と同様、事の大きさをしっかりと伝える為の措置だ。勿論、部下達は厳命としてしかと受け止めた。

「シャルティア達の手柄はそれだけ大きいという事だ。最早大手柄という言葉でも物足りないくらいだがな……」

「そ、それほどまでにでありんすか……!」

その事実シャルティアは驚愕するしかなかった。その驚愕ぶりには先程モモンガ達が見せた大はしやぎとほぼ同様だ。まさか、取り敢えずと持って帰って見たチャイナ服が、厳命されていたソレであると同時に、至高の御方ですら大喜びしてしまう程のレアアイテムだとは思ひもしなかった。当然、ハンゾー達も同様である。

「命令をこなした者達には褒美を取らせる予定だったのだが……さて、どうしたものか」

「そ、そんな!褒美等と、御褒め頂けるだけでも至上の喜びでありんす!」

「シャルティア様に同意致します!我々に褒美は……!」

「まあまあ、そう言わずと。でなければ、私達の気が済みませんよ。貴方達が成した大儀は、言葉どころか多少の褒美では物足りません」

「うむ、全くだ」

「な、なんと勿体なきお言葉……。それだけでも、私達は報われた思いですわえ……」

事実、シャルティアとハンゾー達はその手厚い褒め言葉だけでも充分すぎるほどの褒美だと思っていた。事実、シャルティアは頬を上気させ上も下も大洪水だ。

だが、それでは御二方の気が済まない。どうすればいいでありんしよう、ナザリック配下としては贅沢極まりない悩みを抱えてしまった。

(ぐぬぬ……アインズ様から引き離れた事が仇になるなんて!)

その様子にアルベドは凄まじい嫉妬心を抱えていたが、巧妙に隠し通した。

一方、アバ・ドン達もそう言いつつ、モモンガ共々悩み始めていた。実を言うと、頭を抱えてしまいたかった。

——世界級アイテムゲットに対する褒美ってどうしたらいいんだ。

二人とも重度という言葉すら生温いガチ廃人のユグドラシルプレイヤーだ。その為、世界級アイテム入手という事の大きさを、誰よりもよく理解していた。シャルティア達が成した事は、言うなれば、世界を一つこの手にしてきたと同義なのだ。

かつて、とある旧独軍軍人が、余りにも多くの手柄を立て過ぎてしまった為、時の独裁者が彼に与える勲章について大いに悩んだという事例があったのだが、まさにその状態と言うに相応しいだろう。

「まずは手始めに、何が欲しいか言ってみるが良い。叶えられる範囲ならばどんな事でも構わんぞ？何なら複数でも良からう」

「ど、どんな事でも……複数……」

シャルティアは愛しの主の言葉を反芻すると、喉をごくりと鳴らし鼻息を荒くしながら大いに悩んだ。

「ど、どんな事も複数などと！そんな羨ま、シャルティアが何を要求するか分かったものではありません！」

何故かアルベドが狼狽えながらアインズに進言した。アウラとマールレがうんうんと頷いている。二人も同様の意見であるようだ。

「ド、ドンナ事デモ……」

一方、何故かコキュートスも喉を鳴らしていた。

「シャルティアさんもそうですが、勿論ハンゾーさん達もですよ？」

「わ、我々も……むむむ」

ハンゾー達も、コキュートスに続いた。蟲系特有の無表情であろうとも、その喜びと迷いは脇で見ている守護者達も手に取るように分かる程だ。守護者と言っても、コキュートスはそれどころではなさそうだったが。

「お前たちは何を想像してるんだ……。まあ良い。多少の事ぐらいは聞き入れる度量はあるぞ？」

「で、でしたら……」

「何だ？」

シャルティアは目を見開き、己の欲望を口に出す。

「アバ・ドン様がハンゾー達にお預けになった、あの写真を頂戴したく存じんす!!」

「……へ？」

### 第九階層、円卓。

アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー達のホームポイントに設定されている、この場所で、モモンガとアバ・ドンは話し合っていた。

任務の報告については一段落し、緊急招集された面々も各々の持ち場へと戻っていった現在、二人は目下の悩みについて話し合っていた。

「まさか、世界級アイテムを持ち帰ってくるとは……ユグドラシルの面々でも一苦労だったと言うのに」

「スタートダッシュってレベルを超越してますねえ。……ちよっと妬けます」

二人は世界級アイテムが入った事を喜ぶと同時に、配下のNPCがあっさりと世界級アイテムを入手した事実が、元ユグドラシル廃人として少し悔しかった。最も、割合としては喜びの方が大きいので、別に機嫌が悪い訳ではない。

「褒美にあの写真あげる事になっただけど……いいのか、あんなので」

モモンガとしては世界級アイテムの対価が自分の写真、しかも腿チラ写真などと納得しかねていたが、結局はシャルティアの意見を尊重する事にし、見事写真を入手出来た。本人としては大勝利である。

「モモンガさんの腿チラ写真、作って正解でしたね。シャルティアさ

んがモモンガさんの骨格を恍惚の表情で褒め称えた話を聞いて閃きましたから」

「少し恥ずかしかったですけど効果があつたし……良いのかなあ？」

「ペロロンチーノさんの性的嗜好とシャルティアさんの性的嗜好と需要に鑑みてあれが健全かつベストなラインかと思えますよ」

「まああれぐらいなら……それにしても、今回は最良の結果に終わりましたか……」

ふと、腿チラの話については切り上げ、モモンガは真剣な面持ちになる。

「シャルティアさんとハンゾーさん達が接敵したと言う勢力は……」

「少なくとも世界級アイテムを所持出来る程です」

アバ・ドンも同様だ。世界級アイテムを所持する勢力の存在は、自分達にとって絶対に無視出来ない存在だ。アバ・ドンの蟲玉によってボロボロになった防具を回収した結果、以前戦ったスレイン法国の装備と類似点がある事が判明した。法国の仕業だとは断定出来ないが、関係者の可能性は非常に高い。

「最悪シャルティアさんが洗脳されていた可能性もあつた訳ですから、手放しには喜べないな。……さつき手放して喜んじやったけど」「それは言わないで下さい……アバさん。もし、もしもですよ？あの傾城傾国の魔の手がシャルティア、延いてはアバさんに及んだとしたなら……ぞっとしますよ」

モモンガが両手の拳を力一杯握りしめ、カタカタと震わせている。その震えは恐怖ではなく、怒りの籠もつたものである。程なくして震えが止まったのは精神が安定化したか為だろう。

「いや、プランAで行って本当に良かった。むしろ、もっと慎重に行っても良かったかも……」

「より一層情報収集が必須になりましたね。一先ずはセバスが回収した人間から話を聞いてみましょう。なんでも悪の秘密結社ズーラーノーンの一員だそうで、何か良い情報を持っているかもしれない。これまた慎重にやらないと、ニグンの二の舞になりかねませんけど……はあ、慎重の連続だなあ」

モモンガはやれやれと頭を抱える。しかし、アバ・ドンはその様子に頼もしさを感じていた。カリスマが在るか云々は、人を見る目など素人同然の自分には分からないが、少なくとも、今この場でナザリックの未来を考えるこのギルドマスターの姿は、ナザリックのトップとしてこれ以上無い程相応しいと確信していた。

何となく、色々とモモンガから教わっていた時代を思い出した。

「まあ、一先ず世界級アイテムを奪われた向こうの法国（仮定）も慎重に動いてくれる事を祈るとして……褒美はどうしよう。マジで」

「どうしよう……」

二人は再び褒美について悩み始めた。当然のように、あの写真一枚では褒美として物足りないと思つた事と、シャルティアやハンゾー達が褒美について悩んでいる事に乗じて、後日また改めて褒章を与えるものとしたのだ。

元リーマンであつたモモンガは褒美の分割払いだなあ、などとぼやいた。

「ハンゾーさん達の報酬についてはある程度目星は付けましたんで！で、残るシャルティアなんですけど……」

「おお、是非聞かせて下さい」

何か考えがあるらしいアバ・ドンにモモンガは食い付いた。

「最近、エントマちゃんのハートをゲッツするため乙女心について勉強しようと、食堂でご飯食べながら聞き耳を立てていたので……」

「ほう」

ついにメイド達はアバ・ドンと食事を取る時でも、雑談に興じる程にまで至つた。実は結構な精神力を要している事はアバ・ドンの知る由も無いが、その中で語っていた内容の一つが、アバ・ドンの中で大きく印象に残っていた。

「なんでも、女の子は自身へと拵えられた”たった一つの特別”を喜ぶんだそうです」

「……手作りのアイテムとか？」

「おお、それ結構近いです。別に物とかじゃなくても、加えて言えば、

名前とか気持ちでも良いんです。んで、褒美の分割払いと聞いて思いついたんですけどね……。まずはささやかな何かをあげるところから始めるんですよ。それで、段々とグレードを上げていくと」

「ほうほう、報酬として適切なラインを見極めるんですね」

「流石はモモンガさん、そういう事です。と言う訳でまずはほんのささやかな……。かるーいジャブとして」

「ふむ」

「二人きりの時は”モモンガ”と呼んで良いとか」  
「なるほど」

## 閑話編

### デミウルゴスの謀略？

(さて……そろそろだろうか)

ナザリック地下大墳墓第九階層、ロイヤルスイート。その一角に佇むバーの中で、赤いキノコ頭のマイコニドである副料理長は、これからすぐ訪れるであろう至福の時と幾許かの緊張を心待ちにしていた。つい先ほど、日々のライフワークであり極めて重大な使命になりつつあるショットバーをオープンした。いつも以上にバーテンダー衣装の襟元を正し、来るべき最上客のショットグラスに汚れが無いか、念入りにチェックする。

これらの行動は全て、その最上客の為のもの。近頃、恐れ多くも懇意にして下さっている偉大なる御方が再び御入店なされる頃だ。

ドアのカウベルが小気味の良い音を鳴らし、来客を告げる。

——ご来店なされた。

「どうも、副料理長。今日も来ましたよ」

「……ようこそおいでくださいました。アバ・ドン様」

胸中に余す事なく来店の感謝を込め、深々とお辞儀をする彼の前には、全身玉虫色の輝きを放つ偉大なる常連客、アバ・ドンの姿があった。

更にその後ろでは、カウベルの音を立てぬよう静かにドアを閉め、従者然と同行する影が一つ。かの御方がバーに入られる際、ドアを開けたのは彼のようだ。副料理長にも覚えのある姿。よく知るもう一人の常連客もやってきたのだと、ようやく認識した。

アバ・ドンの来店に全神経を集中していた為、気づくのにはやや遅れた。だが、彼が恭しく礼をした後にショットバーのドアを開けてアバ・ドンを招き入れた事は容易に想像が付いた。

赤い三つ揃えのスーツと隙間から出ている銀色の棘付き尾。深い

笑みを湛え、静かなながらも気分が大きく高揚している姿が印象的だ。第七階層守護者、デミウルゴスである。

二人がカウンターの一角へと座ると、アバ・ドンが一言。

「いつものをお願いします」

「アバ・ドン様と同じく」

「畏まりました」

慎重かつ丁寧、それでいて迅速に注文のあったカクテルを用意する。アバ・ドンには彼とよく似たエメラルドグリーンのカクテル（ストロー付き）。デミウルゴスには燃えるような赤色のカクテルを出す。その高まったモチベーションは、渾身の一作を出すには充分すぎる程であった。

二人が静かに乾杯し、一口。

カクテルの絶妙な味わいを楽しんでいると、デミウルゴスが口を開いた。

「アバ・ドン様、本日はこのような場にお招き頂き、感謝の念が堪えません」

「いえいえ、コキュートスさんや恐怖公から常連と聞いたものでして。常連仲間が出来るというのは良いものですね」

「はっ、光栄です」

慇懃丁寧。物静かなながらも胸に熱い想いを秘めるデミウルゴスであるが、アバ・ドンが静寂に包まれた雰囲気を入っていると蟲系異形種である友人づてに知り、なるべく抑え込んだ。喜びを大きく露わにする事はやぶさかでは無かったが、敬愛する至高の一柱と、面倒見の良いマスターに配慮する。

「忙しい中誘ってしまいましたけど、体調や仕事に対して不備はありませんか？」

「お気遣い感謝致します。万事順調です。今のところ、聖王国の方で足も付いておらず、事を荒立ててもおりません。私の体調については、これもまた全く問題ありません。それどころか、アバ・ドン様よりお誘い頂けた事で、力が漲る思いです」

「それは良かった。ならば、満点と言えるでしょう」



「はい、ありがとうございます」

アバ・ドンの一言により、デミウルゴスの声はより明るみのあるものとなる。至高の御方の特命を受け、その成果を褒め称えられる。これは何にも勝る幸福である。

だが、副料理長がデミウルゴスの姿に嫉妬する事は無い。何故ならば、今の自分もまた幸福を享受する一人なのだ。至高の41人の一人がバーを気に入り、リピーターとなる事実だけで天にも昇る心地だ。偉大な御方の光り輝く体は、落ち着きのある仄暗さの中であろうと少しも損なわれていない。華美でありながら、奥ゆかしさを感じさせ、部下を労う様子は神々しさとダンディズムに溢れていた。

(そうだ、自分は今、この瞬間の為に生を受けたのだな)

カウンタ―奥に佇み、副料理長は幸福を噛みしめていた。

(……さーて、何から話そーかなあ)

一方、副料理長が万感の思いを抱いているとは露知らず、アバ・ドンはデミウルゴスに振る話題について考えていた。自分に巧みな話術など無い事は百も承知なので、予め、どういった話をするかは考えていたのだが、どう切り出したもんかとやきもきする。

とは言え、誘ったのは他ならぬ自分なので、このままダンマリというのはよろしくない。彼とも一度しっかり意思疎通しておきたかったし、コキユートスや恐怖公の時のような自然にコミュニケーションを取れば良いのだと、自分自身に発破をかけた。以前書かせた面接用アンケートの項目を思い出す。

「少し聞きたい事があるんですよ」

「何なりと」

デミウルゴスの言葉にはどんな話であろうとも、いくらでも答えてみせようという気持ちと、聴いた者の心を安らげるような慈しみが込められていた。

「デミウルゴスさんって、確か日曜大工に凝ってるそうですね。貰えたと聞いてちよつと気になってたんですが、どんな物を作ってるんですか？」

「はい、主に日用品や芸術品等を取り扱っております。スクロール製

作の折、不要になった素材を吟味し、趣向を凝らした椅子を製作中でして、差し支えなければ是非ともアバ・ドン様、アインズ様のご両名に献上出来ればと思います」

「なるほど」

何ら問題の無い健全な会話だと、アバ・ドンは思ったが、時たま感じる一抹の不安は一体なんだろうか。

「ふ、ふふ、では完成品のお披露目をお待ちしてますね」

「はいー」

デミウルゴスは、満面の笑みで答えた。その表情には裏表など一切無く、心よりの笑顔である。

「後は……、ああそうだ。デミウルゴスさんはアインズさんの智謀が凄まじい高みに至っていると認識しているのですよね？」

「はい。私は勿論の事、ナザリックにおいては共通認識と言つてもよろしいかと思えます。私も自身の知恵を用いてナザリックに貢献出来ると自負しておりますが、それはアインズ様には及びもつかぬ些末なものでしょう」

「な、なるほど……」

その言葉に何ら迷いは無かった。ナザリックにおいて共通認識と言うのも間違いでは無いのだろう。事実、副料理長もひっそり頷いていた。

(改めて聞いてみるとモモンガさん、期待が重いだろなあ……)

重すぎるぐらいなのだが、それを否定する訳にもいかない。モモンガは支配者ロールを継続中なのだ。苦労を強いる状態ではあるが、止めるも敵わぬところである。

実を言うと、その事についてアバ・ドンも一部肯定的だ。”賢明な判断力と実行力”とのデミウルゴスの言も、ユグドラシルやギルドの事となればあながち間違いでは無いと、少なからず思っているのだが、だからと言って負担を増やして良い訳ではない。

アバ・ドンに出来る事は一つだ。出来る限りモモンガが楽を出来るよう軟着陸させる。

「まあ、頭が良くとも、大変な事には間違いありません。デミウルゴス

さんも、アインズさんの事をしっかりと補佐して下さいね」

「はい、少しでもアインズ様の深遠な智謀に及ぶべく、これからも身を粉にして参ります」

「うんうん、デミウルゴスさんは私よりずっと頭が良いですからね、時には詳しく教えて貰う事もあるでしょう」

「なんと……ククク、ご謙遜を」

(あ、これ自分も頭良い奴だと思われてる)

ある種必然であった。

「……いえ、謙遜なんかじゃないですよ。私はアインズさんの作戦を予め補佐するのが限界ですから、作戦を打ち出したりなんてのは正直不得意なんです。蟲の統率については覚えがありますが、作戦云々についてはデミウルゴスさんが補佐をして私が補佐の補佐くらいが丁度良いでしょう」

アバ・ドンは、自分の知力の無さを打ち明けた。そうする事でアインズとアバ・ドンでは分からぬデミウルゴスの超絶級な策略を、しっかりと聞き出せるかもしれない。いわば、捨て身のカミングアウトだ。自分の評価は下がってしまうが、少なくともアインズの支配者ロールが崩れる事は無い。

「ですから、もしデミウルゴスさんが良い作戦を思いついたならば、詳しく聞いてみたいところですね。いや、申し訳ありません」

「い、いえ、アバ・ドン様が謝罪成される必要は全くございません！

……事情についてはよく理解できました」

「……」

「……」

妙な間があった。流石に失望されたかとアバ・ドンは心配した。ところがそんな懸念は余所に、その瞳に宿る炎はどういう訳か尊敬の色だ。今の一言のどこがデミウルゴスの琴線に触れたのか？アバ・ドンは知る由も無い。

(本当に、アバ・ドン様は……お優しい方だ)

デミウルゴスは感動の面持でこう思った。

アバ・ドン様は、己の力について謙虚に捉えられているようだが、ま

ず何より……。

”アインズ様の作戦を予め補佐出来る”

これはナザリック内であろうと可能な者は皆無だ。だが、御二方はほんの僅かな打ち合わせとアイコンタクトのみであろうと、的確な、美しいとすら言える連携を眼前で悠々とお見せした。そして、勿論の事、アインズ様はそんなアバ・ドン様に全幅の信頼を寄せられている。暗愚等とは口が裂けても言えない。

では、アバ・ドン様が仰った事を自分自身はどう受け止めるべきか？

ご両名は恐れ多くも、私の力を高く評価して下さっている。言うなればこれからの私に期待を寄せられている。世界征服の道を開ける役目の一つを私に仰せつかった。アインズ様を前にすれば取るに足らぬ私の策について詳細に伝える意味とは……。

そう、自分は今……。

(試されているのだ。極めて穏やかに)

デミウルゴスはこれからが自分の真価を問われる時なのだと、決意を新たにした。

「では、アバ・ドン様の仰るよう。今後は私の作戦についてしっかりと話し致しましょう。お時間を取らせてしまう事は非常に心苦しいのですが、どうかお許し下さい」

「も、勿論です」

(何故かすんげーやる気満々になってるけど上手くいった！)

結果オーライという奴だろう。作戦についてしっかりと説明してくれるならば、やりやすくなる。この話についてはこれぐらいで良い。とりあえずこれ以上汚名を増やさないようにと、話題を切り替えた。

「えーっと……まあ仕事の話についてはこれくらいにして……。では私に対して何か聞きたい事とがありますか？自分ばかり質問攻めというのもアレなので、よければどうぞ」

アバ・ドンの唐突な返しではあったが、デミウルゴスは一切の淀み無く述べる。

「畏まりました。それでしたら、同じくアバ・ドン様のご趣味を教えてくださいたく思います。我々に手配できる事であれば、直ちにご用意致しますが？」

趣味について聞き返されるといふ全うな返答だったが、直ちに手配という妙な特典が付いてしまった。

「うーん、私はエ……ンン、昆虫採集や観察が趣味ですね。蟲の生態を観察しているだけで時間が経つのも忘れそうになるんですよ。ブループラネットさんもそうでしたっけね。何と言うか、規律のある脚の動きや、特異な習性を眺めているだけでも、幸せな気持ちになりますねえ……」

アバ・ドンはしみじみと趣味について語りだした。

ナザリック外への進出は未だ解禁されていないが、アバ・ドンは『黙示録』の蟲系モンスターを眺めたりエントマを眺めていると、とにかく幸せであった。遠視の鏡を用いれば外の様子も分かるのだが、いずれは自らの足で大自然を眺められるのだからと、我慢していた。

ちなみに、眺められていた側はもつと幸せを感じていたのは言うまでも無い。

「確かに、生命の営みを眺めていると微笑ましく感じる事は私もございます。可愛らしい鳴き声を聞くと、尚の事、笑みがこぼれます」

「おお、気が合いますねえ」

「アバ・ドン様は蟲の細部を鑑賞する事に楽しみを見出されておいでで……」

「はい。昔は中々出来ませんでしたから。喜びもひとしおです」

「それはそれは……」

おいたわしやと、デミウルゴスは心中で呟いた。この御方はこれ迄趣味に興じる暇など無かったのだ。死の呪いに抗い、ここに帰還なされた事を、改めて喜ばしく思った。

こうして暫く、アバ・ドンとデミウルゴスは趣味の話や他愛の無い話を騒がしくない程度に興じ続けた。

だが、アバ・ドンが趣味を話して以降、デミウルゴスの眼光が一層輝いていた事に最後まで気付くことは無かった。

あー、何だかんだ昨日は楽しかった。デミウルゴスを飲み誘った時はどうなるかと思っただけど、コミュニケーションを取るってやつは大事だね。成果もあったし。これで、モモンガさんの負担も軽くなる  
と良いんだが……。

などと考え椅子にノンビリ座っていると、扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞー」

俺は朗らかに入室を許可した。この二足歩行の足音は、多分エントマちゃんが用事から帰ってきたのだろう。五感が鋭いおかげか最近そういう事も分かってきたぜ。

しかし、いつも時間通りなエントマちゃんにしては珍しく、少し遅かったけど何かあったのかな？

「しい、失礼しますう……。アバ・ドン様あ……」

「お帰りなさい、エントマさん。……どうしたんですか？」

エントマちゃんの様子がおかしい。最近のような落ち着きが無く、初対面の時に見せたような感じ、そう、妙に緊張していると言うか……。

「あう……そのお……アバ・ドン様に、志願したい事がある……」

志願？しかし、言いあぐねている様子だ。言い辛い事でもあるのだろうか。

「大丈夫ですよ。エントマさんの志願であれば、私は決して無下にはしません。ただ、命に関わることはダメですけどね？」

「で、でしたらあ、大丈夫ですう……。スウー、ハアー」

深呼吸する姿もまっことプリティー。さて、いよいよエントマちゃんは言う気になってくれたようだ。さあどんと来………いいい！

え、ええ、え、エントマちゃんはおもむろにスカートをたくし上げ  
「もしよろしければあ……私の体を隅々まで御観察くださいい！」  
のーみぞ せんぞー はじまた

The goal of all reason is death／あらゆる理性の目指すところは死である

「もしよろしければあ……私の体を隅々まで御観察くださいい！」  
「……………!?……………!」

言った。言ってしまった。

アバ・ドンの目の前でスカートを捲り上げたエントマ。その頭の中はいつぱいっばいで、爆発しそうという表現が比喻では無くなりそうな勢いだ。

至高の御方も先の大膽な試みから微動だにせず、こちらを見たまま固まっている。

(うう、み、見られてるう。たくさん見られてるう……)

俗にいうガン見というヤツだ。複眼によって、全身を余すこと無く観察されるに比例して、エントマの体温が急激に上昇する。恥ずかしい、どうしようもなく恥ずかしい。このままでは不敬極まりない事に、逃げ出してしまいそうだ。

(どうしてえ？至高の御方が望まれるならばあ、迷う必要なんで無いのにい……)

元々、エントマは中身を見られたからと言って取り乱したりはしない。むしろ”至高の御方のご命令とあらばあ、色々とお見せしちやいますう”といった心構えである。

外敵に衣服を乱され、はだけた格好になつたとしても、真つ先に覚えるのは怒りだろう。至高の御方があしらつた掛け替えの無い衣装を土足で踏み荒らす行為に殺意が湧くのみだ。

では、今のエントマに渦巻く感情は何なのか。

それは、異性への意識の芽生え。アバ・ドンという雄の目の前で、自分の雌を曝け出す行為がどうしようもなく恥ずかしい。顔が上気し、顔担当の蟲と髪担当の蟲が暑がっている。

スカートをもつと捲り上げるつもりだったのに、予定の半分程度し



かたくし上げていない。これでは人間の部位で言う所のお腹すら見えない程度だ。

デミウルゴスからの情報提供により、蟲の観察を趣味として嗜むと知ったのだから、何の迷いも無く、堂々と全て見せるのが筋と言うものだ。至高の御方を喜ばせる方法を知っているのならば、それを即座に実行しなければ従者として失格だ。

ただ、その理論で行くと一番正しい行為は目の前で全裸になる事なのだが。

エントマにはそれがどうしても出来なかった。役目を果たす前に恥ずかしすぎて死んじやうと、無意識下に出来なかった。と言っても、エントマは主の命により死ぬ事に何ら抵抗は無い。正確に言えば、主命を果たせぬまま朽ち果てるのが絶対に嫌なのだ。

しかし、アバ・ドンが死を望むような事は決して無い上、それどころか慈悲に満ちた御方は深く悲しむ。故に、命を投げ捨てるような行動を自粛している。結果、スカートをたくし上げる行為に留まっているという訳だ。

傍から見れば荒唐無稽な理論なのだが、エントマにとっては文字通り死活問題なのである。

(ダメえ、もつとお見せしないとお)

腹を括り、当初の予定通りに腹部が見える所までスカートを捲り上げるとアバ・ドンの体がピクリと跳ねた。

「どお、ですかあ?」

「……」

返答は無い。色々とそれどころでは無いのだ。代わりに、ゴクリと喉を鳴らす音がした。

(わ、私のからだあ、変じやないかなあ……?)

幸い、それはもうがつつりと見られているので、嫌悪感を催されていない筈。アバ・ドンの複眼一つ一つ全てがエントマに集中している。しかし、回答が無いとどうしても不安になるというものだ。

「……」

お互いの微かに荒い息遣いしか聞こえぬ状況下、不意にアバ・ドン

が立ち上がった。

「あつ……」

瞬きする間もない一瞬で、アバ・ドンが目の前まで迫った。憧れのあの人が、口付けを交わせそうな程近い。蟲の検査をする為、顔を近くに寄せられた時もそうだったが、ドキドキする。このままこの御方に連れ去らわれたらどんなに悶えてしまう事か。

（か、可愛い。エントマちゃん、ほんとに可愛い……。そんな誘惑染みた事をされたら俺はもう……。うおおお、このままもつ……。いや、ダメだ。もつときちんと段階を踏んでからこういった行為を）

などという理性的な考えとは裏腹に、体は正直なものでエントマとの距離は目と鼻の先まで迫っている。体が言う事を聞かないのだ。とは言うものの、今こうしているのは紛れも無く本人の意思によるものなので”聞かない”と言うのは語弊がある。

とあるギルドメンバーは、恥じらいの感情つて滅茶苦茶萌えるよね等と言っていたが、その主張が言葉ではなく心で理解出来た。

叶わぬ恋と知りながら惚れてしまった二次元半の女の子が、奇跡とも言うべき現象で現実化し、尊敬の念を抱いて甲斐甲斐しく奉仕してくれる。そんな夢のようなシチュエーション。更にダメ押しで、今は体を隅々鑑賞して欲しいと来たものだ。頭がどうにかなりそうだとドメと言わんばかりに、入室時から既に発され始めていた性フェロモンが濃度を増す。

アバ・ドンはエントマの攻勢に抗えない段階まで来てしまった。

「……」

「んうう……！」

艶めいた、甘い声が漏れた。

ガシリと、刺々しい副腕がエントマの脚を掴んだのだ。普段の柔らかな態度と優しさは成りを潜め、荒々しい獣性を感じさせるような力の籠もった触り方だ。足に貼り付けてある札の一枚が少しだけ剥がれた。

「ど、どうぞお、お好きだけえ……」

勿論、御触り厳禁なんて事は全くもって無い。されるがままであ

る。

(そ、そんな事言われたら、もう……!)

(わあ、私い、食べられちゃうのお……?)

捕食されるのだと錯覚する程の迫力。身も心も至高の御方の物になった時の感情とは、これほど甘美な物なのかと思う。胸がきゆうきゆうと締め付けられるようで、どうしようも無いほど心地良い。アルベドやシャルティアがアインズの寵愛を激しく求める事は必然だったのかもしれない。こんなの、抗えない。

「ふやつー」

脚を触られていると思っていたら、不意打ちの如く主右腕がエントマの頬に触れた。

すると、自分の意志とは裏腹に、顔の蟲と本来の顔に少しばかりの隙間が出来た。アバ・ドンが蟲の指揮権に割り込んだのだろうか。エントマが慌てる間もなく、隙間に手が滑り込み、直接顔を触れられた。「ッ……う……」

至高の御方の指が、エントマの輪郭をそつとなぞった。這うように動く度、顔が熱を帯びるようだ。

「……は……小顎肢……下唇肢……大顎……」

眩くように、なぞった部位を刻々と告げられると、触れられている事実を指し示されたようで、心音がより大きくなった。

(あつ……口の中)

大顎をなぞり終えようとした辺りで、大きな変化があった。

「あむう……」

「ッ!？」

エントマが、アバ・ドンの指に噛みついてしまった。茹だった頭のせいで無意識下に蜘蛛の防衛本能が出た結果だ。拒絶しているという訳では無く、一種の生理現象のようなものである。

「あぐあぐ……」

「おお……」

幸い、本気力で噛みついてる訳では無い。本気で噛もうとも能力差を考えれば平気なのだが、そこは気持ちの問題だろう。

「温かい」

舌は無いが、口内の肉の柔らかさが右手腕に伝わってくる。生温かな口内を、指が蹂躪した。エントマも負けじと、指に齧り付く。淫靡な雰囲気は吞まれて、アバ・ドンの思考はどんどんエスカレートしていく。

——もつと、エントマちゃんに触れたい。

右主腕は忙しい。となると、左だ。

「頭部の、方も……」

「ろうろお……」

唾えながらなので、口が上手く回らなかった。しかし、背徳感を助長したのか、アバ・ドンの興奮度はより一層増した。

右手の時と同じ手口で頭部に指を滑り込ませ、頭を優しく撫でる。

「ふわふわしてる……」

「ふうう……あむ……」

いつの間にか鑑賞どころではない領域に達しているのだが、二人にとっては些末な事だ。咎める者は誰もいない。

二対の副腕は今尚、たくし上げて露わになった脚を掴んでいた。そして、主腕は顔を余すこと無く触り続けている。まだ触っていない部分をもつと触ろうと、封じられた右手腕に代わって左主腕が動く。ようやく顔を触れ終わると、必然的に下の方へと移っていく。口唇蟲をなぞり、喉を通り抜ける。

(そ、そんな所までえ……)

いよいよエントマの着物に手をかけようとする

——コンコン。

「アバ・ドン様ー！ルプスレギナっすー！カルネ村の件で定時報告に来ましたー！」

二人とも、それはもう盛大に体が飛び跳ねた。



アバ・ドンの精神安定化は、パッシブスキルを以てしても、長い時間を要した。

・

・

・

「ゆ、ユリ姉。エンちゃんが口を利いてくれなくなったっす……」  
「何したのよ……」

ルプスレギナには知る由も無かった。

## 日進月歩

昔々、俺はるし★ふぁーさんにそそのかされて、ギルド最強を誇る たっち・みーさんにどれだけハンデを貰えば勝てるかという大変に情けない検証をした事がある。その結果

- ① たっち・みーが使用して良い攻撃は《次元断絶》ワールドブレイク一回のみ、外したら負け。
- ② アバ・ドンの超位魔法を用いた攻撃に一度でも被弾したら負け。防御スキルも不可。
- ③ アバ・ドンが妨害工作と超位魔法・无二打二の打ち要らずの準備が完了するまで攻撃禁止。

という破格のハンデを貰ってしまった。超位魔法とは、一定レベルから覚えられる魔法の強い版みたいなものだ。魔法と銘打ってはいるが、MP消費無し、一日の使用回数が制限される等、どちらかと言うとスキルに近い。

課金アイテムでないとキャンセル出来ない長大な溜め時間がある事に加え、プレイスタイルの都合上余り使ってなかったのだが、PvP、タイマン戦の時に一つだけ、課金アイテムを使って愛用していた超位魔法があった。

それが上記ハンデ中に記載されている无二打二の打ち要らずだ。これは、超位魔法の一つで、発動後の攻撃が一発だけ超強化されると言う非常にシンブルなものだ。具体的に言えば、全能力値を攻撃力に換算後、威力を倍加、更に対象の防御力を無視する(ワールド系は例外)、といったところだろうか。俺が唯一最高火力を叩き出せる貴重な技である。

しかし、近接職が使う事前提であり、超位魔法特有の溜め時間を考えると、溜め時間キャンセル用の課金アイテムが必須になってしまう事から”二の金要らず”等と不名誉な蔑称が付いてるのだがそれは置いてこう。

ちなみに、黙示録の蝗害《デイザスター・オブ・アバドンズローカ

スト》という、自分におあつらえ向きなイカした超位魔法があるのだが、残念ながら余り使わん。勿論真つ先に覚えたのだが、俺のキャラビルドの都合もあるし、モモンガさんの方が上手く使いこなせるからだ。後、正直な話、威力が微妙という……。

まあそれは置いて、ナザリック地下大墳墓第六階層の闘技場、アンフィテートルム円形劇場で俺VSたち・みーさんの勝負が始まった。

目と耳を覆い尽すような蟲弾幕によるリアル視界妨害&探知阻害。蟲には探知妨害の効果そのものもしっかりと付いている。何匹か、たちさんの顔にへばり付いているが、微動だにしない。攻撃が一回こっぴりの為だ。超位魔法ではない為セーフだが、それでもきつかるう。

更に、ムシマスターのスキルにより、幾多に混ぜこんだ囷用の偽アバ・ドンもいる。蟲弾幕に混じり、何十人にも及ぶ俺の偽物が飛び回っている。とある敵対ギルドのメンバーがこの光景を味わった結果PTSDを患ったなんていう都市伝説まで出回った。

こうした数々の準備を施し、超位魔法、無二打を発動。

たちさんの視界は妨害蟲と俺の偽物で覆われており、常人ならばログアウトしてしまう程の大惨事だ。どこに俺がいるか等分かりもしないだろう。俺は勝利を確信し、満を持して、ハイ・キックジャンパー最強スキル、極・流星脚（見た目はエフェクトの付いた飛び蹴り）を放ったのだ。

たちさんの背に、超スピードとなった俺の脚が迫り来る。

——だが、気が付けば、俺はたちさんの攻撃を喰らって敗北していた。

な、何を言っているのか、わからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。PvP終了後、武人建御雷さんとするし★ふぁーさんが「ないわー」って言ってたな。勿論たちさんに対してだ。

蓋を開けてみれば極めてシンプルな結果だ。あの時たちさんは、すぐさま振り向くと俺の流星脚に合わせて次元断絶でクロスカウンターを決めてきたのだ！



しかも、後で録画映像を検証した結果、寸分の狂い無く、俺は真つ二つにされていた。

言葉に出してみれば簡単な話だが、はつきり言っており得ない。変態の領域だ。蟲で視界は覆ってたし、探知もされていなかったし、自分のスピードにも自信があった。

正確なタイミングと狙い打ち、そして限界を超越した反射神経が無ければ不可能な芸当だ。うん、あの人ニュータイプかなんかだよ……。たちさん曰く、俺なら後ろから来るだろうと思ってたし、後はタイミングの問題だった。との事だが何なんだあの人。

とまあ、そんな苦くも楽しかった思い出がヒントとなって、俺はモモンガさんにある修業を課していた。

「そーら、まだまだいきますよー！頑張れモモンガさん！」

「言われなくとも！」

転移後のナザリック地下大墳墓、宝物殿。リング・オブ・アイन्ズ・ウール・ゴウンを用いなければ来られない一種の独立空間。今、俺は此処でモモンガさんとある修業をしている。

わざわざ宝物殿を選んだのは、モモンガさんが訓練中に失敗するところを部下達に見せない為だ。パンドラも外に出てるから、守護者達が無断で入らない限りは誰にも見られる事は無い。

金銀財宝の数々は俺の蟲パワーで整頓し、大きなフリースペースとなった空間に剣戟が響き渡った。切り結んでいるのは俺と、黒鎧&二刀流大剣が特徴的な冒険者モモンことモモンガさんだ。

俺は右主腕にくっ付いたブロードソードのようなものをモモンガさんめがけて振りかざす。一見ただの剣に思えるが、これは俺が呼び

出せる蟲の一匹、剣刀蟲というモンスターだ。所謂、蟲武器というヤツで、エントマちゃんが愛用しているヤツだな。俺も昔はよく使っていたんだ。

切り結ぶ度、大きな音と共に火花が飛び散る。しかし、剣刀蟲も大剣もへっちゃらだ。頑丈で何よりです。

蟲武器は、状態異常の抵抗力や攻撃力の判定が呼び出した蟲に依存する。画期的な事に、俺のパッシブスキル強化込みでも、剣刀蟲のレベルは60に満たない。

何故画期的なのかと言うと、モモンガさんは上位物理無効化Ⅲによってレベル60以下の攻撃を無効化出来る。つまり、超安全に近接戦闘の訓練が出来る寸法だ。

無論、俺も心配無用だ。モモンガさんの物理攻撃ならダメージらしいダメージにもならんだろう。後衛職の物理攻撃ぐらいなら俺も余裕で耐えられる。

「隙有りー！」

「むっ!?!」

俺はモモンガさんに大振りの攻撃をわざと振りかぶる。こいつは囷で、本命はモモンガさんの後ろに迫る大きなてんとう虫、硬甲蟲(俺カスタム)だ。

この蟲は元々盾用に使う蟲だ。そんな硬甲蟲を十匹程飛ばして、多角的な攻撃を繰り出しているのだ。ちなみに、俺の硬甲蟲はまん丸でてんとう虫柄にアレンジされている。かわいいだろ。……エントマちゃんのはどんなだろうな。

こうすることで、一対多の訓練も兼ねる。当然、硬甲蟲もレベル60に満たないので、モモンガさんのダメージにならない。そんな巨大てんとう虫こと硬甲蟲の一匹がモモンガさんの背中に体当たりしようとして迫り来る。

「はっー！」

「おお」

俺は感心の声をあげた。モモンガさんは、俺と硬甲蟲の挟み撃ちに對し、大剣を一本ずつ用いて見事に防ぎきった。目に見えて上達して

いる、恐るべしモモンガさん。始めたばかりの時は何度か硬甲蟲の攻撃に被弾していたが、その数も徐々に減ってきている。

だが、これならどうだと言わんばかりに、硬甲蟲に四方八方から一斉攻撃を仕掛けさせた。

「なんのおー！」

華麗な回転切りだ。硬甲蟲は弾き飛ばされる。しかし、何匹かは撃ち損じモモンガさんに尚も突進する。

だが、モモンガさんは巧みなステップで攻撃を避け、俺に反撃する。「おっと」

俺は持ち前のスピードでひよいとかわす。俺に攻撃を当てるのも課題の一つだ。……まさか、俺がモモンガさんにこういう事をする立場になるとは夢にも思わなかった。

「やっぱ速いな……。アバさん」

「ふははは、モモンガさんの賜物です」

「どういたしまして。いや、見るのと実際にやってみるのとは全然違いますね。勉強になりますよ」

「こちらこそ、良い訓練になります。じゃ、更に追加しちゃいますか？」

「お願いします」

「ほいほい」

会話を交わしつつも、修業は続く。硬甲蟲を更に五匹程追加し、俺の剣刀蟲と硬甲蟲のラッシュは激しさを増す。それでも、モモンガさんは攻撃をきつちりと捌ききつては反撃を繰り出す。やはり呑み込みが早い……。

モモンガさんは、経験が無くともユグドラシルオンラインに関する知識はギルド一……。いや、世界一だ。しかも状況判断能力にも優れているので、後は体が覚えるかどうかという段階だったのだろう。この人、近接キャラビルドでも上位になれると思うよ、俺。

「しかし、中々当たりませんね」

「伊達に切り込み隊長やってませんかからね、ふふふ」

俺はドヤ顔だ。表情筋は無いのだが、多分ドヤ顔に見えている。

「さて……どうしたものか」

モモンガさんは攻撃をいなしながら考えている。どうやら俺に一太刀浴びせる方法を模索しているらしい。俺は移動スピードは結構本気でやっているの、まだ直撃は喰らっていない。やはり、ゼロからの超加速は回避に有効だ。体を動かす練習になっているので、必然的に俺も上達している。

昔は、俺自身が貧弱だったのも有り、超スピードをやや持て余し気味だった。しかーし、身も心も蟲になったおかげで、以前よりこの身体能力を使いこなせるようになって来た！今なら式式炎雷さんになんて及べるかもしれないという自信があるぞ！

……” かもしれない” が付いてる辺りまだまだかもしれんが。

何にせよ、攻撃を簡単に喰らうつもりはない。ラツシユを捌いては反撃を暫し繰り返していると。モモンガさんが口を開いた。

「よし、良い手が浮かんだぞ」

げげ、何か閃いたようだ。な、何をやる気だ。この人は敵へのメタを組むのが抜群に巧い。手の内をよく知る俺相手なら尚更にな。俺は大きく警戒しながら攻撃を繰り返す。

「そうそう、アバさんはエイトエツジアサシンにハンゾーって名前を付けましたけど……」

「はい」

な、なんだ。揺さぶりでもかけようと言うのか。その手には……

「使える傭兵モンスターにハンゾウという名前の忍者が……かぶつてますね」

「え」

「隙有り」

「ぐえっ」

俺は頭頂部に良いのを貰ってしまった。なんてこーかつなせんりやくだ。

## 秘め事

ナザリック地下大墳墓、第六階層ジャングルの奥に存在する『大穴』。階層守護者のアウラですら忌避する恐るべき場所だ。ナザリック五大最悪の一角。生態最悪と謳われる餓食狐蟲王が潜むこの大穴の脇に、木々が生い茂っておらず、20cmの高さの草しか生えていない平地がある。

「……」

「エンちゃん、なーにをそんなにむくれてるっすかー？」

そんな場所で、ルプスレギナは何故かお冠になっているエントマの頬を突っついて反応を窺っている。しかし、状況は芳しくない。エントマはスタスタと歩いてルプスレギナを引き離そうとする。

アウラに警備を任されている獣系異形種と、アバ・ドン直轄部隊『黙示録』の蟲系異形種達が、心配そうな表情で様子を窺っている。ちなみに、『黙示録』の面々は、大穴の警備担当である。

傍から見ると、グリズリー並の体格をした狼や、夥しい量の鋭い牙を生やした巨大ネズミ。二足歩行するカミキリムシ顔の蟲人等が獲物を狙って舌なめずりしてるようにしか見えないが、それでも彼等は心から心配しているのだ。

異形種達の横を通り抜けて、メイドらしき人物がまた二人程やって来た。

「ただごとではなさそうね、ルプー、やらかし？」

「ルプーは、何したの？」

「だーかーらー！ 私なーんもしてないっすよー！」

黒髪ポニーテールのドツペルゲンガー、ナーベラル・ガンマと、赤金のロングヘアーに眼帯、迷彩柄の伝説級マフラーが特徴的なオートマトン、CZ2128Δ、シズ・デルタの二人も同伴していた。

今この場には、プレアデスの内四名が来ている。一般メイド達のテーションが上がるシチュエーションなのだが、余りにも場所が悪すぎるので残念ながら彼女らはいない。

ナーベラルとシズは、この物珍しい出来事に興味津々だ。

エントマが姉妹喧嘩をする。これは、シズ相手に限れば結構多い。どちらが姉であるか不明な為だ。それ故に、お姉ちゃんの称号を賭けた諍いを起こす事があり、時折ユリがストツパー役を務めているのだ。

しかし、ルプスレギナ相手にこうしてつつけんどんになる事は滅多に無い。ルプスレギナはプレアデスの次女。お姉ちゃんであるとはつきりしているし、別に喧嘩をふっかける理由も無い。

「ふーんだあ……」

「エントマ、食べ物トラブルでもあったの？」

ナーベラルはエントマに事の真相を問い質す。真っ先に食べ物の話が出てくるのは、勿論、食べ物絡みである可能性の高さを考慮してだ。

姉の声掛けにより、ようやく速足を止めたエントマが振り向く。その表情はいつも通りのポーカーフェイスだが、心なしか陰が濃い。特有の大きな身振り手振りも精彩に欠けていた。

「もつとお、もつとひどい事お」

おまけに、声色が普段より半オクターブ程低い。

「まずい、本当にただごとじゃないわ」

事態の深刻さを、今のやり取りで理解出来た。食べ物絡み以外でエントマが怒るとなると、消去法から至高の御方絡みと断定出来るからだ。ナーベラルは、大嫌いな人間さえ絡まなければ、真つ当な思考回路になる。ナザリック基準でだが。

「ルプー、ひどい事したの？ひどい姉」

「シズっち、それこそひどくないっすか！こつちに心当たりないっすよー?!ほんとに!」

「うへあ」

一方で、シズに聞かれたルプスレギナは無罪を主張する。事実、彼女自身には何の心当たりも無い。何があつたかと言えば、カルネ村監視後の定期報告を遂行する為、アバ・ドンの下へと向かった事だ。アインズが不在の際は、基本的にアバ・ドンが報告を受けている。

身だしなみを整え、きちんとノックもしたし、無論、入室を許可さ

れてから入った。ここまで不備は見当たらない。

入った直後、エントマの服がやや着崩れていたのが気になったのだが、アバ・ドンが何も言っていない以上は、指摘する必要も無いだろうと言わずに放っておいた。もしや、それが不味かったのだろうか、思い当たる原因を考える。

「アバ・ドン様はどちらに？」

「アインズ様とお、宝物殿に御用事だつてえ……。ナーベえ、別にいい、至高の御方々はルプーを怒ってる訳じゃないよお。でもお、私は怒ってるう」

「そう……」

ルプスレギナが至高の御身に対し失態を演じたのかと心配したが、そうではないようだ。

「ぶー、何をどう説明したらいいすか……」

頭を押さえて、どう弁明したものかと考えていると目に留まった物があった。

「……あれ？シズっち、首の所になんか入ってないすか？」

シズの顔辺りを見てみると、いつも巻いている迷彩柄マフラーの一部が不自然に盛り上がっていた。こんな時でもルプスレギナは好奇心に身を任せる。

「これ……アバ・ドン様から貰った」

「何何？見せて欲しいっすよー」

「ええ？」

アバ・ドンからの貰い物と言う言葉に、エントマは機敏な動きで反応する。それは、非常に鬼気迫るものがあった。

「おいで……」

シズがそう言うのとマフラーがもごもごと動き出し、顔との間にある隙間から黄色い体毛の何かが這い出てきた。

「……何かしら、これ」

ナーベラルはこれが何の生き物か分からなかった。

獣と蜘蛛の中間のような不思議な生物だ。全長20cm、高さ10cm。体は、比較的ふんわりとした体毛に包まれており、つぶらな四対

の瞳に小さく短い四本の脚がある。

どちらかと言えばハエトリグモに近いのだが、黄色い毛はふさふさとしており、脚が四本しか無い上、丸っこく短いので蜘蛛らしさはやや薄い。

「蟲つすか?」

あの御方から下賜された生物ならば蟲なのだろうという推理で、シズに問いかけた。

「電気蜘蛛……だって」

「へえー」

電気蜘蛛と呼ばれる黄色い蟲は、短い脚をぴよこぴよこ動かしてよじ登り、シズの頭に居座った。まるで帽子のようである。

「……可愛い」

頭上の黄色い蜘蛛に対し、満足そうな様子で呟く。

「どうしてそんな素敵な子をお、シズが貰ってるのお?」

エントマは、アバ・ドンからの贈り物を頂戴した理由が気になって仕方が無かった。結構なジェラシーが入り混じってはいるものの、シズは涼しい顔だ。頭上の電気蜘蛛も、シズの頭が気に入ったのか、お昼寝を始めた。

「宝物殿の鍵を開けたお礼と、テストを兼ねてるって、アバ・ドン様が……」

「テストって……何を試してるっすか?」

「受けの良い蟲。アインズ様もそう言った」

「アインズ様もお? 一体どんな狙いがある……」

「私にも分からないけど、至高の御方々の深遠な御心、何か深い考えがあるのよ」

アインズとアバ・ドンの計画が何なのかに頭を捻らせるが、その答えは出なかった。

「ソレニツイテハ、恐怖公ガヨク知ツテイル」

「この場所では珍しい面々がお揃いのような」

「……コキュートス様に、恐怖公」

助け舟に名乗り出たのは、ライトブルーに輝き、冷気を放つ昆虫武



人の第五階層守護者コキユートスト、第二階層の一角、黒棺の領域守護者であるゴキブリそのものな恐怖公だった。二人は森の奥から姿を現した。

「シズ殿はまた毛深い生物を愛でに来たのですかな？」

「今日はちよつと違う」

「おや、左様で。ではエントマ殿はお腹を空かせておりませんか？心なしか御加減が優れなさそうですが……」

「気にしないで良いよお。アバ・ドン様の御指示でえ、デミウルゴス様が融通してくれるう。胴体は中々食べられないけどお、それぐらいなら大丈夫う」

ナザリツクの食糧事情には大分余裕が出来た。アインズ主導による検証の結果、回復魔法を用いれば肉類をほぼ無限に確保出来ると判明した為だ。

例えば、人間の腕を一本もいだとして、もいだ腕が原形を留めていると、回復した瞬間にはもいだ腕が消滅し、元の体部分に腕が戻っている。しかし、もげた腕が何らかの理由で原形を留めない程ぐちゃぐちゃになっていた場合、ちぎれた腕はそのまま残り、人間の体は元通りになる。この結果は光明を差すこととなった。

人間丸々一人必要なソリュシヤンのような者も居るので、消耗についてはもう少し考える必要があるが、これらの応用によって食糧事情が大きく改善された。尚、具体的な応用方法についてはデミウルゴスとその配下好みとだけ述べておく。

「それはよかった、眷属達も枕を高くして眠れますぞ」

「眷属はもう食べないから安心してえ、至高の御方に御心を痛められる方がずつと辛いからあ」

「ソノ心意気ヤヨシ」

「どうもお」

「ところで、恐怖公が此処にいるのは餓食狐蟲王に用事？」

「その通りですぞ。所用がありましたな」

「で、コキユートス様は巡回っすか」

「ソウダ」

第六階層の本来の守護者であるアウラとマーレの姉弟は、現在調査の為不在。その穴埋めとして、コキユートスが巡回している。シモベ達の警備に穴が無いかの確認も兼ねているのだが、そちらについては何ら問題無いようだ。

「先に我輩の用件を説明しておきますぞ。プレアデスの面々も知っておいた方が良いでしょう。アインズ様とセバス殿が捕らえられた人間達の処遇に、ある程度目途が付きまじましたぞ」

と、恐怖公は前脚を一本立てて説明する。

「あら、そうなの？」

「ええ、情報収集が完了した後の話となりますが、捕らえた捕虜達は、恐れ多くもアインズ様が栄達する可能性の芽を幾許か潰しておりまじす。故に、アバ・ドン様は減らした分を増やして戻そうと御思いのようですな」

「そういう事……。ウジむ……。ガガンボ……。オケラ……。今の全部無し。だめね、そう、ナメクジ如きに贖罪の機会をお与えになるなんて、至高の御方々は本当に慈悲深いわ」

蟲の名前に例えて人間を卑下すると、恐らくアバ・ドンが落ち込むのでナーベラルは四苦八苦している。かの偉大な御方が蟲好きである事は、配下達の間で既に常識なのだ。

「ナーベ、頑張れ」

「アバ・ドン様は蟲が御好きだから、考えないと……」

「ですな、我々も含め、特に観察が好きなようですぞ」

「ワタシモ、御観察ナサレテイタ」

コキユートスはやや興奮気味に答える。

「本当に蟲が大好きです……って、エンちゃん、なんでダンゴ虫みたいになつてんの？」

「な、何でも無い」

エントマが頭を抱えてうずくまっている。ルプスレギナの言う通り、ダンゴ虫に見えなくもない。しかし、うずくまっている理由は全く以て分からない。抱えている頭の隙間からほんのり湯気のような物が見えた。熱から逃れようとする顔の蟲達を抑え込んでるようだ。

(ああ、成程……)

恐怖公は、全てを察した。

「私もアバ・ドン様に御観察される事は……」

「無イナ、ソモソモナーベラルハドツペルゲンガーダロウ」

「そうですねど……少しぐらい夢見たって良いでしょ？」

「気持チハワカル。ワカルゾ」

「……ドツペルゲンガーの指って、蟲っぽくない？」

「少シ苦シイナ」

「ちっ」

ナーベラルは至極残念そうに舌を打ち、コキュートスは「仕方アルマイ」と呟く。この二人は製作者の武人建御雷と式式炎雷が仲良しだった影響で仲が良い。気さくな関係のようだ。

「……で、まあその時には、間違いなくアバ・ドン様もお立会いになるでしょうからな、餓食狐蟲王殿に部屋を清潔にするようお願い聞かせようと馳せ参じた訳ですぞ」

「わ、分かるのお？」

エントマは、どうにか立ち直った。

「勿論ですぞ。あの御方は生命が誕生する瞬間もお好きですからな」

「恐怖公はあ、アバ・ドン様への理解が深いのねえ……むう」

「妬いてるっすかー？エンちゃん。……私もっすけど」

(ワタシモダ)

アバ・ドンへの理解は、シモベ達の中だと恐怖公が一步抜きん出ている。自らの創造に大きく関わっている為だ。この事實は、配下達、特に『黙示録』の面々にとっては非常に羨ましい事であった。

「さて、至高の御二方が受けの良い蟲を探っている理由ですが、彼の御方は蟲に対する忌避感を和らげようと奮起成されておいでですぞ。

『黙示録』の結成により、存在感が増した故の策という事でしような」  
「あー納得っす」

「流石は至高の御方々……。そこまで御配慮成されるなんて。一言あれば、我々一同は蟲とのやり取りも円滑にするのに」

「『黙示録』とのやり取りにい、ワンクッション置くのねえ」

「ナゼ、苦手ナ者ガ多イノカハ分カラナイガ……本当ニ慈悲深イ御方々ダ」

理由は至極単純であった。ナザリック地下大墳墓内の配下には、蟲に対して苦手意識を持つている者がそれなりにいる。階層守護者の中でも、シャルティアやアウラ等は恐怖公に対して苦手意識を抱いているし、餓食狐蟲王等もそうだ。

だからこそ、アバ・ドンは蟲の中でも比較的女性受けが良かった者をピックアップして、小動物好きのシズに宛がってみた。結果は良好だ。

「特に、我輩の見た目に強い抵抗を持ってしまふ御人も多いですからな」

「す、すごい説得力つす……!」

その説得力は、ルプスレギナをもつてして舌を巻く程であった。アバ・ドンとしては、最終的に恐怖公にも慣れて貰いたいと思っているのだが、現実には厳しいのである。

「トコロデ、ルプスレギナトエントマニ何ガアツタノダ? ルプスレギナガ弁明シヨウトシテタガ……」

「それが、エンちゃん教えてくれないつすよー。だから困つて……。アバ・ドン様に報告した時ぐらいしか心当たりがないつす」

「フム……」

コキュートスは複数腕を組み考える。

「……エントマ殿、もしや、アバ・ドン様と何かしてたのではありませんかな?」

そんな中、恐怖公は核心を突いた。

「ええ? あうう、そのお、あ、アバ・ドン様とお……。私い……。い、言えないい……。!!」

その時、この場の全員に電流走る。電気蜘蛛、密かに満足。

(凶星ですな)

(言えない事?)

(アバ・ドン様と一緒に言えないような事をつ!?)

(マ、マサカ!?)

警備担当の異形種達にもわかにか騒ぎ始める。まるで、草木までもがざわめき始めているようだ。

事によつてはナザリックの未来を左右する事柄になるからだ。しかし、聞き出す訳にもいかない。言えない理由がアバ・ドンの意向であつたならば、至高の御方に背く結果となつてしまう。

「言えないような事つすか!?アバ・ドン様とナニしてたつすかー!!」

(ルプスレギナー!?)

(ルプー!?)

コキュートスとナーベラルは本気でビックリした。ここで、聞いてしまうのは、良くも悪くもルプスレギナーであつた。

「言えないつてばあー!内緒お、内緒おー!」

「てことは私はそれを邪魔したつて事つすか!?エンちゃん!ごめん!アバ・ドン様に孕ませられるチャンスを潰してしまつたつす!!」

「孕まあ!?ちい、違ううー!そこまではまだ行つてない!」

(ソ、ソコマデハ……!マダ……!?)

(そこまで進んでたの!?!……そこまで進んでたの!?!)

(……御寵愛?)

コキュートスとナーベラルは二人揃つて軽くパニックに陥つた。一方で、シズは要領をイマイチ得なかつた。

「も、もお知らない!!みんなあ、おいでえ!!」

アントマはたまらず眷属の蟲による飛行で逃走を図る。主人の影響もあるのか、蟲達がワタワタしていた。

「あー!エンちゃん!待てつすー!」

ルプスレギナーはそれを追つて、どこかへ行つてしまった。その跡は正しく嵐が過ぎ去つた後のようであり、どこからともなく微風が吹き、草木を揺らした。

「……行つちやつたね」

マイペースを貫き続けるシズは頭の電気蜘蛛に話しかけるが、同じくマイペースな電気蜘蛛が寝惚けながらシズから発せられる静電気を食べており呑気なものだ。しかし、その様子は大変可愛らしく、シズは満足であつた。

「オオ、ボツチャマ！ボツチャマ！ワタシヲ爺トオ呼び下サイ!!」  
「おち、落ち着いて、コキユートス様！……だめよ、大変！わ、私は至高の御子息様の叔母になってしまいわ！」  
（アバ・ドン様、御進歩成された事、今宵は眷属共々お喜び申し上げますぞ。さて、餓食狐蟲王殿の所へ行きますかな）  
恐怖公は、よく分からない事になっている二人を尻目に、偉大な主人の大躍進を喜んだ。

アルベド、暁に死す

「面をあげよ」

アインズさんの一言で、玉座の間に集合したシモベ達が顔を上げこちらを見た。いつ見ても壮観だ。だが、アルベドのみ既に許可を貰っており、アインズさんの傍らに立っている。今回の式典を取り仕切る為だ。

とうとうシャルティアとハンゾー達に褒美を授与する時が来た。ドキドキするね。

今、第十階層玉座の間にはいつもの階層守護者達、シャルティア、コキュートス、アウラ、マーレ、デミウルゴス。『黙示録』の三騎士が集合している。餓食狐蟲王を除き(大穴でアツプ中)、コキュートス……はさつき言ったな。恐怖公とエントマちゃんだ。

最近気まずい事もあるけど、お互いの距離が物理的に近づいてる気がしなくもない不思議な関係のエントマちゃんだ。……やつぱ可愛い。

そろそろ玉座の間の世界級アイテム『諸王の玉座』が準レギュラーになりつつあるが、報酬云々を偉い人が提示するなら此処が良さそうなので仕方ない。そもそも、俺とアインズさんはこの手の式典をどうするのかもよく分らん。毎度御馴染み分らん尽くしであるが、アルベドとデミウルゴスが段取りを取ってくれてたので、その心配は無用だ。

そんな頼れる一人、アルベドが守護者統括然として今回の褒章の対象者である部下を呼び出した。普段の『くふー！』な感じと今みたいな感じ、この公私の切り替えに関しては俺も見習いたい所だ。

「第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン。『黙示録』、ハンゾー、サンダウ、ナガト、ドウシユン。前へ」

集合した面々からシャルティアとハンゾー達が玉座の前にやって来た。本日のMVPってやつだな。功績考えたらMVPという言葉すら生温いかな。

「此の度の世界級アイテム入手、改めて深く感謝しよう。お前達の見

事な活躍を称え、褒美を取らせる」

ハンゾー達は跪きながらも頭を深々と下げた。シャルティアも勿論そうなのだが、彼女だけ何か頬が上気してるし小刻みに震えてるぞ……。

「まずはハンゾーさん、ドウシユンさん、サンダユウさん、ナガトさんへ私が贈りましょう」

「はっー」

気を取り直し、世界級アイテム入手の褒美第一弾をプレゼントだ。ハンゾー達は八肢全てを背筋に合わせてピンと伸ばし、とても良い姿勢で待つ。俺は立ち上がり、どこからともなく取り出した四つの布を右手腕に持つ。

それぞれが薄目の色をした赤一色、青一色、緑一色、黄色一色、約1メートル四方のスカーフだ。模様も無いシンプルなデザインでありながら、手触りは滑り落ちてしまいそうな程滑らかで、上品な趣を感じさせる一品である。

これにはアインズさんのバフ系魔法を俺のエンチャント能力で付与しており、更にアインズさんがコンティニューアル永続化を掛けている。俺がエンチャントの職業を持っている理由は、詳しく説明すると少し長くなるので今回は省略する。まあさっくり言えば蟲を大量に呼び出す為のコスト削減で身に付けたものだ。勿論アインズさん考案な。

話を戻して、この四色のスカーフは緊急で作った物だ。その効果は第九位階以上、又は防具破壊を受けないと無効化出来ない。

本当は神器級アイテムとか気前良くあげたかったんだけど、人数分同一のアイテムを用意となると……。このクラスまで来るとほとんど一点物だしなあ。それに、今回の報酬は序の口と言うやつだ。

「では、失礼して……」

「……」

俺は手ずからスカーフをエイトエッジアサシン達の首へ結びつけるつもりだ。ハンゾーは直立不動であるにも拘らず、より体が強張っているのが分かった。生真面目な分、緊張の度合いも大きいのかもしれん。



アインズさん曰く、勲章の授与とか取り付けるのってお偉いさんが直接やるらしい。恐らく、昔好んでいた某軍隊を参考にしているのだろう。ネオなのか旧なのかは知らん。と言う訳で、ハンゾー達の首にスカーフを巻く。絞めすぎないように気をつけねば……。

「苦しくないですか？」

「はっ、はい、素晴らしい手際です……！」

スカーフを少し太めの紐状、バイアス折りにして均一にねじり、二重巻きで付けるダブルツイストチョーカーというスタイルだ。サイクロンとかジョーカーは関係ない、念の為。こうすると、布をチョーカーの如く首にしつかりと巻ける。垂れ下がったりしないので任務の邪魔にならないだろうと言う、恐怖公の提案だ。サンキュー恐怖公。

やり方も恐怖公が快く教えてくれたので問題なし。俺は同じ調子で、ドウシユンに青、サンダユウに緑色、ナガトに黄色のスカーフを巻いた。

（オオ……）

（ああ、アバ・ドン様直々にい、お巻きになるのお!!ううう、羨ましいい……！）

（御見事ですぞ。アバ・ドン様）

な、何か『黙示録』達の目力が尋常じゃない事になってんだけど。そんなに見られると流星に緊張するなあ。元コキュートス配下、現『黙示録』所属の蟲系異形種達も熱い視線を送ってくる！

「よくお似合いですよ。これからもよろしくお願いします」

「は!!此れを励みに、より一層任務に取り掛かせて頂きます!!」

声が少し上ずっていた。みんな、ちよつとは喜んでくれただろうか？

「では、次はシャルティアさんですね」

「うむ、まず、シャルティアには手始めとして……」

「……はい」

シャルティアは緊張と恍惚の面持ちでアインズさんの言葉を待った。

「二人きりの際、私を”モモンガ”と呼ぶ事を許そう」

玉座の間は妙な空気に包まれた。

(え！え！何この雰囲気!?もしかしてダメなの!?)

(わ、分かんないです！)

俺もアインズさんも大慌てだ。もしかして報酬として見合わなかったのだろうかという懸念が広がっていく。やはり物的な褒美にするべきだったか!?

「ナ、何ト……」

「そんな、だ、大胆な……」

「……」

わなわなと震えるコキュートスや、ドギマギするアウラと目のハイライトが消えたマーレ等を皮切りに静寂がどよめきに変わる気配を感じる。

——すると、ドサリと崩れ落ちる音が二回した。

「……え?」

アインズさんは何が起こったか分からなかったようだ。俺も分からなかった。音のした方を見ると、集合していた筈のシャルティアと、アインズさんの隣にいたアルベドが姿を消していた。いや、消えたように見えたただけだ。

「ちよ……」

慌てて視線を下の方へ移すと、そこにはアインズさんの傍ら顔を横向きにうつ伏せで倒れ伏すアルベドと、俺達の目の前で大の字仰向けにぶっ倒れたシャルティアの姿があった。

「お、おい！アルベド！シャルティア！どうした!?!」

「これは……」

俺は一足先に精神が安定化したようだ。エントマちゃんとの刺激的すぎて刺激的すぎる経験により、精神力が凶太くなってるのかもしれない。ともあれ、この事態を冷静に観察し、アインズさんへ個人用メッセージを送ろう。

(アインズさん、二人は気を失っただけのようですよ)

(そ、そうですか。良かった……)

(ただ、何で気絶したのかは……)

(うーん)

「嘘……嘘よ……」

「きゅ〜……ふへ……へへ……」

おお……アルベドもシャルティアも女がやつちやいけない顔で倒れている。

アルベドは大きく口を開け、血涙を流し、泡を吹いて痙攣している。その顔は、太古の昔に存在した凶戦士漫画のべへなんとかみたいだ。この世の終わりが訪れた時、人はこんな顔をするのかもしれない……。

一方シャルティアの方は、何とも言い難い顔だ。だらし無く口角を釣り上げ、笑顔のようにも見えるが、顔を真つ赤にした上に白目まで剥いており、かなり歪だ。昔ペロさんが語っていたアへ顔という表情がコレなのかもしれない……。うん、まあ幸せそうな表情という気がしなくもない。下半身については見なかった事にした。俺は何も見えない。

「な、何故二人共気絶したんでしょうかね？特にシャルティアさんはアンデッドですから、精神系の異常は『血の狂乱』でない限りは……」俺は、ハンゾー達の後ろで守護者共々に控えていたデミウルゴスへ目配せしつつ呟いた。さりげなく、気絶した理由を教えて貰おうと企んでいます。……わざとらしすぎたか。

アインズさんに個人メッセージで「ナイス！」と言われた。

「はい、是非とも御説明させてください！」

と言いつつ、すごく嬉しそうなデミウルゴス。こういう細やかな頼み事でも喜々として応じてくれるのはありがたいが、喜びすぎじやなかるか。

「それとアインズ様、説明後、私が場を進める許可を頂いてもよろしいでしょうか？」

あー、進行役が気絶しちゃったからな。アルベドエ……。

「許可する。では説明せよ」

「お願いします」

アインズさんが許可を出し、俺もそれに続く。

「畏まりました。アルベドとシャルティアは、気絶したと言うよりは、脳内が極限まで煮え滾っている状態になっていると思われます。シャルティアは喜びすぎ、アルベドは嫉妬によるものでしょう。偉大なる御二方の前で臣下の礼もままならぬ有様になるとは、無礼千万だと思いますが、それ程までに頂いた褒美が大きいものだったとも取れます」

(大きいのか!?)

(それ大きいのか!?)

シャルティアとアルベドがぶっ倒れている傍ら、二人揃って似たような突っ込みを個人メツセージで叫んだ。

ともあれ、置かれている状態が非常に良く理解出来た。シャルティアとアルベドが呟くように発する謎の奇声がBGMという状況下ではあったが、デミウルゴスの説明は分かりやすかった。何よりその思いは俺もたくさん味わっている。あ、思い出しただけで精神安定化が……。

「二人きり」の時に限りアインズ様の”偉大なる旧名を呼ぶ”許可。……言葉にするだけでも甘美な響きです。他の者もそうですが、特にアルベドとシャルティアならば殊更でしょう」

「よく、分かりました。ありがとうございます、デミウルゴスさん」

俺もアインズさんもてつきり褒美がショボすぎたなんてマイナス方向に考えていたが、『モモンガ呼び』はナザリックの面々にとってすっごい価値があったようだ。ジャブだと思つて繰り出した技がワールド系スキルだった気分……。

「安心したぞ。私はてつきり、褒美として不十分だったのではないかと危惧していた」

「ご謙遜を。世界級アイテムを超越する、至高の褒美でございます」  
「お、おう」

この様子。分かっちゃいたがマジで言ってるようだ。こういった”特別”が効果あるのは、何もシャルティアだけじゃなかったみたいだな。

であれば……。

「うう……あ、アインズ様あ……何故……何故……」

設定が”モモンガ”を愛しているアルベドのダメージはとんでもないって事だ。俺は、この世の終わりを体現したような表情で倒れ伏すアルベドを見ながら、この想定外へのフォローをどうするか頭を悩ませた。

## 四巻編

### 逆転の妙手？

ナザリツク地下大墳墓、アツシユールバニパル。第十階層に設けられた大図書館だ。入り口には玉座の間と同等の大きな扉が据え付けられており、それを守る形で強力な武人型ゴーレムが待機している。さる偉大な御方を通し、一仕事を終えたゴーレム達は今も変わらぬ姿のまま鎮座していた。

「……ふむ」

アツシユールバニパルの一角、二階のバルコニー部分に設置された見事な意匠の木製机一つと向かい合うように設置された椅子が二つ。席に着いているのは、ナザリツクの者ならば敬意を表して止まないアインズことモモンガ、アバ・ドンの二人だ。

「……」

本のページを捲る音、モモンガの呟き、アバ・ドンが背中への翅の位置取りを微調整する音等が静かに響き、木製の棚の数々に吸い込まれるように消える。

一見、静かに大図書館を利用しているようにしか思えないが、内心、もとい個人＜<sup>メッセージ</sup>伝達＞は様々な会話が飛び交っていた。

(……アルベドさん、大丈夫ですかねえ。モモンガさん)

(私室で休む許可を与えた上で、ハンゾー達が運んでったから、暫くは。……目を覚ましてからは俺がなんとかしますよ)

(お願いします)

本に目を通しながらの会話は、何となく密使みたいでワクワクした。

件のアルベドぶつ倒れ事件は一旦幕を下ろし、今は大図書館で話し合い中だ。円卓の間以外も使ってみたいと言う、アバ・ドンの要望によるものだ。だが、勿論の事だが気分転換だけが狙いではない。むしろ、もう一つの狙いが本命と言える。

今、二人はユグドラシルオンラインの攻略情報、スキル、魔法の情

報を纏めた書物を閲覧している。十中八九ギルドメンバーの誰かが書いた物であろう、有名な情報や効果が簡潔かつ分かりやすく纏められている。

しかし、簡潔とは言えユグドラシルオンラインの魔法とスキルは膨大なものだ。従って、その書物は最早鈍器と言って差し支えない。装備したら鈍器判定を貰いかねないレベルだ。

(えーっと、『枯れた技術の水平展開』だっけ。良い教訓ですね)

(はい。昔の人が考えた哲学の一つらしいです。とは言うものの、モモンガさんは読まなくても平気な気がしますけど)

(そんな事ないですよ。俺も結構抜けてる所ありますし、こういう事も大事です)

今ある物やかつての技術を有効に活用する。

この発想はナザリックを存続させる上で、必須の考えと言える。何しろ『枯れた技術』に関しては、大量にあるからだ。二人で言うならば、使わなくなつた低位階の魔法や、使う機会に恵まれなかつたスキル、アイテム等がそうだろうか。

異世界に来て、ユグドラシルと異なる仕様や効果が多々ある中で、有効になりそうな何かが無処から出てくるかも分からない。今も二人が続けている、剣刀蟲による安全な特訓方法等が最たる例だろう。フレンドリファイア、味方への攻撃判定が付いてしまった故の対策なのだが、この発想が良いヒントになるのではと、二人は考えた。

実際、今まで目を向けていなかった本を開いているのだから、既に実行していると言える。だが、残念ながら具体的な成果は今のところ出ていない。

尚、気分転換としての効果は抜群だ。何となく、昔やっていたゲームの攻略本をついっつい読みふけてしまい、夢中になってしまうような感覚を、二人は感じていた。

(アインズ様とアバ・ドン様のご両名はあんなに熱心に読書を……。優れた才をお持ちなだけでなく、決して努力も怠らぬ姿勢。及ばなくとも、見習わなくては……！)

至高の二人の傍ら、司書Jと書かれた腕章を装備したエルダーリツ

チが図書の確認作業をしている。至高の二人をそれはもう丁重に出迎えてから、本来の作業に戻った。二人に感化されたせいかな、かなり張り切り気味だ。この後の埃払いもいつも以上で徹底的にやる所存だ。表情は骸骨そのものなので分らないが。

ちなみに、本来ならば司書長であるスケルトンメイジのテイトウス・アンナエウス・セクンドウスと、その部下であり、モモンガと同等の種族である死の支配者<sup>オーバーロード</sup>もいる筈なのだが、現在はスクロール制作の業務を別室で遂行中だ。作業に戻る前、図書館で働くアンデッド達は全員、モモンガとアバ・ドンから労いの言葉を受けた。その為、やる気を新たに、と言うより限界突破中である。

「アインズ様、御多忙のところ、失礼致します」

「……ん、構わん。何の用だ？」

読書している最中、現れたのは別の司書だ。司書Jと同じくエルダーリッチである彼(?)の腕章には司書Bと書かれていた。モモンガとアバ・ドンへ最敬礼をし、用件を話し始めた。

「はっ、報告致します。アルベド様の意識が回復したとの知らせが入りました。現在も、私室にて待機中との事です」

「そうか。すぐに行く」

どうやら、ハンゾー達から連絡が来たようだ。時は来たと言わんばかりに、モモンガは立ち上がる。

(アバさん、そういう訳なので、行ってきますね)

(いてらーです)

(有用なスキルの調査と、コキュートスの件、お願いします)

(了解！ 頑張ります！)

二人は軽い目配せをし、モモンガは指輪による転移でその場を後にした。



「やてと……」

アイنزは今、第九階層にあるアルベドの自室前に来ている。階層守護者の住居は、皆自分の階層に設けられているのだが、アルベドは違う。

元々、創造主であるタブラ・スマラグデイナは「設定は机上のもの」とする考えに基づき、アルベドの部屋を用意していなかった。その為、ギルドメンバーの予備部屋を宛てがい、彼女の住居は第九階層にあるのだ。

意を決し、扉をノックする。

アイنزはナザリツクの絶対的上位者として振る舞い、様々な物事に取り組んできた。だが、女性の部屋にいきなり押し掛ける等、今まで以上に未知の経験。ノックをする前にも、精神安定化が一度発動したぐらいだ。エントマと接している時のアバ・ドンはもつとひどい事になっているらしいが、良く耐えられる物だと逃避気味に考える。

「アルベド、私だ」

「……そ、その御声は……」

扉越しに狼狽気味の声が聞こえた。

「……あー、うん、アイنزだ。入っても良いか？」

少し気恥ずかしそうにアイنزが答える。

「しよ、少々ー！ ほんの少しだけお待ち下さい!!」

そう言うや否や、部屋の方からドツスンバツタンとお祭り騒ぎな音が鳴り響く。アイنزは、扉がギャグ漫画調の弓なりになっている錯覚を覚えた。

待っていると扉が開き、中からアルベドが現れた。

「お待たせ致しました。どうぞ、お入り下さいませ」

「……うむ」

普段の堂々とした佇まい、時折見せるハシヤギつぶりはどこへやら、覇気が一切無い。だが、しおらしくなった姿もまた薄幸の美女と言わんばかりであり、彼女の美貌に一切の陰りは無かった。

(やばい、ちよつとグツときた)

アイنزの中身である鈴木悟目線だと、アルベドの容姿はぶつちぎりのタイプであり、超弩級の美女だ。油断していると、失態を演じてしまいそうだと危機感を覚えた。

中に入った第一印象として、整然とされた小奇麗な部屋だと感じた。

ただ、奥に設置されたアンティーク調の戸棚が、パンパンに盛り上がっているのだが、多分あれは見なかったことにした方が良いのだろう。

部屋の隅には、モモンガの紋章旗とアイズ・ウール・ゴウンの紋章旗が、綺麗に立てられている。

これは、アイズの知る由も無い事だが、アルベドの心にはとある変化があった。

まず前提として、彼女の忠誠心の全てはモモンガに対するものだ。アイズ・ウール・ゴウンに対して見切りをつけていることはおろか、自らの創造主に対しての感情も、ギルドを見捨てた者であるとして、憎悪にまで達していた。アイズ・ウール・ゴウンの紋章旗を床に捨て、粗末な扱いすらする始末であった。

だが、それも過去の話となりつつある。

以前述べた通り、大復活を果たしたアバ・ドンの影響は、モモンガの心に明らかなプラス作用をもたらしていた。アンフィアテアトルムで見せた連携もさる事ながら、モモンガはアバ・ドンを頼りにしているし、アバ・ドン自身も、モモンガの事、ナザリックの事、配下達の事を一身に考えているのが、行動で遺憾無く伝わった。

その全ては、アルベドが考えを改めざるを得ないものだった。

今までのままでは、モモンガに不幸をもたらしてしまう。愛するあの御方が悲しむ姿を見たくない。そう気付いたアルベドは、今一度、モモンガが愛したアイズ・ウール・ゴウンを信じてみようと思ったのだ。その気持ちだが、紋章旗への扱いに表れていた。

だが、当の本人はそれどころではないようだ。

「……今の私は、シャルティアに先を越されそうな行かず後家です。

哀れな私をどうか見ないで下さい」

なりゆきで、アルベドのベッドへ二人座る状況となる。普段のアルベドなら鼻息を荒く狂喜乱舞するところなのだが、シャルティアへの褒美が相当に堪えたのかしおらしいままだ。そもそも、正妃か側室かで揉めていたのに、行かず後家とまで言わしめるとはいよいよもって重症である。

「……あー、その、アルベド。お前が手柄を立てた時にも同じような褒美を取らせるつもりだから、今は耐えてほしい」

「でしたら！ 私も、私もアインズ様をあの御名で呼びたく思います！」

「すまないが、そうはいかない。時間が経てば変わってもくるだろうが、今はシャルティアの意思を尊重せねばならないのだ」

「そ、そんな……」

シャルティアに与えた“モモンガ呼び”の肝はアバ・ドンが言っていた通り、特別感にある。それを崩す事はあってはならない。アルベドには悪いが、彼女が立てた手柄を考えれば、それぐらいの配慮はしないと、罰が当たるだろう。

アルベドは失意のどん底だ。モモンガをモモンガと呼ぶ。これ以上崇高な呼び名が果たしてあるだろうか。あの、憎たらしい虚乳ヴァンパイアは事もあるうに素晴らしきモモンガの名を独り占めにするのだ。この絶望的状况下を打破する褒美があるとは到底思えない。

「……ハッ!?!」

だが、そう思っていた矢先、アルベドは天啓を得た。モモンガをモモンガと呼ばずとも、二人の仲を確固たるものにし、尚且つ、シャルティアへの牽制にも繋がる妙案を。

「どうだアルベド、何か良い物が思いついたのか？」

「はいー」

「良いだろう、言ってみろ」

もし、これが叶ったならば、そういった打算を抜きにしても、すごく幸せだ。そう思った瞬間、アルベドは既にアインズへ答えを述べて

ていた。

「で、でしたら……私は、いずれかの褒美とするならばアインズ様をこ  
うお呼びしたいのです！……『あなた』と！」

「へ？」

アインズは思いがけない提案に、目が点になった気がした。気がし  
ただけだ。

「……そ、それで良いのか？」

「はい！」

一点の迷いもない返事だ。

（あ、”あなた”か……。そう来るとはな……）

諸説あるが、”あなた”もしくは”おまえ”とは、古来の武家から  
伝わる夫婦が互いを呼ぶ時の名称である。民衆でも広まり、一般化し  
たのは有名だ。まさか自分がそう呼ばれる日が来るとは思いもして  
いなかったが、尚更想定外だったのはその破壊力だろう。

”あなた”の一言は、鈴木悟が家庭の為に仕事をし、帰る家で暖か  
く出迎えるアルベドの姿を容易に想像出来てしまう。

（な、何か緊張してきたぞ）

「ふ、ふむ。良いだろう、アルベドが素晴らしい働きを見せた暁には、  
二人きりの時そう呼ぶ事を許可する」

「……！」

アルベドの表情がみるみるうちに明るくなっていく。曇天の薄暗  
さが、一気に快晴へと変貌したかのようだ。これはもうひと押しすれ  
ば、きつとやる気を持って仕事に掛かるだろうと確信したアインズ  
は、更にもう一つ提案をした。

「そうだな、今この時だけ許そう。早速私をそう呼んでみるが良い」  
「く、くふー！ よよよ、よろしいのですか!？」

いつもの調子が戻ってきたようだ。アインズは手応えありと確信  
する。それだけでアルベドが復活するなら、安いものだ。後、ちよつ  
と呼ばれてみたい気もするという気持ちが無くもない。

「褒美の先取り、と言うべきか。その、アルベドはいつも頑張っている  
事を私はよく知っている。だが、依怙贖戻になりかねないので、他者

には内緒だぞ?」

「はい! はい! 勿論です!」

すっかり元気を取り戻したアルベドに、モモンガは安心した。

「で、では、あ……あなた?」

「うむ、なんだ?」

「……あなた!」

「なんだ、アルベド?」

(やばい、結構来るぞ、これ)

アルベドは勿論の事だが、モモンガも結構グラついていた。しかも、アルベドのベッドに隣同士座っている状態。どうしてもそういう意識をしてしまう。

「あ・な・た」

「ふふふ、そう何度と呼ばずとも、私はここにいるぞ?」

「……くふー!」

アルベドが頬を赤らめ体をくねらせている。表情は崩れきっているのだが、それでもなお崩れぬ美貌と放たれる色気はアインズにもかなり効いた。

仕切りにアインズを「あなた」と呼んでは、アルベドは身悶えする。

(ま、まあこれくらいで喜んでくれるなら、良いかな?)

本人も大喜びのようだし、これで業務に支障を来さないぐらい精神が回復しただろう。この時限定なので、気が済むまで呼ばせてやろう。後は頃合いを見て去れば、ミッション達成だ。

そう思っていた矢先の事だった。

「……」

「……ん?」

内心込みだと、お互いに身悶えしていた中、不意にアルベドの動きが止まった。緩急の差も一切なく、くねらせていた体がピタリと止まったのだ。急な変化にアインズは戸惑った。

(な、なんだ? 何がどうなったんだ?)

心なしか、濃密な何かの気配を感じた。アインズの危機センサーが警鐘を鳴らしている。

「どうした?」

「……………あなた、少し失礼しますね」

「あ、アルベド?」

アルベドはスツツと立ち上がり、目にも留まらぬ早歩き一直線に扉の方へ向かった。

——それと同時に、ガチャリという音がした。

「あ、あのー、アルベド? どうして、鍵を閉めたのかな?」

「申し訳ありません。あなた……………私はもう我慢が出来ないので……………。浅ましくも愚かな私をお許し下さい、あなた」

最初は、もつと”あなた”呼びを続けたという欲求から来ているものと思っただが、それ以上のナニかである事に、アインズは気がついた。

じりじりと、アインズににじり寄る姿は、美女の皮を被った野獣の眼光と言わざるを得ない。仕切りにあなたと連呼するアルベドに対し、今の自分は転移してから最大級のピンチに陥ってる、間違いない。(これ、やばい奴だ! これやばい奴だ!?)

アルベドの理性は既に滅殺された。シャルティアに手柄を取られた危機感、アインズの優しさ、私室に二人つきり、お互いが同じベツドに座り、トドメの「あなた」呼び。理性が破壊される要素は十二分にあつたのだ。誰だつてそうする、アバ・ドンだつてそうする。

「ストープ! アルベド! 落ち着くのだ!!」

「ごめんなさい! 落ち着けません! こんな素晴らしすぎるご褒美に私は限界です! さあ! 愛し合いましょう! あなた!」

「ぬおおお!!?」

ベツドに座っていたのが好機であるが如し、アルベドはアインズを取り押さえた。彼の状況は正しく、肉食獣の檻に入れられた小動物だろう。これぞ、肉食系女子である。

「あなたああああ!!」

「は、離してええええ!!?」

アルベドのパワーに為す術もないアインズ。

この後、かなり際どいところまでいった後、のち指輪の転移で逃げれば

良い事によろやく気づき、事なきを得た。

## 念願

「うおおおおお！マジですか!?!モモンガさん!!」

俺は絶叫した。

ナザリック地下大墳墓、執務室。この部屋の中には俺とモモンガさんの二人きりだ。

モモンガさんの一言をきっかけに、俺の胸中に驚きと喜びが波状攻撃を仕掛けてきた。待望していたことが遂に許可されたのだ。肩の鎌もヒュンヒュン荒ぶっている。あ、器物破損とかは無いから大丈夫だぞ、念のため。

「アバさん、声！声のトーン下げて……!」

「おつとと失礼しました……」

声のトーンを下げる前に、精神安定化も働き俺は落ち着きを取り戻す。大事なお話ってことで、護衛の面々は外で待機させてるのだが、恐らく聞こえたかもしれん。聞かなかったことにして貰おう……。

「それでモモンガさん、本当に良いんですね?」

「はい、そろそろ頃合いでしょう。とは言え、範囲は限られますよ?」「いやいやいや、充分です!ほんとに」

その範囲というのはナザリック大墳墓から半径3km以内。これを狭いと取るかは広いと取るかは何とも言えないが、俺からすれば正真正銘本物の森を探索出来るだけでも値千金なのである。

「では、現在アウラ達が調査しているトブの大森林。南側の安全圏に限り、アバさんの外出を許可します」「やったー」

俺はさつきより音量を落として喜びを露わにした。目下調査中だったトブの大森林の一部に限り、査察の名目で散歩することが出来るようになったのだ。

「ただし、まだまだ予断を許さない状況です。アバさんの護衛は嚴重極まりないものになりますからね」

「勿論です」

俺は大きく頷く。



これは当然だろう。不確定要素が残っている中で、外に出ることを許可してくれただけでも相当な無茶をしたと言える。【黙示録】のみんなに護衛して貰うのは当然として、奪われるリスクを踏まえた上で世界級アイテムまで持たせてくれると言うのだ。これ以上は望むべくもない。

「外の世界観を生で感じる事も目的ですし、その辺はきっちりやりますとも」

「それが分かっているなら大丈夫ですね」

外の世界の把握は一応の目的でもあり方便でもある。

その実態は普段頑張っているご褒美らしい。大墳墓に缶詰のままでは心身ともよろしくないだろうとモモンガさんが気をまわしてくれたのだ。ありがたやありがたや。

……実をいうと、ナザリック内での永久生活でも割と平気なんだけどな。多少の緊張はあれど、みんな慕ってくれるし、滅茶苦茶居心地良いし。まあご愛敬だ。

「ほんつと、明日が楽しみですよ。今夜は眠れないなあ」

(屋内公園遠足前の子供みたいだな……)

モモンガさんが何やら考えているが、そんな感じでついにナザリック外へ。ワクワクと精神安定化が止まりません。

鬱蒼と、日光を遮るほどの木々が生い茂る深い森の中を、異形の軍団が闊歩する。

まず目に付くのは先頭、木々の上を風切る蜘蛛の異形種。八肢刀の暗殺蟲だ。3体の暗殺蟲が木を揺らすことなく飛び回り、周囲の状況を複眼で死角無く確認をしている。偵察を主としたであろう彼らの

眼差しは、異物を欠片も見逃さぬという覚悟が宿っていた。

その上空を巡回するのは、5体の赤褐色をしたドラゴンだ。巡回するように悠々と飛び回っているのは、空の問題事を即座に片付ける算段なのだろう。

暗殺蟲の後方から追隨するのは、狼型、虎型、豹型をした魔獣の群れだ。中には文字通りごうごうと燃え盛る獣、口内から毒液を滴らせる獣もあり、そのどれもが深い毛の中にはち切れんばかりの分厚い筋を秘め、口内に鋭い牙をずらりと並べている。獲物を八つ裂きにするには十二分だ。

その更に後方には、当世具足を身にまとったカブト虫ベースである蟲人型のソードマスターが10体控えている。

そして、魔獣とソードマスターの群れを縫うように這い回るムカデ型、カミキリムシ型、毒アリ型の蟲達と、八枝刀の暗殺蟲と魔獣の間辺りを滞空する、蜂型蟲の群れは、それらの群体の隙間を埋めるように巡回しており、尾先からの毒液噴射による遠距離攻撃の用意があつた。更に、地中は這い回る地蜘蛛型の蟲によるテリトリーが形成されていた。

これと同様の部隊が東西南北、輪を作るように編成されている。

かなりの密度と種族の閥鍋ぶりからは想像もつかない程の一糸乱れぬ行進は、正に訓練された軍隊そのものである。彼らは斥候と敵の殲滅を兼ねた前衛部隊だ。全ての異形が、心を一つにし、一つの任務に従事していた。

その任務とは、彼ら全てが神と崇める至高の御方の勅命である、もう一人の至高の護衛。

”何としても無事に終わらせる”

その気持ちと素晴らしき榮譽を例外無く胸にした彼らは、この場で何が起ころうとも、絶対に完遂せねばならない。彼らの行軍は何人たりとも乱すこと敵わぬ。それほどの気迫を中心地で受ける当の本人は圧倒されるほかなかった。

(うわあ、なんだかすごいことになっちゃったぞ)

いつぞやのエントマだいしゆきホールド事件の時と同じく、超変異

体千鞭蟲に仁王立ちしているアバ・ドンは、人目の付かない森の中とは言え、ここまでの部隊になるとは思わなかったと仰天していた。

(モモンガさんが少数精鋭で探索してる反動かなあ……)

これらの大部隊全てが自分一人を護衛するために宛てがわれたのだ。聞きしに勝るとはこのことである。おまけに、アバ・ドンの側を守る、いわゆる親衛隊もそうそうたる面子である。

前衛部隊の直近に、コキュートスの部下であるガーディアンナイト守護騎士。オーラ漂う真紅の邪槍を装備し、深紅のサーコートを羽織ったノコギリクワガタ形の蟲系騎士だ。

その内側には同じくコキュートスの部下、ロードナイト王騎士。魔法が付与された大型のグレイブを装備し、腰には煌びやかな装飾の大剣を下げ、白銀のサーコートで纏われた甲虫さながらの鎧は、優れた耐性を持ち、レベル70でありながら、レベル100のプレイヤーをウザがらせる硬さを誇る鉄壁の蟲系騎士である。

守護騎士、王騎士の両名は、ただでさえ士気の高い部隊の中でも更に際立つ程覇気に溢れている。何しろ自らの名に関する任務を、最も重大な形で請け負うことになったのだ。己が生まれた意味の全てがそこにあると言っても過言ではない。表情には出ないが、やる気の満ち溢れ方は群を抜いている。

そして、王騎士に囲まれる形になっているアバ・ドンのすぐ前方には、第5階層守護者【黙示録】の四騎士が一人、コキュートスが行軍する。この大部隊の総指揮と、アバ・ドンの護衛における最高火力を担当している。

同じく、四騎士である30cm大のゴキブリそのものな恐怖公はアバ・ドンの右隣だ。

「シルバーゴレムコックローチ、我ながら実に見事なものです。こうして実際に這う所を見ると、感動もひとしおですね」

「光栄ですぞ。アバ・ドン様、るし★ふぁー様御両名の賜物ですな」

恐怖公は、銀色に眩く輝く大型のゴキブリに騎乗している。昔、るし★ふぁーが超希少金属をちよるまかし、アバ・ドンが造形を施したゴキブリ型ゴレム。シルバーゴレムコックローチだ。そのレベ

ルは70。戦闘力ならばプレアデスを凌駕する。

(あうう、アバ・ドン様はあ、今日も御輝きになられてるう……)

エントマ・ヴァシリツサ・ゼータはアバ・ドンの左側で飛行蟲を用いて低空飛行している。時折、アバ・ドンを仮面蟲越しに熱っぽい視線で見つめ、操作が覚束なくなるも、飛行蟲による行軍は乱れない。飛行蟲達も日々努力しているのだ。

「……？」

「……し、失礼しましたあ」

「いやいや、何の問題もありませんよ」

エントマが、アバ・ドンの方を見つめると必ずと言って良い程、アバ・ドンと目が合う。そこで、すぐさま目を逸らすのは却って失礼に当たるのではないかという葛藤が生じ、暫く見つめあい、また視線を前に戻す。これで何度目か分からない行為を、時折繰り返していた。

(エントマちゃんやっぱ可愛いなあ……。見つめられる理由は分からんけど、何か幸せだ……)

理由は分からないが、向けられているのは嫌な感情ではない。最近蟲の感情を何となく理解できるようになって来たアバ・ドンは、エントマの視線をそんな風感じていた。目が合う度に、お互いの体温が微かに上がり、少し恥ずかしい気持ちになるのだが、度々繰り返してしまう。

(無礼なのに、目を離さずにはいられない……)

アバ・ドンが咎めなかったからなのか、自分自身の気持ちを段々と隠さなくなってきたからなのか、或いは両方かもしれない。咎めないからと言って何をやっても良い訳ではないのは百も承知だが、ついつい繰り返してしまうやり取りであった。

「……」

一連の様子を眺める形になった王騎士の一部は、それを止めるべきか迷う。自分たちの任務はエントマを含め、アバ・ドンの守護が最優先だからだ。

(温かく見守りましょうぞ)

「……！」

だが、それは恐怖公が身振り手振りでごっそり阻止。

(アバ・ドン様自身も御望みですからな)

「……」

王騎士達は静かに頷く。

偉大なる創造主の考えを最も理解するのはやはり被創造物である恐怖公なのだろう。そして、至高の御方自身が望んでいるならば、止める理由は皆無だ。アバ・ドンがこの状況を望んでいることを密やかに理解した王騎士達も、心の中でエントマにエールを送る。

エントマの恋模様は勿論のこと、アバ・ドンに何か崇高なる秘密が隠されている件は最早【黙示録】中の知るところである。

別にコキュートス等が「秘密有り」と公言した訳では決してないのだが、その様子から非常にデリケートな問題であるのは皆が察したので、守護の任はコキュートス達が専念し、恋路の成就を密に応援するのみである。

余談だが、無意識に歩くカップルの七割は、男性が右側で女性が左側になる。その影響が配置に出ているかは謎である。

一方その恋模様の中コキュートスはと言うと。

(エントマハ、アバ・ドン様トノ絆ヲ育ンデイル。ソシテ、ワタシハアバ・ドン様ノ守護ヲ仰セ遣イ……ヌオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!  
コノ恋路ヲ邪魔スル者ガアレバ、必ずヤ、斬リ捨テテミセルゾ!!ソシテ、行ク行クハ御生マレニナル坊チャマヲ、護衛スルガ使命ナリ!)

コキュートスは、武器を強く握りしめて奮起する。案の定、士気が高かった。それも、先の守護騎士と王騎士をも凌駕する勢いだ。大軍団の行軍と真後ろの蜜月がなければ猿叫を上げていただろう。

彼は、自らを一本の剣だと考えている。偉大なる至高の御方の手により振るわれる一振りの剣であると。そして、それはアインズとアバ・ドンの両名に命じられた今、この時こそが、ソレなのだ。武器も本気モードの四本装備で万全の態勢を整えている。

しかも、その全ての武器が、己の創造主である武人建御雷の武器なのだ。左上腕に、主の名を冠する建御雷八式を携えたコキュートスは、その氷結した甲体にとことんまで反するほどに燃え上がってい

る。

アバ・ドンを中心とした周囲は、熱い空気と甘い空気が混ざり合つて、最早よく分からないことになっていた

(なんだかみんな、やる気が感じられるなあ。いいことだ)

改めて、アバ・ドンが外の様子を堪能するのはもう少し後であった。

## ●●死す

トブの大森林南部、尚も深き森の中。異形の大行進の中心地にて、大行軍に慣れを感じ始めたアバ・ドンは周囲を一望する。

「……」

首をせわしなく左右に動かし、複眼を総動員。その景色を隅々まで堪能する。

青々と生い茂る草木の数々。陽光すら遮る程、幾重にも折り重なった葉。力強く根ざし、太い幹が存在を主張する木々。鼻覚いつぱいに空気を吸い込むと、むせ返りそうなほどの緑と土の香りに包まれる。

「すごい……」

ごくありふれた感想を、万感の思いで呟いた。

「あちらへ」

アバ・ドンの一言で、超変異体千鞭蟲が頭を持ち上げると、アバ・ドンは目の前の葉を一枚摘んだ。

「これが、本物の葉……！これが、クロロフィルの緑……！これが、大地に根ざし育まれた植物!!ふふふふ……」

興奮気味に葉を裏表じつくりと眺めた後、おもむろに口に含んだ。

「アバ・ドン様あ?」

エントマは、突然の奇行とも言える至高の御方の行為に少しばかり驚いた。エントマに限らずとも、配下達もアバ・ドンから目が離せない。

「んー、食用とは言い難い味だが悪くはない……。これこそが美しい蝶を生む糧にな……あ」

ゆつくりと咀嚼した後、摘んだ葉を飲み込んだアバ・ドンは、自分の様子を心配そうに何う配下の視線にようやく気が付いた。

(や、やややばい。ドン引きされたかな? チキショー! またこのパターンか!)

アバ・ドンは取り合えず、何か喋って様子を伺うことにした。

「み、皆さんは何故、葉を食べたのか疑問に感じているようですね」

「ハッ、失礼ナガラ、何故葉ヲ才食ベニ?」

コキユートスが皆の総意を恐る恐る代弁した。

「えー……芋虫、毛虫等の植物性を好む幼虫はこれを糧にして力を蓄えます。それはいつか蛹になり、やがて蝶になるのです。私は、彼らの好んだ味と栄養をこの身で確かめたかった。いやはや、貴重な体験が出来ました」

「ナルホド……得心シマシタ」

「毒はあ、ありませんでしたかあ？」

エントマが心配そうに質問する。上目遣いでこちらの気を使った様子は、アバ・ドンをかなり萌やした。

「あ、あー大丈夫ですよ。毒の判定はスキルにも引っかけりませんでしたが、耐性にも自信があるのでそちらに関してはご心配なく」

「ほ……。畏まりましたあ」

胸をなでおろし、心から安心しているようだ。愛おしい。

「お楽しみ頂けて何よりでございますぞ。心ゆくまでご堪能くださいませ。護衛は我輩達が請け負いますからな」

「ありがとうございます」

（なんと……。アバ・ドン様は葉を食むことによって、蟲達の心への理解を更に深めようとされていたのだな……）

護衛騎士達と王騎士達は、至高の御方の真意を理解すると感動に打ち震えた。偉大なる蟲の王の慈悲の一端を垣間見たのだ。だいたいあつてる。

（よし、とりあえず納得してくれたっぽい！本当は土の味とか木の幹の味も確かめたかったんだけど、今日は我慢しよ……ちえ）

「して、お味は如何がでしたかな？」

「悪くありませんが、やはりナザリックの料理が一番のようです」

「それはそれは……。その御言葉、料理長達も喜びますぞ」

「口直しに、お飲み物を御用意させていただきます」

「ありがとうございます」

口直しは後回しだ。本物の葉の味を、もう少し口内に残しておきたかったからだ。

（全く、ずるいなあ、モモンガさんは）



清浄な空気、どこまでも広がる草原、更には満天の星空を、一番に楽しんでいたモモンガに心の中で抗議した。ここにも、自分自身やギルドメンバーのブループラネットが求めて止まなかったものが有った。

遠隔視の鏡へミラー・オブ・リモート・ビューイングで眺める手もあつたのだが、どうせなら最初はそれを生で体感したいと思い我慢していたが、その結果得られた感動は凄まじい。

ゆっくりと森林を観光出来るように、超変異体千鞭蟲は速度を緩め、配下の異形達はより周囲への警戒を強める。この至高の森林浴を何人にも邪魔させぬように。

「ふう」

何度目か分からぬ精神安定化の折、ようやく落ち着いたアバ・ドンは生じた疑問を口にする。

「生き物がほとんど見当たりません……」

緑は豊富だが、それに乗じる生物が見当たらないのはどうということだろうか。答えは単純明快であつた。

「全て逃げ出したようすな」

「ですよね」

恐怖公の答えは極めて納得のいくものであつた。目に見える程土気の高いハイレベル異形集団に、大森林の生物たちは一目散に道を譲つたのである。

「コキュートスさん、殺してはいませんか？」

「ハッ。アバ・ドン様ノ命ニ従イ、逃げ出シタ生物ハ全テ見逃シテイマス」

「よしよし、ではそれを続けるようにして下さい」

「承知シマシタ」

今回は見敵必殺の必要はない。害が無ければ、原生物はそつとしておく方針だ。

「アバ・ドン様ハ、森ノ原種ニ関心ヲ持チデスカ？」

「ん？ええ、そうですね。非常に興味深いです」

コキュートスは、恐らく生物との邂逅を求めているであろう主に提

案をする。

「御望ミトアラバ、捕獲致シマスガ……」

「ああ、そこまではしなくとも良いですよ、何しろ……」

だが、アバ・ドンは発見していた。

「捕獲せずとも、そこにいるじゃないですか」

「ソコニ、デスカ……」

「逃げ出さない生き物があ、いたのですかあ？」

「ほら、あの葉の裏側ですよ、エントマさん」

至高の御方が指差した草の一部。エントマが飛行蟲の一匹を用いて葉をめくると、その茎の裏側には米粒よりも更に小さな灰色の虫が大量にくっついていて。視力には自信があるので、意識すれば認識は容易だった。

「退化した翅、平べったい体に細く短い口針。あれは恐らくアブラムシの一種、口針を柔らかい茎に刺していますね。植物の中を流れる師管液などを吸って食事を取っているのでしょう。見慣れない色をしています、恐らく大森林に適応した種族、とても大人しい気性のようです」

「オオ……」

「草食の虫い、ですねぇ」

部下達は至高の御方の知識に基づいた推理に感嘆する。気を良くしたアバ・ドンも、得意の知識を披露する機会についつい饒舌になってしまう。

「本当にい、ちっちゃい虫ですねぇ」

「ムム、ナント小サナ……」

部下達も、ここまで小さい虫は初めて見た。恐怖公の眷属や、エントマの蠅吐きによる蠅よりも更に矮小だ。アバ・ドンが第六階層に設置した蟲達の中にも、これ程までミニマムサイズの蟲はいなかった。正確にはいなかったのではなく、作れなかったのだが。

「テントウムシは好んで捕食するそうですよ。この森林にいるかは分かりませんがね」

「むう、私達が食べるにはあ、向いてないですう」

「ははは、確かに」

食べるにはいささか小粒すぎる虫だ、どんぶり一杯に用意すれば食料にならなくもないが。

この虫達はレベルに換算すれば最早小数点以下の領域だろう。脅威足り得ないのは間違いないので、護衛達もあえて見逃していた。小虫一匹侵入を許さないことも可能なのだが、アバ・ドンが辛うじて食い止めた。

「エントマさんは、蟲も捕食するんですね」

「はい、でも一番は人間のお肉ですう。蟲はおやつみたいなものですねえ」

「ふむ、やはり蜘蛛人の肉食性は蟲にも及ぶと」

「仰る通りですう」

「ふむ……」

アバ・ドンは主腕を組み、考え込む。

(我輩、何か嫌な予感がしますぞ)

「もしかして、恐怖公の眷属も?」

「!?」

「ッ!」

「!」

森林内に今までの比ではない程の緊張が走った。

地中を走る地蜘蛛の異形種はうっかり石にぶつかり、蜂達の足並み揃えた羽音に乱れが生じ、八枝刀の暗殺蟲達は木の上で体を硬直させた。汗腺が無いのに、冷や汗が噴き出すような感覚に苛まれる蟲系異形種達。魔獣達も同様だが、それを解決する術は無い。

(イ、イカン! ソノ話ハ……!)

(こ、これはどうしたものか!)

コキユートスは慌てふためき、恐怖公はこの話題を如何にしてフォローするか必死で頭をフル回転させる。先ほどとは別次元の緊迫した空気が護衛達にも蔓延した。

「……」

「……」

既に知つての通り、エントマは恐怖公の眷属をおやつ代わりにしていたことがある。アバ・ドンが帰還した今は、二度としないことを誓っていたのだが、蟲知識に詳しくすぎたアバ・ドン自身の手により、奇しくも明るみになってしまった。

至高の御方とエントマが結ばれるにあたって一番の懸念材料。タブー中のタブーであった恐怖公眷属捕食問題がここにきて、白日の下に晒されてしまったのである。

(我輩が口を出し……否)

かつて、アバ・ドンが来る前の恐怖公は、眷属に眷属を共喰いさせることによって食糧事情を解決していた。恐怖公自身は余り気にしていなかったのだが、アバ・ドンは食料が確保出来る状況なのに、共喰いで飢えを凌ぐのは複雑な心境だった為、食用油を与えたのだ。

共喰い自体は生態の一つなので寧ろ肯定するが、あくまで最終手段というスタンスだ。

(慈悲深き御心をお持ちになっているアバ・ドン様だからこそ、どのような答えを……)

アバ・ドンの蟲に対する想いは計り知れない。恐怖公と眷属を始めとする蟲系異形種に向ける親愛も、エントマに向ける愛情も尋常ならざるものだ。生み出された恐怖公はそれが身に染みているだけに、創造主の返答が予想できなかった。

「はっ、アバ・ドン様の仰られた通りです！私がかつて、恐怖公の眷属をおやつ代わりに食べていました！とんだ、失礼を！」

「おっとー」

エントマはすぐさま言語を正し、蟲を降りて平伏するも、アバ・ドンが新たに呼び出した千鞭蟲(やや大きめ)が体の一部を素早く敷くことよって服が汚れるのを防いだ。

「顔を上げて下さい。エントマさん」  
「……」

アバ・ドンの千鞭蟲に乗ったまま平伏していたエントマがアバ・ドンを見る。

配下の周りには重苦しい空気が漂った。今まで、問題視されていな

かった事実だが、至高の御方が罪とするならば、それは大罪なのだ。【黙示録】は気が気でない。もし、このことを嘆き悲しんだ御方が、他の至高の41人と同じくどこかへ隠れてしまったならば、それは転移後のナザリックにおける最大の悲劇となるだろう。

「……恐怖公も含め、いくつか質問があります」

「はい」

「何なりと」

「恐怖公、眷属たちは、エントマさんに捕食されることをどんな風に考えていましたか？」

「考える」という程の行為ではありません。食べる、食べられる、逃げる。これらの行動は全て本能に従っている故。元々食うも食われるも然程抵抗はないかと。我輩は少しばかり恐れを抱いておりますが、それもまた自然の摂理と考えておりますな」

「なるほど、概ね私の考えていた通りですね」

「慧眼恐れ入りますぞ……」

恐怖公はかつて、エントマの行為に冷や冷やものだったのだが、今は別の意味で冷や冷やだ。

「エントマさんは、”かつて”眷属の捕食を行っていた。つまり、今は控えているのですね？」

「その通りです。アバ・ドン様の所有する恐怖公の眷属を、無断で食べる行為は無礼と考えました」

「そうでしたか……」

アバ・ドンは二人の回答に満足したように頷くと、暫し考える。

「ほぼ無制限に召喚が可能な恐怖公の眷属を捕食するのは、合理的と言えます」

「……」

「……」

「自然の摂理に従い、眷属が食べられたならば、それは仕方のないことでしょう。私から頼むべきことがあったとするならば”他に食べる物があるから、眷属は食べないであげて欲しい”ですかね。それが既に成されているのであれば、問題ありません。恐怖公も理解を示して

いますし」

ゆつくりとエントマに語り掛ける内容は、いつの間にか全ての配下が静聴していた。

「言わば、今眷属たちが保護されているのは、私の依怙勳員です。頼むことはあれど、責めることは絶対にありません。……ただ、最後に一つだけ聞かせて下さい」

「はい」

「手を付けた眷属たちは、残さず食べましたか？」

「脚一本残さず、大事に食べました。美味しかったです」

「ならば良し、です。眷属たちは、貴方の糧となり、業務を遂行する力の一端となったのです。今後もそれを忘れずに、励んでください」

「あ、アバ・ドン様あ……」

「この話はこれにて解決とします。異論はありませんね？」

「ありませんぞ」

「アリマセン」

「はい！」

（身が凍ル思イダツタ……）

一件落着したことに、配下達はほっと胸をなでおろし、アバ・ドンの慈悲深さを改めて思い知ることとなった。

（エントマちゃんに捕食されるとかご褒美でしょとか言えないよな……）

アバ・ドンは、咎める気は欠片もなかった。何しろ理想の死因or埋葬ランキング堂々の一位は、エントマに足から捕食されることなのだから。次いで、二位はエントマに頭から捕食されることである。ユグドラシル時代、そのことをカミングアウトしたとき、ペロロンチーノは「ちよつと勝てない」と呟いたという。

無論、天寿を全うしてからのつもりなので、まだその時ではない。

「さ、見回りを続けましょう。エントマさんも、一緒ですよ？」

「畏まりましたあー！」

（可愛い）

すっかり元気を取り戻したエントマに萌えつつ、監査を再開した。

(アバ・ドン様トエントマノ仲ガ深マツテイル！総員、周辺ノ警戒ヲ怠ルナ！)

(はっ！)

一瞬にして気を取り直した配下達は、気持ち新たに警備を強化した。

「ん、あれは……」

再開した矢先、アバ・ドンは八肢刀の暗殺蟲の一体が飛来して来たのに気付く。首に巻くスカーフは黄色、ナガトだ。アバ・ドンの前にヒラリと着地すると、流麗な動作で跪く。

(やっぱイカしてるなあ。我ながらスカーフも似合ってるし)

「アバ・ドン様に報告したき儀がごさいます」

「如何致シマスカ。アバ・ドン様」

「無論、聞きましょう。どうぞ」

「承知」

アバ・ドンの許可を得て、ナガトは報告を始める。

「トブの大森林南部奥地より、奇妙な魔獣を捕獲したとのことです」

「奇妙？」

アバ・ドンは予め、森の原生物が反抗してきた場合は勝てそうになれば撤退、倒せそうならばひっ捕らえて自分の下に連れてくるように指示していた。結果は後者だったらしい。

蟲達に連行されて来たのは予想以上に奇妙な魔獣だった。

(ハムスターだ！ものすつごくでかいジャンガリアンハムスターだ！)

アバ・ドンはその姿をみた瞬間にそういった印象を抱いた。見上げる程の巨軀と、鱗に覆われた20メートルの緑色の尻尾を除けば、ハ

ムスターそのものな見た目の魔獣に、アバ・ドンは複眼を丸くする。  
「至高ノ41人ガ一柱、偉大ナルアバ・ドン様ト謁見スル譽、謹ンデ受ケヨ」

コキュートスがアバ・ドンの供をすることになった。【黙示録】の中で、アバ・ドンを除くと一番地位が高かったからだ。初の試みに、コキュートスは緊張気味である。

簡易的に玉座の間よろしく、超変異体千鞭蟲の頭上にて良い姿勢でふんぞり返る。異世界の住人との初遭遇なのだ。何人もの部下を抱えている手前、しつかりと偉い人ぶらねばならない。

「は、ははーでござる」

(ござるってあんた……)

震えの止まらぬ巨大ハムスターが腹を見せて寝そべった。後方に控える王騎士がグレイブを握りしめる。どうやら、失礼を働いてるものと思ったようだ。

「無礼者！偉大なる至高の御方、アバ・ドン様を前にそのような不埒な真似を！」

「ああ、王騎士さん武器を収めてください。恐らく悪気はないのでしよう、一応聞きます。そのポーズは？」

「服従のポーズでござる……。うう、どうか殺さないで欲しいでござるよ……」

「ということみたいです」  
「……」

腹を見せて服従を示すのは獣の習性と同様らしい。偉大なる至高の御方の前で無礼を働いた訳ではないと理解した騎士達は、構えを解いた。腹を見せて寝そべった巨大ハムスターとそれを取り囲む蟲達の構図は、何とも言えないシユールレアリスムを醸し出していた。

「その姿勢が貴方の誠意を示しているのは理解しました。さて、私はアインズ・ウール・ゴウン、至高の41人が一人、副統治者兼蟲系異形種軍団『黙示録』最高司令官兼宝物殿領域守護者代理を務めております、アバ・ドンと申します。お見知りおきを」

こういつた時に備え、こつそり自分の地位を何度も連呼して練習し



た甲斐があつた。相変わらず役職名長すぎね?と思ひながらも、巨大ハムスターに対し自己紹介を済ませる。

「きよ、恐縮でござる。それがし某はこの森を縄張りにしていた者。人間からは森の賢王と呼ばれていたでござるよ」

「森の賢王?噂は聞いてますよ。貴方がそうなのですね」

「御存知でござりましたか」

「ええ、上司との情報共有で少々」

「さ、更に上の上司がいるでござるか!？」

「私は2番目です。副統治者ですから」

「左様でござるか……」

森の賢王は驚いた。目の前の見るからに神々しく禍々しい蟲の王者より、更に上の立場の御方がいるらしいことに。

「ここへ来るに至つた経緯を教えてください」

「分かつたでござる」

賢王は『黙示録』との遭遇時、その夥しい異形の軍勢に最初は驚くも、話を聞いてみることにした。彼女は、森のとある異変から距離を取っていたところだった。もしかしたら、その異変の関係者ではないかと思ひ、コンタクトを取つてみたところ、怪しい者と捕縛され、その集団の圧倒的な戦力差に完全に屈服したとのことだ。

「なるほど、して、貴方が遭遇した異変とやらはいつたい……?」

「それが……」

「紫色の宝珠を持った人間が、奥へ向かつてから森の様子がおかしいのじやないや」

## 便利な物差し

俺は『黙示録』の護衛達を引き上げ、すぐさまナザリツク地下大墳墓へ帰還した。森の賢王を通して、イレギュラーな要素が浮上してきたからだ。すつごく名残惜しいので、いずれまた、みんなでお出かけするとうしよう。

入り口前で、皆となんやかんや話したら一先ず解散だ。ハンゾー達と森の賢王は一緒な。

「皆さん、護衛ありがとうございます。貴方達のおかげで心おきなく査察出来ました。また一緒に外出しましょう」

「ハイ、我ラモアバ・ドン様二同行スルほまれ誉ヲ心待チシテオリマス！」

ほまれとは少々大袈裟じゃなからうかと思うが、彼らは本気のようにだ。青天井の忠誠心であるコキュートスを始めとする、護衛騎士や王騎士達も畏まる。色々と気を利かせてくれた彼らには感謝しかあるまい。それに、勇ましい蟲達の行軍は、見てて本当に壮観だった。ヘラクレスオオカブトやギラファノコギリクワガタって、男のコだよな。

「大森林の万難を排した暁には、またじつくりと散策致しましょうぞ」  
「ソノ際ニモ、是非我ラニオ任セラ」

恐怖公とコキュートスの申し出に俺は大きく頷いた。自分の蟲生にまた一つ楽しみが出来たぜ、へへへ。

「アバ・ドン様の為ならばあ、たとえ火の中水の中ですう！」  
俺もだ。

「ふふ、頼もしいですね。では、私とハンゾーさん達は森の賢王さんの一件をアインズさんに報告します。皆さんは休憩後、通常業務に戻って下さい」

「畏まりましたあ」

「デハ、我々は失礼致シマス」

「我輩もこれにて」

深々と礼をすると、部下達は持ち場へと戻っていった。恐怖公はあの骨格でどうやって礼をしているのか本当に謎だなあ。黒棺でくつ

ろぐ時にでも聞いてみるか……。

「では、私達はアインズさんの下へ」

「御意」

「お供するでござるよ！ 大老！」

大老とは俺のことである。なんかモモンガさんは殿と呼ぶ予定らしい。最初はなんのこつちやと思っただが、確か戦国時代の幕府だとか藩だとかの地位で言うところのナンバー2だった筈。まあ変えろと言う程のことでもないのですそのままだ。また、妙な称号が増えてしもーた。

モモンガさん情報によれば、現地人との会話は謎の翻訳魔法的なものが働いて意思疎通が可能になっているそうだが、どういう翻訳でこなったのやら……。

「大老はとても慕われてるでござるな。あれ程の御仁が全て従うとはすごいでござる」

「至高の御方々の慈悲深さと思慮深さは留まるところを知らない。崇敬すべきは当然のことだ」

とはハンゾーの弁である。いやー、それほどでもー。……ほんとにそれほどでもだよ。

「みんな頑張ってますから。そりゃ優しくもなりますよ」

「ありがたき幸せ……」

褒めるとみんなは心から嬉しそうに恐縮する。ナザリックのシモベ達は、本気で俺やモモンガさんに尽くすことを存在意義としているからな。それがこの短期間で身に沁みたまよ……。お給料問題が有耶無耶になつてるので、しっかり働いてたらしっかり褒めましょう。

「某も尊敬するでござるよ！殿にお会いするのも楽しみでござる」

「良い人ですよ。それに、私より強いです」

「大老より更に強い御方とは最早想像つかないでござる……」

「アインズ様は偉大なる死の支配者にして最高の知恵者だ。失礼のないようにな」

「気を付けるでござるー！」

賢王が結構フレンドリーで助かった。コミュニケーションを取る

分に問題なさそうなので、これならモモンガさんと顔合わせしても大丈夫だろう。あの人珍しい物好きだけどどういう反応するかなつと。あ、そうだ。一応現地で勧誘(?)した部下はこれで2人目だし、1人目のブレインとも顔合わせさせとくか。シャルティアが捕まえてきた青髪の剣士だ。モモンガさんと《伝言／メッセージ》で軽く打ち合わせして集合だな。

「お前の名は今日からハムスケだ。良いな」

「了解でござる！ 皆々様、よろしくでござるよー」

(えー)

玉座の間で守護者達プラス、ブレインと顔合わせしたら、モモンガさん命名により森の賢王改めハムスケになりました。うーん、このネーミングセンス。ま、まあみんな普通に受け入れてるからこれでいいのだろう。今日からこいつはハムスケなのだ。

尚、守護者達とは言ったがアウラとマールは今も森林探索中です。ほんとに頑張ってる模様。プレアデスもといエントマちゃんいないのが寂しい。

「森の賢王、噂には聞いてました。なんと見事な威容……。これをあっさりと手懐けるとは……」

ブレインはハムスケを見てそう言った。威勢のある立派な方の威容なのか。異様の方だと思つたよ、一瞬。

「至高の御方の威光ならば当然の結果でありんしょう」

「正二、アバ・ドン様ノ御力添エガアツテコソ」

「は、はあ……流石です」

シャルティアとコキュートスに釣られてブレインも俺を称賛する。

いや、ほぼなんもしてないっす。まあ遭遇のきっかけは俺だが。

「アインズさん、先にも言った通り、ハムスケさんのレベルは30強と思われれます。ブレインさんの反応からも、異世界基準で言えば、かなりの強者みたいですよ」

「ふむ、ではブレイン君。もしハムスケと戦った場合、どのような結果になるのだ？」

「えーと、その、勝てないです。も、申し訳ありませんでしたあ！」

ブレインが綺麗な土下座を決めた。責めてる訳じゃないんだけど……。

「止せ、別に咎めてる訳ではないぞ。そう畏まるな」

「は、はい……」

モモンガさんの厚いフォロー。

（ブレインさん、俺らのことめっちゃ怖がってますよ……）

（無理もないでしょう。我々は彼にとって上司の上司ですから……）

ああ、ブレイン君からすれば全員上司か）

（身内じゃない分、面接時のルプーさんよりハード……。頑張れブレインさん。やっぱ、縦社会なのはどの世界も変わらないか……）

（まさか自分たちがトップになるとは思いませんでしたかね）

（それな）

「森の賢王の知名度はかなりのものと言って良いのですね？」

「はい、少なくとも、冒険者やワーカーの間で知らぬ者はいないです」  
「なるほど……。となると、冒険者モモンのペットとして連れ歩けば

良いかもしれません。それだけで名声も確固たるものになりますよ」

「!?」

「!」

ペット、という単語にアルベドとシャルティアが反応し、ハムスケを睨んでいるような気がする。ハムスケが怯えとるがな。あの二人のことだから、モモンガさんのペットとか羨まけしからんとか思ってるのだろう。俺もエントマちゃんに飼われて、キャベツとかアーンって食べさせて欲しい。言ったらやってくれるだろうけどドン引き不可避だろう。……俺は何を言っているのだ。

(え……もしかして、コイツ馬替わり?)

(ハムスケさんが有名なのは間違いないし、部下達からの反応が良ければ乗った方が良いですよ)

(うーん……)

モモンガさんは文字通り乗り気でないが、異世界でネームバリューのあるハムスケを連れ歩くのは有効だろう。利用しない手は無い。ほら、ハムスケもつづらな瞳でこっちを見てるし。アルベドとシャルティアの殺意に充てられたのか更に小動物みたいになっている。多分、やまいこさんとかあんころさんとか茶釜さんなら可愛いと感じるのだろう。

「ブレインさん、冒険者モモンがハムスケに乗って街をうろついたら、どう思います?」

「乗りにくそうにも感じますが、誰もが英雄の凱旋と見紛うでしょう。自分もそう思います」

「……本当に本当ですね?」

「ほ、本当です!嘘はついていません!」

「ええ……」

モモンガさんが小声で困惑した。ブレインは本気で言っているようだ。黒騎士がハムスターに跨る姿は俺やモモンガさんからするとアンバランス極まりないが、異世界的には超かっこいいようだ。文化の違いってすごいね!

「……デミウルゴス、お前は どう思う?」

「はっ、私もかの世界の人間に対してアピールになるのであれば、このハムスケに騎乗して行動するのが得策かと思われます」

(マジか……)

(マジかー)

詰んだ。デミウルゴスのお墨付き貰っちゃった。という訳で、ハムスケは冒険者モモンの騎乗モンスターになりました。わー、ぱちぱちぱち。……すまん、モモンガさん。

「そ、そうか……。では、ハムスケには私が扮する冒険者モモンへの同行を命ずる」

「御意にござる！殿を背に乗せ、どこへなりとも駆け抜けるでござるよー！」

やる気満々です。頑張れモモン。頑張れセバス&ユリ。

「それと、鍛冶長に伝える。ハムスケに騎乗する為の鞍と鎧を用意せよとな」

「畏まりました」

ああ、ハムスケの体型じゃ乗るの大変そうだな。間違いなく必要になるだろう。事前に察知するとはさすがモモ。

「ブレインさん、中々有効な情報が得られました。ありがとうございます」

「い、いえ。お役に立てて良かったです」

うむ、ブレイン基準で外の世界のTPOを知るのはいの外の外有効だ。冒険者モモンと愉快な仲間達の情報収集と合わせれば効率アップだ。今後も役に立って貰おう。

「……さて、ハムスケの処遇は決まったが、もう一つ問題が残っていたな」

気を取り直したモモンガさんが、話を切り替える。そう、ハムスケが本来のテリトリーから逃げてきた経緯について知らねばなるまい。ブレインがここにいるのは、ハムスケが逃走した経緯について何か知っていることは無いか聞くためでもあったのだ。正直、期待薄だけど。

「でしたね。ハムスケさん、貴方の知りうる限りの情報をこの場で話してください」

「承ったでござる」

ハムスケとの質問のやり取りを得て判明した情報を脳内で纏める。

冒険者モモンがズーラーノーンをひっ捕らえた一幕から一週間後ぐらいに、森の奥地で謎のモンスター大移動発生。中には満身創痍のモンスターも居たとか。で、ただ事ではないと思ったハムスケも、テリトリーより更に南方へ避難。ここで俺たちと遭遇。

これがハムスケ遭遇の経緯。

大移動の前日、人間の手のひらサイズの真つ黒な石を持った冒険者

らしき男が森の奥地へ侵入。冒険者のランクはタグの色から恐らくミスリル級と推測。装備はあちらの世界基準ではそこそ良い物、それなりに腕の立つ冒険者だそうだ。その男は、目が虚ろで、正気とは言えない様子だったと。

「ぬう、それはもしや死の宝珠……!」

「知っているのですか! アインズさん!」

いっぺんやってみたかったやり取りだ。

「カジツチャンとやらが所有していたアイテムと特徴が一致している。だが、あの一件でスローラーノーンの幹部から没収したアイテムは、冒険者ギルドが纏めた後にモモンの物となる筈だった」

「まさか……アインズ様の所有物を盗もうとした愚か者がいたでありんすか!?!」

「ナンタル不屈キ者……!」

シャルティアとコキュートスが怒りに打ち震えだした。あ、ブレインがハムスケに負けず劣らず小動物みたいになってる。

「それが本当に死の宝珠だとしたら……」

「そう、洗脳された可能性が高いな」

カジツチャンから絞り出した情報によれば、死の宝珠は、黒いゴツゴツの石で、意思を持った特殊なアイテムとか。時には所持者を洗脳して死をまき散らそうとする迷惑アイテムらしい。ここまで特徴が一致していたなら、ほぼ確定か。何らかのきっかけで手に取った冒険者が洗脳されてしまったのだろう。

「うーん、わざわざ森の奥地に潜り込んで、何をする気なんでしょう? 皆さんはどう思いますか?」

「アインズ様に恐れをなして逃げ出したでありんしょう!」

「一理アルナ。デミウルゴスハドウダ?」

「その可能性は否定出来ないね。ただ、もしそうでなかった場合、死の宝珠にとって有益な何かがあるのでしよう」

「だとしたら碌なことは企んでいないだろう」

逃げるのが目的でなかった場合、宝珠が死をまき散らす為の有効な手立てがあるのかもしれない。これは警戒しといた方が良いな。



「では、アウラとマーレにはトブの大森林奥地の調査を優先させよう」  
「モンスターが逃げ出した中心地を割り出すよう連絡しときますね」

さて、吉と出るか凶と出るか。アウラとマーレには世界級アイテムを持たせてはいるが……。

「むむ、殿、良いでござるか？」

「なんだ？」

「……実は、もう一つ心配事があるのでござるよ」  
「ほう」

話が纏まってきたところでハムスケが言い出した。まだなんかあるのか！

「それが、死の宝珠が森の奥地へ行くよりも前にも、モンスターが大移動をしていたでござる……。四方八方からあらゆるモンスターが逃げ出したのでござるよ。某は心配でござるー！」

「……」

それ、アウラが追い立てた方のモンスターです。

## この木なんの木

ナザリックの新たな仲間、ハムスケの報告により、冒険者ギルドが一旦預かった『死の宝珠』が持ち去られ、犯人がトブの大森林奥地に向かっていることが判明。大森林制圧(?) 担当であるアウラとマーレへ優先的に調査するよう指示した。

んで、今は第九階層の円卓でモモンガさんと情報共有中だ。情報が大事なものは勿論のことなのだが、思いつきり素が出せる機会なので無駄話も多くなっちゃうのが玉に瑕である。

「……というわけでこのままモンスター討伐を繰り返していれば昇格もすぐですね」

「逃げてきたモンスター達は上手いこと冒険者モモンの功績になったか。よかったよかった」

「はい、おかげさまで」

喋っていると喉が渇くので繊細な模様入りの銀コップに入った樹液ジュースをストローで吸う。うんまい。エントマちゃんが出してくれてからすっかりリピーターだ。モモンガさんは渇く喉もないので平気。だからどうやって喋ってるのかと。

ズーラーノーン逮捕の一件と、アウラ達が引き起こしたモンスター大移動は、出世に一役買ってくれたようだ。最近だと二つ名的なもので呼ばれてるらしい。タッチことセバス。マイコことユリの二人も含めてな。

冒険者モモンが『漆黒の英雄』

セバスが『拳聖』

ユリが『美姫』だったさ。

なかなかかっこいい！俺の『害蟲』みたいなな！

……これ、某匿名掲示板で付けられた蔑称なんだけど、実はお気に入りなんだよね。そもそも俺の能力のコンセプトがソレだし。

「そーいや、『死の宝珠』が盗まれた件で、冒険者組合からは何か対応ありましたか？」

「ああ、冒険者に死の宝珠の探索をさせてるそうです。足取りは未だ

掴めていないみたいだから、見つけるのはこちらが先になるでしょう。後は……。組合長から直接謝罪されたくらい？あれはエ・ランテルの警備の責任だから気にするなどは言つとききました……。」「なるほど、一応動きは見せてると」

「まあ、組合は比較的真っ当な組織だと思います。アバさん、そっちはどうでした？」

「良い感じです。『黙示録』のみんなの行軍は、足並みもしっかり揃っていたし。何かしらの接触があった際の対応もきちんと指示通りでした。基本的な部分は大丈夫だと思えますよ」

『黙示録』率いる俺の大森林査察は軍事行動がきちんと出来るかの確認も兼ねていたのだが、結果は上々。NPC達は生まれて間もない子供のようなものなのだ。何が出来て、何が出来ないのかを知る必要がある。

いや、実はさ、みんなの話を聞く限り、ユグドラシルオンライン時代の記憶もあるらしく、俺やモモンガさんの黒歴史を認識してるんじゃないかと戦々恐々で、エントマちゃん実は俺が源次郎さんに直談判したこと知ってたりしたら……。うわあああああああ!!

……精神鎮静化した。ふう。それでもNPC達の戦闘経験は俺やモモンガさんには遠く及ばない。故に、色々学ぶ必要があるわけだな。あれ？じゃあ俺は、年端もいかぬエントマちゃんを手籠めにしようとするド変態ということに……？

この話は終了した。

これまでの見回りや部下たちと接してきた感じからも分かったが、自分のスキルの行使や、役割分担、統率に関しては問題ない。NPC達は自分のスキルをきちんと活用して、ナザリックに貢献している。まあ、アインズ・ウール・ゴウンの運営がきっちり出来てる時点で今更な気もするが、ジッサイ確認は大事。

「となると後は、咄嗟の事態に対応出来るかですかね……」

「モモンガさんそういうの超強いからほんと羨ましいです」

「いやいや、とんでもない。マニュアルがないと不安すぎてもう……」

「わかる」

モモンガさんが頭を抱えながら呟く。お互いネットゲ廃人なだけで、一応パンピーなのである。

先も言った通り、NPC達は経験が少ない。後は自分の能力を応用出来るか、突発的なトラブルに対処できるかが問題だ。俺もそこんとこ急務なんだよね……。がんばろ。

NPC達の応用力問題に関しては、良い方法を思いついたので俺が実行するつもりだ。モモンガさんには許可貰ったし。超々渋々だけど。

「許可してから言うのもアレですけど。ほんつつつと、ケガには気を付けてくださいよ?」

「はい」

俺はサムズアップしつつ素直に返事をする。モモンガさんの気持ちも分かるし、危ない方法なのは確かだ。だが、これは俺のためでもあるし、対策はガチガチに固めてあるので、後はモモンガさんの言う通り、ケガに気を付けるこつたな。

「モモンガさん、話変わるんですけど、トブの大森林って確かかなーり広いんですね。死の宝珠の一件は結構時間かかりそうかな?」

「元々森林の調査はだいぶ進んでるみたいだから……。ある程度の範囲さえ絞り込めば良さげだし、そろそろくるかも」

「よっしゃ」

「よっしゃって……。アバさん、大森林探索、相当気に入ったみたいですよ」

「みんなで散策するの本当に楽しかったんですよ。機会があればインズさんや他のみんなも誘いたいぐらいです」

「ナザリック総出でピクニックか……」

モモンガさんが顎に手を当て考え込んでいる。てことは、結構乗り気だな。取り巻く問題が片付いたら行ってみたいもんだ。後はエントマちゃんと二人つきりでデートとかな、夢が広がる……。

「確かに、みんなでのんびりするのもよさそ……。お、アウラから『伝言』きた」

「おや、噂をすれば」

ほんとに早かった。『伝言』で呼び出してことは概ね特定出来たっぽいね。モモンガさんとアウラが会話している。会話してる者同士でしか声が聞こえないので大人しく待とう。スキル次第で盗聴っぽいこともできるけど、そこまでしなくともよからう。樹液ジュースうめー。

モモンガさんが威厳あるアインズさんモードでアウラと会話中だ。相変わらずギャップすげえ。

「なるほど、そいつはドライアードだからその場から動けないと……。ほう、そちらも完成したか。分かった、丁度良い。私たちがそちらに出向くから待機しておけ。……ああ、気にするな。あくまでついでだ。では、すぐそちらに向かう」

そう言うのと、『伝言』をモモンガさんが切った。ドライアードって木の精霊だよな？ 後、なんか完成したらしい。

「アバさん、宝珠の件。所在を知る者との接触到成功したそうです」

「おおーこの速さでそこまで辿り着くとはすごいな」

「所在をある程度割り出して、ニグレドに探させるつもりだったんですが、手間が省けました」

「ですね」

ニグレドはアルベドの姉。第五階層の『氷結牢獄』にいるタブラさんお手製NPCの一人だ。見た目が超ホラーの製作者趣味爆発なレディで、調査系特化の能力を持っている。野外で大規模な行動中は魔法によって監視を行ってくれる縁の下の力持ちなすごいヤツだ。

じゃあ、ニグレド一人に調べさせればええんじゃないかな？ と言うなかれ。みんなに仕事を割り振る方が良いのだ。森林調査は今も続行中だしな。

「それと、森林の拠点が完成したそうなので、拠点の視察ついでにそっちで報告を受けることにしました。一緒に来ます？」

「お、マジすかー！ ラッキーー！」

わーい、また森林に行けるぞー！ 別にモモンガさんだけ出向いても問題ないっちゃないのだが、そこんところは気をまわしてくれたのだから。さすモモ。

はい、アインズさんの『転移門』でやってきました、トブの大森林。今日も空気が旨い。

基地の外観や森を見たかったので、拠点入り口前に出てきたのだが、まあご立派なこと。どっしりとした石の土台に巨大な木造建築の基地が出来上がっているではありませんか。巨大な木の柱、急斜面の木造屋根、木造の梁と壁。たまんねえなおい。

(これが木造建築！木の匂いが素ん晴らしい！木造っていいもんだなあ)

(元の世界じゃ木造建築なんて絶滅してましたもんね)

(はい、こつちきて良かったですよほんと。シロアリの気持ちが知りたいのでちよつと齧っても)

(やめなさい。……それじゃ、中でみんなを待たせてるので入りましょうか)

(あい)

見上げるほどの大きさの入り口をくぐると、階層守護者のアウラとマール、コキュートスとデミウルゴスにエントマちゃんが跪いている。俺の秘書だからエントマちゃんが出て当然なのだ！幸せ。

尚、警備体制の都合でアルベドとシャルティアはナザリック地下大墳墓で留守番だ。仕方ないね。こういう状況ならヴィクティムに第一階層の警護を任せるのが良いんだが、ヴィクティムは死んで効力を発揮するタイプの能力故に未検証なんだよね。試しに殺すわけにもいかないので……。

警備に穴が開くのは間違いない、念のために手は打っている。

「皆、待たせたな。立ち上がって、楽にしてよい。アウラ、マール。拠

点制作と『死の宝珠』調査、ご苦労だった」

「皆さん、お疲れ様でした。素晴らしいものをありがとうございます」  
「光栄です！アインズ様！アバ・ドン様！」

「お、お褒め頂き、ありがとうございます！」

アウラとマールレが目を輝かせ、答える。俺とアインズさんのダブル誉め言葉攻撃！論功行賞のときのシャルティアやハンゾー達もそうだったが、本当にうれしそうだ。喜ぶならどんどん褒めちゃおうね。  
「ただ、至高の御方々をお迎えするには簡素な作りになってしまいました。申し訳ありません！」

喜んでたのも束の間。アウラが謝っている。まあ来たのは急だったしねー。てか、ただけゴージャスにする気だったんだ……。

「気にすることはない。お前が私達の為に作っているものなのだから、この場はナザリツクに匹敵しよう」

アインズさんが良いこと言った。

「アインズさんの言う通りです。それに、こういったシンプルな木造、私は大好きですよ。自然が感じられて、とても清々しい気分です」

「……はい！」

よかった、アウラが元気になった。アウラってそういうの結構気にしちゃうタイプなんだよねえ。茶釜さんも弟絡みで責任感したりするところあったから、似たのかもしれない。ちよつとしたところでギルメンの面影を感じるのが微笑ましい。

「アバ・ドン様ハ、木造ガ才好ミデアラレルト……」

「参考にさせて頂きます」

「メモメモお……」

……ん？エントマちゃんはメモを取り出して、何か書いている。書記とか頼んだっけ？それにしても、ダボダボの裾に隠れた手で器用に記入するものだ。しかも、あの中の手はカギ爪型だから難しいだろうに。スプーンやフォークもお手の物だもんな。うーん、生命の神秘。エントマちゃんを複眼で視界に留めつつ、俺はデミウルゴスに話しかける。

「デミウルゴスさん。メガチャ……私の召喚した蟲の警備に問題はな

いのですか？」

「はい、警備の補強に大いに役立てております。アバ・ドン様。あれほどの強大な蟲を召喚して頂き、深く感謝致します」

「いえいえ、お気になさらず」

最近ナザリック地下大墳墓も他所に出てる部下が増えてきたしな。念のために、俺の蟲にも警備をやらせることにしたのだ。なんと、レベル100のとびつきり強いヤツだ。大奮発である。

(100レベルのモンスターを経験値消費なしで呼び出せるとかほんと羨ましい……)

(司令官系の特権ですからね！とは言うものの、3日に1度が限界ですし……)。つーか、モモンガさんは俺より遥かに能力の幅が広いでしょ！俺の蟲達は永続的に召喚し続ける方法がまだ分からないし、消費MPが据え置きなせいであんまり活用できてないし)

(ああもう、ほんと勿体ない……！)

(そう言うと思ってました)

かつてユグドラシル時代に幾度となく患った”勿体ない病”がかつそりぶり返した模様。

この人みたいに、死体を媒介にして召喚した者を永続的に留めておくことが出来たら良かったんだけどな。蟲の永続化は今も研究中だ。

幸い、永続は無理でも長時間維持することなら出来るので、代わりに警備要員として呼び出した。こんな時でもないと呼び出す機会がないしな。超変異体千鞭蟲より、更に不憫な子なのである。

MPの回復手段は時間回復のみ。俺の戦闘スタイルの関係上、1体の蟲にMPを割き過ぎる訳にはいかん。故に、今まで日の目を見ることはなかったのだ……。呼び出したとき心なしか嬉しそうだったもんなあ。警備頑張つてね、メガちゃん。

「さて、『死の宝珠』の在処をドライアードが知っているそうだが……。であるならば、こちらから出向く必要があるな」

ドライアードは木が本体なので、行動範囲は木の近くに留められる。面倒だけど、行くしかないか。



「いえ、それには及びません！本体を引っこ抜いて、こちらに運んでおきました！」

「え?!」

「え??:……おほん。それは、色々大丈夫なのか?」

想定外である。アウラさんだったら大胆ね！アインズさんも言うてるが、それは良いのかな……?」

「はい。なんでも、あの周辺はすつごく危ないヤツがいるから、むしろ運んでもらえると助かるとか言ってたので」

「なんだ、そういうことか……。良い判断だぞ、アウラ」

「恐縮です!」

良かった、ドライアードも同意の上だったみたいだ。現地人との敵対はなるべく避けたかったので俺もビックリした。

「ドライアードノ本体ハカナリ騒ガシカツタノデ、拠点ノ裏側ニ植エテオリマス」

「騒がしかった、ですか」

「なんでも世界が滅亡するー!とかって……。うるさくつてしやうがなかったです」

「静かにしてほしい……」

「全く、冷静さの欠片もありませんでした」

「蟲で口を塞いでしまふべきかと」

「ふむ……」

俺もエントマちゃんに口を塞いでほし、なんでもない。

みんな、ドライアードのやかましさにご立腹のようだ。しつかし、世界滅亡とは大きく出たな。

「穏やかじゃないですね。事情はよく分かりませんが、ナザリツクに何かしら被害が及ぶ可能性があります。早急に話を聞いた方が良いでしょう」

「その通りだな。ではアウラよ、ドライアードの元へ案内しろ」

「かしこまりました!」

「ほんとなんだって！このまんまじや魔樹が大暴れして世界が滅んじやうんだよ!!」

木の幹のような肌。新緑の葉の髪。どっからどう見てもドライアードだな。名前はピニスン・ポール・ペルリアと言うそうさ。なげー。みんなが言ってた通り、かなり騒がしい。怯えによるパニック状態だな。俺とアインズさんに対面したときもひえええ！化け物と！大騒ぎするし。まったくもう。

なんとか話を聞いてみたところ、黒い石を手に持った冒険者らしき男が、封印の魔樹、ザイトルクワエとやらを目覚めさせたそうさ。冒険者の男はこちらの呼びかけに答えもせず。虚ろな目で、魔樹の元へ向かっていったとか。ハムスケの証言と一致している。ほぼ、間違いないだろう。ザイトルクワエは森の奥地東側。枯れ木の森に潜んでいるそうさ。

「場所は分かったが、彼女の証言ではザイトルクワエの具体的な強さが分からんな」

「ではエントマさん。ニグレドさんへ、ザイトルクワエの調査をするよう『伝言』お願いします」

「畏まりました」

(アバ・ドンさん)

(ええ……)

俺とアインズさんに緊張が走る。世界を滅ぼすってんなら最悪ワールドエネミークラスも覚悟せねばなるまい。

「調査なんかしてる場合じゃないって！みんなで世界の果てまで逃げなきゃ危ないよ!!」

「……」

(やれやれ。仕事の邪魔だな……)

(まずいです、みんなが激おこぶんぶん丸ですよ)

(激、なんですつて? まあ、有益な証言をしてくれたことは間違いないです。このままでは部下に殺されかねないからなんとかしたいんだけど……)

ピニスンがなおも騒いでいる。怖いのは分かるが、エントマちゃん  
の業務を邪魔するとは不届きものめ。とは言え、怒るわけにはいかな  
い。部下たちがキレる5秒前なので、そっちをなんとかせねば。多分  
騒がしいことよりも、俺とアインズさんに失礼だと思ってることが原  
因なのだろう。

(仕方ない、こんなこともあろうかと俺が温めておいた、とびっきりの  
インセクトジョークで場を和ませるツツ!!)

(え)

アインズさんが困惑しているが、部下たちとのコミュニケーション  
で培った、ジョークネタをキめることで、この空気を打破するのだ。

(大丈夫です! ルプーさんやエントマさんにバカ受けだったので、結  
構自信あります)

(う、うーん。それならまあ、お任せします)

お任せされた。ではいってみよう

「ピニスンさん、余り騒いではダメですよ。皆さんの任務を阻害して  
しまうかもしれませんからね。この問題は、我々がきちんと処理する  
のでご心配なく」

「で、でもー」

「ですから、あんまり騒いでいると……。住処コロニーにしちやうぞ? ☆  
」

ピニスンは、一言も喋らなくなった。

手

(コロニーはいやだ、コロニーいやだ、コロニーはいやだ……)

ピニスは静かになった。アバ・ドンの一言に命の危機を感じたのだ。彼の蟲の部下たちは氷つぽい蟲以外それほど強そうではないし、おまけにロクな武装もしてない。怒られたとしても世界の破滅よりはマシだと思っていた。

だが、この蟲、否、蟲の神は桁が違う。虹色に輝く神々しさと、刺々しくいかつい顔の禍々しさを兼ね備えた容姿。自分を住処にしてしまうなど、恐るべき発想が平然と出来る冷酷さ。肩に付いた鋭い鎌は、自分の本体を容易くくりぬいてしまうだろう。ここで静かにしないと、ザイトルクワエに食べられるよりも恐ろしい目に遭うと、本能的に悟ったのだ。

(あれー?)

アバ・ドンは冗談のつもりだったのだが、いかんせん相手が悪かった。

「流石ハ、アバ・ドン様。騒ガシカツタドライアードヲ瞬時ニ黙ラセルトハ……」

「あれ程注意してもうるさかったのに、すごいです!」

「す、すごかったです!」

「アバ・ドン様、お手数をお掛け致しました。私が支配の呪言を用いるまでもなく、ドライアードを服従させる手腕、お見事でございます」

コキユートス、アウラ、マール、デミウルゴスがアバ・ドンの手腕に舌を巻き、目を輝かせている。

「う、上手くいきましたね」

「アバ・ドン様、ありがとうございます。至高の御方の手腕に感動しています!」

エントマがペコリと頭を下げ、賛辞を送る。

「フフ、お安い御用ですよ」

(まあいつか!)

(ちよろい……)

横で、友達もとい上司が失礼なことを言っているが、エントマの前には些細な問題である。

「さて、ピニスンよ。落ち着いたかね。危険を承知でお願いしたいのだが、そのザイトルクワエの居場所をこの場で案内してくれないか？無論、君の安全は私が保証する。引き受けてくれるならば、相応の礼をしよう」

アインズの言葉にピニスは頷く。この場で案内というのもよく分からないが、そもそも静かにしろと命じられてるのにどうやって説明すれば良いのか。

「……あ。騒がしくない程度なら喋って良いですよ。アインズさんが貴方に説明を求めているのですから」

「うあ、は、はい」

(すつごく怯えられてますが)

(ルプーさんはお腹抱えて笑ってくれたんだけどなー)

(まあ結果オーライってことで……。じゃあアバ・ドンさん。遠視お願いします)

(はーい)

「あの、この場で案内というのはどういう……」

「すぐ分かりますよ。エントマさん、遠視を使います」

「はっ！お任せ下さい！」

張り切り気味のエントマが、裾から札を取り出し、地面に張り付ける。すると、札を中心に4メートル×6メートルほどの真っ黒な影が現れた。

(ほお、ほんとにいい、やるんだあ……！)

今になってエントマは緊張してきた。だが、至高の御方の命令ならば絶対だ。

「で、では手筈通りに」

「は、はいー」

二人の心拍数が上昇する。この連携は、とある動作が必要になってくる。

(マジでやるんですね……)

(恐怖公やみんなが言うんだから間違いないですよ!!その方が効果があるというなら、やるしかないっいたらやるしかないツツツ!)

(お、おう)

アバ・ドンの気迫にアインズは気圧されながらも考える。確かに触れることが起点になるスキルはいくつもある。でも、そんな効果あつたかなあと疑問に思う。まあやらないよりは良いのかもしれない。

「ど、どうぞ」

エントマが右腕の裾を左腕で捲り、広げている。右腕が剥き出しの状態だ。アバ・ドンは聞こえないようツバを呑む。

「お見苦しいものをお見せして、申し訳ありません……」

「そ、そんなことはありません。とても、とても綺麗な手です」

「……ッ!」

「エントマさんに、見苦しいところなんて、一つたりともありません」

エントマの心拍数が急上昇する。美しい少女に擬態しているが故、むき出しにした腕とのアンバランスさを不気味に思われないか不安だったが、不安は完全に取り払われた。それどころか、自分の手をとっても綺麗だと褒めてくれた。いつもそうだ。いつだって、至高の御方は自分のコンプレックスを肯定し、全て受け入れてくれる。

「い、痛くなったら言うってください。加減を間違えては危ないですからね」

「畏まりました」

「で、では失礼」

「……んう」

アバ・ドンは一言断って、エントマの手を握り締める。ほのかにヒンヤリとして、カギ爪が良い具合に引っかかる。手をしっかりと握り締めたのを確認すると、エントマは裾を戻した。アバ・ドンの手が、エントマの裾の中にすっぽりと納まっている状態だ。

(手、繋いじやった!手、繋いじやった!)

(……好きい)

エントマの胸中は、アバ・ドンへの愛しさでいっぱいだった。不思議な気持ちだ。本来、自身には戦闘メイド、プレアデスとしての矜持

がある為、女性的に軽々しく扱われるのは不愉快な筈。であるにも関わらず、至高の御方に女性として扱われるのが幸せすぎてどうにかなりそうだ。

(アバ・ドン様にい、愛されたいい……)

フェロモンも全開放中だが、配下たちは全力で見逃した。

(あ、またエントマちゃんの良い匂いがが……)

アバ・ドンは、何度目か分からない精神安定化が発動する。気を紛らわせるためか、何故、自分はこのような幸せな目に遭っているのかに思いを馳せる。

暫く前、『黙示録』の面々とスキル検証をしていたときのこと

「アバ・ドン様。我輩の主観であります。エントマ殿と手を繋がれている方が、遠視の映像が鮮明に映し出されている気がしますぞ」

「え」

「ワ、ワタシモソノヨウナ気ガシマス！」

「えー、その、恐怖公殿の言う通りと思われませう。ブレインもそうだな!?」

「え?……. 思います! 思います!」

「エントマ殿はいかがですか?」

「えつとお、わあ、私も、私も、恐怖公に、同意致しますう!」

(マジで!? マジで!? マジですか?!?!?)

「であるならば裾越しではなく! 腕をむき出しに……」

(えーつ!!!)

(恐怖公……。ありがとう……。それしか言う言葉が、見つからない……！)

左手に感じるエントマの手の感触に感動し、恐怖公の十字勲章ものの貢献にアバ・ドンは感謝する。エントマがそれほど嫌がっている感じではないのも僥倖だ。

「さ、さて、これで準備は整いました。そら！出ておいで」

アバ・ドンが空いた右手を掲げると、小さなハエのような蟲が飛び出す。

「あの蟲が見たものを映像として映し出しています」

上空を指した先に、蟲が滞空している。程なくして、エントマが作り出した黒い影に、蟲の視界が映し出された。高画質、高音質の優れものである。

「な、なるほど。すすす、すごい技です」

利便性の高いスキルにピニスは驚きを隠せなかった。最初は何イチャついてんだらうと思っただが。

そして悟る。この御方の能力の前には、自分は一生逃れられないのだと……。そもそも本体の木から離れないのでどちらにせよ詰みである。

(それにしても、あの子は複眼なのに、なんで映像は複眼にならず映し出されるんでしょう?)

(まあそこはそういうスキルとしか……)

遠視の鏡は、低レベルの隠蔽魔法でも引つかかってしまう微妙アイテムの為、信頼度の高いアバ・ドンの蟲を使うことになった。逆探知やトラップについても、ニグレドがしっかり検証済みなので手抜きはない。

アバ・ドンができるのは視界の共有化のみの為、エントマが扱うフジツシの能力で映像化した。地面には、ドローンで録画しているかのような、鮮明な映像が映し出されている。

(えへへえ、アバ・ドン様とお、共同作業う……。逞しい御手え、刺さっちゃいそうう)



エントマは、心の中で密かにガッツポーズ。だが、映像に乱れがな  
いか、細心の注意を払う。至高の御方に従うシモベとして、当然の嗜  
みである。

(……ウムー)

コキユートスは、二人の様子を見て心の中で密かにガッツポーズ。  
かに思えたが、腕が全てグツとなっているので胸中に留まっていな  
い。

(感無量)

(夢の一つでしたもんね)

(手を握り直すと、ぎゅって握り返して来るんですよ。誘ってるんで  
すかねコレ)

(のろけか)

また一つ、自身の夢が叶った喜びから精神安定化が発動し、アバ・  
ドンは気を取り直した。

「では、お行きなさい。見つからないように気を付けて」

蟲は飛んでいく、その姿は瞬時に見えなくなつた。

「アウラ、アバ・ドンさんの遠視は能力探知にも対応している。出来る  
か?」

「はい、見つけたらすぐに調べます!」

今回はアバ・ドンの能力テストと、エントマとの連携テストを兼ね  
ていたたので、アバ・ドンが一通り対応する予定だ。故に、先ほどか  
らアバ・ドンの護衛で空気に徹しているハンゾー達が……。

(偵察に従事してお役に立ちたかった……)

しよんぼりしているのは内緒である。

さて、エントマちゃんを手を繋いで力もみなぎってきたところで、枯れ木の森に到着。噂のザイトルクワエはつと。

「……どう見ても、あれですよ。アインズさん」

「ああ、随分と腹が減っているらしいな」

と言うのも、100メートルくらいあるでつかい木が、300メートル以上ある6本の触手で枯れ木を片っ端からムシヤムシヤしている。

「め、目覚めてる！ザイトルクワエが！も、もうだ」

ピンスンの声が大きくなってきたのですかさず見つめる。

「めだあ……」

よし。

……元々こんなつもりじゃなかったんだが。

「アウラ、ザイトルクワエの能力は分かったか？」

「えーっと、はい！たった今終わりました。80から85レベルと思われるわね」

俺は危うくずっこけそうになった。

(ええ……)

(世界を滅ぼす?)

ワールドエネミークラスを想像していたので、俺もアインズさんもとんだ拍子抜けだ。

(ま、まあ思ったよりは弱かったですけど、この世界のモンスターとしては最高記録ですよ)

(トップなのは確かだが……)

「特化しているのはHP、測定外です」

「ほう、測定外か」

「レイドボスみたいなものですかね」

能力を偽造してる様子もなし、ニグレドのサーチに引っかかる者もなし。HPが測定外とは言え、煮るなり焼くなり好きにできるとしか言いようがない。

(前までなら実験台に丁度良かったけど……)

(どうしましょうかね)

アインズさんは、元々適当なモンスターを見繕って、守護者のみんなに連携を取らせる実験をするつもりだったんだけど、それも必要なくなつたしなあ。

「ナザリツクを荒らされる前に、討伐するか」

「オオ！ デシタラ、コノワタシニオ任せ下サイ！」

「あ、コキュートスズるい！ はいはい！ 私がやります！」

「ぼ、僕も！」

「……」

みんな案の定やる気だなあ。この場にシャルティアとアルベドがいたら、二人も志願してたんだろうね。が、デミウルゴスは顎に手を当てて何か考えてる。怖い！ 今、何か考える要素あつたっけ？

さて、ザイトルクワエ討伐の任だが、みんなには悪いけど……。

「すみませんが、先に、私にやらせてもらえないでしょうか？」

「アバ・ドン様!」

俺は右手を上げてザイトルクワエ戦に志願する。左手は尚もエントマちゃんの手を握り締めている。離したくねえ！

「皆さんの活躍を奪う形になってしまふのは心苦しいのですが……。この機会を逃すと、異世界のモンスターと中々戦えないでしょうし。少し、運動しておきたいのですよ」

（ええ!? アバ・ドンさんがやるんですか?）

（前哨戦には丁度良いかと）

（うーん……。万が一を考えて、みんな立ち合いの下で、俺のバフ増し増しなら）

（やった！ HP測定外なら、一応まともな戦闘が出来そうですよ）

許可は貰えたけど、アインズさんは本当に過保護だなあ。80〜85レベルなら、多少直撃しても大丈夫なだけだ。だが、アインズさんの懸念は正しい。初見の敵であることは間違いないし、アインズさんのバフをありがたく受け取ろう。

「いいだろう。ただし、アバ・ドンさんは一度でも被弾したら終了とする」

「問題ありません」

聞いてねーよ!と、言いたいところだが、構やしない。それぐらい出来ない、俺がこの後にやろうとすることは無理ゲーだからな。「では……《無限障壁／インフィニティウォール》《魔法からの守り・神聖／マジックウオード・ホーリー》《生命の精髓／ライフエッセンス》《自由／フリーダム》《虚偽情報・生命／フォールスデータ・ライフ》《看破／シースルー》《超常直感／パラノーマル・イントウイション》《混沌の外衣／マントオブカオス》《不屈／インドミタビリティ》《感知増幅／センサーブースト》《竜の力／ドラゴニックパワー》《天界の気／ヘブンリーオーラ》《吸収／アブソープション》《抵抗突破力上昇／ペネトレートアップ》」

ほんま魔法のデパートだな、この人。守護者達も、余りの魔法の羅列に目を白黒させ……いや、尊敬の眼差しで目をキラキラさせてる。そういうとこやぞ!

「《光輝緑の体／ボディ・オブ・イファルジエントベリル》よし。では、ザイトルクワエの対処はアバ・ドンさんに任せよう。お前たちもそれでいいな?」

「仰セノママニ」

「アバ・ドン様の戦い方、しっかり見ておきます!」

「ありがとうございます。では少々運動してきます。エントマさん、行ってきますね」

「はい……」

すつごく名残惜しいが、すつごく名残惜しいが、すつごく名残惜しいが、エントマちゃんと手を放す。放した悲しさを振り切るように、俺はザイトルクワエの下へすつとんでいった。

「コキユートス。『黙示録』の騎士として剣を振るえなくて残念だったか?」

「イ、イエ、至高ノ御方々ノゴ意思コソガ最優先デスノデ……」

「ふふふ、それでは残念だと言っているようなものだな。だが、落ち込んでいる暇はないぞ? お前たち、今の内にアバ・ドンさんの戦い方をよく見てくといい、何しろ……」

「お前たちにもアバ・ドンさんと戦って貰うからな」

## はじめの

彼の者は、いつこの地に降り立ったのか覚えていない。否、覚える必要がなかった。生きる為、生き延びるため、他者を喰らい、排除し、成長を繰り返すのみ。

ある日、空を割り、新天地に降り立った。場所が変わった。己よりも小さき者がひしめいていた。己の牙よりも、手足よりも遙かに小さい。小さかったが、成すことは何一つ変わらなかった。

### 滅尽滅相。

小さき者を、自らの腕でもって喰らい尽くした。だが、それに抗う小さき者もいた。

### 竜だ。

牙が生えている、空を飛ぶ小さき者たちによって、共に空を切り裂いたヤツらがことごとく排除され、己は森林奥地に封じられた。

長く長く、不自由を強いられた。食事が貧相になった。だが、己の手は動かすことができた。生き延びる栄養には困らなかった。

食事をする為の手を、複数の小さき者に討ち取られたことがあった。その時、小さき者に、ザイトルクワエと名付けられた彼は、封印を解いた暁には、小さき者を全て喰らいつくし、排除することにした。

小さき者は危険だ。危険は喰らい尽くさねばならない。自らが生きる為に、小さき者を根絶やしにする必要がある。ザイトルクワエの生存本能が、そう決めた。

手を壊されてから更に幾月が過ぎた。黒い石を持った小さき者が目の前にいた。黒い石が光った。何かをした。その何かによって、封印がほんの僅かに緩んだ。ザイトルクワエの生存本能はそれを見逃さなかった。僅かな緩みを基点に、大きく体を動かした。少しずつ、体が動かしやすくなった。それを何度も繰り返した。

そして、ザイトルクワエは己の自由を取り戻した。

だから目の前の者を喰った。目の前にいたから喰った。

持っていた黒い石ごと、丁寧に咀嚼した。小さき者は何も言わない。黒い石が何か叫んでいた気がした。それでも、ザイトルクワエに

は関係ない。小さき者は喰らわねばならない。まずは、周辺に生えている己に似た小さき者を喰らい尽くす。自らの腕で以って喰らい尽くし、力を得て、また小さき者を喰らい尽くす。

不覚を取らぬよう、喰らって、喰らって、また喰らう。ザイトルクワエは、力を蓄える。

己に似た者を喰らっていると、また小さき者が現れた。

「こんにちは、ザイトルクワエさん」

その小さき者は空に浮いている。まるで混沌のような色をしている。何か喋っている。だが関係ない。目の前にいるから喰らうのみ。

「少し、私と遊びましょう」

自らの腕を振るい、小さき者を叩き落とす。幾千幾万と繰り返した行為だ。

「これはこれは。急ですね」

腕を振るったのに、小さき者は何も変わらなかった。砕けていない。静かになってもいない。ならばもう一度力を込めて振るう。

「よつと……。避けるだけなのもあれなので、反撃します」

何か小さく呟いた後、フツと、小さき者が消滅した。

「ノーダメ縛りなら、先手必勝で行くべきだったかな？ みんな見てるからカツコ悪いところ見せらんないし……」

どこからともなく、小さき者の声が聞こえる。つまり排除していない。だから小さき者を探す。

探していると、足に痛みが走った。

「こういうのをなんて言ったか……。足元がお留守ですよ」

足に、何かが齧りついている。今まで見てきたよりも遥かに小さき者達が、足の隙間を埋め尽くしていた。齧りつかれる度、今まで感じたことのない程の不快感に襲われる。それは痛みだった。

ザイトルクワエは痛みを知っている。それはどれも取るに足らないものだった。だが、今はその痛みが嫌だ。牙のある小さき者や、細い線が頭に生えた小さき者、光る細い物を持った小さき者よりも、ずっと痛かったからだ。

手で痛みの元を振り払おうとする。じつと留まる小さき者を潰す

ことなど容易い。

「大きいって、中々不便なものですよね。隙間に入り込んだ蟲を取り除くのは難しいでしょう?」

だが振り払えない。己の足の影に隠れ、潜り込んだ小さき者達が、尚も齧りつく。ザイトルクワエの足は頑丈だ。自ら砕くのは難しい。その間にも何かを流し込んでくる。

痛みが更に増した。

大きく叫んだ。

「おや、叫び声ですか。あれ、トレントって設定的には痛みが強かったような……。それより、耐性はそれなりにあるようで。その子達は麻痺攻撃と朦朧攻撃が得意なんですよ。神経毒による麻痺と、激痛毒による朦朧です。貴方、痛覚あるんですね」

小さき者の声が聞こえる。真上だ。ザイトルクワエは痛みを耐えて反撃した。あの小さき者を排除すれば、この痛みから解放されるものと、本能的に悟った。視界が揺らぐ。それでも、自らの腕を総動員し、口内から大量の種を吐き出して攻撃する。

「ああ、やはりそういう攻撃もあつたんですね。まあ所謂ノーダメーシ縛りというヤツなので、全部かわしますが」

それでも当たらない。腕が当たったと思えば消え、種が当たると思えば消える繰り返し。何故か当たらない。今も、足を齧られて焼ける痛みが己を蝕む。だが、当たるまで何度でも繰り返し。腕を、種を、牙を、己の全てを以って。

「ところで」

腕を振り上げる。小さき者を叩き落とす為に。

「そもそも意思疎通出来るのか分かりませんが」

ここで、ザイトルクワエは違和感を覚えた。

「一つ言っておきます」

己の動きが。

「私の蟲は」

鈍くなっている。

「その程度ではどうにもなりません」



腕だけではない、足もだ。竜にしてやられた時と違う。手足を動かそうとしても動かない。体を動かすのに必要な何かがごっそりと取り除かれたかのように。

「異常耐性を下げる子も勿論いますので、こうなることは自明の理でした」

それでも痛みは止まない。動きが鈍る。痛い。痛い。痛い。火よりも、氷よりも、雷よりも痛い。振り払いたいののに、目の前の者を排除したいのに思い通りに動かない。動けない間にも、痛みが際限なく増していく。

また大きく叫んだ。

「おや、これは不思議だ。物理的な痛みは、麻痺によって鈍るものなんですよ、普通は。麻酔のようにね。朦朧の効果を発揮する為に、痛みも継続してるんでしうかね？　ここまでくると一方的で、傍目にも面白くないでしょうが……」

早く、この痛みを取り除きたい。一心不乱に腕を振るおうとするが、体が応えない。ぶるりと震えるだけに留まった。

「お、まだまだ動けるんですね。じゃ、おかわりといきましょう」

混沌の色をした小さき者が、また消えた。その代わり、上空から更に小さき者が降り注いだ。目の前が色の違う小さき者達で埋め尽くされた。全て、己に寄ってきた。

目の前を埋め尽くしていた小さき者達が入り込んできた。痛みが増した。更に、気持ちが悪い。体内の小さき者が這い回る。身体の中まで痛みが走り回った。口は塞がらない。小さき者が入り込んでいく。体内が埋め尽くされていく。削れていく。己が削られていく。

もう叫べない。

「まあ、切り替えましょう」

混沌の色をした小さき者がまた目の前に現れた。

「今から、色々な状態異常を試してみます」

ザイトルクワエは生存本能のみで活動している。喰らう、生きるの二通りの本能だ。己が捕食者で、それ以外の者が被捕食者。そういうものだった。そのザイトルクワエに、生まれて初めて、別の感情が芽

生えた。

「なるべく耐えてください」  
それは恐怖だった。

## 使い道

至高の御方の戦いぶりを再び拝見する機会に恵まれたナザリツクのシモベ達。だが、アインズの一言はそれよりも更に大きな衝撃をもたらした。特に、蟲系統のモンスターであり、アバ・ドン直属の部下である者達は突然の爆弾発言に色めきたっている。

エントマは触角が直立し、コキユートスは口内から冷気を勢い良く噴出。驚いて姿勢を正したハンゾー達の眼前を冷気が掠めた。

「ア、アバ・ドン様トノ闘争……。我々ガデゴザイマスカ!?」

「そう、お前たちがだ。ふふ、随分驚いているようだな」

「そりやもう驚きますよ！ アバ・ドン様と戦うなんて恐れ多すぎます！ それに、至高の御方に攻撃するのはちよつと……」

アウラの言葉にマールも頷いて同意する。二人の表情は少し怯えているように見えた。自らの神にも等しい、至高の御方に刃を向けるなんて出来る訳がないからだ。だが、それを指示しているのは絶対者たるアインズである。アインズも内心かなり心配なのだが、それは内に秘める。

「何、心配するな。お前達の懸念は私にも分かる。正確に言えば、闘争というよりは鬼ごっこのようなものだ」

「鬼ごっこ、ですか」

「そうだ、デミウルゴス。鬼ごっこだ。鬼役がそれ以外の者を追いかけて捕まえる。まあ、子供の遊びだな」

「なるほど」

デミウルゴスは早くもアインズの真意を探ろうと、知恵を絞っている。鬼ごっことは、古くからある子供の遊びらしい。ルールは単純。鬼役を一人決めて、残りの役が鬼から逃げ回るもの。確かに、肉体的にも精神的にも未熟な者であろうと簡単に理解できるし、手軽に遊びに興じることが出来るだろう。

だが、それはあくまで子供同士の遊びならばだ。

ここにいるのは肉体的にも精神的にも力のある者達ばかりだ。アウラとマールは見た目こそ子供だが、階層守護者を任されているその

力は紛れもない本物だ。もし、この場の者全てが鬼ごっこに興じたとなれば。

(遊びでは済まないでしょうね)

鬼役が、アバ・ドンなのか、シモベ達なのかは分からない。どちらにせよ、対アバ・ドンにおいて極めて困難な戦いとなるのは間違いない。デミウルゴスは、後に課せられるであろう指令が超々高難易度であろうことに冷や汗をかく。

「そうだな、後ほど詳しく説明するでしょう。今はアバ・ドンさんの戦い、いや、実験だなあれは……。実験を眺めておけ」

アインズの言葉に、一同勢いよく返事をする。

偉大なる至高の御方々の狙いは何なのか、アバ・ドンを映し出すスクリーンをしっかりと目に焼き付ける。既に戦いは始まっている。最善を尽くすためにも、アバ・ドンの動向に集中せねばならない。

(怖い……。怖い……。蟲、怖い……)

一方、ピニスは身を丸めて震えている。涙は枯れ果てた。

「良い実験になりました。どうもありがとうございます」

俺の目の前にザイトルクワエだったものが佇んでいる。いや、死んではないんだけど。一応生きてる。だけど、なんかもう見た目がグロい。俺が呼び出した50cm大の蟻型蟲、トビイロケアリに似た見た目をした、通称アリくんに集まれ、隙間から見える全身は腐り果てて真っ黒に変色し、肌質はグズグズとカサカサの中間みたいな感じだ。地面にはザイトルクワエの溶け落ちたもので水たまりができている。ぐお、我ながらひどい臭いだ。

それに、幹は真ん中からボツキリ折れて、こちらに頭を垂れてるみ

たいになつてる。これでも生きてるのか。流石はレイドボスみたいな体力してんな。まあ俺の火力不足も原因だけど……。

おっと、他の蟲達が溶け落ちた残骸まで啜ろうとしてる。あれは色んな子の色んな毒が混ざったヤバイブツだ。俺の蟲でもダメーじ受けちゃう。注意しとこ。

「あれは毒の塊です。飲んじやダメですよ。その代わり、胴体の毒は処理しました。そっちは好きなだけ齧りなさい」

そう言うと、残骸を啜ろうとしてた蟻型の蟲達が引き返してご馳走にかぶりついた。俺の蟲達は行儀がいいので、お残ししないのだ。でも、あれは流石にな……。

「和みますねえ」

みんな嬉しそうに齧つてて微笑ましい。ほっこりするわー。もう中身は9割ぐらい俺の蟲で埋め尽くされたかな？ やっぱ攻撃力低いから殺すには至らないんだよね。

ああ、そうそう。ザイトルクワエの手足代わりだった触手は、六本の内、四本を蟲達が美味しく頂きました。経過観察の為に二本だけ残しといた。

「おやっ？」

残した二本の触手を俺の目の前で擦り合わせている。麻痺のせいで動きは弱々しい。こちらへ攻撃する意思は感じられない。……もしかして命乞いでもしてるのだろうか。

そう考えると、こちらに土下座をして頭上で手を合わせてるようにも見える。そこはかとなく哀愁が漂う……。齧られっぱなしだけど。

ザイトルクワエの様子を観察していると、あることに気が付いた。頭頂部に苔みたいなの草が生えてる。とか思ってたら、アrikun樹皮ごと綺麗にひっぺがした。そういや、怪しいものは食わずに回収するよ頼んだっけ。ちゃんと覚えてたようだ。偉い偉い。

口の中からも、黒い石の破片や、金属片を持ったアrikunが這い出てきた。もしかして、あの黒い石の破片が噂のインテリジェンスアイテム、死の宝珠だろうか。

(もしもしアバ・ドンさん。一段落したみたいですね)

(お、アインズさん。おつかれっす)

(無事で何よりです)

丁度アインズさんから連絡が来た。ザイトルクワエについて、色々報告したいことがあったからナイスタイミングだ。まあ、ずっとみんなで見えてたし。カツコ悪くなかったかハラハラするわ。

(今、蟲達が色々発見してくれました。そろそろ戻ります)

(了解です)

じゃ、みんなのどこへ戻ろうか。……と、その前に。

「そーれ」

俺の腕から十匹程の蟲が飛び出した。全て第十位階クラスの麻痺属性持ちだ。動かれても困るからこの子達に根元をガジガジさせておこう。火力は大したことないので死にはしないだろう。アrikunの回収品を受け取りつつ、俺は翅を広げた。

「では、殺さない程度に齧っててください。私は戻ります」

みんなが牙を鳴らして返事をしたのを確認して、俺は飛び立った。到着。

「戻りました」

「お帰り。アバ・ドンさん」

「ヒイツ」

アインズさんがお出迎えだ。真っ直ぐ飛んではあつという間である。今微かに聞こえたヒイツはピンスンの声かな？俺がみんなの前に着地すると、エントマちゃんがお辞儀をする。

「お帰りなさいませ、アバ・ドン様」

「ただいま、エントマさん」

エントマちゃんにお帰りと言われる蟲生。素晴らしいと思います。でも、ちよつとこう……複雑な表情してる気がするの気のせい？怖がつてるような、そうでないような。というか、エントマちゃんだけじゃなくてアインズさんを除く全員そんな感じだ。俺の戦い方そんなにえげつなかった!?

(なんか、みんな怖がつてないです?)

(ああ、怖がつてるんじゃないやなくて緊張してるんでしょう。この後、ア

バ・ドンさんと戦闘訓練すること言っちゃったので)

(あ、そういうことか……。よかったー、嫌われたのかと思った……。)  
(そんなことはないですよ)

ほっとした。アインズさんそのことを話したのか。みんなの態度  
考えりや、俺と戦うとなれば緊張するわな。

「皆さん、お待たせしました。ザイトルクワエの生殺与奪の権は握る  
ことに成功しました。アインズさん、一応の勝利を報告致します」

「ああ、見事な働きぶりだったぞ。アバ・ドンさん」

「恐縮です。さあピニスンさん、もう貴方を脅かす者はいませんよ」

「は、はい、あり……がとうございました」

うん、すっごい表情引き攣ってる。ピニスンからすれば俺も脅かす  
者なのだろう。そんな気ないのにー。

「あ、あの……。今、どうやって戻ってきたんですか？ここから枯れ木  
の森まで、結構な距離があったと思うんですが……」

「ちよつと急ぎました」

ピニスンの目がより一層死んだ。なんでや。

「アバ・ドン様ハ偉大ナ至高ノ四十一人ノ中デモ、一、二ヲ争ウ素早サ  
ダカラナ」

「さっきの戦いも目で追えませんでした！」

「知性のないモンスターにあれ程の恐怖をもたらし、屈服させるとは  
……。このデミウルゴス、己の未熟さを思い知りました！」

みんなが俺を褒めてくれるのは嬉しいが、ちよつと照れる。だが、  
デミウルゴス。なんでそんなに嬉しそうなんだね君は。

「では帰ろうか、ナザリック地下大墳墓へ。詳しい報告はそちらでな」  
「了解です。さて、ピニスンさん、貴方はどうしますか？移住先の希望

があるなら聞き入れます。但し、アインズ・ウール・ゴウンの管轄内  
のみになりますが……」

「え、えつと。では、このままです。ここで一生大人しくしてます。な  
ので、た、食べないでください……。うう」

「食べませんか」

「お前の安全は、アインズ・ウール・ゴウンの名の下に保障する。安心

して根を下ろすがいい」

ナザリック地下大墳墓に植え替える手もあつただけど、俺の近くにいると寿命が縮むだろうし、これで良いだろう。まあ、この先、大森林に遊びに来ることも増えるんだが……。頑張れピニスン、頑張れ。

（あ、そうだ。アインズさん、墳墓に戻ったら任務で外出中の者を除く階層守護者とプレアデス全員に召集をかけて貰っていいですか？）

（ええ、大丈夫ですよ。何か思いついたんですか？）

（はい、ちよつとザイトルクワエのことで）

（ほほう）

ナザリック地下大墳墓、第十階層玉座の間に到着。戻るついでに、召集を掛けてもらったので、既に全員集まっている。集まったのは、シャルティア、コキユートス、アウラ、マーレ、デミウルゴス、アルベド、セバス、ユリ、ルプスレギナ、ナーベラル、シズ、エントマ、恐怖公、ハンゾー達だな。

恐怖公はコキユートスやエントマちゃん、ハンゾー達の蟲組の中にいる。女性組の何人か表情が少し引き攣ってる気もするが、すまん、ちよつとずつ慣れてくれ。恐怖公も結構頭いいんだよ！

俺とアインズさんが席に着き、全員に楽な姿勢を取らせる。何度も繰り返した行為なので手慣れたものである。ちなみに、この場にはないメンバーはソリユシャンとパンドラだ。

「集まって貰ったのは、皆さんにザイトルクワエの使い道を考えて欲しいのですよ」

アルベド、デミウルゴス、恐怖公以外が戸惑っており、プレアデス



達は顔を見合わせている。首を傾げるエントマちゃん可愛すぎやしませんかね。

(アインズさんが考えてた使い道がなくなっちゃったので、その埋め合わせにどうかと思つて)

(良いですね。みんながどうするのか、俺も興味あります)

俺とアインズさんは、考え込む部下たちを温かく見守る。今後、NPC全員に養つてほしいのは、考える力だ。アインズさんは成長の可能性を模索している。能力の成長や、スキルの強化だけでなく、NPC達自身の経験や精神的成長のことだ。

連携を取らせる為の実験台という案もあつたのだが、それは俺が代わりを務めるから必要なくなった訳だな。果たして、どんなアイデアが出るか？

ちなみに頭の草は、回復効果のある薬草らしいので、研究用に司書長へ預けている。

「無論、私達にもいくつかの案はあるが、今回は敢えて、お前たちに判断を委ねたい」

(案あるんですか？ アインズさん)

(樹皮をスクロールの材料にするとか)

(なるほど)

(まあ、アルベドかデミウルゴスが良いアイデアを出すでしょうから) 頭脳担当二人なら俺やアインズさんが考えるよりも良い使い道を出いつくのは確かだ。

「うーん……。むむむ……」

なんかナーベラルがうんうん唸っている。恐らくなんとしてでもアイデアを出したいのだろう。あんまり仕事ないもんな。すまぬ……。

「はいはい！ 思いつきました！」

「はい、アウラさん」

「憂さ晴らし用のサンドバッグにしましょう！ 体力がある分、叩き

甲斐があります！」

「私もアウラ様に賛成します」

「私もです！」

「……私もそれがいいかと」

ユリ、ルプー、ナーベラルがアウラに賛同した。ナーベラルは先を越されて落ち込んでいる。

（意外と脳筋！）

（三人はともかく、ユリは意外）

（一緒に行動して分かったけど、ユリは結構脳筋なんですよ。やまいこさんの影響でしょう）

（子は親に似る……）

改めて、ユリは創造主のやまいこさんによく似てんなあ。真面目なのは分かってたけど、意外と脳筋などこまで似てたのか。NPCの中で一番親似なのはユリかもな。

「はん、おチビは発想が野蛮でありんすね」

「んな!?　じゃあ、シャルティアは何を思いついたのさ?」

「ザイトルクワエとやら、大きさはそれなりでいんす。トブの大森林がアインズ様の所有物である証として、飾り付けてモニユメントにしてしまいんしょう」

「私もシャルティア様に賛成……」

「ぼ、僕もそれがいいです!」

シズとマールレが同意見のようだ。

（悪くないのでは?）

（ありっちゃありですね）

でもこれ、絶対みんな方向性違うよな。シズは可愛らしく。シャルティアは多分十八禁。マールレは想像できん……。

「なるほど、どちらも興味深い提案です。他に誰かいませんか?」

「ハイ」

「はい、コキユートスさん」

「言イソビレマシタガ、ワタシモアウラニ賛同シマス。タダ、理由ハ少シ違イマス」

「ほう」

「ザイトルクワエハ今マデ遭遇シタ者ヨリ高レベル。武技習得ニ何カ

役立ツノデハナイカト」

「面白い。武技習得に手こずっている原因は、レベル差にあるということだな？」

「仰ル通りデス」

(コキユートス、結構面白いこと考えるなあ)

(アインズさんが狩ったヤツにはそこまでのレベルはいなかったですもんね)

(そうそう)

武技習得出来ないのレベル差説。あると思います。

「う……」

サンドバッグ案にちゃんとした理由が出てきたためか、シャルティアがちよつと気まずそうな表情だ。アウラを煽ろうとするからだぞー。

「では、私からも」

セバスが拳手をする。さて、彼の意見は如何に。

「樹皮をスクロールの材料にしては如何でしょう？ ザイトルクワエのレベルならば、今までよりも質の良い素材になると思いますが」

「な、なるほど」

(被った……)

(被りましたねえ)

思いつきり被ったけど、守護者の口からきちんとアイデアが出たのは事実なので良し。

「我輩も思いつきましたぞ」

「恐怖公。どうですか？」

俺が恐怖公の名を呼ぶと、何人か恐怖公に対して羨ましそうな表情をしている。なんだろう？俺が恐怖公のデザインをしたからだろうか。いわば親子の会話だもんな。

(アバ・ドンさんって、恐怖公だけ呼び捨てなんですね)

(え？ ああ、そーいやそーうかも)

言われてみればそうだ。ん、もしかして皆呼び捨てを羨ましがってる？ ま、まあ、それはともかくとして、恐怖公の意見を聞いてみよ

う。

「アバ・ドン様の眷属達が現世に留まれるようになった時に備え、食糧として保管しておくのは如何ですか？ 樹皮はスクロール、中身を食糧にすれば兼用もできますぞ」

「私も恐怖公に賛成します。ご飯は種類が豊富な方が、みんな喜ぶと思います。アバ・ドン様の蟲達は、ザイトルクワエを美味しそうに食べてました」

「おやおや、二人とも嬉しいことを言ってくれますね」

(エントマちゃんマジ好き)

(元からでしょ)

「ふふ、私の蟲達もきつと喜んでますよ」

後、意見を出してないのはアルベドとデミウルゴスだけか。二人とも何やら深い笑みを浮かべてるのが怖いんですが……。

「デミウルゴスさん。何か良いアイデアが浮かびましたか？」

「はい、僭越ながら、ご提案させていただきます」

さて、デミウルゴスからは一体、どんなアイデアが出てくるのやら

……

「ザイトルクワエを『傾城傾国』で洗脳し、スレイン法国へ送り込むのは如何でしょうか？」

「え」

いつもの

デミウルゴスの提案に、アインズとアバ・ドンは顔を見合わせた。ザイトルクワエの用途は、主に内政的なものばかりだった中での、攻撃的な利用法。二人に表情筋があれば、鳩が豆鉄砲を食ったような顔になっていただろう。

(またどえらいアグレッシブな利用法を思いついたな、デミウルゴスさん……)

(デミウルゴスの提案だから、勝算ありきなんでしょうけど……)

(とりあえず、具体的にどういう利点があるのか、俺が聞いてみます)(お願いします。アバ・ドンさん)

以前、デミウルゴスとバーで飲み交わしたときに、作戦があれば詳細を伝えるよう頼んで、了承をもらっている。その為、アバ・ドンは一応何の問題もなく、質問ができる。アインズは絶対者ロールのせいで策略の具体的なメリットなどを聞き出せないため、大助かりである。

「今までと打って変わって、敵国に対して積極的なアプローチですね。デミウルゴスさん、その作戦にはどのような目的があるのでしょうか？」

「はっ、説明させて頂きます！」

デミウルゴスは喜色満面な様子で、作戦の詳細を明かす。自信があるのだろうか。

「まず主な目的は、スレイン法国への牽制になります」

アインズは頷いた。

それは二人にも分かる。だが、それをするには色々と問題があるのではないか。

(カルネ村で法国の兵に名前乗っちゃったんだけど、それは大丈夫なのかな?)

(確かそうでしたよね。俺がナザリツクに来る前)

(はい)

アインズは、カルネ村の襲撃事件で法国の兵相手に大立ち回りを演

じ、名乗り口上まで上げている。法国相手に自分達のことを認識されている筈だ。アバ・ドンも、自分の手引きで漆黒聖典を全滅させ、世界級アイテムまで強奪している。このまま相手を刺激すると、法国最強戦力らしい番外席次が動くのではないか。

クレマンティーン曰く”人外領域すら超越した漆黒聖典最強の化け物。六大神の血を引くとされる先祖返り”とのことだ。六大神は世界級アイテム『傾城傾国』を所有していた。しかも、国民から”ぶれいやー様”と呼ばれているらしい。ユグドラシルオンラインのプレイヤーである可能性が極めて高い。その血を引いているのであれば、警戒は最大限にするべきだ。

「しかし、アインズさんが法国の兵に名乗りを上げています。我々の暗躍が明るみになってしまおうではありませんか？」

「その問題については、ザイトルクワエと死の宝珠が解消します」  
「ほう」

「ザイトルクワエが目覚めた一件は、秘密結社ズーラーノーンの所持する死の宝珠がエ・ランテルの管理不足によって暴走したことに起因しています。ですので、このままザイトルクワエに襲撃させれば……」

「ズーラーノーンの仕業になる、と」

「その通りでございます」

デミウルゴスは笑みを浮かべて答えた。

巧い手だと二人は思った。ンフィーレア拉致未遂事件の主犯であるズーラーノーン幹部は自分達の手の手の中。現地に残るは下つ端のみだ。ザイトルクワエについて覚えが無いと末端が言ったところで、言い逃れにしか思われなйдらう。死の宝珠も完全に砕けており、死人に口なしの状態だ。

アインズが”アインズ・ウール・ゴウン”と名乗っていることによつて、自分達がズーラーノーンとは別組織であることも一応アピールできる。

「捕虜の言が正しければ、残る脅威は番外席次のみ。その強さを確かめるのに丁度良いのではと思っております」

最も警戒していた番外席次の能力がある程度分かるのは大きい。ザイトルクワエが勝つならそれで良し。負けたとしても、ナザリック地下大墳墓には何のダメージも無い。スレイン法国への警戒を強めるだけの話だ。

(あれ？アインズさん、ザイトルクワエの勝敗はどうやって確かめしようか？監視系のスキルはバレる可能性高いからあんまりやりたくないし……)

(ザイトルクワエが死んだら『傾城傾国』の効果が切れます。それで判別できるでしょう)

(あ、そっか)

『傾城傾国』の洗脳効果は対象一体のみに適用されることを検証済みだ。効果が発動している間、刺繍されている龍の模様が消える。ザイトルクワエが倒されれば『傾城傾国』の模様が元通りになる為、わざわざ監視系の魔法やスキルを用いなくても問題ない。

(世界級アイテムを所持していた漆黒聖典があ程度の度でしたからね)  
(断定はできませんが、残る戦力が番外席次のみである確率が高いでしょう。上手くいけば、法国に何かしら損害を与えられるかもしれません)

「法国側は中核である陽光聖典と漆黒聖典を失っています。立て直しが必要な以上、直接行動に移す可能性も低いのではないかと」

「要はやるなら今の内ってことですね」

「ええ、今の内でございます」

(どうします？アインズさん)

(リスクを極力抑えてるのは分かりましたし、やっちゃいましょう)

(いやー、なんにもバレずに嫌がらせ出来るのって最高なんやなって)

(ゲスい)

(ぶ、ぶにつと萌えさんよりはマシ……)

(ギルド一の”えげつないさん”が比較対象になつてる時点で……)

デミウルゴスが考え出した見事な作戦に対し、ギルド一の軍師であるぶにつと萌えの姿が脳裏をよぎった二人。気を取り直し、デミウルゴスの提案を採用する方向で進めることにする。

「分かった。お前たち、よく考えて提案してくれたことに感謝しよう。今回はデミウルゴスの意見を採用し、スレイン法国へザイトルクワエを襲撃させる。皆、異論はないか?」

部下たちの中に答える者はいない。満場一致でスレイン法国襲撃作戦が採用されることになった。

「デミウルゴスさん、素晴らしい作戦をありがとうございます。やはり、貴方の頭の良さには敵わないですね」

「ああ、ナザリック一の知恵者はお前だ」

「ありがとうございます」

デミウルゴスが深々とお辞儀をする。至高の二柱の賞賛を一身に浴びるデミウルゴスを、配下達は羨ましそうに見つめている。いついかなる時でも、至高の御方に褒め称えられるのは代えがたい喜びであるが故に、嫉妬の炎が見え隠れする。

(あんなにお二方に褒められるなんて、羨ましいであります!)

シャルティアとハンゾー達も、大手柄を立てて褒美まで貰っている筈なのだが、やっぱり羨ましいものは羨ましいのである。

「……くつくつく」

お辞儀をしたままのデミウルゴスが、こらえていたかのように笑い声を漏らす。御前で不敬ではないかと思う者が大半だったが、アインズの傍らで黙っていたアルベドもそれに合わせてか微笑を浮かべている。

「デミウルゴス、何ガオカシイノダ?」

コキュートスの疑問に対し、デミウルゴスは守護者達の方へ振り返って答えた。

「全く、君たちはまだ気づいていないのかい? 全ては至高の御方々の掌の上であることに」

「ナヌ!」

「え!」

「えええええ!?!ど、どういうことですか?」

第十階層『玉座の間』はにわかになぞわついた。階層守護者、プレアデスの面々、全員大なり小なりデミウルゴスの言葉に驚きを隠せない



でいる。

(ええええええええええええええええええ!?)

(はっはっは、それどこ情報?!どこ情報だよおい!?)

トップクラスに驚嘆したのは勿論アインズとアバ・ドンである。全くもって身に覚えが無い。

「デミウルゴス、どういうことか説明してもらえませんか?」

「勿論教えるとも、セバス。だけどその前に、いくつか質問がある」

デミウルゴスはそう言っつて、全員の顔をそれぞれ見渡す。質問というのはアインズとアバ・ドンを除いた皆が対象なのだろう。この煉獄の造物主がなにを言い出すのか、二人は冷や冷やしている。

「まずはシャルティアに答えてもらおうか」

「何でありんすか」

「スレイン法国に名乗りを上げたのはどなただったかな?」

「馬鹿にしてんの?アインズ様に決まってるでありんす!」

「誤解だよ、シャルティア。馬鹿にしている訳ではないさ。質問の答えは正解だね。では二つ目の質問。セバス、ズーラーノーンの幹部を捕えるようご指示なされたのは?」

「無論、アインズ様です」

「その通り。ではコキュートス。三つ目の質問は君だ。ザイトルクワエを討伐せずに、敢えて生け捕りにしたのは?」

「アバ・ドン様だ」

「そう、ここまで言えばみんな分かるね?」

(分かりません)

(分かんない)

二人は混乱している。

「マ、マサカ!?!」

「そのままかだよ。ここまで丁寧に膳立てして頂ければ流石に気づく」

「そっか!デミウルゴスの作戦は、始めから御二方の計画通りだったんだ!」

「す、すごいです!そんなに前から!」

アウラとマーレが、目を輝かせて二人を見つめた。

「しかも、アバ・ドン様のご帰還成される前から、計画されていたでありんすね!？」

「アバ・ドン様もお、ご帰還なされて間もないうちからあ、既に連携されていたのねえ。病み上がりであるにも関わらずう……」

シャルティアとエントマは、愛しの君の卓越した知力にうっとりしながら絶賛する。スレイン法国と対立した時から、既に計画は温められていたのだ。

(待つて、待つて)

(だれかたすけて)

誰も待たないし。助けもない。

「なるほど、御両名は我々にその答えへと辿り着いて欲しかったと……!？」

セバスが身を震わせた。至高の御方々の策略はここまで見通していたのだと、震撼する。同時に、その答えへと至れなかった己の愚かさを猛省する。

「そうね、アインズ様もアバ・ドン様も貴方たちに気づいて欲しかったのでしょうか」

「私がそう気づいたのはあくまで偶然だよ」

デミウルゴスは、アバ・ドンの酒盛りに随伴した輝かしき記憶に思いを馳せた。

「なんてこと……。私は至高の御方々がそこまで見通されていたなんて思いもしなかったわ……」

ナーベラルは、そこまでの考えに至らなかったことにひどく落ち込んでいる。

「正に智謀の将! やつぱ至高の御方々はすごいっす……! あ、特に活躍していないナーちゃんがすごい落ち込んでる」

「ぐふっ」

ナーベラルの心に大きなダメージが入った

「ユリ姉! ナーちゃんを励ましてあげます!」

「ごめん、ボクもちよつと……」

「あらら」

ユリも少々落ち込み気味だ。一人称が地になっている。アインズと共に冒険している身として、気づくべきだったのではないかと責任を感じている。ナーベラルと同じく、至高の御方々の期待に応えられなかったことが悔しいようだ。尚、ルプスレギナは至高の御方々への尊敬が強いためか、あつけらかなとしてしている。

「じゃあ、シズっちとエンちゃんを励まさないや」

「よしよし」

「待つて、取れる。ボクの頭取れるから」

シズがユリの頭を撫でる。ユリの頭が取れそうになっている点を除けば微笑ましい光景だ。

「慌てない慌てない、一休みい一休みい」

「……」

エントマはかつてアバ・ドンが唱えてくれた呪文を唱えてナーベラルの頭を撫でる。効果は余りないようだが。

「そういうことですよ？アインズ様！アバ・ドン様！」

デミウルゴスは崇敬すべき二人へ振り返る。その表情は会心の笑みだ。

「ふっふっふ……」

「はははは……」

至高の二人が笑う。玉座の間に、威厳ある笑い声が響き渡った。その様子は、ちよつとした悪戯がバレたかのような愉快気なものだった。

「流石はデミウルゴス。そこまで気づくとは……」

アインズは、そう答えるしかなかった。

これがやりたかった

配下達と諸々のお話を済ませ、現在、俺とモモンガさんは第九階層の円卓で席に座っている。毎度おなじみ、報告会&反省会だ。

「どうしてこうなった……」

「それな……」

俺とモモンガさんは二人仲良く頭を抱えて円卓に突っ伏す。デミウルゴスがザイトルクワエの使い道を提案したまでは良い。なんで、俺らの計画通りってことになってんだよお!?!あの状況じゃモモンガさんも俺も頷くしかないよね! H A H A H A

「俺の”至高の御方も知能レベルは普通なんだぜアピール作戦”が全く活かされてないなんて……」

「長い作戦名だなあ……。まあ、気を取り直して今回のおさらいしましょう。アバさん、ザイトルクワエは傾城傾国で洗脳した後、法国に突撃させる方向で良いですね?」

「はい。ただ、頭の薬草が有用そうなのと、若干高レベルな部分を加味して、栽培出来ないか研究する予定です」

「OKです。そこはアバさんの主導でお願いします」

「了解っす」

デミウルゴス以外の意見もアリなものが多かったからな。ふっふっふ、元研究職のノウハウが活かされる時が来たようだ……。研究担当の司書長達がつっこい優秀だから俺必要なのか疑問だが。

ザイトルクワエはなにかと貴重な要素満載だ。いくつか体を切り取ってサンプルにしている。マールや恐怖公みたいな森林系ドリドのスキルを用いてなんとか増やせないか画策するつもりだ。頭の薬草も応用次第で財源か何かに出来たらいいんだが、現地産なのかユグドラシル産なのか分らないので、そこも課題の一つ。

「ブレインとハムスケの言が正しければこの世界に80レベル越えはまずいないそうですが……」

「それが本当なら法国が減ぶの間違いなしなんですがね」

俺は机に頬杖をつけて呟く。これで法国が減んでくれればラッ

キー。滅ばなかつたら要警戒なんだよな。どうなるか。モモンガさんが、卓の上に広げた地図を指差す。

「少なくとも、ザイトルクワエが道中で阻まれることはないかな？ ああ、それと進行ルートなんですが、エ・ランテルとエ・ペスペルの間を通り抜けて法国まで直進させて下さい」

「まあそれ一択ですよ。法国以外は喧嘩売理由がありませんし」  
「ええ。直行ルートがあつたのはラツキーでした」

エ・ペスペルはエ・ランテルの隣にある都市だ。ザイトルクワエを大森林からスレイン法国へ直進させると、丁度二都市の間の道を横切る形になる。このルートには大規模な街や集落が無いから、法国以外には被害がそれほど及ばない筈だ。

まあ、冒険者とか旅の商人が轢かれる可能性はある。冒険者モモンのお知り合いが轢かれでもしたら微妙に損だし、洗脳したときにつきり避けるよう明言しておこう。

「後は、砕けた宝珠と冒険者の残骸をザイトルクワエの中に入れてまあ向かわせれば……」

「ズーラーノーンの仕業に見せかけられると」

これも全てズーラーノーンって奴の仕業なんだ。

「バツチリですね。よし、じゃあ手筈通り、俺は冒険稼業を再開していきます」

「はーい、いつてらっしやい」

《転移門／ゲート》でその場を後にするモモンガさんに手を振って見送る。冒険者モモンのサクセスロードは始まったばかりだ。いや、ぶつちやけアリバイ作りなんだけどね。冒険者モモンが他所で活動してる真っ最中にザイトルクワエを大暴れさせる寸法よ。意味あるかは微妙なとこだが念のためである。

「さてと……」

そろそろザイトルクワエの治療が終わった筈だ。状態異常はそのままにしてるけど、万が一ってこともあるから見に行こつと。べ、別に大森林に行ける口実にしてる訳じゃないんだからねッ！

俺は転移系の魔法が使えないから、シャルティアの《転移門／ゲート

ト》で大森林まで連れて行ってもらおうとしよう。リング・オブ・アイ  
ンズ・ウール・ゴウンでシャルティアの元へ転移して、その後には  
シャルティアの転移魔法で大森林へ。電車の乗り換えみたいだな。

トブの大森林内、枯れ木の森に到着。すぐ近くでエントマちゃん、  
恐怖公、コキユートス、ハンゾー達。後、綺麗に折りたたまれた傾城  
傾国を持ったルプーが待っていた。

ルプーは回復担当だからこっちに來てもらった。アウラとマーレ  
は枯れ木の森周辺で使役獣や『黙示録』のみんなと一緒に警備中だ。  
相変わらず嚴重すぎワロス。

「アバ・ドン様、到着したのでありんす」

「ありがとうございます。護衛はコキユートスさん達にお願いしま  
すので、シャルティアさんは引き続きナザリツクの警備をよろしくお  
願います」

「畏まりました。転移が必要になった際は、またいつでもお頼みく  
なまし」

シャルティアがいつもの変な廓言葉の後、スカート裾を軽くつま  
んでお辞儀をして去っていった。カーテシーだっけ？外国式の挨拶。  
エントマちゃんがやっても可愛いかもと思うが、彼女は和装寄りだか  
らな。残念。

さて、ザイトルクワエは……よしよし、大人しく痺れてるようだ。  
見た目は完全に元通り、と思いきや、元々6本あった触手が5本しか  
ない。

「皆さん、お待たせしました。首尾はいかがでしょうか？」

俺が尋ねると、エントマちゃんが答えてくれた。

「ザイトルクワエのお、回復は完了しましたあ」  
「ふむ」

この喋り方ほんまたまらん……。公の場って程でもないの、エントマちゃんもこの口調なのだ。俺の前で、エントマちゃんとルプーがいつもの口調になるのはみんなも知ってるので問題ない。許可してるしね。

「回復後にい、触手の内一本を切り落としてえ、サンプル用に回収しますう」

「エントマちゃんが”切り落としてえ”と言った辺りでコキユートスが冷気をちよい噴出してた。心なしか嬉しそうだ。多分切り落としたのはコキユートスなんだろう。むう、見てみたかった。

「ああ、このまま回復すると消えちゃいますからね」  
「はい」

「そーいや、原型を保ったまま欠損部位を治癒すると切り落とした部位が何故か消滅してしまうんだっけ。ミンチにしとくと消滅しないとかほんと謎仕様。てことは、こつからだと見えないけど、ザイトルクワエの頭頂部も切り落としたまんまなんだろうね。割と惨い。

「触手はあ、コキユートス様が切り落しましたあ。恐怖公の提案でえ、武器は等級の低いものを使用しておりますう」

「確かに、コキユートスが持っている武器は従来のものに劣っている。見た目は普通の日本刀だな。体力が残るよう、きちんと加減してくれたか。

「それなら、体力もそれ程減っていないでしょう。ありがとう恐怖公、コキユートスさん」

「勿体なき御言葉ですぞ」

「光荣デス」

んじや、ザイトルクワエを洗脳させようかね。

……。あ。

「傾城傾国。誰に着てもらいましょようか……」

すっかり忘れてた。決めてなかったし。

「アバ・ドン様！」

「なんでしよう、ルプーさん」

「エンちゃんに着せましよう！」

お前まじふざげんな天才かこの野郎そうじゃない。

「ええ!？」

ほら、エントマちゃん困ってるじゃないか。困ってる様子も中々そうじゃない。エントマちゃんの擬態は露出を避けること前提だからそんなチャイナドレスなんて着ちゃったらあばばばばば。

「ほう、予想外の提案ですぞ」

「ワタシト恐怖公デハマズ似合ワナイ。ソウナルナ」

コキュートス、そういう問題じゃないんだ。っーか着れないだろ多分。

「ハンゾー殿、ナガト殿、サンダユウ殿、ドウジュン殿は如何ですかな？」

「……わ、我々はノーコメントで」

ハンゾーの言葉に、他の三人も困った様子で頷く。僕はエントマちゃん!と素直に言えば良いのだが、それは色々ダメな気がしてならない。この状況、一体どうすればいいんだ!助けてモモンガさん!「るう、ルプーが着た方がいいんじゃないか」

「まあまあ、そこ決めるのは私達じゃないっす」

そう言うのとルプーがこちらに振り向く。その顔は心からの善意で満ち溢れている。ナザリック配下の者が、俺やモモンガさんに尽くすとき見せる、心からの笑顔だ。ちよつとドヤ顔寄りだけど。ちよつと待て。ルプーさんあんたまさか。

「アバ・ドン様は、私とエンちゃんどっちが着れば良いと思うっすか!？」

聞くなああああああ!!色々まずいでしようがああああ!!

「きよ、恐怖公はどう思いますか?」

俺は恐怖公に助け舟を求めた。

「アバ・ドン様の御心のままに、ですぞ」

【悲報】助け船、来ず

ルプーがワクワクしながらこちらの様子を伺っている。恐怖公は



優しくこちらを見守り、ハンゾー達は気まずい表情。コキユートスは多分よく分かかってない。

ここでルプーを選んだところでそれはそれで問題だしエントマちゃんがチャイナ服着るとどこかぶっちやけ見たいというか、世界は回っている。イツツアスモールワールド。

「ああ、アバ・ドン様あ?」

「……エントマさんでお願いします」

エントマ・ヴァシリツサ・ゼータさん。本当にごめんなさい。

まじやばい

トブの大森林内、枯れ木の森。渴いた荒地、乱雑に並ぶ朽ち果てた大木。痙攣するザイトルクワエ。生命を感じさせぬこの地の一角に、四方を布で囲った簡易的な天幕が佇む。エントマが傾城傾国チャイナドレスに着替える為に用意させた更衣室である。

天幕を用意させたのは勿論アバ・ドンだ。付与魔法によって第十位階クラスの完全防護に完全防音。天幕の四方を王騎士が見張る徹底ぶりである。着替えを覗こうとする不埒な輩からエントマの身を守るためだ。尚、不埒な輩には外ならぬ自分自身も含まれている。

「アバ・ドン様も超が付くほど紳士的っすよねー。エンちゃんの着替えの為にここまでするなんて。ほら、帯解くからバンザイするっす」「ばんざいいい」

エントマが両腕を頭上に伸ばすと、ルプスレギナがお腹の縄帯と帯に手をかける。彼女の和装ドレスは脱がせるのに一手間かかるものの、一人で事足りる。ルプスレギナが天幕内にいるのは、単にエントマと会話するための口実に過ぎない。『エンちゃんの着替えを手伝ってきます！』と言って、天幕に入ったので、有言実行はしているが。『別にいい、アバ・ドン様以外に見られても平気なんだけどお……。えへへえ』

「嬉しそうっすね、エンちゃん」

「だつてえ、アバ・ドン様があ、わざわざ私の為にここまでしてくださったんだものお」

「そうっすねー。ついでに言えば、エンちゃんのことをちゃんと女として見てる証拠っす」

「それにそれにいい、アバ・ドン様選ばれちゃったあ……」

エントマが上げていた手で顔を覆って首を振る。分かっていたことだが改めて言葉にすると、胸の内が熱くなる。

「ちえっ。……ま、エンちゃんが選ばれたのは想定済みっすけど」

元々、蟲好きなああの御方ならエントマを選ぶであろうことが分かった上で提案したのだが、至高の御方に選ばれるというのは何とも羨ま

しい話だ。

「妹の恋路の為に精神的ダメージを省みなかった私ってば超妹思い！」

「ありがとう、ルプーう」

「どういたしまして。……にしても当てが外れたっすね」

「当てえ？」

「目の前で着替えさせて誘惑する作戦がパーっす」

「……そんなこと企んでたんだあ」

覆っていた顔から目だけ覗かせて抗議の視線を送るも、ルプスレギナはどこ吹く風だ。会話の最中も手を止めない。縄帯を解き、綺麗に結びなおすと備え付けられたカゴに仕舞う。ルプスレギナもメイド。その気になれば着替えの手伝いぐらいきちんとこなせるのだ。

「んじゃ次は着物脱がせるっす。はい、ぶーんのポーズ」

「ぶーん」

ルプスレギナに言われるがまま、エントマは両腕を水平に伸ばすポーズを取る。”ぶーん”は至高の御方の会話によれば”古代ねつとすらんぐ”なる言語が由来とか。

「へっへっへ、エンちゃんの裸、御開帳っす」

「だから何よお」

「レアっすねー。って黒ッ」

「ほっといてえ」

アラクノイド蜘蛛人特有の硬質な肌が露わになる。人間の美少女を模した顔に、御札付きストッキングを履いたままの人間的な脚と、露わになった蟲の体が何ともアンバランスだ。背中には折りたたまれた蜘蛛の脚が生えており。自らの身長を超える程の脚が綺麗にしまい込まれている。「そんな脚、よく収納出来るっすね……。あ、スカート脱がすから足上げて」

「うんしょお。創造主様のお、賜物お」

着物とスカートも丁寧に折りたたんで、カゴに仕舞う。これで、エントマはストッキングを除いてほとんど裸の状態になった。

「蟲の感覚は分かんないけど、今のエンちゃんは超セクシーなんじゃ

ないっすか?」

「こんなのでえ、あの御方は動じないと思うけどお……」

蟲系の異形種は設定上、防具を装備できない。すなわち人間的な感覚で言えば全裸の者がほとんどなのである。

蜘蛛人のエントマや、課金種族を得ることで防具を装備出来るようにしたアバ・ドンのような例外もいるが、コキュートスのように、甲殻が防具代わりの者が多数派を占める。以前、目の前でスカートを捲り上げた時には散々翻弄されてしまった。

故に、エントマは自分の裸体ぐらいで、アバ・ドンがどうなる訳もないと結論付けた。

尚、見せた場合、精神安定化をぶち抜く勢いで悶絶するのだが、二人は知る由もない。

「じゃあ、傾城傾国装備するっす」

「分かったあ」

会話中に広げておいた傾城傾国を、上から被せるように着用させる。首襟から顔を出し、袖に腕を通すと、服のサイズがエントマ用に変わっていく。着用が終わり、ルプスレギナがエントマから距離を取って、全体図を確認した。

「へー、似合ってるじゃないっすか」

「そうっす?」

体を軽くひねって自分の姿を確認する。蟲の体は長袖とドレス特有の襟首部分に上手く隠れて、思いのほか丁度いい形だ。無論、偉大なる創造主から賜ったメイド服程ではないが。

「エンちゃんの髪型といい具合にマッチしてる、気がするっす」

「そうだといいなあ」

「いよいよ、アバ・ドン様にお披露目っすね」

「緊張するう……」

用事も済んだので、至高の御方の元へ二人は早足に戻る。天幕の外で待つ至高の御方の感想が楽しみだ。

「アバ・ドン様、お待たせしました！エンちゃんを着替えが終わったっすー！」

天幕に対して背を向けていたアバ・ドンが瞬時に振り向いた。その速さは配下全員が視認出来なかつたほどだ。おまけに足元の土が摩擦熱で煙を上げている。時間にすれば3分掛かつてない程度のものだが、アバ・ドンは一日千秋の思いで待ち構えていたのだ。

「アバ・ドン様あ、いい、如何でしょう？！」

「ふむ」

（うおおおおおおお）お”お”お”お”お”お”お”お”お”お!!」

それはメイドというにはあまりにもセクシーすぎた

可愛らしく 美しく 色っぽく そして愛らし過ぎた

この気持ち 正に愛だった

アバ・ドンは心の中で静かに発狂した。その姿は琴線に触れるどころか琴線が100本引きちぎれてギリギリ生き残った1本が大音響を鳴らした勢いだ。

（コンソール、コンソール……。スクショ機能どこ……。あ、出ないんだ。チキショウ！）

無意識にコンソールを開いて撮影機能を探そうとしていた。その姿を一生のお宝にしようと思ったが故の行動だ。当然、異世界に來てからはコンソールがなくなったので無意味である。

「とてもお似合いですよ。エントマさん」

「はうう、ありがとうございますうー！」

興奮に対し必死で蓋を閉め、努めて優し気な声色で感想を述べる。似合うという言葉がアバ・ドンの口に出せる限界だった。その姿は言うなればこの世に舞い降りた大革命。和装メイド服からチャイナドレスという文化の異なる衣装チェンジ。だがそれは新たな親睦

性を生み出しており、エントマの可能性を更に広げる今世紀最大のレポリユーションであった。

(足が、足がやばすぎる)

視線はエントマの顔に合わせているが、その実複眼を活かして全身を隅々まで観察している。シニヨンへアールとチャイナドレスの化学反応もさることながら、両足に空いたスリットから見え隠れするおみ足がアバ・ドンの心へと深く染み入る。

(精神安定化がなければ即死だった)

人間時代の自分なら鼻血による失血死。又は尊死とうとししていただろう。

お披露目するときエントマが照れ気味だったのも更なる加速を生み出している。手を後ろに隠して俯き、上目遣いにこちらを見る姿は、少女的愛らしさを含んでおり、ドレスによる大人びた色気とのギャップはタブラ・スマラグデイナも大満足だろう。そしてアバ・ドンは大満足である。

(アバ・ドン様が嬉しそうで何よりですぞ)

恐怖公は己の選択が間違いでなかったこと、アバ・ドンが大喜びしていることに達成感を得た。

「そ、それでは、本題に入りましょうか。エントマさん、ザイトルクワエを洗脳して指示を与えてください」

「畏まりましたあ」

「指示内容は、カンペを用意しておいたので、それを読み上げてください」

「感謝いたしますう」

エイトエッジアサシン  
八枝刀の暗殺蟲達が、学校の教室に備え付けられた黒板程の大きさはある白いボードを掲げた。少々大きすぎるような気もするが、このボード程度の重さなら八枝刀エイトエッジアサシンの暗殺蟲にとっても軽いものだ。

カンペはエントマが着替えてる間、邪念を振り払う意味も兼ねて作った物だが、誠に残念ながら一つも振り払えていない。

「えいー」

エントマが傾城傾国の効果発動を念じると、ドレスに刺繍された金色の龍が光を帯びて飛び出した。世界級アイテムの発するオーラは

未知のそれだ。その場にいた者達全員、少なからず驚嘆を覚えるが、アバ・ドンはエントマをガン見していた為、それどころではなかった。金色の龍がザイトルクワエ目掛けて咆哮し、光と化す。光に包まれたザイトルクワエは尚も痙攣したままだが、洗脳は成功したようだ。ドレスの刺繍が消え去ったことから、無事にアイテムの効果が発動したのが分かる。

「ではあ、お前はあ、この先にあるう、大きな建物とお、人間を襲いなさいい」

カンペをチラ見しながら法国のある方向を指差し、指示内容をザイトルクワエに対して述べる。

「但しい、街に到着するまではあ、人間を避けつつ最短ルートで進むようにい。」

エントマが指示し終わると、アバ・ドンはザイトルクワエに掛かっている状態異常を解除する。ザイトルクワエは、地鳴りを起こしながら法国を目指して、一直線に進軍した。

「さて、これで一段落ですね。後はのんびり結果を待つとしましょう」  
去っていくザイトルクワエを、エントマの観察ついでに確認すると、一先ずの任務は完了した。

（ん、待てよ……？）

アバ・ドンは、ある重大な事実に気が付いた。

世界級アイテムの効果は発動している間、当然だが発動した者が所持し続けなければならぬ。

つまり……。

「エントマさんって、奇襲の結果が分かるまでは……」

「この格好のままですな」

（オイオイオイ、死ぬわ俺）

## 日常

ザイトルクワエを法国へ送り込み、モモンガさんも冒険者稼業を再開しに旅立った。俺は一先ず、普段通りの活動を再開するとしよう。後々の予定となつている俺VSナザリック配下ーズの鬼ごっこもどきは法国への嫌がらせが一段落してからだな。

さて、今何をしているかと言うと、すやすや寝てます。もうほぼ起きるタイミングだが。

場所はナザリック地下大墳墓、第九階層のロイヤルスイート、自分の部屋だ。

華美な装飾を施されながらも、目に優しく、ふつかふかなベッドはどんな姿勢でも俺の体を優しく包み込んでくれる。昔のベッドとか、あれもう寝具じゃねえ。ただのコンクリートだ。

蟲に倣つてうつ伏せの体勢で目を開けたまま睡眠中だ。まあ、瞼ないしな、俺。目を開けたままでも平気で眠れてしまう生態は、俺が蟲になつたことを雄弁に語っているようで嬉しいものだ。

俺は毎晩0時から2時の間熟睡している。そう、俺の睡眠はたった二時間で済んでしまうのだ。しかも寝覚めから頭はスッキリしているし、アバ・ドンボデイすぎすぎない？ベッドから出ることすら出来なくなつてた頃が遙か昔のようだ。

モモンガさんはアンデッドなのでデフォで食事も睡眠も不要になつてしまった。が、俺の場合知つての通り、生物の範疇な為、食事も睡眠も必要になる。リング・オブ・サステナンスを装備すれば不要になるんだけど、それは止めて欲しいと懇願されてしまった。モモンガさんどころか配下全員からも。みんな心配してくれてるんやな……。

とかなんとか考えてるうちに丁度起床時間だ。朝どころか、未だ草木も眠る丑三つ時だが爽やかな目覚め。自分のベッドを破いてしまわないよう、そつと起きる。この瞬間が俺の生き甲斐の一つになっている。何故ならば。

「ウゴお、おはようございませす。エントマさん」



「おはようございます。アバ・ドン様あ」

不覚……。傾城傾国装備中なのを一瞬忘れて、変な声が出そうになった。俺の目覚めの最初の挨拶はエントマちゃんがしてくれるのだ。贅沢にも程がある……！

ペコリと会釈をし、ジッと俺を見つめてくるエントマちゃん。そりやもう、俺もパワー全開つてもんだ。しかも今はチャイナドレス。おみ足のセクシーさが尋常じゃない。つま先から太ももの御札までチラ見えとか大胆にも程がある。相変わらずエントマちゃんからすごく良い匂いするし。この瞬間だけで、俺の幸運一生分使ってる気がする。

「御身体はあ、大丈夫でしょうかあ？」

「はい、今日も元気いっぱいですよ」

「良かったですよ！これからもお、ご自愛下さいい」  
「無論です」

ただ体調を確認しただけだと言うのに、嬉しそうなエントマちゃんが尊い……。

朝方はエントマちゃんに限らず、俺の調子を確認する者が多い。ひ弱だったのはとうの昔の話なのだが、俺がギルドを抜けてた理由が理由だからみんな心配してくれるのだ。

その一環で行われている、配下達による寝ずの番。勿論最初は遠慮しようとしていたのだが、病み上がりの俺が大事に至らないようにとか、至高の御方のシモベとしての使命だのと熱いやり取りの末、押し切られてしまった。押し切られてよかつ……。えへん。

余談だが、その際モモンガさんもベッドに入るとき、一般メイドのみんなにシフト制で寝ずの番をされる羽目になった。アインズ様当番と言うらしい。すまぬ……。モモンガさん。

俺が睡眠している間はエントマちゃんやハンゾー達や恐怖公、後たまにコキュートスが寝ずの番をしてくれている。最近、誰の根回しか知らないが、エントマちゃん率が高い気がする。

当然、最初は緊張して眠れなかった。エントマちゃんの番の時は寝たふりしながら複眼で俺を見守る姿をガン見してました。ごめんな

さい。

あ、ちなみにほかのみんなもきちんと睡眠時間は確保してるのでそこはご安心召されよ。蟲系異形種は生物の枠に当てはまるからな。しかしまあ、この習慣も繰り返すと慣れるもので、特にエントマちゃんに見守られてる時は、安らかに眠れる。甘えん坊か。

この安らかさは、個人的に味わったことのない感覚のように思えた。モモンガさんに聞いてみたところ、子供の頃、母親と一緒に寝ていたら心が安らいだという話だ。そういうのに縁が無かったので軽く衝撃だった。孤児院近くのゴミ箱に捨てられてたのを先生に拾われた身だからなあ、俺。

毒だらけの空気をモロに吸ったせいで赤ん坊の俺は風前の灯火。ボロ雑巾もかくやという大惨事。オデノカラダハボドボドダ！（拾われた時から）

おかげで日常生活すら一苦労だったし、仕事で体壊した挙句、不治の病に侵されて早死にした訳だな。まあ、今までの全部がこっちの世界に来るための布石だったと思えば、俺の人生も捨てたもんじゃないな。ははは。

纏めると、俺はエントマちゃんに母性を見出してしまったようだ。どこの赤い彗星だよ。

……エントマちゃんに甘やかされる俺とな。ヤバイ、確実にハマる。

犯罪です。本当にありがとうございます。こんなこと絶対言えねえ。墓場まで持つてこ。

「お風呂の準備はあ、整っていますう」  
「ありがとうございます」

エントマちゃんが机に置いてあった洗面器を手を持った。中には大きめのタオルが綺麗に折りたたまれた状態で入っており、隙間に長方形のブラシが収納されている。俺用のお風呂セットだ。第九階層には私室だけでなく、スパリゾートナザリックと言う超豪華な風呂場もあるのでそちらに向かう。日課の朝風呂だ。

「アバ・ドン様。おはようございます」

「おはようございます。皆さん」

私室を出ると、入り口前で待機していた俺直属の八エイトエッジアサシン肢刀の暗殺蟲、ハンゾー達が一斉に挨拶をしてきた。綺麗にハモリすぎて、一人が喋ってるようにしか聞こえない……。息びったりやな。

「アバ・ドン様が御休息を取られている間、大墳墓内に異常はありませんでした」

「分かりました。ありがとうございます、ドウジュンさん」

今日はドウジュンがお話担当か。前はハンゾーが代表で話す感じだったのだが、最近は交代でドウジュンやサンダユウやナガトとも話をする機会が増えた。満遍なくコミュニケーションが取れるよう配慮してくれるのはありがたい。恐怖公の提案らしい。あの子にや頭が上がらなくて……。

私室からスパまで意外と距離がある。その道中では寝ずの番をした者や護衛のハンゾー達と雑談を交わす。今日はエントマちゃんエントマちゃんとハンゾー達だ。エントマちゃんが俺の左隣。ドウジュンが右隣。ハンゾーとサンダユウとナガトは天井に張り付いている。いつも護衛ありがとう。

雑談は、みんなのを知る為だったり、普段何考えてるのかを知ってモモンガさんと情報共有するのが主な目的だった。モモンガさんの場合、支配者ロール優先しなきゃだから意外と機会に恵まれないんだよね……。最近は専ら普通に楽しみなからお喋りしてる。みんなと取り留めのない話するのって、結構楽しいんだよね。

「今日の朝ご飯は誰と食べることになるんでしょうね。楽しみです」  
「えつとお、確かインクリメント達の筈ですう」

エントマちゃんがこちらを見つめて返答する。身長差のせいで自動的にこちらを見上げる形になるのだが、それがまた可愛いものなんの……。

「おや、もしかして把握してるんですか？」

「いええ、昨日休憩してる時にい、次は私達がアバ・ドン様と食事する榮譽を賜ると話しててえ、デクリメントもお、とっても嬉しそうに頷いてましたあ」

「ふふ、まったく大袈裟ですね」

それは果たして榮譽なのか……。

俺は相変わらず、従業員用の食堂でみんなと飯を食っている。シフトによつて俺と一緒にご飯を食べる相手が変わるのだが、いつの間にか、俺と一緒にご飯を食べる＝榮譽になつてたらしい。なんでやねん。

「大袈裟だなんてとんでもない」

「おや、そうですか？」

「私もお、一緒だとお……。とつてもお、嬉しいですよ」

エントマちゃん、照れているのか上目遣いにこちらを見てそう言った。

ぐおおおおおおおおお!!ぬがあああああああああああああ  
あああ!!!

……ふう。

「それなら、今日の朝食も貴方にとって、喜ばしいものになりますね。私も嬉しいですよ」

心臓が爆発しそうだが、平静を装って返答する。危なかった。精神安定化が1秒で5回ぐらい発動したかもしれん……。エントマちゃん、そういう破壊力のあるセリフで不意打ちするなんて悪い子ね!本気で死ぬかと思つたぞ!頬筋が無くて良かった。あつたら溶解してたわ。

すると、エントマちゃんがドウジュンに洗面器を渡した。どしたんだろ……。あ、待って、エントマちゃん。両手で顔隠してプルプルしないで。萌え死ぬ、萌え死ぬから。落ち着け。あくまで忠誠心の賜物。忠誠心の賜物……。

とか思つてたらドウジュンとハンゾー達がなんか透明化&気配遮断してる。何の気遣い。

さて、スパの入りに無事到着。エントマちゃんとの楽しいお喋りも一旦おしまいで……。だが、悲しむことはない。すぐにまたエントマちゃんと再会出来るのだから。

実は当初、エントマちゃんに背中を流してもらうという超絶ウルト

ラ魅力的な案もあったのだが、男湯に女の子を入れるのは流石にあかんってことで断腸の思いで断りました……。本当に残念だ……。

「では、エントマさん。また後で」

「はあ、はい、いつてらっしゃいませえ」

エントマちゃんがお辞儀をした後、両手を力一杯ぶんぶんする。何でそんなに可愛いんだ。

そして、暫しの別れ。俺とドウジユン達は青い”男”の暖簾をくぐってスパへ入った。

脱衣所で、ドウジユン達が首に巻いたスカーフを外してカゴに仕舞う。傍から見たら全く区別できないそうだが、結構個性あると思うんだけどなあ……。

それにしても脱ぐのはあつという間だ。みんな元からほぼ全裸だもんね！H A H A H A。

余談だが、みんな全裸全裸とは言うが、蟲のアソコのアレは基本収納式だ。だから大事なところは隠れてる。全裸は全裸でも安心して見られる全裸なのだ。安心して下さい、履いてませんよ。

……おや、風呂の入り口前に誰かの気配がする。今日は誰が同伴するのかなつと。

「おはようございます。お待ちしておりましたぞ。アバ・ドン様」

待ってたのは恐怖公だった。風呂の為か、王冠とマントと王笏は着けてない。完全に30cm大のゴキブリである。うーん、キャストオフでも男前。

「おはよう、恐怖公。今日も貴方が背中を流してくれるんですか？」

「はい、我輩めに、是非」

「張り切ってますねえ。ではお願いします」

「はっー」

恐怖公は基本手空きな場合が多いので、こうして一緒に風呂に付いてくれることが多い。

勿論、俺も背中流し当番なんて恐縮だと思ってた。それでも、みんな嬉しそうに勤めを果たそうとするもんだから、結局日課になってしまった。配下達は、俺やモモンガさんに尽くすことを本当に喜びに感

じてるのだ。背中を流すことを任せるぐらいで喜んでくれるのなら、素直に受け入れよう。まあ、これも良い交流の機会になるしね。

さて、スパリゾートナザリックは男女合わせて九種類と十七浴槽ある。多すぎにも程がある。その中でも俺のお気に入りには、ジャングル風呂だ。ブループラネットさんの技術は当然ここにも活かされている。深い森林の奥に佇む秘湯のようで、森林浴と入浴を同時に楽しめる。湯を囲う岩場は自然且つ入浴の妨げにならない絶妙の設計だ。

小山の湧き水を模したかけ湯で体を洗って、仲良く湯船に浸かる。湯の温かさが外骨格を通して筋肉に染み渡りますわあ……。ドウジユン達も湯船の端にもたれてノンビリしている。和む。

だが、恐怖公は湯船近くで俺を見守っている。

「恐怖公、湯船に浸かれないのに、いつも付き合わせちゃって悪いですねえ」

「とんでもない。アバ・ドン様の日々の生活を御手伝い出来ることは、我輩にとって代えがたき喜びでございますぞ」

「ははは、そこまで言いますか」

「言いますぞー!」

恐怖公は湯船に浸かる必要がない。浸かれないとも言う。ゴキブリの体はフェノール、クレゾールを含む消毒性の分泌物が、常に放出されている。体がテカテカしているのはこれが理由だ。

つまり、風呂に入らずとも汚れは落ちるし清潔そのもの。病原菌やら雑菌やらは生息地の問題だから、恐怖公は本当に何の害もないぞ! 後、分泌液を洗い落とすと呼吸器が守れなくなつて窒息死するから、湯に入るのは逆に良くない。

そもそも、虫は変温動物なので、熱湯を浴びると体を構成するタンパク質がすぐに変質してしまい、即死するのだが、俺やナザリックの配下達は基本そのくらいで死にはしない。一安心。恐怖公も多分大丈夫なんだろうけど、まあ必要ないしね。

「恐怖公はお風呂に入らなくなつて清潔そのものなのに、女性陣に避けられちゃうのはどうしたものか……」

お風呂でくつろぎながら俺は呟く。

「恐怖公殿は紳士そのもの。何故、忌避されてしまうのか、私たちには分かりませぬ」

ドウジュンの言葉に他の三人も同意する。まあこればかりはなあ……。

「彼の見た目は人間の区分で”不快害虫”と言つて、見た目だけで忌避されてしまうのです」

「なんと……！それはひどい……！」

俺の言葉に、みんなが身を震わせる。ドウジュン達からすれば理不尽な差別そのものに移るだろう。憤りを感じているのが手に取るように分かった。

「名称はともかく、この忌避感は生き物の本能に基づくもので、それが抗いがたい恐怖となってしまうのです。実際、生息地によって病気やバイ菌を持つてくるのは事実ですので、そこが更に拍車を掛けてます」

「我輩の名の所以ですな。同志を不快にさせてしまうのは心苦しいですが、その忌避感によつて侵入者へと恐怖をもたらす。それが我輩の使命ですぞ」

「故に、恐怖公……」

サンダウウの呟きに恐怖公は頷いて答えた。

「恐怖公殿が忌避されてしまう問題、思いの外、根深かったのですね」

「アバ・ドン様、ありがとうございます。勉強させて頂きました」

「いえいえ」

講義のつもりは全くなかったのだが、みんなの礼に素直に応える。「さて、もう暫く浸かったら、恐怖公に仕事をお願いしましょうかね」「はっ、お任せあれ！アバ・ドン様の御背中をより輝かしくしてみせましょうぞ」

張り切る恐怖公を微笑ましく見守る。わが子可愛さというヤツなのだろうかこれは。

「……！」

和んでいると、不意に壁の向こう側、女湯の方から小さな小さな足音が聞こえた。蟲の脚特有の、か細い音だ。蟲王の鋭き聴覚でない

聞き取れないそれは、俺に試練をもたらす音だ。

その時が訪れた……。

「こらあ、暑くても我慢するのぉ、動かないでえ」

うひよー



## 罪

スパリゾートナザリックの女湯に設けられたシャワースペースへ向かう異形種がいる。エントマだ。その趣は普段とは異なる。

つま先の尖った、大きく長い脚が四本。硬質で微かな音を立てて歩行している。湯気の中見え隠れする四本の脚に支えられた体は、少女の体が背中を支点に宙吊りされているようだ。

しかしよく見ると、宙吊りの少女もまた異形であることが分かる。八つの赤い目と鋭い牙は紛れもない蜘蛛の貌。人を模した両手に、二匹の蟲と、人間の唇を模した口が付いたヒルに類似した生物を抱えていた。口唇蟲だ。

「口唇蟲ウ、ジットシテエ」

エントマの可愛らしい声は、この口唇蟲によつてもたらされている。普段、喉に仕舞っている口唇蟲を外した為、彼女の声は本来の蟲のそれだ。本来の声はコキュートスと同じく、音の塊を無理やり声の形にしているようなものだ。

「モオ、我慢スルノオ」

口唇蟲は日差しを嫌う。その為、明るい浴場に曝け出されるのを嫌がって落ち着きがない。エントマは嫌がる口唇蟲を嗜めながら目的の場所へ向かっている。

現在のエントマは、ほぼ丸裸の状態。擬態時に使用している脚ではなく、本来の脚で闊歩し、人間の顔と髪に擬態した蟲達と口唇蟲を両手に抱えて運ぶ。

傾城傾国チャイナドレスは蟲の脚の一本、右前脚に首とスカートを通して引っ掛けられている。龍の刺繍は消えたままの為、ザイトルクワエの洗脳効果は維持出来ているようだ。

ユグドラシルオンラインは、アイテムを装備するときコンソールで登録する。装備してるか、装備してないかのステータスしか表現されない。要するに、半脱ぎが仕様上存在しないのだ。

現実化した今、中途半端に装備した状態だと、効果がどうなるか調べる必要があった。その為、これについてはモモンガとアバ・ドンが

検証済みだ。その結果、傾城傾国は半脱ぎでも効果が維持されることが分かった。

おかげで、エントマはお風呂で身を清めつつ、傾城傾国の洗濯が可能になった。

「関節肢イ、チョット汚レテルウ。落トサナキヤア」

ボディ用たわしに蟲用ソープを絡ませ、顔と髪担当の蟲達を抑えようと、まずは背を洗った。背の部分の隙間や模様を擦る。次いで裏返すと関節や腹を丁寧に擦る。ほんの僅かな汚れも決して看過できない。抑えている蟲達がくすぐったそうに足をよじらせているが、当然お構いなしだ。

「至高ノ御方ニイ、オ仕エスルノニイ、汚イノハダメエ」

彼女にとつて、浴場で体を清める行為は作業以外の何者でもない。スパの使用許可を得たのも、アバ・ドンがくつろいでる最中に事を済ませる効率面によるところが大きい。

だが、作業は作業でも極めて重要な作業だ。偉大なる至高の御方に側仕えするという素晴らしき名誉を授かり、その任を全うするのに身が汚れているなど論外だからだ。

「ハイイ、口開ケテエ。ウガイネエ」

泡だらけの蟲達は一旦置いておき、口唇蟲の口部へ洗面器に貯めたぬるま湯を注ぐ。口唇蟲が咀嚼するような動作を見せた後、お湯を吐き出した。

「ホラモウ一回イ。……体ノ汚レハア、大丈夫ウ」

うがいをしている間に、口唇蟲に汚れがないか丹念にチェックする。口唇蟲は体から粘液を放出している為、恐怖公と同じく手洗いは不要だが、至高の御方と会話をする機会がある以上、確認は決して怠らない。

「流スヨオ」

顔と髪担当の蟲達をシャワーで洗い流す。蟲達は気門に詰まった水をペっペと吐き出し、その場をせわしなく動き回って水分を飛ばそうとする。一方、口唇蟲はうがいを終え、明かりに背を向けるように体を丸めている。

「ジャア、私モオ」

その光景を尻目に自分の体に取り掛かる。エントマは、粗めのボデイタオルで自分の脚を擦る。洗う部分が多いため、その動きには無駄がなく素早い。

四本の脚を手早く洗い終わると、次は人間態部分だ。胴体と背中をボデイタオルで擦る。特に背中が重要だ。背中から生えた脚の付け根は汚れが溜まりやすいので、丹念に洗う。洗い終わったら、次は手だ。  
「手エ……」

ひよつとしたら、あの御方にまた手を握られてしまうかもしれない。そう思いながら洗っていると、汚れを落とすのが何故かもつたない。

「足イ……」

ひよつとしたら、あの御方にまたストッキング越しに足を掴まれてしまうかもしれない。再度、汚れを落とすのがもつたないように思えた。段々自分の顔が熱くなっているような気がする。

「口ノ中ア……」

口唇蟲と同じように、口内を洗浄する。ひよつとしたら、また口内を指で掻き回されるかもしれない。またもつたない気がした。蟲達しか見ていないのに、羞恥に震えた。

「……」

どうしても思い出してしまう。とつくに洗い落としている筈なのに、アバ・ドンに触れられた熱い記憶が何度も蘇る。思い出す度、動きが鈍る。思い出に集中してしまうのだ。

また、御観察されてしまうかもしれない。だからこそ、しっかり洗わねばならないのに、この矛盾はどうしたことだろう。恋心とはかくも難儀なものかと、頭の茹だる中、エントマは思った。

「お痒いところはごさいませんか？」

「……ああ、少し考え事をしてました。はい、大丈夫ですよ」

恐怖公への返事が一寸遅れる。理由？言わなくても分かるだろう……。

(アバ・ドン様は顎に手を当て、何かをお考えだ)

(ナザリックの未来を見据えておられるのだろうか……)

うう、見ないでくれ……。好きな子のお風呂に耳を傾けてしまう最低な俺を見ないでくれ……。

やっちゃいけないことだと分かっているのに、俺の超人的な聴覚がエントマちゃんの入浴姿を雄弁に伝えてくれるのだ。俺の聴覚は毛細血管を流れる血液の音も拾えるからな。勿論調整可能んだけど、エントマちゃんの音に聴覚全振り状態なんですよ。ダメだダメだと言いつつ思いつきり音声拾ってるんだこれが。

あ、これは口唇蟲がお湯を吐き出した音だな。次に聞こえたのはエントマちゃんの顔の蟲と髪の毛の蟲を洗い流した音。……やっつてること完全にストーカーです。お巡りさん、わたしです。

わが子に等しき恐怖公に背中流させながら、好きな子のお風呂を聴覚で全拾いしてる俺は、今この世界で一番ひどいやつかもしれない。ところがどっこい、その自己嫌悪は容易くねじ伏せられる。エントマちゃんの体を洗う音が俺の耳に届き、心拍数が跳ね上がる。

好きな子が隣で風呂入ってるシチュエーションは刺激が強すぎる。人間時代の俺なら鼻血で失血死していたに違いない。

あゝ！ エントマちゃんが自分の体を洗いだした……！

俺はもうダメかもしれない。色んな意味で。